

王の領十三

「領」

十三

著：雅

2006.3.10 初稿
2007.7.16 校了
2013.9.11 改定

第
一
章

入の必要はなきそ�だつた。

「想定していたより早く終りますな。さすがはフレイザーだ」

地上の戦況を注視していた副将グラントスレイが、満足の色をその頬に浮かべる。

飛竜の羽ばたきが、厚い雲の垂れ込めた上空を埋め尽くす。
黒地に暗紅色の双頭の蛇の紋をあしらつた軍旗が、吹き抜ける強い風に幾重にも棚引いている。

王の直轄軍、近衛師団の軍旗だ。

その第一大隊の一軍が空と地上とに展開していた。岩だらけの大地と雲との狭間に重く打ち付け合う剣撃の音が満ち、時折、剣や槍、鎧が雲間から洩れる薄い陽光を鈍く弾く。

空を覆うように布陣した漆黒の鱗を持つ飛竜達の中で、一頭だけ銀の鱗を纏つた飛竜の背から、近衛師団第一大隊大将レオアリスは膝に片腕をつくようにして眼下を覗き込んだ。そこから地上の布陣全体が漆黒の瞳に見て取れる。

「頭が、そろそろ出るな」

誰に確認するでもなくそう口にすると、レオアリスは屈めていた上体を起こした。背中から流した黒い長布が身体に纏いつくようにはためく。短い黒髪に、後ろに一筋だけ伸ばした髪を風が煽つた。

喉元まで襟の詰まつた黒の軍服は周囲の者達とさほど変わらないが、周囲を取り巻く兵達の中で、彼だけは鎧も纏わらず、剣も帶びていなかつた。

年の頃は十七、八。近衛師団の中で最も若い。傍らに乗騎を寄せる副將、グラントスレイとは、まるで親と子との間ほども年齢が離れて見える。

地上に展開させたのは中隊一隊、敵軍千に対して左軍五百騎の内、八小隊四百騎のみだったが、夜明けとともに始まつた戦いは陽が中天に昇りきるのを待たず、既に終幕に差し掛かっていた。

地上では中将フレイザーの率いる左軍が敵の陣形をほぼ崩し終えている。左軍の残り一小隊、約百騎が上空に待機していたが、どうやら投

近衛師団第一大隊中隊左中右軍の内、フレイザーは左軍を預かる中将だ。草原や荒野など、広範囲での布陣、采配を得意としている。

ただ有利に運んではいるものの、この戦いを終わらせるための重要な要素が、眼下の戦場には欠けていた。

それを探してグラントスレイが銀髪の頭を僅かに巡らせた丁度その時、敵陣の奥の一角が俄かに騒がしさを増した。レオアリスが口元に笑みを浮かべる。

その場に、何か巨大な影が立ち上がるとしていた。

腐った水のような臭いが周囲に立ち込める。

その臭気の主が、土の中から次第に姿を現していく。

小山のような背、鋭い鉤爪を持つた節くれだつた腕。

捻れた三本の角と、蹄を持つた脚。一つだけの瞳が、赤く爛々と光を湛えて辺りをぐるりと見回した。

フレイザーの軍馬がたたらを踏むようにして激しくいななく。手綱を引き愛馬を落ち着かせながら、吹き付ける風に緋色の髪を煽られるまま、フレイザーは前方に立ちはだかる異容を見上げた。

「牛蹄種か。初めて見たけど、とんでもない大きさね」

この世界の中でも、これほどの異容と巨体を持つ種は滅多にない。

獰猛で戦乱と血を好む種、戦闘種と呼ばれる種族だ。

手にした斧もまた、刃渡りだけでも軍馬の大きさを軽く凌ぎ、振り回されれば通常の剣や盾など、まるで意味をなさないだろう。

だがフレイザー達が待つていたのはこの相手、敵軍の将、ゴートだ。将を討たなければ戦いは終わらない。

敵将ゴートは大地から巨大な身体を持ち上げ、大気を押し潰すような

咆哮を上げた。押されるように地上の兵士達の陣列が揺れる。

精銳と呼ばれる近衛兵達の間にさえ恐怖の色が広がっていくのを目取り、フレイザーは叱咤の声を上げた。

「気圧されるな！ 陣形を保て！ ……すぐに上将が降りられる！」

その声を耳にした途端、兵士達の青ざめた顔に安堵の色が点る。

上空からゴートの姿を視界に捉えたまま、レオアリスは待ちくたびれたよう軽く息を吐いた。

「漸く出たか。暢気な奴だ」

立ち上がった状態からは、上空の飛竜にまで長い腕が届きそうだ。手にした戦斧が風を碎くように振り回され、敵味方問わず叩きつけられた。

敵陣の中に更なる混乱が満ちた。

「退くぞッ！ 遅れるな！」

フレイザーが予め想定していたかのように、素早く陣形を整えながら兵を退いていく。錐のように敵陣に食い込んでいた部隊が、中央が退くと共に両翼が左右に展開し、敵軍を包囲し始めた。

「あれが大将では、出したくなかったのも無理はないでしよう」

叩きつける風に金の髪を巻き上げられながら、グラナスレイの反対側に乗騎を寄せていた参謀官ロットバルトは、その整った顔に皮肉の籠つた薄い笑みを刷き巨大な姿を眺めた。

ロットバルトの言葉通り、大将が姿を現したというのに敵軍内には却つて混乱が満ちるばかりで、士気が上がる様子は全く見て取れない。逆に自分達を包囲する近衛師団の戦列へ、逃げるよう打ちかかっている。

「元々が不満分子の集合体で組織力も政治力もありませんからね。一つの力だけが抜きん出ていたところで、結局は脆い」

だがあの種は、非常に高い戦闘能力を有している。小隊一つ投入して切り離すべきかと、ロットバルトは右隣に視線を投げたが、レオアリスの口元に浮かんだ笑みを眺め、何も言わずにそれを戻した。

「行つてくる」

一言だけ告げ、レオアリスが飛竜の背を蹴った。そのまま地上に向って飛び降りる。

背中に纏う黒い長布が風を孕んで大きく広がる。

全身を取り巻く風を感じながら、レオアリスは右手を自らの鳩尾に充てた。

そのまま、ずぶりと手首まで呑まれる。

そこから、青白い光が零れた。

手を引き抜くにつれて光は灰色の大気を青く染め、地上に落ちかかつた。

ゴートの巨大な頭が光に氣付いて上空へ向けられる。

一つ眼が、驚愕と敵意に見開かれた。

敵陣の中に、波のようにざわめきが広がる。

ゴートが引き絞るように吼えた。

「レオ……アリス！」

青白い一筋の尾を引いて敵陣の只中に降り立つと、レオアリスは手にした剣を一閃させた。

青白い光を纏う、美しい長剣。

「け——、剣士……！」

再び、敵陣が揺れた。ゴートが現われた時よりも更に強い恐怖が、鎧も纏わらず、ただ一振りの剣を提げただけの少年を中心に広がっていく。『剣士』

自らの体の一部を剣として戦う種をそう呼ぶ。

種としての数は多くは無いが、一人が百の兵を抑えると言われる程高い戦闘能力を有している。戦闘種の中でも頂点に立つ種であり、その中でもレオアリスは最高位と謳われる剣士だ。

通常、剣士の剣は主に腕などを変化させたものだが、レオアリスはそ

の十三対目の肋骨を剣とする。

二対の剣、それを持つものはただ一人、レオアリスのみだった。

後退る敵兵の中を悠然と歩きゴートの前方に立つと、自分より数倍もの身の丈を持つ敵将を見上げ、レオアリスは楽しげな笑みをその頬に乗せた。

巨大な戦斧が風を裂く音を立てて振り上がり、レオアリスめがけて叩きつけられる。大地を碎いて轟音が響く。

グラントスレイは眼下の戦場を眺め、諦観とも苦笑ともつかない形に眉をしかめた。

「たまにはおとしく戦況を見届けて戴きたいものだ」

大将自らが戦場に立ち、自軍はその劍威を畏れて陣を引く。通常の戦略にも戦術にも無いものだ。

だがそれだけ、剣士の剣とは、破壊的な力を持つている。

「まあ、剣士とはそういうものなのでしよう。全体の動きをただ見ていろと言ったところで無駄ですよ」

ロットバートは既に、レオアリスが降りる事を想定した上で陣を引いている。フレイザーもその布陣に従つて、深すぎず、浅すぎず、自軍に影響を受けずに敵陣を囲むための距離を保っていた。

本来、大将ともなれば軍を采配する事が主たる役割であり、通常戦場で直接剣を握る事は少ない。

大将が討たれればその軍は脆い。だからこそ、基本的にはどの軍も、戦場においては大将の周りを固める事が重要になる。

だがレオアリスにとつてはそれは煩わしいものでしかないようだつた。『剣士』にとつて、戦う事は存在の意味と同義だ。

剣士は恐怖される。敵のみならず、自軍にも。

『殺戮者』『切り裂く者』『戦うためにのみ生まれる種』

それが剣士のもう一つの呼び名でもあった。

「戦闘種同士の戦いか……。見物というには危険極まるな」

ロットバートはもう一度、眼下の布陣を見渡した。レオアリスの剣威の想定範囲を僅かに上回るように、予定通り陣は展開している。

レオアリスの剣から発する強力な圧力が、上空の飛竜にまで届く。怯えて興奮する飛竜の手綱を引いて宥めながら、ロットバートは頬を叩くその圧力に目を細めた。

その姿はまるで、見る者の目に一振りの剣のように映る。

右手に提げた剣、何の飾り気もない、戦うためのみに形造られたもの、それ故に息を呑む美しさと危うさとを併せ持つ。剣士とは、どちらがどちらを映したのだろう？

ロットバートはふと疑問を覚えて地上に注いでいた瞳を上げた。

「考えてみれば、上将が二刀をお持ちになるところを見た事がありませんね。副将はご覧になつた事が？」

レオアリスは二対の剣を有する。だが今まで彼が二本の剣を抜いたところを見た事が無かつた。

ロットバートは近衛師団に配属されて比較的日が浅く、それ故に眼にした事がないのかとも考えたが、グラントスレイは首を振つて否定した。「私も無い。おそらく、師団にお入りになつてからはまだ一度も無いだろう。剣士として覚醒されたときに一度だけあつたとお聞きしているが。一度見せて頂きたいのだが、恐ろしい氣もするな」

グラントスレイの言葉が吹き上がつたゴートの咆哮に紛れる。

ゴートの戦斧が、巨体からは想像できない速度で雨のように振り下ろされる。砂塵が吹き上がり、大地が割れ、岩となつて隆起する。

レオアリスの身体を切り裂く紙一重の位置を刃が過ぎ、再び地面を碎いた。

ゴートの位置は、レオアリスの長剣から考えられる間合いにはまだ遠い。未だ剣を振つてすらいないレオアリスに対し、己の優位を確信して

ゴートは嘲りの笑いを浮かべた。

「どうした、ちよこまかと逃げ回るだけが剣士か？ ただ提げているだけ

なら、その剣は飾りと変わらんな」

レオアリスは、自分の背丈よりも更に広い刃渡りを持つ戦斧をちらりと眺め、返すように笑った。

「そう言うなら当てろよ。お前の斧はでかくて見えやすくてな。でも、

避けるのももう飽きた」

「——この小童が！」

ゴートが吼え、戦斧を引いて再び振り下ろす。レオアリスは避けようともせず、頭上に降り掛かる戦斧に向けて、右腕に提升了劍をすいと上げた。

青白い光が弧を描くように流れる。

ゴートの戦斧に対し、レオアリスの長剣は余りに頼りなく映る。周囲の兵達が剣が碎けるのを予期して思わず顔を背けた。

「——ばかな」

呻いたのはゴートの方だった。一つ目が驚愕に見開かれ、周囲からどよめきにも似た声が上がった。

ただ頭上に掲げられただけのようすに映るレオアリスの剣が、巨大な戦斧を受け止めている。

力任せに押し切ろうとして、高い亀裂音が走る。

「馬鹿なッ！」

慌て斧を退こうとした腕を追つて、レオアリスは一步踏み込むと、下から斬り上げるように剣を振り抜いた。

「そんな距離で届く訳が……」

生じた剣風が衝撃波のように大地を碎いて走り、ゴートの右肩を突き抜けた。

鋭い衝撃を感じたものの、視線の先の肩口には何の異常もない。ゴートは歯を剥き出すように口元を歪め、レオアリスに顔を戻した。

「何のつもりか知らんが」

一步踏み出した瞬間、ずるり、と湿った音を立て、ゴートの右腕がずれた。一抱えもある腕は、まるで始めから外れるものだったかのように、地面の上に落ちた。

自軍を退かせる理由、それはここに起因する。剣が生み出す衝撃波が、容赦なく周囲を切り裂くからだ。

一瞬の後、苦痛に満ちた咆哮が辺りを震わせた。

残った腕が苦痛を搔き消そうとするかのように、闇雲に振り回される。掠めれば吹き飛ばされるだろうその腕を少しも気にした様子もなく、レオアリスは平然と歩を進める。

「剣士いいいい！」

ゴートはその拳を、レオアリスへではなく自らの足元に突き立てた。衝撃に大地が小刻みに揺れ、碎けて隆起し散乱していた岩が、ゴートへ向つてゆっくりと動き始める。

その動きが次第に速度を増していく。

固い岩盤が、ぐずぐずと音を立て、泥のように溶けていく。

大地は巨大な沼と化し、岩も自軍の兵も関係なく、辺りのものを飲み込み始めた。レオアリスの足元も、ズブリと音を立てて沈んでいく。

「引きずり込んでくれる！」

自らも沼の中に沈みながら勝ち誇るゴートの姿を眼下に捉えたまま、参謀官ロットバルトは片手を上げた。隊の術士がすぐに乗騎を寄せる。

だが指示を出す前に、ロットバルトは開きかけた口を再び閉ざした。レオアリスの身体はすでに膝の下まで泥に沈んでいる。それに構わず、レオアリスはゴートとの距離を測るように前方に視線を投げた。

無造作に剣を掲げると、一息に振り下ろす。

剣風が生じ、大地を激しく打つた。

反動を利用して、レオアリスの身体がふわりと宙に浮き上がる。

宙上で身体を捻り、一度沈みかけた岩を蹴ると、大地に突き刺さったままの戦斧の柄の上へ降り立つた。

上体を起こした正面に、ゴートの顔がある。
レオアリスの口元に凄惨なまでの笑みが浮かぶ。剣が一層の光を纏つた。

「ま……、待て、降伏する、だから……」

ゴートは残つた一本の腕を押し止めるように突き出し、恐怖と苦痛に顔を歪ませて泥の海を数歩後退つた。

「お前は王に刃を向けた。今更、無理な話だ」

言葉と同時に青白い閃光が幾筋も走る。

次の瞬間、弾けるように、ゴートの体が幾つもの断片となつて崩れた。まるで巨大な刃に穿たれたかのように液状化した大地が深く削られ、空中に巻き上がる。ばらばらになつた肉片を巻き込み、再び地面に降り注いだ。

光が消え、揺らいでいた地面は、中途半端に岩を飲み込んだ形のまま、元の姿を取り戻す。

僅かの静寂の後、敵陣が恐慌に包まれた。

戦意を失つた敵兵達は武器を取り落とし、我先に背を向けて駆け出していく。フレイザーはその様を見ると、円形に展開させていた陣を収縮させた。

敵兵が取り押さえられる中、近衛師団軍旗が荒地を吹き抜ける風に煽られ、地上に次々と棚引き始めた。

太陽は未だ、中天には達していない。

東の国境沿いには峻険ミストラ山脈、西に古いにしえの海バルバドス、南に灼熱の砂漠アルケサス、北に黒森ヴィジヤが広がり、行く者の足を阻むからだ。特に東のミストラ山脈から先は、現在も国土争いが続く小国が多い。

王国の四方を取り巻く生者を寄せ付けぬ酷地は、逆にそれら小国の侵入を阻む絶好の墨壁でもあり、アウレウス国を戦乱から遠ざけてくれていた。

大きな戦乱は一番最近と言つても、およそ四百年前、アウレウス国と西の国境を接する『西海』バルバドスとの百年戦争まで遡る。双方共に多数の死者を出した戦乱は、三百年前に両国の間に不可侵条約が結ばれる事で漸く決着を見、以来国内は安寧を保つていた。

大陸の西部に位置する王国アウレウスは、グイノシス大陸で最も広大で富裕な国土を有している。

現王の在位は長く、既に三百年に渡り安定した政事が続いていた。

国土には王都を中心に放射状に街道が整備され、またそれぞれの地域に配備された正規軍の部隊が治安維持に当たつてゐる為、国内の物流は盛んだ。商隊は時に荷馬車を五台から十台連ね、護衛の兵をつけて、主街道沿いの街を行き来した。

ただ、国土の特性上、アウレウス王国は、他国との交易が制限された土地でもある。

及び九十九家の諸侯がそれぞれの領地を治めている。

国の政務を司るのは、大別して四つの機関に分かれる。

内政を司る内政官房、長は四大公の一角、北方公ベール。

治水、土地、生活を司る地政院、長は東方公ベルゼビア。

財務、商工業を司る財務院、長は西方公ルシファー。

治安、軍務を司る軍部、正規軍の長に南方公アスター。

内政官房は他の三部門を総括、調整する役割も果たしている。

また正規軍とは別に、王と王城を守護する王直属の軍である、近衛師団があつた。

高い天蓋に嵌め込まれた飾り窓から、陽光が様々な色彩を纏つて降り注ぎ、大理石の床や広間を支える数十の柱を柔らかく浮かび上がらせている。

それだけで三層の建物程の高さはあるうかという巨大な両開きの扉の前から、深緑の絨毯が広間の奥へと真っ直ぐに敷かれて延びていた。王への謁見の為のこの広間は、百十二家の諸侯および各官衙の首級諸官が一同に会する事が可能なほどの広さだったが、今玉座の前に跪いているのはレオアリスと副将グランスレイのみだ。一人の正面には十数段の階段がしつらえられ、その高みに玉座があつた。

高い天井から流れ落ちるような暗紅色の長布の前に、燻したような銀の材質で造られ精緻な彫刻を施された玉座が置かれている。

その右隣に常に立つのが、四大公の筆頭であり、王の補佐を務める内政官房の長、ベールだ。風貌は若いが、王とともに長い歳月この国を支えてきた最古老の一人でもある。

もう一人、階下に背の高い老齢の男が控えている。近衛師団総将アヴァロン。

引き締まつた体躯をレオアリスと同じ黒の士官服に包み、その背には近衛師団の軍旗と同じ、黒地に王の紋章——暗紅色の双頭の蛇があしらわれた長布を纏つている。

王の守護たる証であり、近衛師団の中でもただ一人、総将のみが纏う事を許されるものだ。

そして玉座には、この強大な王国の主が悠然と座していた。

短めの銀髪を後ろに流し、鋭い容貌の中に金色の瞳が全てを見通すような光を湛えている。

幾重もの暗紅色の長衣に包んだ長身を、玉座の背に預けて座すその壯年の姿は、それだけで周囲を圧倒し、竦ませる程の空気を身に纏つていた。

段下に跪き早朝の戦の報告を行うレオアリスの言葉を、王は瞳を伏せたまま聞いていた。

王の眼は世界を遍く見通すと云われる。それ故に王の前に跪く者は、審判を受けるような極度の緊張を覚えた。

王にとつては本来報告など必要としないが、それは王の敷く王制の仕組みの中で必要な一つの形式でもあつた。形式の中でこそ、国家とは安定を保つ事ができる。

報告を終え口を閉ざしたレオアリスは、面を伏せたまま王の言葉を待つた。

この僅かな静寂の時間にいつも、レオアリスは自分の心臓の鼓動を数えている。

戦場に於いてもこれほどに鼓動を感じる事はない。

それは恐怖であり、戦慄であり、憧憬であり——期待だ。

王はやがて瞳を上げると、暗紅色の長衣をゆつたりと揺らし、金の光彩の瞳を満足そうに細めた。

低く深い、響きの良い声が流れる。聞く者の魂を竦ませ、また包み込み捉える声だ。

「ゞ苦労。兵をゆつくり休めよ。」

抑えていた息をつき、静かに頭を下げるレオアリスの上から、更に声がかかる。

「見事な戦いぶりであった。久々にそなたの剣を見てみたいものだ。」

レオアリスは僅かに瞳を見開き、伏せた顔に微かな、だが誉められた子供が見せるような喜色を浮かべた。

その年齢相応ともいえる喜びの感情に、少し下がった位置に同じく跪いたグランスレイは心の裡で微笑った。

レオアリスにとつて王は、この王国の王、近衛師団の将として守るべき主というだけの存在ではない。

レオアリスの育つた北方の村では、彼が生まれた頃から王とのきさやかな関わりがあつた。長老達が王と取り交わした何事かの約定により、年に一度、王都から北方の辺境の村まで、数十冊の書物が届けられた。その約定が何に由縁するのか、長老達に尋ねても明確な答えはなく、レオアリスが知つてゐる訳ではない。

けれども、隔絶されたようなひつそりとした村で、冬の雪に閉ざされた世界で、レオアリスはそれらの書物に囲まれて育つたのだ。

その事は静かに、確実に、レオアリスの中に根を下ろしてゐる。

会つた事も姿を見かけた事すら無かつたが、いずれ王都に出て王に仕えたいと、何となくそう思つていた。

初めて王に拝謁した時は緊張のあまり、どんな言葉を掛けられたのか、自分が何を言ったのか、殆ど記憶に残つていらない。

ただひたすら嬉しいと感じた事、そしてその黄金の瞳をどこか懐かしいと感じた事を、漠然と覚えていた。

「れつおあつりす！」

謁見の間を出た途端、澄んだ楽器の音色にも似た明るい声と共に勢い

良く背中にぶつかられ、レオアリスは軽くむせた。

背後から肩にするりと細い腕が回される。

「……アスタロト」

肩に乗せられた顔を横目で睨む。

黒い艶やかな髪を高く結い上げて背中に垂らし、透き通るような白皙の面に、紅い瞳と唇が映える。

非常に華やかな、美しい少女だった。

年頃はレオアリスと変わらない。外見からでは実際の年齢を計り難い種はこの世界に少なくはない。アスタロトもレオアリスもまた同様だったが、この時点ではまだ彼等は見かけどおりの若い存在だ。

アスタロトは襟の詰まつた青い長衣を纏い、下には細い銀糸で繊細な刺繡の施された丈の短い黒の上下を身につけ、二の腕の半ばまである黒い手袋と、すらりと伸びた白い足にふくらはぎまでの黒い革靴を履いている。

手や首、耳に惜しみなく飾られた銀の装身具が、その容姿を一層引き立てていた。

「嬉しそうな顔してるなあ。誉められたろ」

アスタロトはひよい、とレオアリスの肩から掛かる長布を持ち上げ、ひらひらと振つてみせた。

「お前ホンツとガキみたい。すぐ分かるんだもん」「うるせえな」

長布の裾を奪い返し、レオアリスは不満の色も濃く眉をしかめた。だがそうしてみても、口元にはまだ微かな喜色がある。

言葉にして確認した事も無く、またレオアリス自身がそう言つている訳でもないが、レオアリスが王に仕える様は、まるで子が父を慕うのにも似ていた。

アスタロトにはそれが面白いらしく、折に触れてその事をつついではレオアリスをからかっている。

レオアリスの表情を捉え、グランスレイは苦笑を浮かべた。そんな姿

は例え他者から畏怖される剣士ではあっても、彼がまだようやく少年の域を抜け出しかけた程なのだと改めて思い出させた。

そしてグランスレイはそこに、言葉には出せない安堵を覚える。

ふとアスタロトの背後に控えている男に気付き、グランスレイは密かに眉を顰め、正規軍の上級士官服を纏つたその男を眺めた。

背が低く横にどつしりと肥え、あまり軍人らしからぬ容貌ではあるが、正規軍二等参謀官の一人で、確かに名をダルベックと言つたはずだ。

ダルベックは、二人の会話をどこか疎むような表情を浮かべて眺めていたが、グランスレイの視線と合つて決まり悪そうに顔を逸らした。

グランスレイは改めて向き直り姿勢を正すと、アスタロトに対しても深々と頭を下げた。

「お久しぶりです、炎帝公」

「よう。一隊は頑張つてるな」

アスタークトはにつこり笑つてグランスレイに手を振つてみせる。形式というものを気にしない点で、この二人は良く似ている。そういうところも気が合う理由なのだろう。

まだ背中に張り付いたままのアスタークトを、レオアリスは首を捻つて睨み付けた。

「いい加減離れる。鬱陶しい」

「気にすんな」

炎帝公アスタークト。

四大公の一人であり、正規軍将軍を務める。立場上レオアリスより上位にあるが、レオアリスが王都に来る前に二人が出会つたという事と、年が同じである事からか、正規軍の総将と近衛師団大将というよりは、ごく親しい友人同士だ。

近衛師団のレオアリスの執務室にも頻繁に顔を出し、よく二人で他愛もない話をしたり、レオアリスを引っ張り出してはあちこちに出かけて

いく。

正規軍の執務はどうしたのかと、グランスレイがいらぬ気を回す程だ。
「なあ、遊ぼうぜ、遊ぼう。街いこ、街」

今もアスタークトはうきうきと声を弾ませ、背中からレオアリスの横顔を覗き込んだ。

「ああ？ 何言つてんだ。そんな暇ねえよ。俺はこれから戻つて演習」

レオアリスがあつさりと却下すると、アスタークトは美しい頬に呆れた色を浮かべた。

「ばつかお前、何そんなに働いてんだ。朝、陣張つたばかりだろ。たまには息抜きしろよー」

「お前はたまにも何もないだろ。働け」

レオアリスは構わず、ずるずるとアスタークトを引きずるようにして廊下を歩き出した。レオアリスの方が少し身長が高いために、アスタークトは爪先を引きずられるような状態になる。

だがアスタークトも肩に回した腕を緩めるつもりは無いようで、形の良い眉を切なそうに寄せ、深々と溜息をついた。

「冷たい……アリスちゃん」

「その呼び方はよせつ」

「いいじやん」

「いい加減離れろっ」

「いいじやん」

長い廊下を擦れ違う官吏や諸侯が笑いを堪え、あるいは眉を顰めてその様子を振り返っていく。

グランスレイは二人の後ろを歩きながら、彼らの顔に浮かぶその二つの感情に、レオアリスの立場の微妙さを思つた。

レオアリスは貴族の出でもなく、王都に縁故もなく、強力な後ろ盾を持つ訳でもない。剣士としての力が彼を現在の地位に置いているが、それについても若すぎるという批判が常に付いて回る。

そうした背景は年若い者達には好まれるが、年季の入った者ほど、剣士であるという事そのものを疎む声も多かつた。

レオアリスが近衛師団に配属され既に三年近くが経過し、その間に上げた実績は多くの者の見方を変化させたが、それでも未だに一部には根深い感情がある。

ただ、グラントスレイは苛立ちを覚えながらも、その感情が消える迄には尚長い歳月を要するだろうと考えてもいた。

どれほどレオアリスが実績を重ねようと、例え貴族の出身であつたとしても、剣士という事実が消える訳ではないからだ。

剣士であることそのものが、最大の問題であると言える。

(ゆっくりと、歳月を掛けて払拭していくしかない)

何事も起こさず、ゆっくりと。

様々な記憶を流す程の歳月を、静かに。

レオアリスは若い。全てはこれからでしかないのだ。

いくら誘つてもレオアリスが付き合いそうにないのを見て取ると、アスターはようやく回していった腕を解いた。もう既に謁見の間の前の廊下を通り抜け、幾つもの階段を下り、正門へと通じる大広間まで来ている。

二人が近づくのに併せて、扉を警護する近衛兵が、両側から重く巨大な扉を押し開ける。それほど力を加えているとも見えず、しかし扉は音も立てずにゆっくりと開いた。

第一大隊の兵ではないが、近衛兵達はレオアリスに対し、誇らしそうに敬礼した。今朝方の陣については、兵達も既に聞き及んでいる。

牛蹄種は戦場に於いて最も恐れられる種族の一つだ。それをいとも容易く倒したのが自分達の大将と聞けば、当然のように誇りと信頼が深まるものだ。

王城内でのレオアリスへの批判などは、直接命を預ける彼等にとって

は、全く見当違いの意見でしかないだろう。

扉を抜けると、広大な庭園が目の前に広がる。扉の前から数段下つて広い踊り場が設けられ、正面と、左右に緩やかに弧を描く階段が十数段続いていた。

階下には馬車寄せと、黒い玉石を敷いた広い道が正門まで長く伸びている。両脇に広がる庭園は常に美しく整えられているが、今は雲間に翳つた陽射しと冬へと移ろう季節の中で、密やかな気配を漂わせていた。「しようがない、いいよ、アーシアと二人で行くから」

ようやく諦めて腕を解くと、アスターは迎えの馬車を待つために、階段の手摺りに凭れかかった。鈍色に光を弾く黒い大理石は優美な彫刻に縁取られ、アスターの姿を微かに映す。

アーシアというのは、アスターが常に傍に置いている従者だ。自由気儘、奔放なアスターを常に補佐していて苦労も多いだろうが、いつも穏やかな微笑を絶やさない少年だ。

「土産持ってきてやらないからな」

「お前の土産はろくなモンが無いからいらぬエ」「つ……ばあ——かっ！」

悔しそうに足踏みをするアスターに顔を向けて、にや、と笑うと、片手を振つてレオアリスはそのまま正門へ向かつた。グラントスレイもアスターに敬礼し、レオアリスの後を追つて階段を下る。

アスターに付き従つていたダルベックは、レオアリスの後ろ姿を見送つてあからさまに不快の色を浮かべた。

「公に対してもこのような態度は、例え近衛の大将とはいえ、いかがなものですかな」

棘を含んだ響きに背を向け、アスターは振り向かず、黙つて正門の方を眺めている。

ダルベックはアスターが何も言わない事を同意と受け取つたのか、重ねて口を開いた。

「大体、公とは身分が違います。周囲との兼ね合いもありましょ、

あまり親しげなご様子をお見せになるのは贊成致しかねますよ。第一剣士など

「お前、何だ？」

乾いてひやりと低い声に、ダルベックは口を閉ざした。

アスタロトは振り向かないまま、ちらりと視線だけを投げる。

「あれは私の友人。お前は何なんだ？」

「こ……」

「身分？」

美しい唇に薄く笑みを刷く。声は魂を凍り付かせるように響いた。

「王都は実力主義だ。それともお前は、私が身分だけでこの地位にいるとでも言うか？」

全身に冷水を掛けられたかのよう震え、ダルベックはその場に叩頭した。

「め、めつそうも……！」

言葉を詰まらせて数度叩頭し、おろおろと立ち上がると、幾度も腰を折りながら慌てて立ち去る。

その後ろ姿につまらなそうな一瞥をくれ、アスタロトは改めてレオアリスの姿を探した。既にグランスレイと共に、正門の前辺りにいる。

「あいつも、色々やつかいなところにいるよな」

丁度そう独りごちたとき、目の前に音も立てず四頭立ての黒い馬車が滑り込んだ。

階下に停まると開いた扉からガチャリと小さな段が降ろされ、飛び降りた紺色の髪の少年がにこっと笑ってアスタロトに声をかける。

「アスタロト様」

頷いて馬車に乗り込むと、アスタロトは深く艶やかな緑をした天鷲の座席の上に、ゆつたりと腰をかけた。

少年——アーシアが差し出した琥珀色の液体が入った摺り硝子の杯を受け取り、一口舐める。

「剣士かあ」

窓から正門に眼を向けたが、既にレオアリスの姿は門の向こうに消えていた。

再び背凭れに身体を預け、アスタロトは見るともなしに、動きだした馬車の窓を流れる正門を眺めた。

浮かんだのは他愛もない疑問だ。

剣士を軍に配さなくなつたのは、いつからだつたつけ……？

アスターと別れて王城の正門を出ると、レオアリスとグランスレイは、正門のすぐ右手から、城壁に沿うように建てられている厩舎へと足を向けた。

正門も四方に設けられており、レオアリス達が主に利用するのは西正門だ。厩舎も各門にそれぞれ置かれている。

王城は広大な面積を有する。レオアリス達近衛師団の司令部のある第一層から、正門のあるこの第四層までもかなりの距離があり、徒歩であれば大人の足でも一刻近い時間を要する。

加えて王城の内部は防衛上、街に設けられていて、馬や馬車、もしくは飛竜で往来するのが常だった。

厩舎には昼夜を問わず数名の管理官が常駐し、城に上がる官吏、軍将校、貴族達などの為に、彼らの乗騎を預かり世話をしている。

城の入り口まで馬車を寄せられるのはアスターのよう高位の貴族、侯爵位以上の貴族達か、官吏で言えば内政官房など各官衙の副長官以上、軍では正規、近衛師団とともに総将とその副官まで、と定められていた。

レオアリス達が入つて来るのを目撃し、管理官達が作業の手を止め立ち上がる。一人の飛竜を預かっていた管理官は彼等の飛竜が憩んでいる柵の前に案内しながら、にこやかな顔を向けた。

「僭越ながら、大将殿の銀翼は非常に見事な翼をお持ちですね」

その言葉にレオアリスは嬉しそうな瞳を上げた。

「まだ若い飛竜ですが、成長毎に一層速く飛行できるようになりますよ

う」

「今より？　すごいな

レオアリスの瞳が更に輝く。彼の飛竜は大将位を得た時に、王から下賜されたものだ。大将になつて唯一、心底良かつたと思えるものかもし

れない。

まだ若いが疾い翼を持ち、レオアリスの意を良く汲んでくれる。ハヤテと名付けたそれは、以前何かの書物で見た言葉から取った。疾風を意味する。

ハヤテとしばしば遠乗りをするのがレオアリスの気に入りだ。尤もレオアリスもハヤテも若くまた好奇心旺盛な面が強く、大人しく飛びはない。周囲に言わせれば遠乗りではなく曲乗りに近い。

レオアリスが近づくのに気付いて、ハヤテは下ろして長い首をもたげて主を待つた。

延ばされた手に艶やかな鱗に覆われた頭を寄せ、青い瞳でレオアリスを見上げる。

「お前、誉められてるぜ。まだ速くなるってさ。すげえなあ」

ハヤテはそんな事も判らなかつたのかと言わんばかりに、身体を一度大きく震わせた。それよりも早く乗れと、首を押し付けるようにして主を促す。

厩舎の中で退屈していた様子が手に取るように見え、レオアリスは笑つてその首を叩いた。

「分かってるって。……少しくらい遠乗りに」

「上将」

背後のグランスレイの咎める響きに、レオアリスは肩を竦めた。

「また今度行こうな」

厩舎の中庭から飛竜を上昇させ、レオアリスは第一大隊の司令部のある西外門の方角へ騎首を向けた。

すぐ眼下には、街道から王都を抜けて最終的に正門へと続く大通りがある。

もしくは、王城を起点として、各方面に街道が伸びていると表現する方が正しいかもしれないが、その通りの左右には、第三層、貴族諸侯の館が広がっている為、その上を無闇に飛ぶ事は禁じられていた。

正門の周囲には四大公の屋敷が四方に配されており、言うまでも無く第三層の中で尤も広大な敷地を有する。

アスターの館はこの位置からは見えないが、その代わり王城の行き帰りに必ず眼にするのが、四大公に継ぐ実力者である、ヴェルナー侯爵の館だ。

レオアリスにしてみれば参謀官ロットバルトの生まれ育った館でもあり、通りかかる都度やはり目はいくが、何度見てもそこは温かみの欠けた無機質な印象が強い。

一度だけそこを訪れた時もやはり、寒々しい印象を受けたのを覚えている。

職務上ロットバルトは第一層に支給される士官の宿舎に居起しているが、彼が好んでそこに居るのは勤務に都合がいいというだけではないのだろう。

大通りに沿うように飛竜を飛ばすと、すぐに第三層と第二層とを仕切る中門に差し掛かる。

基本的には中門で一度飛竜や騎馬を降り、衛兵による身分確認を経るのだが、レオアリスの乗る銀翼は大将の乗騎を意味し、門での確認を必要としなかった。

第二層、軍将校の官舎区を抜けると、ようやく第一層にある司令部の建物が現れる。正規軍が東西南北のそれぞれの方面ごとに配置されるよう、近衛師団もまた大隊ごとにこの第一層に配置されている。

西が第一大隊、北に第二大隊、東に第三大隊の司令部及び兵舎が置かれ、南には総将アヴァロンの総司令部があつた。

総司令部が南に置かれるのは、正規軍の総将であるアスターが四大公の一角として南方を統括する為だ。必然的に正規軍、近衛師団とも、総司令部は南方に置かれた。

見慣れた第一大隊の指令棟の甍を視界に捉え、レオアリスは飛竜の手綱を繰ってその中庭に飛竜を降下させた。

第一大隊の司令部に戻ると、書類に目を落としていたロットバルトが顔を上げ、立ち上がって二人を迎えた。レオアリスの表情を見てとり、整った口元に笑みを浮かべる。

「随分と嬉しそうですね」

「そうか？」

そんなに顔に出ていたどうかと、レオアリスは改めて、右手を頬に充てた。

「雰囲気で分かりますよ。王に拝謁された時は、まあ大体そうでしょう」何となく自分が子供じみている気がして、レオアリスは室内を抜けながら髪をくしゃくしゃと搔き回し、自分の執務机に座った。

ロットバルトが今までまとめていた書類を手にその前に立つと、机の上にそれを差し出す。

「本日の記録です。ご確認を。よろしければその内容で総司令部及び内務へ最終報告を上げます。死者はなく負傷者はいずれも軽傷ですので、今回の作戦は満足出来るものでしよう」

書類にざつと眼を通してレオアリスが頷くと、ロットバルトは今度は別の書類を手に取り、最初の一枚を捲つた。記されているのは午後の演習の布陣図だ。

副将と三人の中将がレオアリスの前に揃うのを待つて、中軍、右軍、それぞれの布陣を読み上げる。左軍に関しては、今日一日は休養を取らせるため、中・右二軍での演習となる。

ロットバルトは第一大隊の一等参謀官の任にあり、大将、つまりはレオアリスの戦術・戦略面での補佐的な役割を担う。大隊の一等参謀官は立場的に言えば中将にあたり、それは正規、近衛師団とともに共通している。

「げ。またお前、そんなめんどくせえ展開を……」

中軍中将クライフが心底閉口したように天井を仰ぐと、右隣に立つ右軍中将ヴィルトールはちらりとその姿を眺め、いかにも仕方ない、とうようにわざとらしく肩を竦めてみせた。

クライフは年齢にして二十代半ば、ロツトバートより僅かに年長で、左軍中将フレイザーとはさほど変わらない。南方出身者特有の浅黒い肌と明るい茶色の髪と瞳が、その性格の陽気さを表わしているような男だ。

対するヴィルトールは三十代半ばの外見に相応しく、長身の背の半ばまである灰銀色の髪と同色の瞳に、落ち着いた物腰が窺える。

「お前が陣を組むといつも単純だからね。まあ苦手なのも無理は無い。ロツトバートが組む陣は頭を使う必要があるし？」なあ、フレイザー」「そうね。たまには思考回路を働かせないと、腐るわよ」

「何でフレイザーに振るんだよ」

フレイザーが翡翠色の瞳に艶然と笑みを浮かべるのを見て、クライフは今度はがくりと項垂れた。

ヴィルトールに笑われるのはただ腹が立つだけだが、フレイザーに少なくからず好意を抱いているクライフとしては、その彼女に笑われるのは少々堪える。

「フレイザーに振らないで誰に振るんだ？　いくらお前でも、上将に頷かれちゃきついだろうに」

「だからお前は破城が得意なんだな。と言うよりあれは破壊だけね」「てめえ、喧嘩売つてんなら買うぜ」

右隣のヴィルトールをじろりと睨みつけクライフは顔をしかめたが、ヴィルトールは涼しい顔で頷いた。

「うん。高いよ」

グランスレイが一つ咳払いをすると、三人とも何事も無かつたかのように真面目な顔をして姿勢を正す。思わず噴き出したレオアリスを横目で見て、グランスレイは溜息を吐いた。

本来であれば、軍議の最中に上官の前で軽口を言い合うなど、厳罰に処されても仕方ないが、レオアリスにはそうした事を気にする様子はない。

「というよりは、その会話を面白がって聞いているばかりか、どちらかというと進んで口を出したがる。それでよく、話がどんどん逸れていくのだ。」

「上将」

「悪い」

レオアリスはすぐに笑みを引っ込んだものの、執務机の上に頬杖を付いた格好のまま中将達を見渡した。

「確かに複雑な陣形だが、時間と余力を残せよ。演習後、俺と手合わせがあるだろう」

その言葉に、一斉に胸に左腕を充て敬礼をする。レオアリスとの手合は月に二度、中将以上の恒例のものだ。この時だけ、レオアリスは「剣」を抜く。中将達の表情も俄かに引き締まった。

場がひと段落着いたのを眺め、ロツトバートは手にしていた書類を閉じた。

「手合わせは演習後、そのまま南第二演習場です。日没までには、全て終わるように組んであります」

「実戦じや、もつと単純に行つた方が上手いく事も多いんだよ」

「だからお前は破城が得意なんだな。と言うよりあれは破壊だけね」「てめえ、喧嘩売つてんなら買うぜ」

剣が纏う青白い光が、意識と全身を圧迫するように感じられる。

レオアリスの構えは無位だ。ただ右手に剣を提げている、それだけの立ち姿に打ち込む隙を見つけられず、ロットバルトは呼吸を整える為に深く息を吐いた。

この相手を前にすると、自らの剣への自信などあつさりと消し飛ぶ。意識を研ぎ澄ませ、集中力を高める。己の限界を知り、それを越える為の方法を模索する。それがこの手合わせの、最大の意義と言えた。

いくら待っても打ち込む隙は生まれない。ロットバルトは自分が最も得意とするもの、剣速に視点を切り替えた。

いつ撃とうと同じであれば、待っていても仕方がない。

左手で鞘を握ったまま、鐔に添えた親指でそれを弾く。鞘走る剣を引き抜き、レオアリスの喉元へと一息に振り抜く。

「速つ」

先に手合わせを終えて眺めていたクライフが、思わず身を乗り出す。だが声を発する前に、既に手合わせは終わっていた。

撃ち抜いた切つ先は喉元に達する寸前でレオアリスの剣に阻まれ、音を立てて砕けた。

それと同時に、その場を支配していた緊張が解け、クライフは大きく息を吐いて再び演習場の壁に凭れかかった。

ロットバルトは自分の手の中に残された柄を呆れた顔で眺めた後、目の前のレオアリスに一礼した。踵を返し演習場の端へ向かう途中、入れ違いに進み出たグラансレイが軽くその肩を叩く。

「速度が増したな」

「……そうかもしませんね」

結果止められているのでは素直に喜ぶ気にはなれず、ロットバルトは苦笑を浮かべた。手合わせはこれまで幾度となく行われていたが、いま

だ一度も切つ先がレオアリスの身体を掠めた事は無い。

折れた剣を片手に戻ると、クライフが座り込んでいた顔を上げ、にやりと笑つてロットバルトを迎えた。

広い演習場内は演習も全て終えて人影も疎らになり、時折緩い風が低く砂埃を吹き散らしていく。

「お疲れさん。やつぱり折れたな。ま、俺の槍も折れたけどよオ。四名様鍛治場へご案内つてとこだ。副将入れて五名か？ はああー、新調したばっかりだつてのに、また作らなきやいけねえ」

「一隊は鍛冶師に嫌われてますよ、完全に。これまでに何本打たせているやら」

ロットバルトの言葉に同意するように、クライフはしゃがみ込んだままぐくりと頭を落とした。

「もう俺、あの親父達のところに顔みせるの、辛くってなー」

「同感だね。その内あそこは過労死するだろう。そうしたら、香典は一隊全体の褒賞渡しても足りないよ」

クライフの隣で堀に寄りかかっていたヴィルトルールが、笑いながら器用に溜息を吐いてみせる。クライフは穂先の折れた槍を手の中でぼんぼんと弾ませながら、グラансレイとレオアリスの手合せに視線を向けているロットバルトを見上げた。

「お前、かなり真剣だろ。下手したらほんとに斬りかねないんじやないか？」

ロットバルトはレオアリスとグラансレイの剣の軌道を目で追つたまま、事も無さそうにそれを肯定する。

「そのつもりが無ければ、立ち会う意味がありませんよ」

「おいおい」

「しかし加減した剣では、剣すら合わせて貰えないでしょ」

あの疾い剣は、まともに打ち合わせれば簡単に相手の剣を碎くが、全ての太刀を受けとめる訳でもない。甘い太刀筋であれば、苦もなく躊躇

れる。

彼等にとつてはレオアリスの剣と打ち合う事自体が、一つの基準でもあつた。

どこまで自分の剣が通用するのか、レオアリスのような相手を前にすれば知りたくもなるだろう。

「そりやま……」

「斬るつもりというのは正しくは語弊がありますが、実際のところ貴方もそう変わらないのでは？」

「当然、手抜きなんざしねえ。俺はいつだつて本気だぜ。けど、当んねえし折られちまうし堪んねエよ。ほんつとマジ次こそ五合保たせてやるわ！」

拳を握り締め悔しそうに力説を始めたクライフの横から、ヴィルトルのからかい混じりの声が掛かる。

「へえ、お前まだ五合いってないの？」

クライフをからかうのはヴィルトルの日課のようなものだが、これでこの二人は息が合っている。クライフはその顔を斜めに睨み付けた。

「うつせえな！ そういうお前は何合なんだよ」

レオアリスと剣を打ち合わせて一合。躰された太刀は計算に入れない。

「最近七は保つようにしてるよ。ただ力まかせに振ればいいってものじやない。手を抜く訳にはいかないが匙加減はないと、すぐ終わつたらもつたといなからね」

不服そうに口元を歪めたまま、クライフはヴィルトルに向けていた顔をロットバルトに戻した。

「だ、そうだぞロットバルト。お前何合？」

「初太刀が良ければ一合」

「いち……」

笑い飛ばそうとして止める。初太刀を最も重要なロットバルトの

劍にしてみれば、一合目でレオアリスが剣を持って止める事が、結

果としてはいい。

「……意味ねえ議論じゃん」

「気付いたか。ま、何を重視するかだね」

「私は何合を数えるより、二刀で手合せしたいわ」

これまで黙っていたフレイザーが、腰の後ろに交差させて佩いた二本の剣に視線を落とす。鞘に納まつた細身のそれは、やはり折れて今は使い物にはならない。

クライフは地面に胡坐をかいたまま、唸るように頬に右手を当てた。

「二刀か、そういうや見た事ねえな。アスタロト公は凄かつたって言つた事あるけどな」

「凄かつたって表現はどうなんだ？ 語彙が足りないんじやないか？ クライフ。」

「アスター様の表現まんまとよ！ 悪いけど！」

「あの方はそういう言い方するわねえ」

フレイザーからの同意に気を良くして、クライフは大きく両手を広げ三人を見回した。

「だろ？ ま、ともかくさ、二刀見てみたいよなあ。見たくねえ？」

その言葉にフレイザーは深く頷いたが、ヴィルトルは同意しかねるというように肩を竦めた。

「一刀でも保たないのに二刀なんて無理だよ」

「そりやそもそもねえけどさ。剣士の二刀だぜ？ フツー剣士だって剣は一本しかないんだろ？」

「確かに、剣士で二刀を持つのは、上将くらいのようだけどね」

そう言いながらヴィルトルは、演習場中央でレオアリスと剣を合わせているグランスレイに顔を向けた。

巨体のグランスレイが扱う大剣を、レオアリスはほんの僅かな動作で難なく凌いでいく。

「しかし、これだけ手筋の違う剣を相手に息一つ乱さないからなあ。さ

すがと言うべきか、恐れ入る」

「楽しそうだよなあー。こつちは必死だつてのに」

ヴィルトールは長剣、フレイザーは細身の二本の剣を、クライフは長

槍、ロットバルトは剣の鞘走りを利用する抜き打ちを得意とする。

それぞれ全く違う太刀筋と休む事もなく剣を合わせているにも係ら

ず、レオアリスは全ての太刀を読んでみせる。

けしてそれぞれの剣技が劣っている訳ではない。事実第一大隊は、精

銳を揃える近衛師団三大隊の中でも、最も剣技に長けると言われている

程だ。

「まあ、剣の腕を押し上げる最大の要因だからね。感謝すべきさ」

「上将程じやないにしろ、剣士ってのは皆こうなのかね。あんま戦場
じやお目にかかりたくないねエなあ。上将が師団で良かつたよ」

そう言つた後、クライフはふと首を傾げた。

「……そういうやあ師団に他にいないな。いたつけ。お前知つてる？」

問われて、ヴィルトールが首を振る。

「いや、上将以外、正規も含めて軍に剣士はいないだろう」

「そうだよなあ。絶対数が少ないんだからそうかもしねないが、他に一、
三人いてもおかしくねえのにな」

「かもな。まあ上が決める事だ。さて、私は一足先に鍛冶師の小言でも

聞きに行つてくる」

ヴィルトールは曖昧に頷くと、剣を取り立ち上がった。

「俺の分も先に謝つといてくれ」

「知らないよ。自分で言え」

退意を告げる代わりに剣を上げ、ヴィルトールは演習場の門へと足を
向けた。

クライフは軽く悪態を吐きつつ片手を上げて答えたが、二人の会話を
聞いていたロットバルトは、僅かな違和感を覚えてその後ろ姿を見送つ
た。

高度な戦闘能力を有する剣士。軍に採用されているのがレオアリス一人のみと言うのは、考えてみればおかしな話だ。確かに剣士は存在そのものが数少ないが、在野の数名の名は時折耳にする。

「剣士って軍がキレイなのかね。まあ、上将も結構、役に縛られるの嫌

そだしな」

向けられたロットバルトの意外そうな顔に、クライフはピクリと眉を

顰めた。ロットバルトの言葉を牽制するように、整い過ぎとさえ言える

その顔をじろ、と睨む。

「お前も何それ。俺がなんか考えるのが意外か？ 考えるつづーの」

「いえ。私も同じ事を考えていたもので」

「お、そうだろ。やっぱ思うよなあ。近いところで言や、上将の一族だつて……」

取り様によつてはそれも失礼な発言だが、クライフはすぐにころつと口調を変え、しゃがみ込んだまま頷いた。それからはた、と口を噤み、ひどくばつの悪そうな表情を浮かべる。

「あ、や、今の撤回。失言だ」

ロットバルトは何も言わず、頷くだけに留める。

レオアリスの一族は、彼が生まれた頃に失われている。

失われた詳しいききつについては、大隊の者達はもとより、レオア

リス自身も知らないようだつた。

特にそれについて、レオアリスが何かを言つた事はほとんど無い。出身にしても、問われば常に、北方の術士の村、と、それだけだ。

ただ以前、それに近接するだらう幾つかの出来事があつた。

数ヶ月前、まだ季節が春を迎えたばかりの頃、第一大隊が王の命を受け、東方の辺境に聳えるミストラ山脈に住む、アリヤタという半獣族を調査した時の事だ。

アリヤタ族はその内蔵が非常に高価で希少な術の触媒となるため、乱獲され、絶滅に瀕していた。ヴィルトールの右軍がミストラに着いた時

には、もはや彼らは取り返しの付かない程その数を減らしていた。

あの時のレオアリスは、自分から望んでミストラに赴いたにも関わらず、終始どこか憂鬱そうだった。

レオアリスが現在の姿——剣士として覚醒したのは王都に上がる直前の事で、それ以前は術を生活の糧とする術士として育っている。

それ故にその件に関しては、かつて術士として生きていた者が抱く罪悪感とも言うべき感情と、それ以外の何かを抱えていた。

ミストラ山脈の奥で眼にした焼け落ちた村に、生き残った僅か十名にも満たない半獣達。

その時に、レオアリスの力が暴走したのだ。

(暴走か。表立つて言える事ではないが、そう表現せざるを得ない)

それが何を原因としたのか、明確には判らないままだ。その後の調査は行われていない。

王の命が下らなかつたからだ。

だが、膨れ上がつた力が山の斜面を断ち、滅びかかつたアリヤタ族の村ごと飲み込んでいく、あの様。

あの時の凄まじいまでの力の発露、それを、ロットバルトは今でも明確に思い出す事が出来る。

事件後、レオアリスの故郷を訪れる機会を得た時、彼と村人の姿が全く似ていないと知つた。

鳥の頭を持つた半鳥の一族であつた彼等は、小さくひつそりとした村で十数にも満たない人数が暮らしていた。

あの時、外界から切り離されたような辺境の村の、その更に奥を示した、レオアリスの横顔が浮かぶ。

指し示した先に広がる、深い森。

『——あのずっと奥に、今はもう滅びた村がある。ガキの頃、一度だけそこに連れて行かれて、爺さん達が何かに祈るのを、訳も分からず見てた。そこかもしれないし、そういうかもしれない』

ロットバルトの脳裏に浮かんだ横顔には、明確な感情は読み取れない。ただその時の推測だけで言えば、レオアリスの一族も、アリヤタ族と同じような理由で滅んだ種なのではないかと、そう思える。

あの時レオアリスが抱えていたもの、おそらくあの力の暴走を呼んだものは、『怒り』だ。

滅びかけた村、滅びに瀕した種族、為す術もなくただそれを眺めるだけしか出来ない事への……

(……いや、少し違うな。共感か?)

それも納得できる根拠が薄い。ロットバルトは今更ながら、あの時調査を進言すべきだったと考えていた。密売に関連する裁判への対応に追われてはいたが、原因を子細に分析し把握しておく必要は本来あつたのだろう。

それはもしまだ同じ事が起つた時、どう対処すべきかという事だ。

あの時左軍に、レオアリスを抑える事は出来なかつた。もしもそこにいたのが左軍だけではなく、一大隊だつたとしても同じ事だ。

ヴィルトールも理解しているのだろうが口にしない、だが厳然とした事実がある。王があの暴走を抑えなければ、おそらく、

「……ト、おい」

はつと現実に引き戻されると、すぐ目の前に当のレオアリスの顔があつた。

「……失礼しました。ご面倒ですが、もう一度……」

視線を落としロットバルトが姿勢を正すと、レオアリスは呆れたようにな笑つた。周囲に眼を向けると、クライフとフレイザー、グランスレイもいつの間にか既に姿を消している。

「ま、そんな大した用じやないんだが」

レオアリスは口元に右手を当て、まじまじとロットバルトを眺める。

「何です?」

ロットバルトはその視線を受けて蒼い瞳を細めた。先程までの思考を読まれたのかと思ったのだが、レオアリスが考えていたのは別のことのようだった。

「いや、今度……」

ふいに声を潜めたレオアリスに何事かと身構えると、レオアリスは漆黒の瞳にどこか楽しげな光を浮かべ、ロットバルトの持つ剣を指した。

「それ、貸してくれ。ちょっとでいいからさ」

ロットバルトは整った顔に、物柔らかな笑みを刷いた。

「遠慮します」

「……即答だな……」

まだロットバルトの剣を指差した状態のまま、レオアリスは頬に慄然とした色を浮かべる。剣を借りるというよりは、ロットバルトの得意とする抜き打ちをやってみたいのだ。

抜き打ちという特殊な技を考慮して打たれた剣は一般的ではなく、特別に打たせる必要がある。使おうと思つても、すぐに手に入るものではない。だから取り敢えず借りて、という事なのだろう。

「貴方なら出来るのでしようが、私の剣で、というのはお断わりします。

貴方はすぐ折るでしょう」

レオアリスは鍛冶師が鍛えた剣を使う事ができない。その力の負荷に耐えられず、すぐに剣が折れるのだ。作りの荒い剣であれば、それこそ振つただけで折れてしまう。正直、一隊の中で鍛冶師に一番嫌われているのはレオアリスだ。

すぐに折られると判っているものを貸す気は、さすがのロットバルトにもない。

「ちつ。さつきクライフもそう言つてさっさと逃げやがった」

「当然ですね。鍛冶師に打たせたらいかがです」

鍛冶師と聞いて、レオアリスの眉間の皺が更に濃くなる。

「あのじじいども、俺が近寄るだけで怒鳴るんだぜ？」

「それも、当然でしょう。王から賜つた剣すら折るんですから」
その言葉に、レオアリスは途端に決まり悪そうに視線を泳がせた。

以前彼は、王から下賜された剣を折つてしまつた事がある。その時のレオアリスは、蒼白になつて暫くの間落ち込んでいた。

アスタークには散々からかわれていたが、ただ王はレオアリスが剣を折る事を見越していたのだろう、謝罪するレオアリスを前にひとしきり笑つただけだという話だ。

「くそ、断るか？ 普通」

不満そうにぶつぶつと独りごちながらも、それ以上要求する気は失せたようで、レオアリスは演習場の端に向つて歩き出した。

向かつた先、演習場の出入口近くではまだ数名の隊士がいて、それぞれに訓練を続けている。既に通常の訓練は終了していて、自主的に行つているものだ。レオアリスはその姿に嬉しそうに眉を上げ、彼等へと近づいた。

「まだやつてんのか、熱心だな」

掛けられた声に振り返り、レオアリスとロットバルトの姿を認めて、

隊士達が一斉に跪く。

「気にしないで続けるよ。まあ、ちょっと見させて貰う」

隊士達は嬉しそうにお互いの顔を見合せた。大将が個々の剣を見る機会はなかなか得られないため、特に末端の隊士達にとつては降つて湧いた幸運と言える。

再び訓練に戻つた彼等を、レオアリスはその場に立つたままじつと眺めた。二人一組での立ち合いや、器具を使つた練習だ。

その一つには、打ち込みの修練の為に使われる、棒の切れ端を複数吊しただけの単純な器具が設えられているが、ただ打つだけではゆらゆらと不安定なそれは確実に捉える事は難しい。数名の隊士はそれに苦心しているようだつた。

剣を振り抜いても、支えが無いために標的は容易く後方へと力を逃が

し、上手く捉えられずにはいる。

「……手の内が甘い。捉える瞬間に絞めてみろ」

レオアリスの助言に、隊士は柄を握り直し、一二、三度振った。それからもう一度器具に向かつて振り抜いたが、今度は標的を越して剣が泳いでしまう。

「違うつて。それじや全体に力が入り過ぎだ」
隣に立ち、肘、肩を軽く叩いて力を抜かせる。隊士の肘を支えるように手を当て、肩越しに標的を覗き込んだ。

「絞めるのは打ち抜く瞬間だけでいい。全体に力が入ってたら逆に速度が落ちるからな。打った後の体捌きも落ちる」

レオアリスが指導を始めたのを見て、他の隊士達もその周囲に集まつて来た。真剣な表情で頷きながら一言も聞き漏らすまいと、身を乗り出すようにしている。

「もう一度。深呼吸してからだ」

「はっ」

隊士は幾分緊張しながらも剣を右手で握りなおすと、身体の前で中段に構え、一呼吸置いてから振り被つた。

気合いと共に正面の標的に向かつて剣を振り下ろす。

先程より堅い手応えが響いたものの、芯を捉えきれずに標的は今度は左へ逃げた。

「やつぱり右肩に力が入ってるなあ。……ちょっと貸してみな」

慌てて差し出された剣を受け取ると、レオアリスは器具の正面に立ち、周囲の隊士達を見渡した。

「打つ寸前まで力は大していらない。特に肩は楽にしろ。絞めるのは小指から一本、中指から先は支え程度で十分だ」

一旦柄を上にして逆手に持つた剣を持ち上げ、言葉の順に沿つて右手の小指と薬指の二本だけで握つて見せる。隊士達が頷くのを見てから、左足を斜め後ろへ引き、身体を僅かに落とした。

周囲が無意識の内に息を飲んで見つめる中、一度剣の平を流すようになつて、吊した十個程の標的を全て揺らす。

一つ一つがばらばらな方向へ浮ききつた瞬間に、レオアリスは右足を一步踏み込んだ。

一閃としか映らなかつた。

瞬きの間に、標的が全て乾いた音を立てて碎ける。その場の隊士達が同時に感嘆の声を上げた。

「おおっ」

「早……見たか？」

「いや、初太刀しか……」

続けざま、高い金属音が弾ける。

「げっ……」

剣を振り抜いた姿勢のまま固まつたレオアリスに、一步下がつて眺めていたロットバルトは溜息をついた。

身体を起こし、刃の中程から碎けた剣を束の間まじまじと見つめ、それからレオアリスは気まずそうに視線を反らせた。

茫然としたままの隊士へ、そろそろとそれを差し出す。

「……悪い……」

「は……？」——あ、いえ

今更ながらに折れた自分の剣に気付いて、隊士は目にした剣への感嘆と無残な剣の状態に、複雑な顔のままそれを手にした。

「ついうつかり……悪かったな」

「い、いえ！ とんでもございません」

自分よりも低い位置にある顔が更に低くなるのを慌てて押し止め、隊士はその剣を素早く鞘に收める。

ロットバルトはその様子に仕方無さそうに息を吐き、二人の方へ歩み寄つた。

「戻る前に調度課に寄りなさい。上将が折つたと言えば咎める者もない

でしょう。経費は上将の報償から落とすよう伝えますよ

「……そうしてくれ……」

「もちろん、この器具についても」

「それもかよ？ 何の為に修繕経費積んでんだ」

「既に逼迫しておりますので。まあ増額を財務と交渉してみることは可

能でしょうが、その場合は財務の担当者を崩すのはお任せしますよ」

「判つた判つた。俺が責任持つ」

溜息をついて歩き出そうとした時、折れた剣を眺めていた隊士が遠慮がちに口を開いた。

「上将、お願ひがあるんですが」

レオアリスが振り返ると、隊士は折れた剣を掴んだまま左腕を胸に当てる。

「折れた剣を、返却しなくても宜しいですか」

「？」

隊の武具は全て貸与品のため、破損した場合は新しいものを受け取る際に返却するのが常だ。

「その、手元に置いておきたいので……」

「いや、だけど」

「構いませんよ」

レオアリスが戸惑っている間に、ロットバルトが微かに笑ってそれを了承する。隊士は勢い良く一礼すると、仲間の元に戻った。レオアリスが首を傾げる。

「何で？ 意味ねえじやんか。それより持つてられると余計後ろめたいんだけど……」

「貴方にとってはいい薬でしょう」

口に出してはそう言って笑つたものの、実際隊士にとつては逆にいい指標になるだろう。

心なしか肩を落としたままレオアリスが歩き出した時、微かな金属音

が鳴り、足元に小さな飾りらしきものが落ちた。地面を二三度転がったそれを、ロットバルトの手が拾い上げる。

「上将、こちらは」

レオアリスは振り向いて、今更ながらに自分の襟元をつまみ上げた。

「ああ、悪い」

細い鎖に通した小さい銀の飾りだ。握り込めば掌に軽く納まるくらいのそれは、中央に青い石と剣の意匠が施されている。

確かに、レオアリスが常に身に付けているものだ。

レオアリスに手渡そうとして、青い石が暮れかけた陽光を微かに弾き、ロットバルトはふと瞳を細めた。

石の奥に何かの影が浮き上がつている。剣の意匠。見ない紋章だ。レオアリスの一族のものなのだろう。

（剣士の一族か……）

レオアリスのような剣士ばかりだつたのだろうか。

（それで滅びるとは、考えにくいな）

レオアリスはその中でも、特に高位の戦闘能力を持つていたと言えるのだろう。ふとある疑問を抱いて、ロットバルトは視線を上げた。

（――この人はこれまでに、全力で戦えた事があるのか？）

常に二本の剣の内一本しか用いない。グランスレイもまた、レオアリスが二本の剣を持つところを見た事が無いと言つていた。

それはレオアリスにとって、「剣士」にとつて、どうなのだろう。

（何だ？）

我に返り、他愛もない疑問は消える。レオアリスは受け取る為に手を差し出しかけたまま、怪訝そうにロットバルトを眺めている。

（いえ……。失礼しました）

飾りをレオアリスの手に戻すと、レオアリスは切れた鎖を見て面倒そ

うに一つ息を吐いた。

「ガキの頃からずつと付けてるからなあ……」

「鎖を代えれば済みますよ。大切なものなのでしょう」
レオアリスは銀のそれを持ち上げた。陽光を弾き、青い石の奥まで透けるように光る。

「爺さん達が片時も離すなつて言つてたから、何となくだ。まあ、前はいつか食うのに困った時にでも売ろうかと思つてたんだけど、それはちよつとさすがに止めた」

その言い草に、ロツトバルトは少し呆れて笑つた。

「食うに困る、ですか」

「お前はちよつと想像付かないかもな」

ヴェルナー家は、貴族の子息が比較的多い近衛師団の中でも異色といえる。食料や衣服に困るなど、言葉すら頭の中に入つていないのでないのではないだろうか。

「想像した事もありませんね」

悪びれもせずに言つてのける参謀官に肩を竦めると、レオアリスは上着にそれをしまつて演習場の出口に足を向けた。

「この後、何だつけ」

「夕刻から会議が一件。出席者は総将、三隊の各大将です」「めんどくせえ……。働きすぎだろ」

レオアリスは天を仰ぎ、うんざりと溜息を吐いた。訓練ならいくらでもやつていいが、会議など肩が凝るばかりだ。この後の会議はまだいいが、出席人数が増えるに従つて議事進行は遅くなり、時間ばかりが無駄になる。

「王の御前演習が近いでしよう。その件ですよ」「ああ」

僅かにレオアリスの声の響きが変わった事に、ロツトバルトが笑みを洩らす。

「何だよ」「いえ」

殊、王に関する事になると、気付いているのかいないのか、レオアリストの纏う空気が変わる。その様子を眺めると誰もが、父親に褒められた子供のような印象を覚えた。

演習場を横切り廐舎の扉をくぐると、個別に仕切られた柵がずらりと並び、数騎の飛竜が翼を休めている。レオアリスは入り口の程近くの柵の中に寝そべっている、銀鱗の飛竜に近寄つた。

「ハヤテ」

主の声に首を擡げ、ハヤテは喉を鳴らしてレオアリスの差し出した手に顔を寄せる。青い宝玉のような瞳を瞬かせ、早く乗れというように一声鳴き翼を震わせた。

「散歩には行かないぜ。司令部に戻るだけだ」

ハヤテはつまらなさそうに木の柵に頸を置き、それでも主を乗せるために身体を屈めた。レオアリスはその首を軽く叩いてから、ハヤテの背に飛び乗る。

手綱を繰ると、銀の翼が風を孕み、ふわりと宙に舞う。
廐舎の中央は飛竜が出入りしやすいように広い間口が取られている。ハヤテはそこから廐舎の外に上がり、一度気持ち良さそうに旋回した後、悠然と王城を目指して翼をばたかせた。ロツトバルトはそれを見届けてから一礼し、自らの飛竜の元へと足を向けた。
演習場と王城の間には、広い城下の街が横たわっている。上空から映る王都には、血の様に赤い斜陽の長い影が差していた。
燃えるように王都を染め上げる、美しいはずのその色が、レオアリスは幼い頃からあまり好きではない。飛竜の上にも染めかかる夕光を避けるように瞳を閉じる。

閉じた瞼の奥に、赤い光は残像となつて散つた。

燃えるような夕日の中、落日よりも更に紅い炎が幾筋も走り、枯れかけた草木に灯る。

それを追うように衝撃が大気を切り裂き、樹々を刈った。

崩れゆく音と闇の中、男は満足そうな笑みを冥い口元に浮かべた。

總てとはいかない。

だが、元通り。

さあ、再会と行こうじやないか？

「ください」

「ああ、お氣を付けて。左右に通り道は開いてますので、そこを抜けて……何だ、これ」

扉の前一面を覆い尽くすように、何かが天井まで積み上げてある。

壁を眺めた。

ロツトバルトの声が壁の向こう側から聞こえ、左右を見ると確かにやつと一人抜けられそうな程の隙間があつた。触れると崩れそうな壁に注意を払いながら、漸く朝の光に満ちた部屋に出る。

何となく詰めていた息を吐いて改めて振り返り、壁を眺め、執務机の前に座っているロツトバルトに視線を向けた。

「……で？」

「今朝早くアスター公がおいでになつて、置いていかれました。土産と仰つておられましたが、お心あたりが？」

そう言えば昨日、どこかに行くと言つていたが……。昨日の別れ際のアスターの悔しそうな顔が脳裏を過つた。

「——あ、の野郎オ」

つまりは意趣返し、だろう。

「何でも、丁度時期で沢山出ていたからとか何とか」

色とりどり、様々な形の小さい箱が天井までぎっしりと積みあがつたそれは、どこから手を付ければ崩さずに取れるのかすら判らない。

「お前、見てたわけ？」

「ええ。それは見事な手際でしたよ」

「止めろよ……」

執務室の扉を開けたとたん、レオアリスはぎよつと後ずさつた。

そもそものはずで、部屋に一步踏み込んだそこに、壁がある。思わず後ろを振り返つて自分が確かに扉を潜つたのを確認し、もう一度改めて

後ろを振り返つて自分が確かに扉を潜つたのを確認し、もう一度改めて

後ろを振り返つて自分が確かに扉を潜つたのを確認し、もう一度改めて

思わず額に手を当てる。ロットバルトはわざとらしいほど意外そうな色を浮かべてレオアリスを見た。

「私が、公のなさる事をですか？」

(出来るだろ……)

普段アスタロトが羽目を外した時などは容赦無く厳しい事を言つてのけるくせに、と思ひはしたもの、レオアリスはただ肩を落として室内を見回した。

要は単に面白がつてゐるだけだ。ヴィルトルもフレイザーも、口元には今にも吹き出しそうな笑みが見える。一人グランスレイだけは、曖昧な表情を浮かべて僅かに視線を逸らせている。

一度深い溜息をつき、レオアリスはもう一度目の前の壁を見上げた。

「いっそ、崩すか」

「いえ、もうすぐ崩れます」

ロットバルトが書類から眼を離さないまま、あつさりと告げる。

「はあ？」

「クライフ中将がまだ出仕しておりませんので……」

その言葉が終わらない内に、扉が勢い良く開く音と共に、クライフの声が響いた。

「すんませんつ遲刻……つぎやあああ！」

ぶつかる音に合わせ、見事なまでに雪崩を打つて、壁が崩れ落ちた。

「お前なあ、何のつもりだ」

王城の第三層にあるアスタロトの館の一室で、広い庭園に面した露台の椅子に座り、レオアリスは目の前の華やかな顔を睨んだ。アスタロトはしてやつたり、と言わんばかりに白い頬に得意げな微笑みを浮かべる。「ふふん。嬉しいだろ。今回はちょっと遠出したんだ。そこの風習とやらでは、好意を抱いてる男に女が贈るらしいぞ。つまりお前はこの私に

好意を抱かれてるって事だ。誇りに思え」

「阿呆か」

「普通は一つらしいけど、私なんてあれだけたくさん？」

「馬鹿？」

「全部食えよ」

「——はあ」

につこり、と満面に笑みを浮かべたアスタロトの華やかな顔に、返す言葉も見つからず、レオアリスはただ大きな溜息をついた。

アスタロトが持ってきた物に、おいそれと手を触れる訳にはいかないとか何とか理由を付けて、あれは崩れたまま、誰も片付けようどしない。多分レオアリスが戻った時まで、床の上で通行の邪魔になつてゐるのだろう。

ちなみにレオアリスはここに来る時、窓から出てきた。

グラントスレイやロットバルトがどうしているのか想像すると笑えるが、戻つたらあの片づけが待つてゐるのかと思うとうんざりする。

アーシアが申し訳なさそうな苦笑を浮かべ、二人の前に暖かい紅茶を注いだ白い陶磁の茶器を差し出した。

「すいません、レオアリスさん。一応、お止めしたんですけど……」

「仕方ない。お前が謝る必要はないさ。苦労するよな、お前も」

アーシアはどんでもございません、と慌てて手を振つたが、アスタロトはもつともらしく頷いた。身を乗り出し、白い藤椅子をきしりときしませる。

「そうだ、謝る必要ないぞ。あれ積むの苦労したんだから。最初行つた時もうロットバルトがいてさ、あいつ意外とくそ真面目だよね?、絶対怒られると思ったけど何も言わないから安心してたのに、途中まで積んだらグランスレイが蹴つまづいて崩したんだ。あいつでかすぎ。もおー、せつかくのヒトの苦労をさあ

「…………」

アスタークトが滔々と話し続ける横で、生真面目なグランスレイが手伝

う訳にもいかず、かと言つて止める訳にもいかずに困惑している姿が眼に浮かび、レオアリスは乾いた笑いを漏らした。

それを知つてか知らずかアスタークトはすぐに得意そうな顔を向ける。

「すつごい高価なものもあるんだぞ！ 一粒三百ルス！」

「さ、三百！」

馬鹿かお前は！ と言いそうになつたが、却つて呆れてしまい、レオ

アリスは口を閉ざした。

アスタークトが食べ物、特に甘いものに対しては金に糸目を付けないのはいつもの事だ。ちなみに三百ルス、銀貨三枚あれば、大体王都の下層あたりでひと月部屋が借りられる。

「もお、さすがに持つてつたお金が底つきるかと思ったあ。でも私の分は隣の部屋一杯買つて来たから、十日は保つかも」

組んだ手の上に形の良い額を載せ、至福の表情を見せる。

という事は、あんなものが部屋一杯を埋めているのだろうか。隣の部屋と一口に言うが、隣は相当に広かつたはずだ。

「……頭痛え……」

「大丈夫か？ 風邪？」

「……」

アスタークトの顔を眺めれば、紅い瞳は心底心配そうだ。レオアリスは頬杖をつき、これで本日何度目になるか判らない溜息を洩らした。

「何か疲れて見えるな、気を付けるよ。お前意外と繊細じやん？」

「……」

誰のせいなんだと言いたい気持ちを飲み込み、レオアリスは席を立つた。

「何だよ。もう行くのか」

「文句を言いに来ただけだしな。俺も暇だよ、全く」

アスタークトはつまらなさそうに唇を尖らせたが、ふと思いついたよう

にレオアリスを見上げる。

「そうだ、お前、今度の御前、剣舞やるの？」

御前とは、年に一度、王の天覧の上で行われる総合合同演習のことだ。

正規軍、近衛師団全ての兵が参加し、祝祭のように華やかに行われる。

将校や剣の優れた兵達が演武や手合わせを行うのが通例で、大将級はそれが必須となっている。レオアリスが他者と剣を合わせるのは困難なため、選ぶとすれば剣舞くらいなのだ。

舞とは言つても型に近い。前回の御前演習の折りに一度見ただけだが、静から動へ、あの青い剣が大気を切り裂く様はアスタークトのお気に入りだ。

だがレオアリスはあまり気乗りのしない顔を見せた。

「そうなりそうで気が重いんだ。また会場壊すのもなあ……」

「そんな些細なこと気にすんな。なんなら私がバツチリ術掛けてやるから」

レオアリスのうんざりした顔にも理由はある。舞とは云え剣士が剣を抜くとなれば、何も術を施さない場で行うには危険が伴う。前もつて厳重な結界を張り巡らすなど、周囲に損害を与えないよう対策を講じる必要があつた。その為に設けられる会議など居心地が悪い事この上ない。

「平気かよ」

「まかせとけつて。楽しみにしてるからな。王なんか、お前がぶつ壊した方が喜ぶんじやないか」

疑わしそうな視線を向けるレオアリスに対し、アスタークトはに、と自信に満ちた笑みを浮かべ、白い円卓の上に頬杖をついたまま、空いている右手をひらひらと振つた。

「今度は一緒に行こうよ。いい店見つけたんだ」

「……そうするよ。またあんなモン持つて来られちゃ敵わねエし。アーシア、ごちそうさま」

「お気を付けて」

アスターと会釈をするアーシアに軽く右手を上げて答え、レオアリスはアスターの館を後にした。

七

通常の訓練は大体毎日同じような日程で回る。

朝の半刻程度、一隊の少将以上の打ち合せがあり、その後レオアリスとグラントレイは七日に一度の割合で、近衛師団全体の連絡調整を兼ねた会議に出席するため総司令部に出向く。

近衛師団とはいえ王に謁見する機会はそれ程多くはない。総将アヴァロンは常に王の傍に控えるが、大将であつても特別な案件が無い限りは、十日に一度、諸侯の揃う謁見に列席する程度だ。

一方、各中隊では午前中は個々の基礎訓練を行い、午後に全体の演習、又三日おきに左中右、三隊揃つての布陣演習が行われる。

この流れは近衛師団の第一、三大隊に於いてもさほど違はないが、た。

だが今は御前演習が近いため、通常の内容とは別に、演習訓練とその詰めの会議が連日行われていた。

会議を終え、漸く一日の終わりを迎えてレオアリスが執務室に戻ると、帰り支度を整えていたクライフが顔を上げた。執務室の奥に置かれた机に向かうレオアリスを、クライフの声が追いかける。

「上将、お疲れさまです。終わりですか？ これから飯行きましたか」空腹を感じていたレオアリスは迷う事無く頷いた。どうせ屋敷に戻つても食べるものはない。どこかで食事を摑つてから帰ろうと思つていたところだ。

「行く。すげえ腹減った。けどちよつと待つてくれ、一件書類の確認を」

そう言つてロットバルトの席を振り返つたが、珍しく空席だ。

「ああ、奴なら先に飯に行きましたよ。また戻るみたいですが」「戻るのかよ。まあなら俺も戻ればいいか……」

レオアリスは手にしていた書類を自分の机の上に放り、再び扉に向かって。取つ手に手をかけていたクライフが手を止めてレオアリスを振り返る。

「え、じゃ酒なしつすか」

「お前飲めば？俺は元々飲まねえし」

「一人で飲んだくれるのもなあ。ヴィルトールは？」

それも悪くは無いが、やはり一人で飲むより相手がいた方がいいと、クライフは同じように帰り支度をしていたヴィルトールに声をかけた。しかし普段はクライフに付き合う事の多いヴィルトールも、あっさりと肩を竦める。

「私は今日は帰るよ、悪いね。最近帰りが遅いせいで娘とまともに顔を合わせてない。そろそろ忘れられそうだ」

「あー、そうだな。ご愁傷さん」

深刻そうな面持ちで溜め息をつくヴィルトールに対して、クライフはきつさと、それ以上彼が口を開く前に会話を打ち切った。

そのクライフの態度に気付かず、レオアリスは以前に何回か会つたことのある彼の娘の姿を思い出し、口元を綻ばせた。前回会つた時はまだ本当に小さかつたが、子供の成長は早い。

「そういうや最近会つてないけど、大分大きくなつたんだろうなあ」

「上将、突つ込まないほうが」

途端にヴィルトールの顔が蕩ける。

「いやあ、お陰さまで。そろそろ三歳になるんですが、もう大分しつかりした言葉を話し始めましたね。どこで覚えてくるものか、結構驚くような大人びた言葉を言つたりして、そこら辺がまたかわいいんですよ。妻に物言いが良く似てまして、妻の口ぐせそのもので叱られたりするので私の立つ瀬がないんですが。あ、先日は」

「分かった分かった、さつさと帰れ」

堪り兼ねたクライフが、蕩々と語りだしたヴィルトールを追い払うよ

うに再び手を振つた。

ヴィルトールは愛妻家で、現在三歳の愛娘がいる。普段は穏やかだが娘の事を語りだすときりがなく、クライフにしてみればもはやその話は聞き飽きたといった態だ。

クライフはまだ話し足りなさそうなヴィルトールを無視して、執務机に向かつて分厚い書類に眼を通してグランスレイに声をかけた。

「副将、いかがつすか」
杯を傾ける仕草に、グランスレイは日頃厳しい眉根を苦笑に寄せた。
「私はもう少しやる事がある。あまり飲みすぎるなよ」

「残念だな。フレイザーは？」

フレイザーは少し考え込んだものの、チラリとグランスレイに視線を向け、すぐに首を振つた。

「私も、もう少し片付けてからにするわ。またね」

その場の全員にげなく断られ、クライフは心底残念そうに肩を落とした。

「しゃあねえ。上将、飯だけ付き合つてください。飲みは現地調達します」

笑つて頷くと、レオアリスはグランスレイ達に一言声をかけて執務室を出た。

中庭と、それをぐるりと囲む土官棟の回廊を抜けていく風が全身を包み、心地良い。上弦の月が照らし出す庭は穏やかそのものだ。会議続いで滅入つていた気持ちがほぐれるのを感じながら、レオアリスは続いて出てきたクライフを振り返つた。

「どこにいく？」

「食うだけなら、食堂行きますか。誰かしらいるだらうし」
飲み相手が、ということだ。

「いいぜ。近いし」

そう言うと、二人は目指す食堂のある方へ回廊を抜けて歩き出した。

「あー腹減った。俺今日は会議ばっかであんま身体動かしてないのに
なあ。絶対会議つて演習より体力使うぜ」

「俺は常に寝てるんで分かりません」

「グランスレイに言うなよ、それ」

「バレてますよ。あつはっは」

士官棟を抜けて通りを歩く道すがら、行き交う兵士達が立ち止まって
は二人に敬礼を向けていく。丁度勤務交替の時間が過ぎたところで、日
中より人影が多い。

王城の第一層、各軍の司令部と兵舎が立ち並ぶ区域との境目辺りには、
兵士達の為の食堂が置かれている。第一層は方角ごとに四分割されてい
るのに近い作りの為、食堂もそれぞれ四ヶ所にあつた。

一般兵の配備は大体半日交替で、夕刻までの勤務の者は時間が終わると
城下に繰り出す者も多いが、兵舎の傍にある食堂を利用する者も少な
くない。

士官専用のものもあるが、それは南の総司令部近くに一棟あるだけ
だつた。その専用の一棟の中には、少し手間を掛けた食事や酒を出す店
などが数店があるのだが、わざわざ士官専用に行くのは面倒さもあり、
だからレオアリス達も大体この食堂を利用している。

ヴィルトールなど家庭がある者はここで食事を共にする事は多くは
ないが、レオアリスやクライフなど独り身には有り難いものだ。

食堂に足を踏み入れた途端に、賑やかな活気が二人を包んだ。任務から
解放された兵達が思い思いに卓につき、酒杯を傾けていて、ずらりと
百台近く並んだ卓は既にほとんど埋まっている。

「空いてないなあ」

「この時間、回転悪いっすからねえ。安いから皆長居して飲んだくれる
んだよなあ……」

どこに座ろうかと首を巡らせているうち、その中で一角だけ、恐ろし
く静まり返っている卓が目に入った。周囲よりも空席の目立つそこには、

五人ばかりの兵が近衛師団兵も正規兵も、おそらく先に座つてしまつて
いたのだろう、離れた場所に座つて他の兵達とは対照的に、まるで
訓練中のように畏まつてゐる。

その元凶を見つけてクライフはあんぐりと口を開けた。

「うつはー、めつずらしいな、おい。つーか、周り固まつてんじやねえ
か」

元凶はというと傍らに置いた書類に目を落しながら、我関せずといつ
た様子で食事を取つてゐる。一斉に立ち上がり敬礼する兵達の間を抜け、
クライフは元凶、ロットバルトの隣の席にどかりと腰を下ろした。

確かに煩雜なこの食堂内でそこだけ別の空間のようだと、レオアリス
も苦笑を浮かべてロットバルトの前の席に腰掛けた。理由は考えるまで
も無い。要はロットバルトの持つ背景と、本人の近寄り難さから来るも
のだ。

(見た目と違つて面白いんだけどなあ)

レオアリス独自の感想に同意する者は少なそうだが、この状況はこれ
で傍から見れば面白いと暢気な考えの下、まだ緊張感漂う周囲の食卓を
一度見回してからレオアリスは品書きを手に取つた。
隣のクライフを氣にも止めず、ロットバルトは読んでいた書類を閉じ、
レオアリスに顔を向ける。

「会議は終了されたようですね

「一応、今日のところはな。お前この後戻るんだろう？ 悪いけど一件確
認したい書類があるんだ」

「何です？」

「前回の御前の警備体制

「承知しました。ご用意しておきましよう」

「頼む」

レオアリスが言葉を切ると、クライフは机に深く肘を付きながら、斜
め下からロットバルトの顔をまじまじと覗き込んだ。にや、とからかう

ような笑みを浮かべる。

「美味しいか？」

普段あまり口にする事はなさそうな料理の皿をつづいてみせる。

「……まあ、それなりに。いい味ですよ」

ロットバルトの評価に、背後の席を片付けていた給仕が、傍目にも分かる程ほつと肩を下ろす。

「じっかしお前、何だつてこんなどこで食つてるわけ？ 似合わねえよなあ。周りの奴ら圧迫すんなよ飯時に」

「お忘れのようですが、私も入隊当初しばらくは宿舎にいましたよ。別に今初めてという訳でもない」

「いや、忘れてねえ。お前の入隊当初が最近の奴等の中じや一番派手だったもんなあー。だから圧迫すんなつて言つてんじやん」

ロットバルトは改めてクライフに身体を向け、蒼い瞳を細めた。

「仕方ないでしよう、時間が無いんですよ。ここが一番近い」

「戻つてまた仕事かよ。せわしねえなあ。俺みてえに勤務時間内でビツと終わらせろよ」

「明朝までの書類を、どなたかが夕刻に出してくださいたお陰でね」

「は……」

口を開け、そのまま冷や汗をかいて固まつたクライフを尻目に、ロットバルトはレオアリスに視線を戻した。

「御前演習については、大方整つたのですか？」

「まあ」

言葉を濁らせたレオアリスの様子に、ロットバルトは口の端に笑みを浮かべた。レオアリスがあまり剣舞をやりたがっていないのは、周囲にも伝わってくる。

「では、剣舞をなさるという事ですね」

「ま、そういう」

レオアリスは非常に気が進まなさそうに言葉を濁したが、ロットバル

トは逆に口元の笑みを深めた。

「見せ物的な要素は強いですからね、お気持ちはお察ししますが、力を示されるにはいい機会でしょう。周囲を破壊しないように気を付けて戴く必要はありますが、修繕費は想定被害分予算計上してありますので、一定範囲内であれば対応は可能です」

「何だそりや……」

一体何を基準に予算要求したのだろう。ロットバルトの試算した範囲がどれくらいなのか分からないが、あまり知りたいとは思わなかつた。

「大体お前、こないだは金ねえって言つてたじやねえか」

「勿論無尽蔵にある訳がないでしょう。使いどころの問題ですよ」

「使いどころが間違つてんだろ……」

レオアリスは口の中でそう呟くと、卓上に頬杖をついた。

「第一、あんなもの見て面白いか？」

レオアリスにしてみれば単に氣の赴くままに剣を振つてているだけで、特に決まった型がある訳でもない。

逆に言えば、自分の精神状態が如実に表れるのがレオアリスにとつての剣舞だ。

術を施さなければならぬのも、裏を返せば自分の能力が未熟で、完全に剣を制御仕切れていないということなのだ。

(みつともないじやんか)

多分完成された剣士なら、見事に舞つて見せるのだろう。ただどうすればそこに近付くのか、今のレオアリスには見えない。

指導を仰ぎたくても、その相手が近くにいないのだ。

「御前でなさることに意味があるんですよ」

ロットバルトの指している意味はレオアリスにも判つてゐる。王の御前演習は軍の一大行事の一つで、そこでの演武を行うのは最大の榮誉だ。

ただ、レオアリス自身はやはり単純に喜ぶ気にはなれなかつた。

まして王の前で不完全なものを披露するなど、尚更嫌だ。

「上将、二刀使いましょうよ。派手でいいっすよ」

クラライフは卓の上に身を乗り出し、期待を込めた顔でレオアリスを見たが、当のレオアリスは余計情けない顔になつて視線を逸らし、言いにくそうに口籠もつた。

「いやあ……、無理じやないか、多分。正直言つて二刀使いこなす自信がないんだ。制御が難しくってさ」

「制御つて、まだそんな力が有り余つてんですか？」

「有り余つてるつてなあ……」

クラライフの驚いた声に、レオアリスは心外そうに眉をしかめた。ロットバルトが蒼い瞳を測るように細める。

「……使おうと思つても、使えないという事ですか？」

使わないのか、使えないのか、それは大きな違いを持つ。ロットバル

トの間に、レオアリスは宙を睨むように考え込んだ。

「いや……。——そもそも使おうと思う事がまずないしな」

二刀を抜いた事はこれまでに二度ある。そのどれも、王都に上がる前の事だ。

一度目は剣士としての覚醒の時。あの時は死が目前にあり、ただ無意識に近く身体が動いた。よく覚えていないというのが実際のところだ。二度目は御前試合の前だが、手にした瞬間意識ごと持つていかれ

そうな感覚に、慌てて収めた。

「慣らしとかなきやいけないのは判つてんだけどさ。まあもうちょっと……」

その言葉の中にはさほど真剣な懸念の色は無い。ロットバルトは束の間レオアリスの瞳を覗き込むような視線を向けたが、そこにあるのはいつもと変わりない色だけだ。

「——いずれ、見せていただきたいのですね」

レオアリス達が頼んだ料理が運ばれて来たのを機に、ロットバルトは席を立つた。

「では、私はこれで。書類はすぐに用意しておきます。ですが今日はもう遅い、御覽になるのは明日でもよろしいのでは？」

「ん……いや、戻るよ」

「承知しました。ごゆっくり」

一礼しロットバルトが立ち去ると、一人の卓の周りも漸く賑やかさを取り戻した。それを眺め、クラライフは大仰に天井を仰ぐ。

「上将、何とかしたほうがいいっすよ、あいつ」

「何とかって」

「もつと親しみやすくとか。あんなに兵を緊張させてもなあ」

「そりや隊内の環境改善も俺の仕事だけど……。親しみやすいねえ……」

レオアリスは一旦考え込むように腕を組み卓上を眺めたが、すぐ眉をしかめて腕を解いた。

「やめた。想像すると意外と恐え……。いいじやないか、個性だろ、あれも」

「それで片付けるンすか？」

「隊持つてねえからな。兵と直接関わる訳じやないし」

「まあ、家が家ですからねえ。ヴエルナーなんて普通、その辺歩いてるような家じやないですし、仕方ないつちやないんですけど。俺も最初、單なる冷やかしか暇潰しかと思いましたからね」

クラライフは既に見知った気安さで口にしているが、実際侯爵家、それも筆頭ともなれば、誰もがより深刻にそれを感じるのは当然の事でもある。

王都に、王城内にあれば、尚更そこを意識せずには通れない。

「そういうモンでもなくて、意外でしたけど」

「……いろいろあるさ」

レオアリス自身にもその枷は大きい。正直に言つてしまえば、時折大将などという地位は返上したくなる。レオアリスとしては王に仕えられるのであれば、ここでなくともいいのだ。

王都とは本当に面倒な所だ、とつくづく思う。

「そう言えば、お前は何で師団に入つたんだ？」

「俺ですか？ 生活の為ですね」

「判りやすいな……」

「俺と二、弟妹すげえ多いんですよ。俺が一番目あと下に六人いますからね。果実農家やつちやいますが、さすがに食わせきれねえでしょ。兄貴は跡継ぎだし他はまだガキなんで、働く俺が出て来たつて訳です」

「八人兄弟か、すげえ」

「じじばばも入れると十二ですよ」

考えてみればクライフのこうした話は聞いた事が無かつたが、弟妹が多いというのはいかにもクライフらしい気がする。

「ま、腕試しつて気持ちの方がホントは大きかつたんすけど。師団つたらやっぱ俺らの地方でも花形だし、腕っぷしにはそれなりに自信ありましたんで」

ガキの頃はさんざん暴れてましたからね、と今でもそう変わらなさそーな事を言つて笑い、クライフはレオアリスに視線を戻した。

「上将はどうなんですか？ やっぱ腕試しとか」

改めて問われたのは初めてかもしれない。レオアリスは束の間、過去を思い返すように考え込んだ。故郷を想つてまず浮かぶのは、白く雪に閉ざされた村の風景だ。

「……俺もお前と似たようなもんかな。俺の故郷もそう豊かじゃなかつたし、それにやつぱり、力を試したいつて気持ちはあつた」
いつからだろう、明確に意識した事は無いが、ずっとそんな想いはあつた気がする。あの場所を嫌つていた訳でも、育ててくれた祖父達に感謝していい訳でもない。

レオアリスの育つた北の辺境は、一年の半分が雪で閉ざされる厳しい地だ。田畠を耕すにも生活は容易くない。

彼等の側にいて彼等を助けたいと思いながら、心の何処かで常に、王都への漠然とした想いを感じていた。

「劍士ですもんねえ」

「いや、そん時は劍なんて使えなくてさ。術士だつたんだ。結構通用すると思つてたんだけど……」

そこまで口にして、王都の術士達を目の当たりにした時に受けた衝撃を思い出し、レオアリスは気まずそうに語尾を口の中にしまい込んだ。「まあ、何だ、前も言つたかも知れないけど、俺にはあんま術は向いてねえ、と……」

クライフが爆笑する。

「……笑い過ぎだ」

「いやいや、すんません。……まあでも」

目の端に浮かべた涙を掌で擦つてから、クライフはもう一度にやりと笑つた。

「上将は劍士のが向いてますよ。あの時の王の御前、俺見てたけど正直舌巻きましたからね。劍士なんて初めて見たし、師団の、しかも第一に配属された時は早く手合させして見たくてウズウズしてたんで」

レオアリスが劍士として頭角を表したのが、三年前の王の御前試合の時だ。誰もが想定していなかつた、年若い劍士の圧倒的な勝利。

王が近衛師団に配し、その後僅か二年の内に大将の地位を得たのも、外部には不満があつたとしても、直に劍を合わせるクライフ達近衛師団の者にとつては自然な事と言えた。

こうしている間も、レオアリスが居るのに気付くと、入れ代わり立ち代わり兵士達が卓の周りにやつてくる。他の大将達ではこれほど気軽に兵士達と言葉を交わす事はないだろう。

要は彼等にとつて、最高位と謳われる劍士の存在は誇りなのだ。加えて年が若く、屈託なく、貴族や王都の出ではない、謂わば彼等の土壤に近い事が大きく影響している。

レオアリスが近衛師団に配属された時、全く反発が無かつた訳ではない。それまで近衛師団に剣士がおらず、一般に流布する印象しかなかつたのも一因だつたが、レオアリスはすぐにその印象を忘れさせた。

それでも、クラライフがふと目を転じると、一方では面白くない表情を浮かべた者達も見える。

(西方か)

正規軍の一部、特に古株の士官の間にはレオアリスに対する反感を抱く者が数名いて、それが少なからず兵士達にも波及している。

正規軍と近衛師団は、完全に両立しているとは言い難い。

正規の誇り、王直轄軍としての誇りが、時として兵同士の対立を生む。レオアリスへの反感も、そうした事に端を発しているとも言えた。

(この地位で若いからな、うちの大将。あんま大将らしくねえし。俺はそういうところがいいんだけどなあ)

地位や階級に拘る者からすれば面白くはないのだろう。

(まあ、全体がけんつくやってる訳じやねえし)

クラライフは視界に見知った顔を捉えて片手を上げた。彼もまた西方軍第一大隊の左軍中将、ワツツだ。ワツツは飲み仲間であるクラライフを認め、にやりと笑つて大股に近づいてきた。

岩を削つたような顔に髪をすっかり剃り上げていて、グランスレイよりも体格が良く、見た目には近寄り難い容貌なのだが、どこか剽軽さを漂わせている。

レオアリスの前に立つと、一旦腕を胸に当て敬礼を施す。正規軍の場合、右腕を当てる。

「お久しぶりです、大将殿。今日はもう上がられるのですか」

「いや、一度戻るんだ。ワツツのとこの大将は」

既にあちらで出来上がっておりま

ワツツは身体をすらし、奥の一角を示した。賑やかな様が見て取れ、レオアリスは笑つた。

「クラライフをお借りしても？」

「連れてつてやつてくれ。一隊には振られたところだ」

「承知しました。じや、クラライフ、食い終わつたら飲もうぜ」

クラライフが頷くのを見届け、ワツツはまた重い身体を揺らすようにして戻つた。

食事を終えてレオアリスは席を立つと、クラライフへ、にや、と笑いかける。

「じやあな。一応言つておくけど、飲みすぎるなよ」

昨夜飲みすぎたと言つて、今朝も遅刻しかけたところだ。明日また遅刻したら、グランスレイの大目玉を食らうのは間違いない。

「肝に命じます」

真面目くさつて敬礼してみせるクラライフに苦笑を洩らし、レオアリスは入り口に向つた。

戻つて前回の警備体制を確認して、グランスレイやロットバルトがまだいるようなら今回の体制の大枠を考える。……本格的に図面に落し込んで組むのは明日でもいいだろう。取り敢えずそれだけしたら、今日はもう寝よう。

レオアリスの後ろ姿を見送り、クラライフは早速奥の卓に足を向けた。明日は午後に演習があるが、午前中までなら多少頭が重くても大丈夫だろう。

いつも通りの一日が、穏やかに終わろうとしていた。

北の空が明るかつた。

夜の闇を嘲笑うかのようなその赤い色に気付いて、北の外門の警護に当たっていた近衛兵の一人が目を凝らす。

「おい、北が変じやないか？」

傍らに立つ同僚に声をかけ、その方角を指差すと、彼もまた空を見上げて頷いた。

「火……か？ もしかしたらどこかの森が燃えてるのかもな」

それが北の街道が伸びている方角である事を確認し、城壁の上を見上げる。誰かに声をかけて上から確認してもらうつもりだったが、歩哨は少し前に通り過ぎたところで、すぐ近くに姿は見えなかつた。

「とにかく准将に報告しよう。悪いが、ここを頼む……」

微かに風に何かの匂いが混じつた。

衛士の視線が、外門に掲げられた松明の明かりと闇との境界に注がれる。

いつの間にか、男が一人立つていた。

闇が形を成したようだ。

外堀に掛けられた橋を、音もなく、だが悠然と近づいてくる。

そのいかにも平然とした姿に、衛士達は思わず諸侯の名前と顔を一通り頭に浮かべた後、漸く見た事のない相手だという事に気付いた。

「……止まれ！ 何者だ！」

声を張り、一人の衛士が手にした長槍の石突きを足元に打ち付け威嚇する。その音に気付いた数名の歩哨が、城壁を門の真上まで駆け寄つた。男の姿を認め、弓を構える。

弦につがえられた矢先が男の喉元に向けられているものの、男の歩みが止まる気配はない。

「所属と名を名乗られよ！」

男は口元を笑いの形に歪めた。瞳の上まで艶のない黒い前髪が落ちかかり、表情を覆い隠している。

低く陰鬱な愉悦を宿した声が、ゆるく吹き付ける風に乗つた。

「——近衛師団第二大隊中将……バインド」

衛士らはぽかんと口を開け、それから顔を見合わせた。二隊は衛士らの所属する隊だ。

「おい、ふざけるな！ 第二大隊の中将にそのような者はいない！」

立てられていた槍が、一斉に男に向つて倒される。城壁の上でいくつもの弓が引き絞られた。

「捕えよ！」

「クク」

男の左腕のある辺りが、夜の闇の中で赤く輝く。口元の笑みが、一層深く吊り上がつた。

ざわりと、樹々が揺れる。

身の裡の剣が僅かに震えるのを感じ、レオアリスは足を止めた。

辺りに視線を巡らせて、映るのは夜の闇と、中天に昇つた細い月が投げ掛ける僅かな光に浮かぶ石垣、そして樹々の影だけだ。影に埋もれたもうすぐそこには、自分の屋敷の門がある。

だが、レオアリスは今来た道に再び身体を向けた。

騒めく樹。

その脈動に合わせるように、剣が鼓動を刻む。

「……誰だ」

闇に呑まれた視線の向うからは、何の答えもない。だが、確かに、そこにいる。

何か。

自分に意識が向けられているのが判る。

漆黒の瞳が一点を捉えて、ゆっくりと細められた。

「俺に用なんだろうが、だんまりじや分からねえ。出て来い」

ここは外れとは云え王城の城壁内だ。滅多な者では入り込める場所ではない。

しかしレオアリスに向けられた気配は、これまで感じた事の無いものだった。

どこか不快な、味わった事の無い感覚。

そのくせどこか……、どこかで知っているかのような、剣の騒めき。暫らく闇に視線を向けていたが、動く気配が無いのを見て取ると、レオアリスは僅かに息を吐いた。

それから、自分が息を詰めていた事に、少なからず驚きを覚える。「……出てくる気が無いなら、引っ張り出しそ。王城内に無断で立ち入らせる訳にはいかない」

闇へと一步踏み出した時、微かな笑い声が風に乗つた。

低く嘲るよう震える、含んだような笑い。

視線の先で朧ろげな影が闇から浮かび上がる。

「近衛師団第一大隊大将、だつたなあ」

言葉と共に、微かな鉄のよう匂いが流れた。あれは、血の……。

レオアリスは瞳をきつく眇めた。

「貴様……どうやつて入つた」

「クク。簡単だつたな。もつとましな兵を配せよ、大将殿」

言葉が終わらない内に、風を切る音と共に青白い閃光が闇へと走る。

足元に敷き詰められた石畳の上に、一直線に亀裂が生じる。

浮かび上がつていた影がゆらりと溶けた。

右手に青白く光を纏う剣を提げたまま、レオアリスは視線を巡らせる。

その先に再び影が浮かんだ。

「おお、止めてくれ。まだ何も話してないじやないか。久々の再会の

感動を、少しは味わわせて欲しいなあ

「知らねえな」

視線だけを影に向けたまま、手の中の剣の感触を確かめる。

先程の一刀は、十分な速さを持たせた。威嚇のつもりはない。

だが、影は何の気なしに避けている。

「連れない事を言うなよ。俺は、お前をよく知つてる。まあ、もつとも俺達が逢つたのは、お前がまだ赤子の頃だつたが」

眉を潜めるレオアリスの視線の先で、何か細長いものが、ぼうつと赤い輪郭を纏つた。

呼応するように、レオアリスの剣が、ゆっくりと一つ脈打つ。

「レオアリス。今じや最高位ときえ謳われる剣士だつてなあ。クク、嬉しいぜ」

「……」

「なのに、お前は仇のもとに仕えるか。哀れだなあ」

「……何、だと？」

「お前の一族はどうなつた？」

「一步、踏み込もうとした瞬間、背後で足音が鳴つた。

影が動く。

レオアリスは踏み込みざま、剣を振り抜いた。

火花が散り、赤い輪郭を纏う何かが、レオアリスの切つ先を受け止めた。

赤く、焰を纏う、

剣。

柄はなく、刃はそのまま、男の左肘から盛り上がるよう生えている。レオアリスの瞳が、僅かに見開かれた。

自分と同じ——。

「もう、城内にはいないだろう」
ロットバルトがレオアリスの視線を追って、再び木立の影に視線を向ける。

「じわり、と紅い剣が熱を帯びた。
男と目が合う。」

「冥い、愉悦と闇を宿した瞳。」

「上将！」

声が掛かった一瞬に視線が弾かれる。

「お前が生まれた頃だ。調べてみろよ」

どこか楽しげな響き。ふつと、圧し返していた剣の力が消える。

「——俺の名は、バインド」

向けた視線の先には、もう男の姿は無かつた。

直後に駆け寄ったロットバルトが闇の向うを追おうとするのを、手を上げて制する。レオアリスの手の中の剣に目を留め、ロットバルトは只ならぬ事態である事を悟り、驚いた色をその顔に浮かべた。

「上将？ 何が……？」

「分からぬ。……いや」

レオアリスはもう一度だけ、闇の中に視線を向けた。

確かに、あれは剣士だ。

焰を纏つた剣。

既に何の気配もない。

レオアリスの剣がその手の中から搔き消える。

俄かに外門の方角が慌ただしく騒めきだした。

「何があつた」

レオアリスはロットバルトに視線を向けたが、答えは大方予想が付いている。先程の影が纏つていた、血の匂い……。

「北外門で、衛士数名が何者かによつて殺害されました。現在、王城内に兵を手配しています」

兵達の呼び交わす声が、深い夜の中に響いて、レオアリス達の所までも聴こえてくる。

（——何者だ）
バインドと名乗った。初めて聞く名だ。自分の事を詳しく知っているような口振り。

『中将以上を集めろ』
無言で頭を下げるロットバルトの横を抜け、レオアリスは城門へ足を向けた。

『お前が生まれた頃だ』
『仇の下に仕えるか』

『お前の一族はどうなつた？』

打ち込んだ右腕に、微かな痺れを感じた。

冥い夜の帳の中で、男は低く笑いを忍ばせた。

左腕には、先程剣を受けた時の鋭い衝撃が未だに残っている。

右肩の付け根から腕にかけて、鈍く重い痛みが走るのを感じて、視線を落とした。

馴れ親しんだ痛みだと、口元を歪めながら思う。

視線の先、男の右腕は、肩から先が闇に溶けたかのように、そこには無かった。

忍び笑いが圧し殺しきれない咲笑に変わる。

「もう少し待てよ。もう少し。思う存分、切り刻ませてやる……。楽しみだなあ」

「報告しろ」

グラントスレイは改めて姿勢を正した。

「侵入者はおそらく一名。北外門から衛士六名を殺害し侵入。上将が遭遇した頃合を考えると、その足で士官区に向ったと思われます」

遭遇？

違う。あの男は始めから、レオアリスを目的にしていた。

「殺害された衛士達は、手足を落とされ、傷口が焼かれています。武器は何を使つたものかは目下調査中ですが、」

「剣だ」

視線が集中する中、レオアリスは宙空を睨む。

「警備は」

「現在、引き続き二隊全体が当たっています」

「三隊にも警備の増強を伝える。それから、クライフ」

「は」

「夜明けまでは、お前の中軍を当てろ」

レオアリスの指示に、クライフは厳しい面持ちのまま頷いた。

「……それと、グラントスレイ。一二、三隊に伝達を。——もし出くわしても手を出すな、と」

その場の全員が驚いたようにレオアリスを見つめる。

「それは、どういう……」

集まる視線の中、レオアリスがゆっくりと立ち上がる。痺れを残していた右腕。

副将以下、中隊中将が顔を揃える中、レオアリスは執務机に肘を乗せ、その手に頭を預けたまま暫らくの間考えに沈んでいた。

グラントスレイが促そようと口を開きかけた時、漸く顔を上げ、その場にいる者達の顔をぐるりと眺め渡す。

「剣士だ」

短く、確信を持つて告げられた言葉に、彼等は一瞬息を呑み、お互の顔を見回した。

「俺の剣を止めた」

「止めた……」

執務室内に、電流にも似た緊張が走った。

レオアリスの剣を止める。

それがどのような意味を持つのか、この場の全員が身を以つて知っている。

「一隊もだ。発見しても手を出さず、俺が行くのを待て」

それぞれが無言のまま頷くと、張り詰めた表情を浮かべたまま一礼し、各隊に指示を出す為に退出していく。レオアリスは一番最後に扉へ向かつたグラансレイの背に声をかけた。

「グラансレイ」

呼び止められ、グラансレイは足を止めてレオアリスを振り返った。

「お前、いつから師団にいた？」

唐突な問いにグラансレイは怪訝そうな色を浮かべ、レオアリスを見つめた。

「……二十七年前に入隊しております」

第一大隊の中では、誰よりもグラансレイが尤も長く在任している事になる。

「そうか、なら……」

言い掛けて、ふと言葉を切った。レオアリスはそのまま、何事か迷うように、壁に掲げられた軍旗に視線を向けていたが、暫らくして再びグラансレイへ視線を戻した。

「上将？」

なかなか口を開こうとしないレオアリスへと、グラансレイは戸惑つた視線を向ける。

「――『十七年前』と『バインド』という名に、何か覚えはあるか」「――いえ」

グラансレイの表情も声音も全く変わらなかつたが、背後に立つロットバルトには、下ろした拳が僅かに握り締められたのが分かつた。レオアリスからは執務机の死角になり、気付いたかどうかは分からぬ。暫らくグラансレイを見つめた後、レオアリスは視線を外した。

「どうか。呼び止めて悪かったな」

「いえ。では、これで」

退出するグラансレイの後ろ姿を見送り、ロットバルトは侵入者との遭遇以来、ずっと厳しい表情を浮かべたままの上官に視線を戻す。

あの時――ロットバルトがあの場に着いた時、丁度レオアリスが剣を振り抜いた時だ。レオアリスの剣を止めたあの男は、その後何事かを発した。『――を調べろ』、と。

何をかは聞き取る事は出来なかつたが、ただ侵入者があつたというだけにしては、レオアリスの様子は不可解な印象が強い。

先程のグラансレイへの問い合わせ――『十七年前』というのが、おそらくは男が調べると告げた事なのだろう。

十七年――丁度レオアリスの年令がその位だ。

問うべきか、問わないままに進展を見るべきか、視線を向けた先のレオアリスの横顔には、彼自身が戸惑つているような陰がある。

(……あまり、退いているべきではないか)

今レオアリスが全て把握しておらず、何を言うべきか迷つているのだととしても、早い段階で口火を切る切っ掛けはあつた方がいい。

「――上将。あの時、あの男は何を言つたんです？」

ロットバルトの問い合わせに、レオアリスは考え込むような視線を返す。

「どう聞こえた？」

「何かを、調べると。それ以外は。……必要とあれば、お調べ致しますが」

レオアリスは暫らく黙つたままロットバルトの視線を受けていたが、やがて普段の彼らしく肩を竦めた。僅かに苦笑を浮かべる。

「……いや。いいさ。どうせ戯言だ」

自分に言い聞かせる響きに、ロットバルトはそれ以上尋ねる事なく、自らの執務机に戻り警備再配置の為の図面を広げた。

どれだけ経つだろう、ふと顔を上げると、レオアリスは再び何事かを考え込むように、軍旗に視線を注いでいた。

グラントレイは灯りを落とした室内で、窓際に立つ老将の言葉を待っていた。

東に設けられたその窓の外には、ようやく仄かな夜明けの気配が漂っている。深い藍色と闇の色とが渾然と重なり混ざる時刻だ。

ずいぶん長い間、総将アヴァロンは窓の外を眺めたままだつたが、やがて東の空に闇を斬るように黎明の兆しが一筋差し掛かつた時、漸く振り返った。

「バインドか。古い名だ」

淡々とした口調には、苦さと、追憶、そして僅かに懐かしむ色がある。

「お前はあるの時、やはり一隊にいたか」

グラントレイもまた何かを透かし見ようとするかのように、窓の外の藍色の闇に眼を向けた。

少しずつ、しかし確実に、闇は薄れていく。覆い隠されていた様々な形が現れる。

王城の甍。王の居城の尖塔の影。

「直前に、一隊の中将に任せられました。ですから、幸いと申し上げるべきでしよう。——二隊は、全滅でしたから」

そう――。

あの時、第二大隊は全滅した。

あの男——左軍中将だつた、バインド、たつた一人の為に。

第二大隊だけではない。あの戦場にあつた北方辺境軍、千余名。

それから――。

だが、あの時死んだはずだ。

いや、そう結論付けられたのだ。どれだけ捜索しても、剣以外、何も出なかつたのだから。

剣を失つた剣士は、死んだも同然だ。

そのバインドが、生きていた。

剣を、再びその腕に宿したのか。

不意に問いかけた、黒い瞳。

『お前、バインドを知っているか?』

何故、今になつて、しかもレオアリスの前に現われた?

レオアリスの問いに、グラントスレイは返答を躊躇つた。

その名は、禁忌だ。——特にレオアリスにとつて。

その為に、第一大隊には特に、当時を知らない者を多く配しているのだ。

誰もが口にする事を避けていいるとはい、蓋をしたいが故に明文化されている訳ではない。ふとした弾みで耳に入らないとも限らない。

「如何致しましよう。おそらく、再び上将に接触してくる可能性は高いでしょう」

その問には答えず、アヴァロンは灰色の瞳をグラントスレイに向かた。

「お前は、当時のバインドと、今のレオアリス、どう見る」

グラントスレイは僅かに躊躇した後、顔を上げた。

「……私はあの時のバインドを直接見ておりません。しかし、上将が二

本目の剣をお持ちになるところも、未だ見た事がない。……ただ、今までさえ、仮にの方を本気で抑えよと命ぜられたら、何隊出すべきかは計りかねます」

「……そうだな。そしてそれが、もう一つの不安材料でもある」

グラントスレイは黙つて頭を下げる。

「暫くは状況を見よ」

「上将には、何も?」

それは、少し危険に思える。バインドと出遭つた以上、もはや伏せておく事が良策とは思えなかつた。

だが、そう口にしたグラントスレイに、アヴァロンは頷かなかつた。

「それは、私の一存では決められぬ事だ。……バインドに関しては、レオアリスの指示通り、発見しても手を出さぬよう徹底させよ。正規四軍には私から伝えよう」

それ以上は何も問わず、グラントスレイは左腕を胸に充て深く頭を下げた。アヴァロンは再び、次第に明るさを増していく窓の外に視線を向けていた。

その先に、王城の尖塔が影のように聳えている。

「王にお伺いを立てねばな」

第一大隊の士官棟への回廊の角を曲ると、そこから司令部の窓際にレオアリスの姿が見える。グラントスレイは足を止め、窓にかかるその姿を眺めた。

レオアリスはバインドの口から、何を聞いたのだろう。あの時の事を全て語る時間は、おそらく無かつたはずだ。

だが。

「バインド——」

右腕に焰を纏う剣を備え、最強と謳われた剣士。

十七年前のあの場で、敵味方を問わず、全てを切り裂いた。

切り裂き、焼き尽くし——そして、唐突に、消えた。

その剣のみを、焼け爛れた戦場に残し。

王はその名を禁忌とし、暗黙の内にあの戦場は伏された。

そして、以来レオアリスまで、軍に剣士は存在しなかつたのだ。

王がレオアリスを近衛師団に配したとき、当時を知る者は等しく不安

を抱いた。

十七年。

たつたの、十七年だ。

あの戦場を直接知る者はいないとはいっても、焼き尽くされたあの地を見た者は多い。グラントレイの脳裏にも、離れる事なく焼き付いている。切り裂かれ、焼かれた身体。

腕、足、胴、首……それらが延々と転がる様。

戦場を見知った者にとつてすら、それは悪夢のようだった。

同じ剣士——。再び同じ事を起こさないと、誰に保障できる？

そして、レオアリスは——。

グラントレイは浮かんだ考えを振り切るように、頭を一つ振った。周囲の思惑をよそに、レオアリスの中にバインドの持っていた闇は感じられず、その不安は時を追うにつれ、次第に薄れて行つた。

漸く解消されつつあるその不安に、再び暗い光が照らされようとしている。

第二章

「剣士……」

改めて、議場内が潮騒のようにざわめく。

「——バインドと名乗った」

翌早朝に、正規軍、近衛師団にかかる軍議が召集された。

王城の議場の一つに長い円卓が据えられ、正規軍総将アスタークトを始めとして、各軍正副将等が顔を揃える。

正規軍は副将タウゼン、参謀長ハイマンス、東方軍大将ミラー、西方軍大将ヴァン・ヴレック、南方軍大将ケストナー、北方軍大将ランドリー、そしてその副将と、王都に駐屯する各第一大隊の大将。

卓を挟むようにして、近衛師団総将アヴァロン、副将ハリス、参謀長ウェイエル、そしてレオアリス、トゥレス、セルファン、各大隊大将と、その副将が座る。

高く取られた壁面に設けられた窓からは、朝の明るい日差しが差し込んでいたが、議場内はしんと冷え込んだままだ。

「めんどくさい挨拶は抜きだ。始める」

議長席に着くと、アスタークトは呼吸を置く間もなくそう告げ、片手を上げた。概略については昨晩の内に報告を受け、またその記述もそれぞれの手元に紙が置かれている。

昨晩王城の警備を担当していた、近衛師団第二大隊大将トゥレスがまず立ち上がり、改めて経緯の報告をする中、報告書を手にした列席者達が互いに顔を見合せ、厳しい表情で囁きを交わす。

トゥレスが着席すると、アスタークトはレオアリスに視線を向いた。
「お前は出くわしたんだろ。どんなヤツだ」

レオアリスは傍らのグランスレイが僅かに身を堅くするのを、視界の隅に捉えながら立ち上がる。昨夜のレオアリスの問い合わせに答えた時の様子。おそらくグランスレイは何かを知っている。

それが何か、これで分かるだろう。

「夜陰に紛れての事だから確証は無い。だが、おそらく、剣士だ」

『仇のもとに仕えるか』

バインドの名が出た瞬間、議場内の空気が変わった。戦慄にも似た、肌が粟だつような感覚が、確かに生まれる。

ここまで反応を予測していた訳ではない。

（何だ？）

レオアリスは自分がもたらした空気の原因を突き止めようと、広い椅子の卓に視線を巡らせた。だがそれを捉える前に、空気は何事も無かつたかのように平常を取り戻していく。

それを掴みきれなかつた事に、レオアリスは軽い苛立ちを覚えた。
「……あなた方の中に、この名に心当たりがあるのなら、教えていただきたい」

重苦しい沈黙がその場に落ちる。幾人かが息苦しそうに身じろぎした時、アヴァロンの低い声が流れた。

「レオアリス。今は報告だけに留めよ」

「しかし——」

だが既に、誰もレオアリスに答える気配はない。レオアリスは喉まで出かかった抗議を漸く飲み込み、椅子に身を戻した。

釈然としない、居心地の悪さが身に纏い付いている気がする。

張り詰めた空気と、沈黙。

今ここで、あのバインドの言葉をそのままぶつけたら、彼らはどんな反応を見せるのか。

「相手が剣士ともなれば、ただ囮んで討ち取れるものではない。発見したとしても、各隊とも、すぐに仕掛けるのは避け」

晒いさえ含んだ声だった。仇？ 仇とは誰だ。

(でたらめを)

「近衛師団に、と言うよりは、このレオアリスに任せてもらおう」

『お前の一族はどうなった?』

一族の事など、知らない。』

「信頼できるのですかな」

レオアリスは思考から引き戻され、顔を上げた。自分の考えに沈んでいたため、それが誰の発言かは分からぬ。

「……どういう意味です」

苦々しい空気が、その場に流れている。

「信頼、とは」

「——いや、そのバインドという輩が、事実剣士なのか、と、そういう意味でしよう。剣士かそうでないかで、対応に大きな違いがある」

そう言つたのは東方軍大将ミラードだ。他の将校達は黙つたまま、レオアリスに顔を向けている。

無表情を貼り付けたような顔。

(違う。……いや)

レオアリスは居並ぶ顔をぐるりと見回す。その奥の考えは読み取れない。

(俺が、捉われ過ぎなのか)

あの男の言葉に。

「……確証が持てないという意味で仰つたのであれば、確かに、俺の感覺で、としか申し上げられない。それこそ、信頼して頂くしかない」

信頼？

言葉が上滑りを起こしているような感覚がある。自分の立っている位置は、これほど胡乱なものだつただろうか。

今度は特に返す言葉は無く、再び議論は事後の対応へと移つた。侵入者の追跡と討伐について盛んに意見が交わされ始める。

近衛師団、そしてレオアリスの昨晩の対応についても、時折針のよう

に批判が混じる。

「今回の件は明らかな失態だ」

「王城の警護と言いながら、こうも容易く侵入を許すとは、根本的に近衛師団の体制を見直すべきかも知れません」

トゥレスは苦虫を噛み潰したように顔をしかめ口の中で悪態をついたが、さすがにこらえて何も言わない。レオアリスもただ彼等を眺めた。昨夜の情景が、脳裏にまざまざと甦る。

(失態か。確かにそう言われたつて仕方がない)

侵入者を許した上に、捕らえる事も倒す事も出来なかつたのだ。それはレオアリス自身が最も憤りを感じている。

ただ、あの時、レオアリスは斃すつもりで剣を抜いたのだ。王城内という考慮はあつたにせよ、これまであの剣を止めた者などいない。

ゆつくりと、鼓動が高鳴る。

もし。本気で剣を合わせたら……?

体内で、剣が鼓動を刻む。

近衛師団の将校が誰も反論しないまま、議論は歯車を違えたようにな、次第に批判は近衛師団から、レオアリス個人の責任問題へと焦点を逸らし始めた。

「最高位を謳われながら、侵入者を討つ事が出来ないとは、非常に残念だ」

「剣士の名が泣きますな。有名無実では困る」

「まあ、元々剣士など、軍にいる事自体が」

アヴァロンが鋭く卓を打つた。

王の守護者の眼光に、議場がしんと静まりかかる。レオアリス自身が驚いてアヴァロンの顔を見つめた。

「今議論すべきは、侵入者に対する対処法、その手法であろう。

こうした議論を、王が好まれるか」

アヴァロンの厳しい表情の前で、将校達は青ざめ、打たれたように視線を落とした。

北方軍大将ランドリーが立ち上がり、場の空気を変えるように咳払いをして卓上を見回す。

「——追跡を行うにしても、現時点では足跡を残していない状況だ。まずは徹底的に現場を洗う事から……」

俄かに、廊下が慌ただしさを帯びた。重い両開きの扉が勢い良く開く。

飛び込んで来たのは、正規軍の下級将校の一人だ。ランドリーが鋭い叱責の声を浴びせる。

「何事だ！ 騒々しい」

顔からは血の気が失せ、ひどく慌てて息を乱したまま、将校はアスターの前で姿勢を正した。

「も、申し上げます。たった今、北方第二軍より、急使が入りました。

——街道添いの、エザムが、か、壊滅、と……」

ざわり、と議場が波立つ。エザムは北の街道上の、王都に最も近い街だ。数名が、彈かれたように席を立つた。

「エザム？ あそこには二個小隊が駐屯していたはずだ！」

声を荒げたランドリーへ、伝令兵は青ざめた顔を向けた。

「そ、それが……おそらく昨夕の事かと思われます」

「——馬鹿な。全滅だと……？」

ランドリーはその場に立ち尽くしたまま、呆然と呻いた。

二個小隊、約百名もの兵が、一晩の内に？

「隊士も、住民も、家畜に至るまで切り刻まれ……街は焼き払われていると……」

二

協議はその時点で中断された。

北方軍大将ランドリーがその幕下を伴い、慌ただしく議場を後にする。

アスターもまた、王への報告の為に席を立つ。

俄かに慌ただしい空氣に包まれた議場内で、レオアリスはまだ自席に腰を降ろしたまま、その動きを見送った。

「どう思う」

傍らのアヴァロンがレオアリスに視線を向ける。

「——バインドかと。奴の左腕の剣は、炎を纏っていました」

エザムの街を焼いたのはその炎だろう。レオアリスにはあの男が嬉々として街を焼き尽くす様が見えるような気がした。いや、その光景を自分は見た事がある。

かつて……。

赤い炎が記憶の片隅で揺れる。

いつだ？

嬉々として剣を振るう。

木々が炎の中で捩れ、家が崩れる。

裂け目から紅い炎が傾れ込み、

誰か、が……

「！」

不意に目の前が紅煉に染まつた。

「上将？」

突然椅子を蹴立てるよう立ち上がったレオアリスに、グラントレイは咄嗟にその背に手を充てた。一瞬だけ、手によろめきかけた身体の重みが加わる。

虚ろに開かれていた瞳に、光が戻った。

「……上将？」

「何だ」

グラントレイの声に含まれた懸念の響きに対し、レオアリスは事も無さそうに問い返す。まるつきり、自分の変化に気付いていない声だ。

「……いえ」

レオアリスの背後で、グラントレイとアヴァロンの瞳がちらりと交わされる。

「ぼうつとしてるな。座れよ、レオアリス」

トウレスが呆れたように笑ってレオアリスに席を指示すると、漸く自分が立ち上がっている事に気付き、レオアリスは机の上に視線を落とした。

何を考えていたのだつたか。

少し疲れているのか、頭が重い。

グラントレイに声をかけられる前、確かに左……」

「いや。それより、今後の動きについてだが」

レオアリスはアヴァロンに正面を向けると姿勢を正す。他の大将もまたその前に立つた。

「エザムの調査は北方に任せ、各隊は王城の警護を固めよ」

「バインドであった場合は、どのように」

「残念ながら今の議論が中断してしまった以上、北の管轄に手を出す訳にもいくまい」

レオアリスが悔しそうな表情を浮かべるのに気付き、アヴァロンの厳しい顔に苦笑が過ぎる。

「そう焦るな。我等としても外門を破られた責は果たさねばならん。公と直接話をしよう」

アヴァロンは席を立ち、大将達が一斉に敬礼する中、長布を翻して扉

へと向かった。一步遅れて、二、三隊の大将達も退出する。

第二大隊大将トウレスは扉の外でアヴァロンに並び、厳しさを浮かべているその顔を眺めた。

「俺は嫌ですよ、剣士とやり合おうのは。俺は見た訳じやありませんがね、またうちの隊を全滅させるのは遠慮したい」

「案ずる必要はない。ただ、決断を間違えれば、あの時よりも被害が甚大になる可能性は否めんな」

「……したくない決断にならなければいいんですけど」

トウレスは一度議場内を振り返った後、左腕を胸に当てて敬礼し、踵を返した。

アヴァロンや他の大将らの退室を見送り、レオアリスは再び席に深く腰掛け、椅子の背に身体を預けた。傍らに立つグラントレイが首を傾げてその顔を見下ろす。陽はすっかり上空へ上がり、窓から差し込む光は細く議場内は翳りを漂わせている。

「上将。お疲れであれば一度屋敷に戻られては。昨夜からずっと不休で動いておいでだ」

「大丈夫だ。それにお前等だつて同じだろう」

そう言つたものの、レオアリスは思い直したようにグラントレイの顔を見上げた。

「——いや。悪いが、やつぱり少し一人にさせてもらえるか」

グラントレイが覗き込んだ漆黒の瞳には、いつもと違つた色はない。「では、何か変化があればお呼びいたします」

「一隊の警備は、朝ロットバルトが作った案でいいだろう」

グラントレイは胸に左腕を充てたまま、束の間上官の表情に視線を落としたが、もう一度軽く頭を下げて議場の扉へ足を向けた。

レオアリスは背もたれに寄り掛かつたまま目を閉じ、思考を巡らせる。

どうしても違和感が拭えない。確實とは言えないものの、一部の者達はおそらく何かを隠している。

そしてそれを口にする事を、どこか恐れているようにも見えた。

自分に対してなのか、それとも自分を含めた他の者達全体に対してなのか。

考え過ぎだと否定されればそうなのかも知れないが。

過去。

(どこか……書庫へでも行つて調べる方が早い)

閉ざしていた瞳を上げる。その途端、離れていた所から遠慮がちにレオアリスに視線を向けていた女官と目が合つた。どうやら議場の片付けの邪魔になつていたようだ。

「悪い、もう行く」

長い間考え込んでいた事に苦笑を浮かべて立ち上がり、申し訳なさそうに頭を下げる女官の傍を横を通り抜ける。

(何を調べればいい?)

分かつてているのは、三点だ。バインドという名と、剣士である事。

そして、自分の生まれた頃と一族に、何らかの関係があるという事。

調べない方がいいんじゃないのか。

ちらりと浮かんだ警告にも似た考えを、レオアリスは敢えて打ち消した。

調べて、あの男の言葉を否定する。

侵入者が混乱させるために言つた偽りに過ぎないのだと、それを確信する為にも、調べてはつきりさせなくてはいけない。

「かまわない」

アンケスは軽く頷くと、書物を取りに奥に並んだ書棚に消えた。程なく戻ってきたが、数冊の綴りを手にしてしきりと首を傾げている。

「どうした?」

「いえ、……おかしいなあ。ずいぶん少ないと、他の年代と比べ

近衛師団に関わる全ての文書・記録が収められ、管理されている。

ここに足を運んだのは、軍に入つてから既に何度も目が知れない。

もともとレオアリスは書物に囲まれて育つたため、すこし湿った紙特の匂いが漂うこの場所は好きだった。軍という性質上、特定の用事が無い限りはここに立ち入る者は少ない。

誰も来ないから煩わしさもなく、好きに過去の記録や戦術書などをひっぱり出しては読み耽る事もしばしばあった。おかげで管理官とも親しくなつて、基本的に持ち出し禁止の書物も度々借り出している。

だが、今日こうして書庫に足を運んでみて、改めて、レオアリスは自分が生まれた当時の記録を見た覚えが無い事に気付いた。

こんな事でもない限り考えもしない事ではあるが、各年代にあつた事で大きい出来事はそれなりに記憶しているものの、順に並べかえてみると、レオアリスの生まれた年代に当てはまるものは無い。

書庫の扉を抜け、管理官のアンケスに片手を上げると、アンケスもにこりと笑みを浮かべた。

「ここにちは。今日は何の書物を?」

アンケスの背後には書物が収まつた書棚が、ずらりと壁のように並んでいる。アンケスに欲しい書物や見たい内容を告げれば、この書士はすぐ取り出してくれる。

整理途中なのだろう、雑然と書物の積まれた受付用の机の前に立ち、レオアリスはその背後の書棚に瞳を向けた。

「十七年前の前後一、二年、記録を全部出してももらえるか」「全部ですか? お待ちください。でも結構な量ですよ」

「かまわない」

第一層、近衛師団総司令部の棟の外れから石造りの階段を地下へと下り、薄明かりの灯る短い廊下を進むと、すぐに古びた木の扉がある。近衛師団の文書保管庫だ。

て

「少ない？」

「ええ。例えば、前後はそれぞれ二、三冊ずつくらいあるんですが、丁度お探しのところだけ、これ一冊ですね。連番ですから間違いはないかと思いますけど」

「……へえ。ま、いいや。ちょっと借りるぜ」

レオアリスは微かに眉をひそめたが、アンケスはそれには気付かず、綴りを机の上に置きレオアリスに向かつて差し出した。
「どうぞ。返却はお好きな時でいいですよ」

綴りを受け取つて礼を述べ、書庫を出る。総司令部から西の区までは

さほどの距離は無い。隊士達や城内の様子を確かめるため、ハヤテを先

に戻し、レオアリスは通りを歩く事にした。

通りを行きかう兵達の上には慌しさと緊張感が漂つてはいるものの、まだそれほど逼迫した様子はない。薄い雲を輝かせ青く晴れ渡つた空の下では、昨夜の事、そしてエザムの事はどこか現実感がなく感じられる。しかし北方軍は既に臨戦態勢にあるはずで、その空気は時を置かず、第一層全体に伝わるだろう。

西の区に入ったところで、ヴィルトールの揮下の少将、ファーレイがレオアリスを認め、足早に近寄つてきた。多少緊張の面持ちではあるが、普段通りの落ち着いた顔をレオアリスに向ける。

「兵達の様子は？」

「警備を固めよという指示を既に頂いておりますので、師団は落ち着いたものです。正規が少々混乱気味ですが」

「仕方ないな。議場も似たようなもんだ」

レオアリスの苦りきつた声に、ファーレイはある程度議場での様子を想像できたのだろう、困つたものだと言うように苦笑を浮かべる。それから再び厳しい顔を取り戻した。

「それで、エザムが……」

口にするのを恐れる様子が、ファーレイの面に過る。レオアリスも領いた。

「その一報で混乱したんだ。北方が調査の兵を出すと思うが、まだ状況は殆ど判つてない」

「そうですか……」

「師団がすべきは、まずは王城の警護だ。いずれ王の命があるかもしれないが、今はな」

そう言いながら、一番動きたいのは自分自身なのだと、レオアリスは胸の裡で笑つた。
謎掛けなどくだらない。実際に動いてしまえば、考える余裕など無くなる。実際はそうしたくて堪らないのだ。

王の命さえ下れば。

けれど、この件に関して――。

どくりと、心音が高鳴る。

自分に、王の命は下るだろうか。

(――いや)

「では、失礼致します」

ファーレイはレオアリスの煩悶には気付かず、ただ領いて退意を告げた。

手にした綴りが、存在を訴える。それを強く握りしめ、レオアリスは離れかけたファーレイの背に声をかけた。

「……ファーレイ、お前」

ファーレイはすぐ振り返つたが、問いかけようとして、レオアリスは結局口を閉ざした。誰にでも聞けばいいというものでもなく、第一ファーレイは十七年前はまだ近衛師団にいなかつたはずだ。

「いや……。動きがないままだと兵達が動搖するだろう。すぐ状況は伝えられるだろうが、その前に流れてくるようだつたら教えてくれ

〔承知致しました〕

敬礼し、再び歩き出したファーレイを暫く見送り、レオアリスはひとつ頭を振つて、士官棟へ向かった。

早朝に会議が始まつたにも関わらず、王城から総司令部の書庫に寄つて戻つてくれば、既に時刻は正午も近い。第一大隊の士官棟が通りの先に見えたところで一度立ち止まり、ふと思ひ直して、士官棟の手前で道を逸れた。

執務室でこの綴りを開く事は、何とは無く憚られた。

士官棟の背面の壁を右手に見ながら棟の裏手に出ると、そこには小さな裏庭がある。棟の反対側は高台のように張り出した造りになつており、そこから王都の街並みが見渡せた。王都の構造そのものが、王城を中心にはやかな階層を重ねている為に、こうした高台は多くあつた。空に向かつて開けたそこからは、王都から各方面へと延び、一旦深い森の中に消えていく街道が、白い帶のように映る。

この西側からは見えないが、北の街道が森を抜ければ、エザムの街がある。馬であれば一日足らずで着く距離でしかない。今、北方軍が調査を向けているはずだ。

バインドと遭遇すれば激しい戦闘になるだろうが、既にエザムにはバインドはいないだろうと、レオアリスは思つてゐる。

尤も、まだエザムについてバインドだと決まつた訳ではない。今は調査の結果を待つしかなかつた。

街並みから視線を外し、草を踏んで裏庭を歩き中央の噴水の辺りで足を止めた。

噴水はずいぶん前に枯れ、存在も忘れられたような庭で、ここに来るのはほとんどレオアリスしかいない。少し息抜きをしたい時に、よくここに来ていた。我ながらそういう場所を見つけるのが上手い、と思わず苦笑を零す。

噴水の脇に座り、ひび割れて崩れかけた縁石に寄り掛かると、手にし

ていた綴りを眺めた。
暫らくそうしていたが、やがて息を吐き、表紙に手を掛けて、ゆっくり、項を捲る。

心音がやけに煩い。こめかみの辺りを、血液がどくどくと巡つていくのが鮮明に判る。

注意深く、前年、目的の年、翌年と全て目を通したが、通常の任務と演習の記述があるだけで、特にこれといった記述は無かつた。
レオアリスは暫く息を止めるように飲み込み、綴りを見つめた。
拍子抜けした気分さえ覚える。

「――」

もう一度全ての記述に目を通したが、やはり何も変わつたところを見つけられなかつた。手の中で綴りを幾度もひっくり返して弄びながら、レオアリスは自分の行為を笑つた。
気にし過ぎて、滑稽だ。

(何もないじゃないか。何があると思つてるんだ?)

目的の年だけ少ないので気になるが、一冊だけという年がこの年以外に全く無い訳ではないだろう。
あの男――バインドが言つた事が正しいとも限らない。むしろ、適当な偽りを言つていると考へる方が、正しい考え方かもしれない。

『お前の生まれた頃だ。』

(気にしすぎだ)

「何もない」

今度は声に出して呟いてみる。だが、それは自分の耳へすら、どこか

力無く届いた。

グラムスレイの態度。議場に一瞬だけ満ちた、戦慄にも似た空気……。否定をしようとするほど、与えられる反応が疑問を投げかける。「もなかつたじやないか」

もう一度、切り捨てるよう呟いて、綴りを脇に置き両手を頭の後ろ

に組むと、レオアリスは瞳を閉じた。

瞼の裏に、昨夜の光景が甦る。

焰を纏つた、紅い剣。

レオアリスと同じ剣士。自分以外の剣士を、始めて目にした。

剣を止められた感触を、つい先程の事のように思い出す事が出来る。

驚き。

男の言葉への疑念。

それから、確かに湧き上がった、もう一つの感情——。

あれは。

閉じた瞳の奥に、ちらりと紅い陰が揺れる。

体内で、もう一つの鼓動が小さく脈を打つた。

震えるようなその鼓動が、断続的に響く。

それは剣の声だ。よく、知っている。

顕現する事への歓喜を、剣を振るう瞬間に伝わる感情を、こうしてい

る今も思い出す事が出来る。

更に覗き込めば、剣もまた手を伸ばす。

——自分の、深淵を。

ふいに身体を引きずり込まれるような、一瞬の剥落感を覚え、レオアリスは跳ね起きた。

荒い息をつき、自分の鳩尾に視線を落とす。
何も変わった事はない。剣は静かにレオアリスの中に眠つている。

「上将。やはりこちらですか」

呼吸を整えようと息を吐いた時、水気の無い草を踏む音と聞き慣れた

声が掛かった。瞳を上げると、沈み始めた太陽を背にロツトバルトが歩いてくるところだった。

金髪が陽光を弾くせいで表情はあまり見えない。だが、レオアリスの脇に置かれた綴りを見て、僅かに眉を潜めたようだつた。

「副将がお呼びです。エザムについて緊急の軍議が招集されました。議場へお越しいただきたいと」

ロツトバルトの髪が薄く赤い夕光を纏つていてる事に、いつの間にそれが時間が経つていたのかと驚きを覚える。眠つていただろうか。

「ああ、悪い。——動きは」

「特にはありませんね。まあ、昨日の今日で王城の警備は膨れ上がってます。この状態で尚、城内に忍び込もうという輩もいないでしよう」

「まあな」

服に付いた草を払つて立ち上がり、綴りを取り上げる。土官棟に足を向けたレオアリスの背に、ロツトバルトが声をかけた。

「上将」

呼び止める声にレオアリスが振り返る。その顔に、落ちてゆく西日がきつく差した。

振り返ったその先に、落日が城下の町並みを、緋く深い光の中に沈めている。

レオアリスは振り返つたまま、動きを止めた。

瞳が、落日に光を吸い取られたかのように色を消し、手にしていた綴りが足元の草の上に落ちる。

「上将……？」

訝しそうに歩み寄つたロツトバルトの前で、レオアリスの身体が搖らぐ。

ヒヤリとした感覚が、ロツトバルトの背筋を過つた。それが何か捉えきれないまま、咄嗟に腕を延ばす。

倒れこむ肩を支え、その顔を覗き込み、ロツトバルトは感じた寒氣の

理由に気付いた。

同じなのだ。暴走を起こしたあの時と——。

だが、今、何がそれを呼び起こしたのか。

あの時はおそらく、切り裂かれたミストラ族の姿に触発されたのだ。

まだ動かないレオアリスの身体を支えたまま、ロットバルトは背後を振り返ったが、特にこれといったものは見当たらない。

ただ夕照に沈む王都が映るだけだ。

レオアリスの身体が、大きく鼓動を刻む。

草の上に落とされた瞳は、何か別のものを見ている。

呼吸が乱れていくのを感じ、ロットバルトは素早く頬を打つた。

乾いた音とともに、レオアリスの視点が定まる。

「……痛え」

少し強く打ち過ぎたようだ。レオアリスは赤くなつた頬を手の甲で擦り、訳が判らないといった顔で目の前のロットバルトを眺めた。

「——失礼。ぼうっとしておられたようなので」「ぼうっと？俺が？」

まつたく心当たりがないのか、レオアリスは自分の行動を思い起こそうと瞳を眇めた。

「いえ、気のせいでしょう。失礼しました。それより、急がないと軍議に遅れます。また余計な皮肉は聞きたくはないでしょう」

ロットバルトはそれを押し止めるように告げ、レオアリスを促す。

今、思い出させるべきではない。それがレオアリスにどのような影響を与えるのか分からないが、ここは王都だ。

「ハヤテは？ 戻つてるか？」

「戻っていますよ。一人で帰されて、少々不機嫌なようですがね」

ロットバルトの言葉にレオアリスは笑つて、出口へと足を向けた。

「不機嫌なのは、最近遠乗りに行かせて貰つてねえからだ」「そうですか？ 前に副将から咎められてから、まだ半月ほどしか経つ

ていないと記憶しておりますが」

「ひと月は経つてるだろ」

レオアリスは眉をしかめ、ロットバルトの澄ました横顔を見上げた。ロットバルトは昨夜のバインドの告げた言葉を聞いているが、いつも通り、変わらない表情でしかない。

「——」

レオアリスが探しているものを伝えれば、この参謀官の方が上手く探し出すだろう。

一度問われたように、伝えた方がいいのかもしれない。

少しだけ迷い——、結局レオアリスは何も告げないまま視線を戻した。

(まだ、もう少し、事の全体が掴めてからだ)

口にするのが怖いのかと問われれば、レオアリスはそれを否定するだろう。

けれど確実に、それはレオアリスの中にあつた。

王城へ向うレオアリスの後ろ姿を見送り、ロットバルトは再び先程の方向を振り返つた。既に陽は落ちきり、薄赤い夕闇が辺りを覆つっている。

(——何だ)

先程のレオアリスの様子は、ミストラの時と同じようで少し違う。あの時は押さえられていたものが、一つを切つ掛けに一気に弾けたような状況だつたが、今回は。

ロットバルトは当てはまる言葉を探した。そう……。

曖昧なのだ。明確な原因が見えない。

確實に言えるのは、レオアリスの変調に、バインドが関係しているという事だけだ。

レオアリスが話を向ける気になるまで待つつもりでいたが、今の様子を考えれば、それでは対応が後手に回りかねない。十七年前に何があつ

たのか、把握しておく必要がある。

レオアリスは近衛師団文書庫を調べていたようだが、先ほどの様子ではおそらく何も得るものは無かつたのだろう。
(文書での記録は無いと考えた方がいいかもしないな。とすると、人か……)

少なくとも十七年前から情報を得る地位にあり、剣士についても一定の知識がある人物。

思い当たる相手はいる。幾人かは面会も得られるだろう。
手持ちの札は少ないが、多く見せるのはそれほど困難ではない。

ただ、事実が何か、そこが全く見えていない以上、札の引きを間違えれば、レオアリスの立場を悪くもしかねなかつた。

(剣士。剣士か……)
これまで漠然とした疑問しか持つていなかつたが、思つた以上に、剣士という種に関する情報は少ない。

ロツトバルトはもう一度、完全に陽の落ち切つた西の空へ視線を投げ、執務室に足を向け歩きだした。

自分を育ててくれた養い親達。
レオアリスが王都での王の御前試合に出ると言つた時、彼らは強く反対した。ただそれは、自分の未熟さを思慮したものだとばかり思つていた。

けれど、もしあの男、バインドの言葉に真実があるのなら、彼らは何かを知つていたのではないか?

『お前の一族はどうなつた』

(——俺の、一族)

瞳を開ける。薄闇の中に、格子状に細い木の張られた天井が映る。
一族などと言われても、それはレオアリスの中に明確な像を結ばなかつた。

親の顔など知らない。気にならなかつたと言えば嘘になるが、あの北の雪深い村で育つてきた中で、それを想う事はほとんど無かつただろう。
というよりは、ある一時期まで確実に、全ての子供には『親』という

夜の闇の中で一人目を閉じる。

そうしていると遠い場所から聞こえるざわめきと、横たわった寝台の柔らかい生地の感覚しか感じられない。

冬が近づきつつある王都では、夜は次第に冷え込みを強くし始めた。

存在があるのだという事すら知らなかつた。村には自分その他に子供はおらず、年を経た老人ばかりだつたからだ。

自分と祖父達の姿が違うのは知つていたが、村の外を知るまでは、あ

る意味それはレオアリスにとって当たり前の事だつた。

いつだつたか、初めて近隣の村へ出た時、自分と同じような姿の者や、小さい子供の手を引く者の姿を、どこか不思議な思いで眺めた事を覚えている。

それが親子というものだと自分に告げた祖父の顔には、どこか翳つた色があつた。その後考え込むように黙つてしまつた祖父の悲しそうな姿に、聞くべき事ではないのだと、以来その事を口にした事はない。

だが、あの時自分はどう思つただろう？

あまり気に留めなかつた気がする。それとも、少し、寂しさを感じただろうか。

ただそれ以来、あの廃墟、ずっと昔に焼け落ちた森の中の家々が、自分が『親』が居たところなのではないかと、時折思つた。

一族。

レオアリスは再び瞳を閉じた。

手が無意識の内に、首からかけた小さな青い石の飾りを握り込む。そうすると、波打つ思考が静かに、穏やかになる。

静かなざわめきが、次第に意識を眠りへと引き込んでいく。

夢の中で、燃え盛る赤い炎を見た。

四

深い闇の中、長靴の固い足音が大理石の廊下に響く。

アヴァロンは謁見の間の扉を通り過ぎ、その先にある階段を昇ると、幾つもの扉を抜けて一つの部屋の前で足を止めた。既にそこは王城内の公的な層を抜けた、王の居城の区域内だ。

扉の前でおとないを告げると、王本人の低い声が応えた。

扉を開け左胸に腕を当てて一礼を捧げる。アヴァロンは王の前へと歩を進め、その場に片膝を付いた。王の傍らに立つていてベールがアヴァロンに場を譲るために一步退くのへ、静かに頭を下げる。

深夜にも関わらず、王はまるで休息していた気配も見せず、黒檀の執務机の前に腰かけたままアヴァロンにその黄金の視線を向けた。王の居城の一角、執務の為に使われているこの部屋には、四大公や筆頭侯爵家、相談役、そして近衛師団総将の、限られた者しか立ち入る事を許されていない。通常の謁見及び執務は、階下の謁見の間で行われる。壁一面の書棚と執務の机のみが置かれた簡素な造りだが、王城内と同じ黒と銀を基調とした室内には、重厚な空気が漂つっていた。それは目の前の存在が纏う空氣だ。

アヴァロンの口からバインドの一件を聞いても、王はその表情を動かす事は無かつた。昼にアスタークトから報告を受けている事もあるのだろうが、王の上には少しの焦燥も懸念もない。

エザム調査の指示を出しているが、通常の指示の範囲を出でてはおらず、アスタークトやアヴァロンに委ねられた形になつてている。

本来、王には国など必ずしも必要ではないのだと、アヴァロンは時折そんな事を思う事がある。

王を守護する要の役割にありながら不敬な考え方かもしれないが、王を守護すると言つたところで王の前に自分達の力など微々たるものだ。王が支配を必要としているのではなく、自分達、この地が王の支配を

必要としているのだ。王の支配と規律が無ければ、この国は他国と同様に、混沌と戦乱が満ちるだろう。

こうしてアヴァロンの報告に耳を傾ける時の王の姿を眼にすると、アヴァロンはより強くその事を思った。

十七年前、バインドの件を伏せさせた事についても、内部の混乱を抑える為でしかない。王自身がどれほどの危惧を感じているのか、アヴァロンには感じ取る事は出来ない。

ただあの時は、王の関与は少なからずあつた。十七年という歳月は、王の意識を摩耗させるほど長いとは思わない。

王は今回の事を、どう捉えているのか。今回、あの時より問題はひとつ多いのだ。

「……バインドとの接触により、レオアリスは既に疑問を持ち始めております。全てが明らかになるのは、時間の問題かと」

例えバインドの名を伏せ、あの戦場を伏せたとしても、多くの者の記憶にそれらはこびり付いて消える事はない。バインドが動き続ける限り、やがてはレオアリスは答えに行き着くだろう。

それは再び、あの戦場を蘇らせる危険すら併せ持つていた。

判断を待つアヴァロンの前で、王は僅かに口元に笑みを刷いた。

「そなたは、あれが過去を知つて変わると思うか」
王の言葉に、アヴァロンは暫くの間、黙つてその顔を見つめた。

変わるか、変わらないか——。

レオアリスの王に対する忠誠心は疑うべくも無い。今の段階では変節があるとは考え難い程、それは強固に思える。

だがそれはあくまでアヴァロンの主觀に過ぎず、説明できる根拠がある訳ではない。

アヴァロンの思考を読んだように、王は再び薄く笑みを浮かべた。

「敢えて知らせる必要はない」

「しかし、」

「だが、バインドが現れた以上、事態は再び動き出した。もはやレオアリスが知る事を止める必要もないだろう。眞実はあれ自身が自ら知り、判断すべき事だ。あれとバインド以外、誰一人当事者では有り得ないのだからな」

アヴァロンは傍らのベールに意見を求めるように、ちらりとその視線を向けたが、ベールはただアヴァロンに視線を返すだけで特に口を挟もうとはしなかつた。諦めて王に視線を戻す。

王は、レオアリスが変節する事は無いと確信しているのだろうか。それとも、変わったとしても、それはそれで構わないと、そう考えているのだろうか。

アヴァロンの顔に浮かんだ疑問に答えるかのように、王は黄金の瞳を細めた。

「私は、少し、見てみたいのだ」

何を、と問おうとして、王がもはやそれに関して語る気の無い事を、その瞳から悟る。

黄金の瞳が向けられる先に見えているだらうものは、アヴァロンには想像する術はない。心の中に持ち上がる僅かな懸念を飲み込み、アヴァロンは深く頭を下げた。

エザムの壊滅。

軍議は対応を巡つて紛糾した。当初の報告にあつたとおり、北方軍が駆けつけた時点で既に、エザムには動くものすらなかつた。街並みは見る影もなく破壊し尽くされ、燐つた煙を上げていた。

調査の結果、エザムを壊滅させたのが、たつた一名によるものであろうという結論に達し、軍内部に衝撃が走つた。

壊滅から三日が経つた今も、明確な対応を打ち出せないまま、既に数回の討議を重ねている。

バインドの情報が少なすぎる事、またバインドと対峙した時、どれ程の兵を充てれば討ち取る事が出来るのか。それらを巡つて議論は平行線を辿つた。

「二個小隊が壊滅させられたのだ、動くのであれば、中隊を基本にすべきだ」

「それでは本来の軍の編成が意味を成さなくなる。第一、警戒し過ぎではないか？」

「軍を各方面に差し向けて、草の根を分けてでも捜し出すべきです。王城への侵入、エザムの壊滅、これで手をこまねいていれば、軍の威信に関わる」

「たつた一匹の賊の為に軍を動かせば、それこそ威信に傷が付くと言うものだ」

「もはやその様な事を言つている場合ではない！」

レオアリスはその様に、心に広がる苛立ちを隠しきれない。

バインドに関する情報を知つてゐる者は、全て出せばいいのだ。現在の事のみならず、過去のものも全て。そうしなければまともな対応など出来はすまい。そうなる事を、レオアリスは期待すらしていた。

だが事ここに至つても、知つてゐるであろう者はそれをしようとはし

ない。むしろ軍議において積極的に発言する事を避け、事の行く先を見定めようとしているようだつた。

彼等自身に直接尋ねようにも、互いに多忙の中ではその機会も無い。また、運よく話す事が出来た者も、何の事かと問い合わせれば、それ以上問い合わせが無かつた。

手探りで不確かな情報を拾い集めようと/orする今の状況は、レオアリスの中に少しずつ焦燥を積み上げていく。

「そもそも、責任の所在を」

閣議の間で延々と交わされる議論に、正規軍の長であるアスタロトは欠伸を噛み殺す事もしない。ちらりと細長い円卓の対角に座つてゐるレオアリスに目を向けた。

（苛立つてゐるなあ）

バインドが現れて以降、軍議では連日のようにレオアリスに対する批判の声が上がつてゐた。バインドと対峙しながら逃した事に対する批判だが、その根底には日頃からの様々な思惑がある。

「もちろん、この責任は果たされるのでしょうか？」

既にそれは何度も繰り返された言葉だが、議場内を覆う焦りや屈辱感は、より単純な議論しやすいものへ収斂されていく。アスタロトは小さく溜息を吐いた。

「王城を守護すべき近衛の大将が侵入者を逃すなど、本来任を解かれても致し方ないものだ」

「この先、もしいざれかの街が襲撃されたとしたら、どうその責任を取るつもりか」

堪り兼ねたトウレスが、苛々と正規軍の将校達を睨めつける。

「そう言うなら、早いところバインドの情報を取つてきて貰えないか」
バインドがエザム以来動いていない事、またエザムに関する件については全て正規軍に権限があるため、近衛師団が勝手に動く事は出来ない。

未だ管轄に拘っているのは正規軍の方だ。

喉元まででかかった不満を飲み込んだトゥレスに対し、北方軍大将ランドリーはやはり苛立ちを隠さず、トゥレスと、そしてレオアリスを睨んだ。

「勿論、正規は昼夜を問わず捜索している。だが、剣士殿は動く気配もないではないか」

「どこにいるかも判らずに、動ける訳がない」

「まさか同じ剣士とあって、臆したのではないでしょ？」

ランドリーの言葉に、正規軍の将達の間から微かな失笑が洩れた。色をなして立ち上がるうとしたグランスレイの腕を、レオアリスが押さえれる。

「……臆する……？ 僕が？」

それまでの苛立ちも相まって、レオアリスは取り繕う事すらせずに、彼らを見据えた。その口元に浮かんだ淒惨とも云うべき笑みに、それで不満をしていた諸侯が押し黙る。

レオアリスが——剣士が戦いを臆する事は無いと、その場の誰もが理解している。しかしその頬に浮かんだ笑みは、彼等を少なからず戦慄させた。

戦いを、同じ剣士と剣を交える事を、待ち望むかのような笑み。

それは——。

(まあ、今回のこれを片付ければ、皆どうせ何も言えなくなる)

その場を満たした緊張を事も無く見渡して、アスターントはもう一つ欠伸をする。

(——剣士か)

アスターントにとつては軍議は退屈で、エザムの壊滅もここであれこれと言つても仕方のない事だと思っていたが、レオアリスの剣を止めたその男には、僅かに興味を覚えた。

ここに居並ぶ諸侯の中で、おそらく剣士を抑え得る者など僅かだろう。

正規四軍の大将か師団総将であつても、エザムをたつた一人で壊滅させる事など、不可能に等しい。

アスターントが考える限りでは、最もそれを可能とするのが、同じ剣士であるレオアリスだ。

軍を出すの出さないと、ここで議論をする事 자체が無駄なのだ。何故それが判らないのだろう。

アスターントは短く息を吐き、顔を上げた。

「さて、今日はこれまで。解散だ」

「し、しかしアスターント公」

「しかしもかかりもあるか」

「か、かかり？」

「お前等連日顔を突き合わせて、一体どんな議論が進んだ？ ぐるぐるぐるぐる同じとこを回りやがつて、尻尾を追い掛ける犬じやあるまいし。時間の無駄だ。どうしても議論を続けたいなら次回までに具体案を出せ。ほれ解散」

アスターントがさつさと席を立つと、正規軍副将タウゼンが軍議の終わりを告げる。

しぶしぶといった程で席を立つ者、解放された色を浮かべる者、様々だ。

レオアリスも溜息を一つ吐いて立ち上がった。アヴァロンが彼を手招き、二、三言、今後の体制について言葉を交わすと、先に退出する。

諸侯が退出して行くのを眺めながら、アスターントはレオアリスに歩み寄り、その前に立つた。傍らのグランスレイが深く頭を下げるのに對し、軽く手を振つて答える。

「お疲れ。大変だなーお前も。めんどくさい奴らばつかでさ。まあ後ろのグランスレイの方が噛み付きそうな顔してたけど」

アスターントにしつかり見られていた事に、グランスレイは恥じ入ったよう口元を歪めた。

「これは、みつともない姿をお目に入れました」

「気にするな。あいつらもう、やれる事なくって焦ってるんだ。正規がこれってのは情けないけど、一旦動き出したらきつちりやるからさ、まあ勘弁してよ」

控えめな笑みを浮かべ、グラансレイは再び頭を下げた。

「しかし、相手が動かない事には、我々としても手の施しようがありますせん。公、ほんの僅かでも情報が入れば、何卒我が隊にもお知らせ戴きますよう」

「分かってる。結局レオアリスには動いてもらわなきやなんないしね」「恐れ入ります。上将、私は先に戻ります。午後は演習がござりますので」

「ああ」

左腕を胸に当て二人に敬礼すると、グラансレイは後方の扉に向かった。

グラансレイの後姿を、レオアリスはどこか複雑な色を浮かべて眺めている。

アスタークトはその横顔をチラリと見て、白っぽい陽射しの差し込むがらんとした議場内を見渡した。ここ数日で、すっかり見飽きた眺めだ。

レオアリスは何かを気にしている。それが何かは分からぬが、レオアリスが言わないのであつたら、敢えて水を向ける気も無い。

自分の助けが欲しくなつたら、そう言つて来る。

レオアリスは暫らく同じように黙つて議場内を眺めていたが、改めてアスタークトに顔を向けた。

「悪いな、アスタークト。お陰で早めに開放された」

首を傾げ少し考えてから、軍議の事を言つてゐるのだと氣付いて、アスタークトはもつと礼を言えといわんばかりの笑みを浮かべた。

「ふふん、感謝しろ。まあ本当は私も鬱陶しかつただけだ。時間の無駄なんだもん」

「無駄……。そりやそりやだが、お前がそれでいいのかよ」

レオアリスに呆れた視線を向けられても、アスタークトはあつけらかんとした態で顎を持ち上げた。

「いいの。とにかくお前さ、さつきとバインドとやらを斬っちゃえよ」

その言葉に、レオアリスは笑みを刷いた。楽しそうに声を立てて笑うと、アスタークトは再びその鮮やかな深紅の瞳をレオアリスに向ける。

「どっちにしろあんまり考えすぎんなよ。たまには息抜きしなきや。遊びに行くなら付き合うぞ」

「本当、お前はそればっかりだな。——分かってる。まあ、適当にやるさ。相手が目の前にいない以上、どうしようもないからな」

だがそう言つて笑いながらも、黒い瞳には沈んだ色が見える。アスタークトは思わず気な色を浮かべたが、それには気付かず、レオアリスは窓の外に視線を投げた。

この二日、当たつた先は空振りばかりだ。誰に問うべきなのかも明確ではなく、誰にでも聞えればいいという問題でもない。自分で探つて行く他に手は無いが既に手詰まりの感がある。近衛師団の保管庫にはあれ以上の情報はなかつた。

(もう一つ、調べてみる所がある)

王立文書宮。

そこなら、全ての書物が揃つてゐる。今の段階で、情報を得られる可能性が最も高いのは、王立文書宮だろう。

蔵書量もさる事ながら、王立文書宮の長スランザールはこの国随一の賢者と呼ばれ、膨大な知識を有している。

時間を見つけて、明日にでも行つてみる必要があつた。

「雰囲気悪いね。何つかピリピリしてやがる」

昼食時で混み合つた食堂内を見回し、クライフは顔をしかめた。この三日というもの、兵達の中にも重苦しい空気が漂つている。それは見えないものへの不安であり、見えるものへと転じていく不満だ。

クライフの前で、フレイザーは手にした陶器の茶器を口許に寄せる。ふわりとした湯気と花の香りに翡翠の瞳を僅かに細めた。

「上層部の様子は表には出てこなくとも、何となくは伝わるものよ。外門とエザム、二つの状況だけしか判つていないし、その後のバインドの情報が無い中では、何をどうすればいいのか不安にもなるわね」

二人が今いる食堂の中にもそれがはつきりと見て取れる。これまで近衛師団、正規軍双方の兵がさほどの問題もなく混在していたここで、今はくつきりと両者の間に線引きがあつた。それぞれが食堂内の左右に分かれて固まり、目が合えば互いに睨むか視線を逸らすようになつてた。

「ちえ、せつかくフレイザーとの食事だつてのに、こんなじや雰囲気出ねえよなあ」

「あら、何の勘違い？」

クライフが情け無さそうに顔を歪めた時、奥の席が俄かに騒がしくなつた。怒鳴り声と床の上に食器が散らばる派手な音が響く。クライフは眉をしかめたまま立ち上がつた。

「つたく、馬鹿が」

口の中で呟き、ずかずかと大股で騒ぎの方へと足を進める。

「そもそも、お前等が外門を守れなかつたのが問題だろう！」

正規兵の一人が目の前の近衛師団隊士を睨み付けると、隣で立ち上がつた正規兵も声を上げる。

「そうだ！ 王城の守護が聞いて呆れるぜ！」

正規兵達から囁くように同意の声がかかり、今度は近衛師団の他の隊士達が立ち上がつた。

「エザムの二個小隊を壊滅させといてよく言うな。力不足は正規の方じやねえのか！」

同意と野次が双方から飛び交い、瞬く間にそこにいた兵達が集まり、騒々しさが一段と増していく。

「大体お前等の大将は何やつてんだ？ さつさと出て奴を討てばいいのによオ」

「そうだ、どうせ同じ剣士でなきや何もできないんだ」

「実際、怖くて出らんねえんじやねえのか？」

「ふざけるな！」

「おい、聞き捨てならんぞ！」

近衛師団兵達が一斉に色めき立つ。

「びびってんなあ正規の方だらう！ 捜索に手工抜いてんじやないのか！」

「何だとオツ」

まさに掴み合いになりかけた瞬間、左右から同時に叱責の声が飛んだ。

「いい加減にしろ、テメエ等！」

「ガキみてえに浮つ付くんじやねえ！」

雷に討たれたようにさつと静まり返り、兵達はそれぞれ自分達の後方で仁王立ちになつたクライフと、正規軍中将ワツツの厳しい表情を見つめた。

ワツツは集まつていた兵達の間に巨体を押し込むようにして中央まで行くと、ぐるりと居並ぶ顔を見渡す。細い眼の中の鋭い眼光を浴びせられ、兵達は熱が冷めたようになつた。

「一体何やつてんだ？ お前等は。この狭え中でお互いに非難し合つてるのが正規と師団の実体か。王城の守護は師団の役割だが、正規軍一隊が王都に駐屯しているのが何の為か、それを忘れてる訳じやないだろう

な？ そんなんで王都が守れるか」

一つ一つの顔を覗き込むように視線を向けるワツツに対し、兵達は言葉もなく畏まる。呆れ顔で眉を一つ上げ、ワツツは兵達に向こうのクライフを振り返った。

「クライフ、テメエもビシツと言つてやれ」

「……てめえが全部言つちまつたよ」

息を吐き、首筋を搔くクライフの隣でフレイザーが微笑みを浮かべた。「ワツツがいてくれて良かつたわね。貴方殴つて止めるつもりだつたでしょう」

「んな事は……」

ワツツがやりと笑う。

「クライフが先に仲裁に入つてたら、俺も参戦してたぜ。その方が意外と発散できたんじやないか、なあ？」

ワツツに同意を求められ、兵達は慌てて首を振つた。

「ど、どんでもございません！」

「遠慮すんなよ。溜まつてんだろオ」

目の前にいた不幸な正規兵の肩を力一杯摇すり、ワツツは豪快な笑い声を上げた。

「はいはい、そこまでにして頂戴。言うことは他にあるでしよう」

パンパンパン、と両手を打つて兵達を振り向かせ、フレイザーは改めて彼等の顔を見渡した。

「苛立つ気持ちは良く判るわ。でも、上層部からの指示が無い限り、言つてしまえばあなた方に責任は発生しないの。気楽に構えるのね」

フレイザーの柔らかい笑みと口調に緊張をほぐされたのか、兵達の顔から強ばりが取れる。一番端にいた兵が顔を上げ、おずおずと口を開いた。

「しかし、何も指示が無いのでは……」

「不安かしら」

「エザムを壊滅させる程の相手です。奴がまた来たら、俺達に対抗できるんでしようか」

「おいおい、そんな事でどうする」

「しかし……相手が剣士では」

再び不安そうに顔を見合せた兵達の前で、フレイザーはにつこりと笑つて腰に手を当てた。

「あら、忘れたの？ 王都には上将がいらっしゃるわ。貴方達、バインドがどんな相手か判らなくとも、近衛師団第一大隊大将は知つてゐるでしょう。王の御前試合を見ているんだから」

その言葉で完全に不安が晴れた訳ではないだろう。しかし兵達の顔からは、先程までの怯えにも近い色が大分薄れている。フレイザーはもう一度、安心させるように彼等を見回した。

「そう遠からず結果は出るわ。それは私が予想する通りになるでしょう」

フレイザーもまた、バインドという剣士がどれほどの相手なのか知つてゐる訳ではない。だが彼女の瞳にはレオアリスに対する強固な信頼があり、それは兵達へ静かに広まつていくようだつた。

「さあさあ、ぼうつとしてんなよ。午後の訓練があるだろう。とつとと飯を食つちまえ」

ワツツが彼等の背を追い立てるようにして元いた席に戻す。再び大人しくなつた食堂内を眺め、クライフとフレイザーも卓に戻つた。

「すげえ。惚れなおした」

「あらそお？ それより、困つた状況よね」

「それより……」

項垂れかけたものの、フレイザーの瞳に覗いた深刻な色に、クライフも表情を引き締め直す。

「いつまで軍議ばかり続けるのかしらね。一言討伐を決めれば、後は動くだけなのに。結局、上将しか剣士を抑えられないんだから」

「でも正規の管轄になつちまつてんだろ？」

「まだそれすら決まってないのよ。だけど正規の管轄になつて、誰が剣士と闘うの？」

「そう問われて、クラライフは恐る恐る口を開いた。

「……アスター様とか？」

「馬鹿言つて。の方を動かすのなんて相当の一大事、それこそ大戦並みよ」

「今だつて一大事だろ——それに剣士だつて同じだ。前の大戦じや、剣士の力がでかかつたんだから。何て言つたつて、大戦の剣士。……まさかそいつじやねえよなあ」

「違うわよ。ジンでしょ。今はどうしてのか知らないけど」

最早三百年も前の話だ。フレイザーにしても歴史の一端として知つてゐるに過ぎない。その当時から軍にいたのはアヴァロンぐらいだろう。「上は結局ぶるつてんだろ。だからさ」

フレイザーはクラライフの物言いに咎める視線を向けたが、そのまま視線を落とした。

「——そうね……」

ふと黙り込むと、まだぎこちないながらも兵達の交わす声がざわざわと聞こえてくる。フレイザーは冷めた紅茶を一度搔き回し、ただ匙を置いた。

「……あの人、また迷つてるのかしら」

呟きを耳に止め、クラライフが顔を上げる。

「あの人？ 誰？」

「えつ？ あつ、やだわ、何か言つた？」

途端にフレイザーは顔を真つ赤に染め、クラライフの眼から逃げるよう右手を上げて遮つた。

「何かつて、……」

「とにかく、もう迷つてる時じやないのは確かよ。どうにか……決断し

てもらいたいものね」

そう言い置いて、フレイザーは席を立ち、まだ微かに赤い頬に手を当てるようにして、足早に食堂の出口へ向かつた。

「ちよつと、フレイザー……。——誰の事だよ……くつそお」

拳を握り締めたものの、向ける先も無い。クラライフも一度自分の頬を軽くはたいて席を立つた。

クラライフが士官棟へ戻ると、先に食堂を出たフレイザーとヴィルトルがいるのみで、他はまだ戻つていないようだつた。

「上将は？」

席に着いて椅子の背に身体を預け、ヴィルトルに顔を巡らせる。何かの書面を読んでいたヴィルトルは、それを伏せて顔を上げた。

「お二人ともまだだよ。けどもう戻るだろう」

「長えなあ。決まつたのかな」

「さて……」

丁度そう言つている間に、扉が開き、グラントレイが入つてくる。

「お疲れ様です。上将は？」

「公と少し話をされている。程なくお戻りになるだろう」

「それで……」

「まだだ」

眉をしかめ短く告げただけで、グラントレイは自席に向かつた。ヴィルトルが立ち上がり、グラントレイの傍に寄ると、先程まで見ていた紙を渡して一言二言何事か告げる。グラントレイは再び眉をしかめたが頷いた。

ヴィルトルが紙を畳んで懷にしまつた時、再び扉が開いた。彼等は同時に顔を向かつたが、入つて来たのはロットバルトだ。

余りに一斉に視線を向けられた為、ロットバルトが思わず足を止める。

「何だ、お前か」

身を起こしかけたクライフは、また元のように椅子の背に寄りかかつた。

「何だと言われても。……上将はまだお戻りではないんですか」

「まだだし、まだ決まってないってよ」

ロットバルトは何も言わず、ただ呆れたように肩を竦めて机へ向かう。

何とはなしに会話は途切れ、クライフは暫く窓の外を眺めていたが、それをグランスレイへと戻した。

つい先程の食堂での諍いが思いだされ、軍議が決着しなかつたと聞い

ただけで、はいそうですかと黙つてもいられない。

「……副将、いつまで放つておくつもりなんです」

「何の話だ」

クライフは立ち上がり、グランスレイの机に近寄った。

「決まつてんでしょ、上将に対する批判とか、言わせつ放しでいいのかつて事ですよ。軍議じやまともに対策も練らないでそなへつかつて話じやないですか」

クライフほど表情には出していないものの、フレイザーやヴィルトルルの顔の上にも同様の思いがあるのを見て取り、グランスレイは苦々しい溜息と共に頷いた。

「そればかりが上がつてゐる訳ではないが、連日飽きもせず、口がさない輩ではある」

「ちつムカつくな。今度は俺を連れてつてくださいよ。がつんと言つてやる」

掌に拳を当てながら、腹立たしげに室内を歩き回るクライフを眼で追つて、フレイザーが苦笑交じりの声をかけた。

「我々の立場では臨席できないのよ。仕方ないでしよう」

基本的に正規軍、近衛師団全体にかかる軍議に出席が認められるのは、

大隊の副将までだ。その規定でいけば出席者は圧倒的に正規軍側が多い

事になる。それもクライフには不満だった。

ヴィルトルルが自席に着いたまま、クライフを見上げる。

「お前までそんな事でどうするんだ？ 大体お前が出たら、余計面倒な事になるだけだよ」

「だからって黙つたままでいられねえだろ。第一、下にまで広がつちまつてギスギスしてんだ。さつきなんて乱闘寸前だぜ？」

クライフが食堂の一件を搔い摘んで報告すると、グランスレイは苦々しい息を吐いた。

あの場ではひとまず収まつたものの、全體的な問題は解決したとは言えない。上層部の不協和音が確實に隊内にも伝わつて、普段なら気にならない事まで不和の要因になつてゐる。

このままの状態が続けば、兵達の不安はますます大きくなつていくばかりだ。

フレイザーが与えた安堵も、このままレオアリスなりが動かなければ、時もなくまた焦燥と疑念に変わつてしまふだらう。

「批判を言わせねえか、軍を出すか、せめてどつちかになんねえと收まりませんよ」

しかしグランスレイはクライフに同意せず、厳しい表情のまま首を振つた。

「上将が黙つておられるのだ。我々が下手に口出しすべきではない。だがいつもの批判に過ぎん」

「つたく、正規にやそんな時じやねえつて、誰も言う奴はいねえのかよ」それまでは口を開かずその様子を眺めていたロットバルトは、グランスレイに蒼い瞳を向けた。

「それだけですか」

「……何がだ。」

「何。それ以外にまだあんの？」

束の間、ロットバルトはグランスレイに視線を注いでいたが、すぐに

口元に微かな笑みを浮かべた。

「いえ。……私も、少々苦言を申し上げるべきと思いますが。それに、批判についてはいずれにせよ結果を出せば消えていく話ですが、意識にも一定の情報は必要ですよ」

グラансレイは一度その瞳を見返しただけで、何も言おうとはしない。代わりにクライフがグラансレイに抗議の籠った視線を向ける。

「ロットバルトの言うとおりだ。上将が黙つてたって、副将から苦情ぐらいい言つてくださいよ。放つとくからどんどん広がつてくれ」

「俺が何だって？」

丁度その時、王城から戻つたレオアリスが入り口で立ち止まり、執務室内の様子に驚いた瞳を向ける。険悪という程では無いにしろ、どこか睨み合うような雰囲気がある。

「何かあつたのか」

「上将が批判を受けてるつてのに、黙つてる事は無いって話です」

「……ああ」

不服そうな色を隠さないクライフの様子に苦笑を漏らし、レオアリスは室内を横切つて自分の執務机まで行くと、ひよいと机の上に座つた。

「別に。気にも仕方ない」

「腹立たないんですか？　俺は気に食わねえっすよ。俺の大将を何だと思つてんだ」

本氣で怒つているらしいクライフを眺めて、レオアリスは宥めるように笑つた。

「落ち着けよ。……まあ、お前らには悪いけど、少しの間我慢してくれ」

「俺達はいいんです。そうじやなくて」

クライフは尚も言い募ろうとして、レオアリスの瞳に浮かんだ光に気付き、漸く息を付いた。バインドの件が片付けば、今持ち上がりつていてる批判も少しは減るのだろう。その瞳は、自分がバインドを斬るのだと、

見る者に告げている。

ただそれは、安堵の他にもう一つ、一瞬の戦慄に近い感覚をクライフに与えた。

「……判りました。上将にお任せします。でも、早いとこ決着つけてくださいよ。正規の奴等も結果を見せりや納得するしかねえでしょうし」

クライフが退るとロットバルトが入れ代わりに進み出て、書類を手に彼らを見渡した。演習の布陣図だと気付いて、クライフは呆れた声を上げた。

「こんな時でも演習やんのかよ」

「バインドに動きが無く、事態が師団の管轄下に無い以上、我々の打つべき手は態勢を整えておく事以外に無いでしよう。必要以上に特別な行動を取る事もない」

「俺はどつちかつつうと、バインドがさつさと動いて実戦になつた方がいいな。その方が兵も落ち着くんじやないか？」

クライフにしてみれば、いつもの軽口程度の発言だった。

「軽々しい事を口にするな！」

鞭を弾くような響きがあつた。予想外に厳しい口調に、クライフだけではなくその場の全員が、グラансレイに驚いた視線を向ける。

「え……つと、——申し訳ありません」

クライフが圧されたように頭を下げる。レオアリスは黙つたまま、グラансレイの僅かに逸らされた横顔に視線を注いだ。グラансレイの表情には、どこか苦い色がある。

だが、それ以上の変化が無いのを見て取り、レオアリスは微かな苛立ちの交じつた溜息をついた。

た大気を少しづつ暖めていた。

館の門を出て少し歩いた所で、レオアリスは足を止めた。そこが、バインドが王都に現れてから、四日目の朝を迎えた。

薄紫と輝くような朱が入り交じる明け方の空は、地上でどんな事があるうと、ただ色を移ろわせていく。

窓の向こうに変わる事なく上がる朝日を眺め、レオアリスは溜息をついた。記録を調べる事しかできていないにも関わらず、疲労は日々積み重なるように身体に纏いついている。

浴室に行き、蛇口を捻ると壁面に設けられた管から勢い良く水が降り注ぐ。部屋着のままなのも構わず、頭を突っ込むようにして水を被つた。明け方の冷えきった水が肌を叩き、寝不足気味の頭が漸くすつきりとしていく。雨のように注がれる冷たい水の中で、浴室の壁に片手を当てたまま、瞳を閉じた。

今日は公休日に当たる。午前中の時間を利用して、王立文書宮へ行ってみるつもりでいた。そこで何もなければ、自分一人の力で探れる範囲は、探し尽くした事になる。

その後、どうするか……。単純に、やはりただの偽りだつたと切り捨てる手はある。いつそそうして蓋をしてしまいたい誘惑は強かつた。

けれど、ずっと引っ掛かっているのは、グラントスレイの様子だ。

昨日のグラントスレイの姿が脳裏を過る。

何を知っているのか。——何故、黙っているのか。その事がずっと、レオアリスに煩悶を投げ続けていた。

勢い良く注いでいた水を止め、滴る零ごと煩悶を振り払おうとするよう頭を振った。

身支度を整えて表に出ると、既に夜明けの色は消え、良く晴れた高い空が見渡せる。通りに沿つて右手には官舎の堀が延び、左側は常緑樹の植え込みが続いている。秋の日差しが樹々の葉や石畳に照り映え、冷え

深く生々しい傷を晒しているものの無機質に語らず、そこから得られるものは無い。

引き寄せられる視線を振りほどき、レオアリスは第一層へ向かった。

早い時間にも関わらず、執務室には既にロットバルトの姿があった。ロットバルトは不意に入つて来たレオアリスの顔を見て、意外そうに眉を上げた。

「どうなさつたんですね。それに今日は公休では？」
「さすがにこんな時のんびり休んでる訳にはいかないからな。情報は？」

「未だ変化はありませんね。どうせ軍議があつても大した内容でもないでしょう、息抜きくらいされても文句は言われませんよ。遠乗りにでも行かれたら如何です。カイを置いていていただければ、緊急時でも連絡は可能でしょう」

「そうだな……」

ハヤテは王城への行き帰りばかりで、すっかりふてくされた様子だ。心引かれた様子で少し考え込むように黙つたレオアリスに一度視線を向けてから、ロットバルトは書類を整えて卓上へ重ねて置いた。

「申し訳ありませんが、私は午前中に少々時間を頂きます」

「用事か？」

ロットバルトの手元に積み上げられている書類の山を眺めながら、何か急ぎの案件があつただろうかと、レオアリスは特に意図も無く聞き返した。

返った言葉に、視線を引き上げる。

「シスファン大将が、昨日から帰還されているそうです」

「シスファン——」

一度それを口の中で反復してから、思いがけない名にレオアリスは驚いて瞳を見開いた。

「まさか。昨日の軍議じや、何も言つて無かつたぜ。第一軍議に出席してない」

「そのようですね。私も表立つて聞いた訳ではありませんが、辺境を空けて秘密裡に帰還するだけの理由があるのでしよう。……今回の件と無関係とは考え難い」

正規東方軍第七大隊大将、レベッカ・シスファン。第七軍、いわゆる辺境軍を統括する彼女が、アスターントや軍の召喚がなく帰還する事は考えられない。

ロツトバルトの言うとおり、秘密裡に、重大な案件を以て召喚されたと考えるのが妥当だろう。

バインドの件に関わりがあるのでだろうか。

（この時期だ。それ以外……）

どこが、何の為にシスファンを召喚したのか。

『剣士と向き合うのは、いつ以来かな』

不意に、いつかのシスファンの言葉が耳を打つた。

鼓動が早まる。

確かに、シスファンはそう言っていたはずだ。

その時はただ額面どおりに受け取つていたが、今その言葉は、無視できない響きを孕んでいた。

「——

バインドの事を知つてゐるのか。——十七年前を？

早い鼓動に合わせるように、目まぐるしく疑問が入れ替わる。

答えへの期待と不安。

レオアリスは逸る気持ちを押さえ込むように、両手を握り込んだ。

（……会つて、話を——）

けれど、秘密裡に上がつているのであれば、通常の面会を求めてもらはぐらかされるだけだ。

ロツトバルトは暫くその様子を見ていたが立ち上がり、執務机を回つてその前に出た。

「面会の申し入れは受け入れて戴いています。任せて戴いても？」

跳ねるように顔を上げ、レオアリスはロツトバルトを見上げた。整つた面に浮かんだ表情は、普段と少しも変わっていない。

レオアリスは僅かに躊躇つた。

バインドの言葉に捉われ過ぎていると自分でも判つてゐる。けれど、それを自分の中でどう方向付けければいいのか、それが未だに見えていないのだ。

しかし自分には政治的な駆け引きなどは向かない。例え面会したとしても、無駄に終わるだろう。ロツトバルトならその術に長けている。

「——何を聞けばいいか、俺にもはつきり判つてない」

まだ迷つたままのレオアリスに対し、ロツトバルトは対照的な表情を浮かべた。

「無論、明確な指示を出される必要はありません。逆に現時点では、私個人の範疇で動いている事に留めておいた方がいいでしよう」

ロツトバルトは特に急かすでもなくそう言うと、執務机の縁に軽く身体を預けた。

この三日間、迷うだけ迷つて來た。それで何が前進した訳でもない。レオアリスは深呼吸をするように、大きく息を吐いた。

「……頼む」

口にしてみて漸く、胸の裡に重くわだかまつっていたものが、僅かだが軽くなつた気がする。

ロツトバルトは頷くと、先程卓上に置いた書類を取り上げ、レオアリ

スへ差し出した。

「せっかく出ていらしたのなら、ご確認を」

レオアリスが受け取ると、口元を皮肉っぽく歪める。

「調査報告と申し上げたいところですが、残念ながら何も得られておりません。午後まで待つて戴くしかありませんね。この後のご予定は？」

「王立文書宮に行くつもりでいる。……一つくらいひつかかるかもしねいしな」

期待半分といったところだ。ただ先程までは無ければ手詰まりになると思っていたが、今はもう一つ別の道が開けている。

「可能性はあるでしょうね。では、午後に館にお伺いして、ご報告いたしましよう」

「……スランザールに話を聞くのが早いかな」

「さて……話が伺えれば非常に有益でしょうが、口を開いたら開いたで、あの方の講義はきりがありませんからね。まあ、お戻りが明日にならないうようにお気をつけください」

ロットバルトの的を得た物言いに可笑しそうに笑い、深く頷いてから

レオアリスは手にした数枚の綴りを開いた。

そこに記されているのは、主に内務官房の人事関係者の名だ。既に引退した者や現在別の部署へ異動している者の名もあるが、基本的に軍部の人事に関わっていた者なのだ。

ここまで調べていてくれたのかと、驚きと、もう一つ別の想いが胸の内に湧き上がる。

「情報が無さ過ぎますね。表立って聞く事が出来ない分、拘束力が弱いのは仕方ありませんが……」

レオアリスはそれを閉じ、一度壁に掲げられた近衛師団の軍旗に瞳を向けていた。

誰かを頼るのなら、自分もそれに對して誠実であるべきだ。

「俺の持つてる情報が、少しならある」

レオアリスとしては、ずっと一人で持つていた事に後ろめたい気持ちがあつたが、ロットバルトは意外な顔もせず、蒼い瞳を促すように細めた。

半刻後、レオアリスは土官棟を出ると、今度は王城へと向かった。

ハヤテを厩舎に預け、正門を潜る。見上げれば、王城の尖塔は首が痛くなるほどに高く聳えている。

王がそこに座す事を考えると、こんな状況でさえ、確實に心が浮き立つののが判る。

『仇の』

浮かんで来ようとするざわめきを押さえ、唇を引き結ぶと、レオアリスは高い扉を通り抜けた。

正面の広く長い階段の横を抜け、長い廊下を何度も曲ると、王城の中庭に造られた回廊に出る。

その先に、王立文書宮があつた。

白い花崗岩を格子状に組み合わせた回廊の壁面からは、左右に美しく整えられた中庭が広がっているのが見える。紅葉した樹々と秋の草花、常緑の植え込みが均整を取つて配置されていた。

この辺りで行き交うのは、多くは文官達と王立学術院の学士や学生達だ。時折いかにも意外そうな視線が、士官服姿のレオアリスの上を過ぎていく。

回廊は途中で十字に交差して分かれている。レオアリスはそのまま正面の道を進み、行き止まりにある両開きの扉の前に立つた。扉には知の象徴を表わす意匠である、葉を茂らせた年経た樹木が一面に彫られていく。

外側に取つ手は無く、レオアリスは扉に両手を置いて、重く大きな扉を押し開けた。

軋んだ音を立てて開いた扉の奥には、天井の高く取られた広間が左右に広がり、天窓から差し込む幾筋もの光と舞い散る埃の中に、壁にずらりと並べられた書物を浮かび上がらせている。両奥の壁には、それぞれ次の間へ続く、上部を弓状に作られた通路が設けられていた。

ここ蔵書量は師団文書保管庫の比ではない。この国の開闢当初からの膨大な量の書物や記録が、文書宮の幾つあるのかすら分からぬ部屋の一つ一つに整然と収められている。そしてその長スランザールもまた、王城の諸官達の間では、開闢と同時にここにいるのだと冗談混じりに噂されていた。

それほど彼の知識は深い。うつかり何かを尋ねようものなら、朝に来たはずが気付けば深夜を迎えていたという事もしばしばあつた。

スランザールは王立文書宮長と王立學術院長を兼任するこの国随一の賢者であり、その知識故に古くから王の相談役を務めている。

レオアリスが扉の正面に置かれた机に近づくと、スランザールは分厚い書物に突っ込むようにしていた顔を上げ、首を突き出すようにして小さい目を更に眇めて、皺に埋もれた真っ白な眉を動かした。長く豊富な髭が口元を覆い隠しているため、その声はいつもくぐもって聞こえる。「ずいぶんと久しいの。お前のような小僧っ子はもっと進んで知識を身に付けねばならん。それを怠るとは何事か。たるんどう」

「いきなり説教かよ。忙しかったんだって」

「それがたるんどうの証拠じゃ。寝食を惜しんで勉学に勤しまんか」「相変わらず口うるせえなあ」

レオアリスは眉をしかめたが、本気で煩わしいと思つた事はなかつた。威厳と愛敬が同居しているせいか、相対するについ笑いが込み上げてくる。

こんな時に自分でも驚くほど気持ちが軽くなつていて、一步か半歩か、前進している気がしてゐる事もあるが、目の前の存在が持つ空氣のせいもあつただろう。

この老公はどこか、故郷の育て親に似て懐かしい。

「なあ、爺さん」

「スランザール様と呼ばんか、無礼もん。第一お前のような不勉強者の孫を持つた覚えはないわ」

スランザールはレオアリスよりふた回りも小さい姿で、胸を反り返らせた。だが幾重にも重ねた長衣から突き出た腕は枯れ木のように細く、皺と長く白い髭に覆われた顔は、あまり威厳があるとは言い難い。

「様つて玉かよ。それより聞きたい事があつて来たんだ」

自分で調べてから来んか。普通は下調べをした上で、尚且つ分からないところに關してのみ、目上の者に聞くものじや。丸投げで聞こうとする時点でなつとらんわ」

「調べたよ。全然出てこねえ。だから、ちよつと頼る事にした。だつたら爺さんに聞くのが一番だろ？ 何だつて知つてるじゃないか」

スランザールはその言葉を聞いた途端、にんまりと満足そうな表情を浮かべた。

「ふん。して、何が聞きたい」

ほつと息をつき、身体を乗り出す。

「バインド。俺と同じ剣士で——」

「ほああ！」

突然奇声を上げたスランザールに、レオアリスは思わず後退つた。ぽかんと口を開けたまま、まじまじとスランザールを見つめる。周囲で書物を閲覧していた幾人かも、何事かと驚いた視線を向けている。

「……な、何だ？」

「わしや忙しいんじや。もう行け、あつちへ行け。こんな所で油を売つとる暇があつたら仕事をせえ」

せかせかとそう言うと椅子から飛び降り、広げていた本を搔き集めるようにして小さい身体に抱え込み、さつさと机の奥の扉に消えようとする。

「ああ？ ……ちょっと……おい、待てって！ ——じじいっ！」

あつけにとられて見送りかけていたレオアリスは、慌てて机を飛び越え、スランザールの服の裾を掴んだ。

「こりや、離さんかい！ このスランザール様の服を掴むなんぞ、数百億年早いわ！」

「あんた生まれてねエだらうつ！ つて、そうじやなく！」

じたばたと細い手足を振り回して暴れる老人を、何とか机まで引き戻す。

「無礼もん！ か弱い老人を何だと思つとるんじやつ」

やつとの事で椅子に座らせると、スランザールは膨れつ面でレオアリスを睨み付けた。

「あのなあ……。信じらんねえな、もう」

思わずレオアリスは肺の空気を全て吐き出すような溜息を漏らした。

これがこの国の頂点に立つ大賢者の取る態度だらうか。

「……いいから、教えてくれよ。知つてんだろ」

「知らん」

スランザールはまるつきり駄々をこねる子供のように、レオアリスから顔を背ける。

(——俺、ここに何しに来たんだつけ)

夜明けを眺めた時の気分と今の状況では、数刻しか経つていないと思えない程だ。

机の上に両手をつき、そっぽを向くスランザールに頭を下げる。

「頼むよ。スランザール様」「知らんっ」

レオアリスは大きく息を吐き、身体を起こすと、スランザールの皺ぶいた顔を見下ろした。

「ふうん。あ、そ。知らねえんだ。情けねエなあ、知のスランザールともあろう者が、知らない事があるなんてな」

「何を言うか、このわしに知らぬ事などない！」

レオアリスの挑発に心底憤ったと言わんばかりに、スランザールの枯れ木のような手が古びた机をばんばんと叩く。レオアリスは、に、と笑みを刷いた。

「じや、教えてくれ」

スランザールは釣られたように口を開きかけたが——不意に厳しい表情を浮かべて再び閉ざしてしまった。

「爺さん」

促すようにレオアリスが呼んでも、じつと落ち窪んだ瞳を向けたまま、動こうとしない。

「……何だよ」

黙つたままの老人にレオアリスは眉根を歪めた。

また、同じ反応だ。誰もが同じように口を閉ざす。

「一体皆、何を隠してるんだ。バインドって名前に何がある？」

「知らなくて良い事もある。」

「知らなくていい？ 奴は剣士で、俺を知つていた。知らなくていい事なんて無い」

睨み付けるレオアリスの視線を、スランザールは無言で受け止める。レオアリスは纏い付く何かを振り払おうとするかのように、握り込んだ拳を鋭く振った。

「いい、自分で調べるさ」「記録など無いよ」

足音も荒く書庫へ向おうとしていたレオアリスは、その言葉に老公を振り返った。スランザールの真っ白い眉の下の小さな眼には、どこか思わしげな光がある。

「過去など、逐一掘り返さずとも良いものじや。掘り返したところで、後悔しか生まぬものもある」

「——そうやつて誰も彼も上つ面ばかり言うな。それで気にならない訳

がないだろう。」

「お前自身の為じや」

「——俺の為、か」

レオアリスは一度だけスランザールに視線を向け、踵を返した。
「だったら皆、やり方を間違えてんだ」

「何だ、暗い顔してるなあ」

鈴を振るような悪戯っぽい声がかかつて振り返れば、アスタロトが王城と文書宮を繋ぐ回廊を歩いて近づいてくるところだった。

相変わらず軍服は着ていらない。首に巻いて背中に流した纖細な織りの白い布。前の開いた同じ白い長衣の下に、丈の短い青の上下を合わせている。首や肩、腕に纏う銀の装飾品が歩くのに合わせて微かな音を立てた。

「尤も、連日あんな会議じや暗くなるのも無理ないか。私ももう疲れた」
レオアリスはそれに曖昧に頷いて、アスタロトが自分の前まで来るのを待つた。純白の花崗岩を細く纖細に組み合わせ光を取り込んだ回廊に、アスタロトの艶やかな髪の漆黒が鮮やかだ。

「気にするなよ、奴らだつて分かつてるんだ。お前の剣を止められるヤツが、軍にどれだけいる？」

そう言つてから、アスタロトはレオアリスの表情に眼を止め、首を傾げた。黒い艶やかな髪が肩にさらりと零れる。

「……それが気になつてるんじやないんだ？」

回廊の白い格子壁に寄りかかり、レオアリスはアスタロトを見た。

アスタロトの様子はバインドが現れる前も後も、あの軍議の中できえ、全く変わらない。

多分アスタロトも知らないのだろうと思ひながらも、レオアリスは問い掛けた。

「——お前、十七年前の事つてなんか知つてるか？」

レオアリスの問ひに、案の定アスタロトは長い睫毛に縁取られた瞳を丸くする。

「十七年前？ 知るわけ無いだろ。お前私をいくつだと思つてるんだ、お前と同じ年だぞ。他のヤツに聞けよ、ベールとか、ファーとかさ。二人とも無駄に長く生きてんだし、知つてんじやない？」

呆れたように細い肩を竦めると、剥き出しの肩にかかる細い鎖がしゃらりと音を立てた。

アスタロトの言うファーとは、同じく四大公の一人、西方公ルシファーの事だ。レオアリスもこれまで幾度か面識を得てはいたが、四大公などそう簡単に会える相手ではない。アスタロトが特別なのだ。

「大体、十七年前の何についてな訳？」

「よく分からないが、多分師団」

シスファンの事を問おうかとも思つたが、思い直した。それはロットバルトに任せてある。アスタロトも目に見える言動ほど実質は無軌道な訳ではないが、嘘の上手い方ではない。

もしシスファンの喚問がアスタロトの預かり知らない所で行われてゐるとすれば、正規軍に余計な亀裂を与へかねない。今は少しづつ動いた方がいいと、そう思った。

「はあ？ そんな事しかわからなくて聞いてんの？ おおざっぱなヤツだなあ」

「お前に言われたくねえな」

アスタロトは軽やかに、舞踊を踏むように回廊を抜け、大広間を過ぎ、警備の立つ扉を出る。扉を警護していた近衛兵が二人に向かつて敬礼する。

アスタロトが話しながら先に立つてどんどん歩いていくため、レオアリスは自然、アスタロトの後を追うような形で王城の正門に向かつた。
「それじや、師団のヤツに聞けばいいじやんか」

「……聞いた」

ちらりと紅い瞳だけを向ける。

「ふうん。……なあ、どつかいこう」

ふいにくるりと振り返ると、レオアリスの腕をわしつと掴み、ぐんぐんと引っ張つて歩き始める。

「ちよつと……待てよ、おいっ」

「いいところあるんだも。最近お気に入りで、しょっちゅう行つてんだけど、お前まだ行つた事ないだろ？」

「待てって。今はそんな時じやねエだろう。それに俺ちよつと用事が」空を見上げれば、太陽は真上近くに昇つている。午後にロットバートが戻れば、何がしかの答えが聞けるだろう。出来れば館に戻つていたかつた。しかしさタロトは腕を離す気配はない。

「堅いことばつか言つてるから、そうやつて暗い顔になつちやうんだ。大体こうして待つてて事態が変わるか？ 事態起こしてんのは私達じやない。もし何かあれば知らせが来るさ」

会話の途中も足を緩めず、アスタロトはずんずんと黒い玉石の敷かれた道を進んでいく。先日とは逆に、レオアリスは半ば引きずられるようにアスタークトの後を歩くはめになつた。

「上将？」

正門から王城内に向かう途中だらう、丁度通りかかったヴィルトールがその様子に驚いた顔を向けて足を止める。

「これは、公。ご無沙汰しております。で、上将、どちらへ？」

アスタークトに一礼し、ヴィルトールが首を傾げる。

「アスタークトに聞いてくれ……」

「よく言つた！」

諦め半分のレオアリスの言葉につこり微笑んで、アスタークトはヴィルトールに手を振つてみせた。

「ちよつと借りる。上層の『アル・レイズ』に行くから。知つてるだろ？」

「は？」

「近いし、後で返すから心配すんな。じゃあね～」

言うが早いか、レオアリスにもヴィルトールにも口を挟む暇を与えず、アスタークトはレオアリスの腕を掴んだまま、さつきと正門に向かつて歩き出した。ヴィルトールがあつけに取られている間に、正門の外に消える。

「……あの方に捕まつたら、暫らくは戻らないだろうな……」

ぼそりと呟いて、今の事を見なかつた事にすべきか否か、ヴィルトールは僅かに思い悩んだ。グラントスレイはまた溜息を吐くだろうが、「ま、公が相手じやお止め出来なかつたのも無理はない。正直に報告するか」

再び歩き出したヴィルトールは、目の前にある場内への巨大な扉に目をやり、自分の用件を思い出してグラントスレイの代わりのように溜息を吐いた。

「内務か。どうせなら私じやなく、ロットバートを召喚してくれればいいものを」

正門の脇で衛士と談笑していたアーシアが、アスタークトに気付いて顔を上げる。

「アスタークト様。ずいぶんとお早いお戻りですね」

それから背後のレオアリスに改めて気付くと、にこりと柔らかい微笑みを浮かべた。

「レオアリスさん。こんにちは」

「お前も元気そうだな、アーシア」

レオアリスが疲れた様子をしているのに気付いて、アーシアは心配そうに眉根を寄せた。

「随分お疲れのようですね。やはり今回の件に関して、お忙しいんです

か

「つていうより、お前の主人のお陰でなあ」

「はは。それは、もう……諦めていただくしか」

小首を傾げて爽やかな笑みを浮かべた少年を眺めて、レオアリスは改めてがつかりと肩を落とした。

「アーシア。『アル・レイズ』に行くぞ」

「ええ？ よろしいんですか？」

「いいも悪いも私が決めるの。こいつの話、聞いてやんないわけないしな」

アスターが細い顎を振り向け、改めてレオアリスは彼女をしげしげと眺めた。ただ気のままに動いている訳でもないと判つていながら、アスターには時折驚かされる。

自分を見つめるレオアリスに対し、アスターはいつも得意そうな笑みを見せた。

「さて、外門まで出るものもめんどくさいし、このまま行くか」「……このまま？ 僕、ハヤテが……」

レオアリスが今まで言い終わる前に、左腕にアーシアを抱え込み、右手でレオアリスの腕を捉えたまま。

アスターの姿はその場から消えた。

入り口で迎え出た家令は、廊下に立つ被きの奥の顔を確認すると、黙つて深く頭を下げた。先に立つて部屋の奥へと進み、一つの扉の前で足を止める。

家令が扉を押し開くと、薄い陽光の落ちた部屋の中で、女が一人振り返つた。癖の無い黒髪を耳の下辺りで切り揃え、きつく釣り上がつた切れ長の瞳は黒、女性特有の柔らかさは少ない。身に纏っているのは私服だが、傍らの卓上にはよく手入れを施された長剣が置かれていた。

来訪者が外套を脱ぎ一礼すると、現れた整つた顔を眺め、女は赤い口元に笑みを刷いた。

「久しいな、半年振り程か。と言つてもこれでまだ二度、いや、三度の面会でしかないが」

「先のミストラの一件ではご助力を戴きました。この度は急な申し出にも関わらず、面会をご了承戴きお礼を申し上げます」

それには鷹揚に頷き、正規軍東方第七軍大将レベツカ・シスファンはロットバルトに窓際の椅子を薦め、自分もその前に座つた。

薄い陽光以外に光源の無い部屋では、一人の姿もその間に置かれた円卓も墨絵のように映る。窓越しに覗く常緑樹の枝葉が、風にざわざわと身を揺すっていた。

家令が茶器を二人の前に置き部屋を辞すと、シスファンは椅子の背に深く預けていた身体を起こした。
「卿がわざわざ訪ねて来るとは思わなかつたな。使者を戴ければ館まで出向いたものを」

シスファンは円卓に両肘を付き、組んだ手の中から黒い瞳を閃かせるようにロットバルトの瞳を覗き込んだ。探る瞳の色にも、ロットバルトはただ笑みを返す。

「近衛師団参謀官としての用件ですので、こちらから伺うのが筋でしょう」

「ふん、そっちか。つまらん事だな。二人きりで密会など、王都の女どもに恨まれるとヒヤヒヤしていたんだが」

「貴女にご迷惑が掛からないよう、顔を見られない配慮はしております。そのご心配はご無用ですよ。ここに貴女がいらっしゃることも、他に知られる懸念はありません」

シスファンはじつとロツトバルトを見てから、気持ちの良い響きを立てて笑った。

ここはシスファンの官舎でも私邸でもない、王都の上層部にある宿の一室だ。閑静な街中に建つそこは、訪れるにも離れるにも、人の目に立たない造りになつていて。

それから今までの会話とは打つて変わつて、低く声を落とす。

「良く私が王都に来ていると判つたな。公式にはサラランバードを離れてはいなかつたがな」

サラランバードはシスファンの第七軍が駐屯する、東方最大の軍都だ。東の辺境、ミストラ山脈を擁するミステイリア地方一帯の治安を担つてゐる。ミストラ山脈での一件の折り、ロツトバルトはサラランバードを訪れ、シスファンと面識を得ていた。

「少し聞き及んだもので。……この度のご用件は査問、ですか。内務の」シスファンの瞳に浮かんだ光が鋭さを増す。

「——侯爵から聞いたのか」

ロツトバルトはただ笑つて、シスファンの想像するに任せた。軍が辺境からシスファンを召喚する場合、通常アスタロトの命で動くが、アスタロトは秘密裡を好むまい。この件に関しては尚更だ。

となればシスファンを喚問出来る権限を持つのは、他に内政官房しかあり得ない。そもそも上層部に限られる。

ヴエルナー侯爵がそうした情報を単なる血の繋がり程度で洩らすとは、ロツトバルト自身が最も考えていないところだが、それを敢えて否定してみせる必要はなかつた。手にしている札は多く見えるに越したことは無い。

「私も、全てを聞いている訳ではありません」

口を閉ざし、促すように自分に視線を向けたロツトバルトを眺め、シスファンは身体中の息を吐くようにして椅子の背凭れに身を投げた。ロツトバルトがここを訪れた理由は察しが付いている。面会を受け入れた以上問い合わせをはぐらかす気はシスファンにはないが、それにどこまでどう答えるべきか、そこを自問していた。

「それで？ 私が何を知つていて考えているんだ？」

ロツトバルトは目礼だけを返し、その蒼い瞳をシスファンの上に留める。

「内務での喚問案件は、先のミストラの一件でしょう」

シスファンは少し剣呑に片眉を上げたが、躊躇無く答えた。

「そうだな。」

「近衛師団第一大隊大将に關わる件ですね」

「……どこまで知つているのか……。私に聞く必要があるのかな」

「推測に過ぎませんよ。ただ」

ロツトバルトはシスファンの反応を子細洩らさぬような色を蒼い瞳に宿す。一見穏やかな瞳の中にある冷えた光に、シスファンは苦い笑みを微かに浮かべた。

シスファンは持つて回つた言い方は好みない。目の前の男に全く取り繕う素振りが無いのは、自分に対しても单刀直入が一番有効だと見抜かれているからだろう。

「ご存知の通り、現在王城は侵入者の件で少々騒めています。侵入者は剣士ですが、ただ剣士というだけには、周囲の口が重すぎる。なにがしかの裏があると言つてているようなものだ。そこへ、貴女が非公式に王

都に帰還されたとあれば、私としては結び付けて考えざるを得ない」

「シスファンは黒い瞳を細めた。

「結び付ける。何に」

「室内的空気が張り詰めるのが判る。窓の外では相変わらず、樹々の穏やかな葉擦れの音が続いていた。

「バインドと軍との関わりを、です」

事も無く告げられた声に、シスファンは一呼吸置いてから、長椅子の上の脚を組み直した。

「――」

「査問の内容については詳しく伺う事はしません。大方の設問は予想が着きますし、私の管轄ではありません」

ミストラに残した情報も多くはない。そこから得られる情報だけなら対処は可能な範囲だ。

「では何を聞きたい」

「バインドはあの日、我が大将に幾つかの言葉を残しています。その全てが真実かは判りませんが、十七年前という鍵がそこにある」「聞いていいな。検査上の重要な要素となるものを秘匿しているとは、軍法会議ものだぞ」

シスファンの咎める響きにも、ロットバルトはただ笑った。

「第一回目の軍議でバインドに関する言及を断たれているのですから、単に機会を逸しただけですよ」「……その程度で済むと……」

「済ませましよう」

事もなく言い切つたその顔を呆れた瞳で眺め、シスファンは続けさせるために片手を振った。

「貴女は第七軍の大将として、既に十七年前にはサランバードにおられた。ご存知でしょう」

「女の歳を測るうとは、意外に女の扱いを知らないのではないか?」

「興味があれば伺いもしますよ」

小手先程度の会話は思案の間が欲しいからだが、苦もなくやんわりと

返され、苦虫を噛み潰したように眉をしかめる。

「教えて戴けますか。十七年前に、何があつたのか」

「知らないと言つたら?」

ロットバルトは一度反らした瞳を、静かにシスファンに注ぐ。浮かんだ光に、逆に厳しい札を引かせてしまった事に気付き、シスファンは内心で額を打つた。

ロットバルトがシスファンの内心を見透かすように、口元に薄い笑みを刷く。

「貴女は以前、我が大将を前にして、こう仰つた。――剣士と対峙するのはいつ以来か、と」

シスファンは益々眉をしかめ、今度は実際に額を右手につくと視線を窓の外に逃がした。

「全く、迂闊な事を口にするものではないな」

「非常に有益な示唆でしたよ。だが、調べても貴女が剣士と対峙した公式な記録は出ません。いつ、どこでか。……何という名の剣士か……」

「――」

シスファンは身体をずらして深く腰掛け、上体を僅かに乗り出して正面からロットバルトの瞳を見つめた。

「聞いたところでどうする」

「現時点では必要なのは情報です。情報が無ければ対応のしようもない」

「例え事実が彼に不利なものであつても?」

「この状況下で、優位なものが出てくるとは思つておりませんよ」

「――」

束の間の沈黙に重なるように、樹木の騒めきが届く。よく耳を傾ければ、丁寧に整えられた小ぶりの庭園に遊ぶ小鳥達の囀りも聞える。シス

ファンの瞳が轉りの主を探すように、窓から見える梢の揺らめきを追つた。こんな穏やかな情景の中では、十七年前の出来事はまるで遠い夢の中の事のように感じられた。

ただしそれは、悪夢だが。
脳裏にあの男、バインドの冥い笑みが過る。いつだつたかバインドと対面した時、あの男が纏う闇にぞつとした。全ての事が終わつて思い返せば、あれは狂氣だつたのだろう。（いや……終わつたと思つていただけか）

追憶を振り払うように、シスファンは一度息を吐いた。

「——十七年前まで、バインドは確かに、我々に関わりがあつた。軍として、日常的にな」「どのような関わりです」

「それ以上語る口を持たん。記録も出まい。……そういう事だ」
そう言つて口を閉ざしたシスファンの上には、語る意思の無いことが明確に読み取れる。だがそれは言葉よりも雄弁に、ロツトバルトにある事を伝えている。

「——成程」

シスファンの対応は、この状況に於いて非常に好意的と言えた。全く対応もせず、一言知らないと言つて通せば、ロツトバルトにはそれ以上の追及は職位上できないからだ。

ロツトバルトの問いかけを完全に否定しない上で言及を避けるのであれば、そこに明白な理由があるのであるのだろう。シスファンが口にする事を避けなければならない理由が。（ここまでか）

得られた情報は乏しいが、示唆された背景は大きい。
退意を告げようとした時、視線を窓の外に投げていたシスファンの、

独り言のよう呟いた言葉が耳を打つた。

「……十七年を経て、バインドは過去の亡靈ではなくなつた。もはや時間の問題だらうな」

それ以上は何も言わず、手の付けられる事無く冷え切つた茶器の上に視線を落としている。

「——有難うございました。お手を煩わせて恐縮です」

ロツトバルトは丁重に頭を下げ、それから立ち上がつた。

「いいや。まあ有益な時間の使い方ではあるさ。卿との面会は面白いし、何より眼福だ」

翳りの無い口調でそう言うと、ロツトバルトの後を追つてシスファンも席を立つ。

ロツトバルトは今までと変わつて、魅惑的な笑みをシスファンへ向けた。

「今度は、また別の折にお時間を戴きたいものですね」

どこまで本気なものかと内心苦笑を覚えながらも、シスファン目の前の整つた顔を見返した。
(迂闊に乗つたら痛い目を見そうだ)

「その時には仕事の話は無しにしてもらいたいものだ。卿とは厄介な件でしか会つて無いからな」

「そうさせて戴きましよう」

シスファン喉の奥で笑うと、扉の外に声を掛け、家令を呼んだ。すぐ

に応える声が返り、足音が近づく。

「最後にあと一つ、お聞かせ願いたい」

ロツトバルトは振り返り、すぐ隣に立つシスファンと向かい合つた。
誰もがこの件に関して示す反応がある。少しづつ異なりはしたが、その根底には同種の感情が流れているように思える。
「剣士という種……いえ、存在にと言うべきかも知れませんが……あなた方が抱いている感情は、一体何です」

シスファンは東の間ロットバルトの瞳を見返してから、自嘲を含んだ

九

笑みを浮かべた。

「——恐怖さ」

士官棟への通りを歩くロットバルトの姿を認め、クライフは走り寄つてその肩を叩いた。

「ロットバルト！ どこ行つてたんだよお前。探してたんだぜ。ヴィルトールも気付いたらいねえしさ」

「少し私用で」

ロットバルトが歩いてきたのは城下に出る外門のある方向だ。その方向とロットバルトの顔を見比べ、クライフはにやりと笑つた。

「私用？ まさか女に会いに行つてたとか言うんじやあねえだろうな」「当らずとも遠からず、ですね。いい勘だ」

「マジで！ お前なあ、勤務中だぞ」

ロットバルトの口振りはまるで作戦行動を読み上げるようで、冗談なのか本気なのか、今一つ判別が付かない。大して答える気が無いのか、ロットバルトはクライフを眺め、その件を打ち切つた。

「何の用です？ 貴方がわざわざ私を探すとは珍しい」

「そんな事ねえだろ。いつも仲いいじやん俺等」

冷めた視線を向けるロットバルトに構わず、肩にがつと腕を回し、クライフはそのまま声を落とした。

「お前どう思う？ 今回の件」

「……どう、とは？」

ロットバルトは特に表情も変えず問い合わせたが、クライフの問い合わせの根にあるのは、昨日のロットバルトとグランスレイとのやり取りだ。「だからさ、剣士だよ。何か全体がはつきりしねえ。奥歯に物の挟まつた感じだろ？」

「抽象的ですね」

「だから聞いてんじやねえか」

クライフは周囲をさり気なく見回してから通りを歩き出した。陽は中

天を過ぎているが、今の季節はどことなく空気が肌寒い。通りの街路樹はすっかり茶や黄に染まり乾いて、後は散るのを待つだけだ。

兵舎の並ぶ通りを抜けて士官棟へと歩く間、隊士達が二人が通り過ぎるに従つて立ち止まり、敬礼を捧げる。クライフは手を上げて答えながら、改めて隣に視線を向けた。

「お前は何か知つてんじやねえかと思つてさ。副将に何か言つてたよなあ」

「おや、よく覚えてますね」

「おい……」

眉をしかめるクライフを一度確かめるように眺め、ロットバルトは視線を前方へ戻した。

「残念ながら私も、大した情報は持つていませんよ」

「ホントかよ」

疑うというよりは、意外そうな響きだ。ロットバルトとしてはぐらかすつもりではなかつたが、確実な情報は持つていないのは事実でもある。レオアリスに示したように、表立つて探る事は出来ない状況下では、得られた情報は無かつた。

シスファンとの面会も結局は、ロットバルトの推測をある程度補つただけに過ぎない。

やはり一番明確な情報を得られるのは、グランスレイが口を開く以外にないのだろう。

「……確かに、副将は我々に隠している事があるのでしきうね。我々とと言うよりは上将に。もちろん、全ての情報を開示する事が物事を優位に働くかせるとは限らない。出すにしても時期はある」

真実を知る者達が隠しているのはレオアリスとバインドとの関わり、そしてバインドそのものについてだ。

あれほどの力を持つ剣士が、何故記録として留められていないのか。全く情報を持たない存在など無い。意図的に殺されない限り。

情報を殺せるのは誰だ？

グラансレイに、シスファンに口を閉ざさせる存在は。

そして、今までして殺したい情報、その事実が何なのか。

バインドは現在、軍の、王国の敵だが、十七年前は。

(違うはずだ。少なくとも単純にそこに分類できるものではないだろう)

隠し事をする場合は、身内に都合の悪い事の方が圧倒的だ。

『恐怖さ』

自嘲するような響きだつた。

(やはり、バインドはかつて軍に所属していたと考えるべきだろうな)

その上で、レオアリスとの関わりがどう生じてくるのか、一番の問題はそこだ。

バインドがレオアリスと同じように、「暴走」を起した事があるのか。

(そっとすると、少し不味い)

内務がシスファンに証言を求めたのがミストラでの状況だとすれば、隕げに事の外郭が見えてくる気がする。蓋をされた過去と、剣士に対する反応、レオアリスに対する殊更の批判。

レオアリスを補佐すべき立場にあるグラансレイの沈黙。知らせないようにしているのは、何の為か。

数少ない断片を繋ぎ合わせて無理やり形作るとすれば。

ロットバルトは自分が取る道を、そこから想定してみる。

隠すのは、レオアリスがバインドと直接の繋がりがある場合。もしくは。

(同じ事を引き起こす可能性がある場合だ)

「おーい。一人で考えるなよ！ 暗えなあ！」

黙り込んだロットバルトの肩を思い切り小突いて、クライフはその顔を覗き込んだが、思考を中断されて冷え切つた視線に迎えられ、そのまま肩を縮めた。

「すんません……」

「……私の意見は取り敢えず置いておきましょう。貴方は今回の事をどう捉えているんです？」

「——外門を破つとして、何をするでもねえ。割に合わねえ行為だよな」

「成程、破城は貴方の専門分野でしたね」

「そう、だから奴の目的は元々狭エんだ」

立ち止まり、戦場にある時のような厳しい眼をロットバルトに向ける。

声は囁くように低い。

「目的は上将だろうな」

「——その発言は、上将の立場を悪くしかねない」

返す声は更に低く、向けられた氷のような視線にも、クラライフは動じる事無く、にやりと笑った。

「俺はもしそうだつて、変わんねえ」

ロットバルトはその眼を見据えていたが、ややあつて口元を歪めた。

瞳に刷いた凍る色が薄れる。

「——そこに答えがありそうですね」

レオアリスの立場に。

グラансレイの態度、隠された情報は、ロットバルト達が想定している以上に、レオアリスを中心にある可能性が高い。

「けど、皆の崩しどころが見えねえんだよなあ」

クラライフらしい表現にロットバルトも頷く。

「ただ崩れないだけならましですが、思わぬ所から決壊するのが恐い」

想定外の所から崩れた場合、事態は必要以上に悪くなりかねない。た

だでさえレオアリスは批判の多い不安定な位置にある。それは避けるべきだ。

(それも、少しくらい手を打つか)

「いい加減今度、副将にはつきり聞いてみようぜ。ごちやごちやすんのはめんどくせえ」

「直球ですねえ」

その言い草にロットバルトは苦笑を浮かべたが、実際この問題は外堀を埋めようとしても埋まり切らないかも知れなかつた。いつそ危険を無視してでも、直接門に手を掛けた方がいい結果を生むかもしれない。

「今日にでも俺から聞いてみる。あの人だつて何か理由があつて黙つてんだろ。だからって一人で考える事でもねえけどな」

「不本意ですが、同意しますよ」

「何で一言多いの？ ……と、ヴィルトールじやん」

近衛師団士官棟の入口に着いたところで、通りの左手からヴィルトルが歩いてくるのが見えた。足を止めた二人の前まで来ると、ヴィルトルは軽く右手を上げた。

「珍しく真剣な顔してるけど、女の子に振られたかい？」

誰が、とは言つていないものの、自分に真っ直ぐ向けられた顔にクライフは顔をしかめた。

「それは俺に言つてんのか？」

「私の訳がないでしよう」

「何で言い切る……」

繊細な色硝子が嵌め込まれた扉を潜り、冷えた広間を通して明るい陽射しの満ちた回廊に抜ける。四角く中庭を囲んだ回廊の正面が、彼等の執務室になる。少し前に中将以上の執務室を一部屋にまとめたところ、業務の効率が良くなつた。

右手に見える中央の噴水が鳴らす涼やかな流水音が、静かな回廊内に彩りを添えている。

「そういうや、お前はどう行つてたんだ？ 途中から顔が見えなくなつたけどよ」

「うーん。まあ面倒くさい用事つて言うかねえ」

「めんどくさい用？ 奥さんのお使いか？」

「何でそれが面倒なんだ？ 人参一本買うのも、どんな手料理になるのかと考えたら楽しいじゃないか」

「ああ、そう……」

閉口したようにクライフが顔を逸らすのを眺め、それからロットバルトの蒼い瞳に向かつて、ヴィルトールは穏やかな笑みを見せた。

「そういう楽しい事じやあなくて、面倒で時間の無駄なだけの事だよ」「訳わからねえな」

クライフは眉をしかめただけだが、ロットバルトは心の裡で苦い息を吐いた。

(それも当然か)

シスファンが辺境から呼ばれた以上、あの時ミストラにあつた第一大隊の者が召喚を受けない訳が無い。

ヴィルトールの口調も表情も穏やかそのものだ。明言しないながらも口に出して見せるという事は、おそらく問題はないのだろうが、状況を問うべきかどうか、ロットバルトは思考を巡らすように瞳を細めた。

「そうだ、ロットバルト。内務でヴエルナー侯爵から言付かったんだ」

「――何の用です？」

注意深く見なければそれとは気付かないが、眉根に苛立ちを覗かせたロットバルトの顔を眺め、ヴィルトールは内心苦笑を浮かべた。ロットバルトが僅かなりともこうした表情を見せるのは、この名を聞いた時くらいだ。

「私などに用件の内容までは仰らないよ。けれど、午後にでも一度屋敷に戻るようとの仰せだ」

ロットバルトは一度ヴィルトールに眼を向け、すぐに浮かべた表情を搔き消すと、口元に笑みを刷いた。

「判りました。後程時間を見て出向きます」

「そうだね。ああ、それから上将は公に引つ張られて『アル・レイズ』

に行かれたよ。戻りは遅いんじゃないかな」

「アル・レイズ？」

クライフが聞き馴れない響きに眉を上げる。

「どこの街だ？」

ヴィルトールは大げさに溜息をついた。

「お前はだから振られるんだよ」

「だから俺がいつ振られたってんだ？」

「最近城下の一層に出来た料理店ですよ。まあ、連れて行けば女性は喜ぶでしょうね」

「そういう心遣いがないから振られるんだ」

「いい加減にしろよ……」

クライフはそう言いながらも、今度使おうと口の中でそれを復唱している。

丁度その時、執務室の扉が開いた。顔を覗かせたフレイザーが取つ手に手を掛けたまま、扉の前で立ち話をしている男達を不審そうに見回す。「貴方達、何をやつてるの？ 窓から姿が見えたのに入つて来ないと思つたら、こんなところで井戸端会議？」

クライフは一度視線を天井に向けてから、フレイザーに向き直つた。軽く咳払いして、口を開く。

「フレイザー。今夜アル・レイズに行かねえ？」

フレイザーは束の間クライフを眺め、柔らかく微笑んだ。

「また今度ね」

そのまま扉が閉ざされる。クライフは暫く黙つた後、両脇を睨んだ。「……使えねえじやねーか」

「阿呆か」

「直球過ぎるんですよ。誘うにのも時と場所というものがあるでしょう。第三者が居るところでなどと、第一に誠実さが感じられない」

「はあ。もう使えない情報は忘れるべきだよ」

クラライフは二人を睨んだものの、文句を言う代わりに力なく肩を落と

した。

「フレイザーって、好きなヤツいんのかなあ」

どちらかといえば自問自答の溜息に近かつたが、ロットバルトとヴィルトールは頑垂れたクラライフの頭ごしに顔を見合わせた。

ロットバルトが珍しく、優しいとさえ言える笑みを向ける。

「……仕方ありませんね。私でよければ相談に乗りますよ」

「何だ、その哀れみの籠つた眼は」

「ただ、私はこれまで一度も女性に振られた事はないので、どこまで参考になるか判りませんが」

ヴィルトールもまた、クラライフの肩に手を置いて頷いた。

「そうだな。クラライフの為だ。及ばないだろうけど力になるよ。飲み明かすなら付き合うからね」

「——てめエら、喧嘩売つてンなら……」

ふと口をつぐみ、回廊の入り口を振り返る。

慌ただしい足音が硬い大理石の廊下に響き、すぐに一人の兵が回廊に姿を見せた。近衛師団兵ではなく、正規軍の下士官服を纏っている事に、三人は顔を見合わせた。正規との連絡調整を行う事務官が遅れて駆けてくる。

正規兵と事務官は執務室の前に立つ三人の中将を見て、緊張した面持ちに安堵の色を浮かべ、走り寄った。

十

城下の街は常に賑やかな喧騒に満ちている。王都の住人達と各地から訪れた旅人や商人など、様々な者達が肩を擦り合わすように大通りを行き交っていた。

王都で一旗上げようとやつてくる者達は後を絶たない。清濁併せ持つこの街で成功し、財を成した者は少なからずいたが、その成功の陰で陽の目を見ない者達も数え切れない程いる。

ここ上層区域であれば財産を失つても故郷に帰る程度で済み、まだ軽い失敗の内だ。自己認識や安全管理を怠つてはいけないと、その後の教訓にすればいい。しかし周縁部の下層地区では、金銭どころか生命を失う例も少なくはなかった。

アル・ディ・シウム、『美しき花弁』と呼ばれるこの都は、広げた花びらの一枚一枚に複雑な色合いの影を宿している。

レオアリスは様々な店が並ぶ賑やかな通りを歩きながら、自分がこの街を初めて歩いた事を思い出していた。

あの時の自分にとつては王都は途方もなく巨大で、曖昧な意志や期待など、容易く打ちひしぐ容赦のない場所に思えた。

そもそも剣士など、自分でやら話程度にしか知らないものが自分なのだと知つて、戸惑いばかりが強かつた事もある。

王の御前試合を勝ち抜く事で僅かな自信を得、近衛師団に配属された事はただ嬉しかった。最初から全て順調に行つていた訳ではなかつたが、気が付けば大将などという場所に居る。

(大将か)

いつの間に、こんな所まで来たのだろう。

王城内ではそれに囚われる事無く在る事は不可能だが、ただこうして街を歩くと、身を覆つていたものは一歩ごとに剥がれ落ち、何も持たないあの頃の自分に戻る気がする。

しかしいつもは開放感を感じるそれも、今はどこか心細ささえ覚えた。

喧騒に紛れていた思いが再び心に浮き上がってきた時、前を歩いてい

たアスターントが足を止め、思考は中断された。ふと気が付けば、見た事もない程の美しい少女を追つて、辺り一帯の視線も止まっている。

(目立つヤツ……)

普段顔を見ていて、しかもアスターントの言動を知つてゐる為に意識する事は少ないが、アスターントは非常に美しい顔立ちをしている。レオアリスの故郷の辺境部でさえ、アスターントの噂は聞き及んでいた程だ。

曰く、傾国の美女と……。

(先代だ、絶対……。)

美女と言うにはまだ年が足りない。加えてアスターントの実態を知つたら、彼等の内少なくとも二割は視線を戻すに違いない。

「ぼーっとするなよ。可愛い女でもいたか？」

アスターントは店の扉を押し開けようとしていた手を止め、レオアリスを振り返った。

「いないよなー、私以上のヤツは」

そう言つて非常に得意そうに顎をつんと上げてみせる。

それにはそれなりに同意も覚える。それ相応の年齢になれば、傾国も大袈裟な言い方ではなくなるだろう。……見た目は。

「それよりほら、結構最近お気に入りな店なんだー。何て言つてもご飯が美味しい」

「……飯？」

何の話かと改めて目の前の建物を眺めれば、通りに面した白い壁に広い硝子窓がいくつも張られた、瀟洒な雰囲気を持つた店だ。『アル・レイズ』という名前が、緑銅で縁取られた白い雪花石膏の板に刻まれ、扉の上に掲げられている。

通りの右奥は行き止まりで、その先は高台になつてゐるのか、低く作られた煉瓦塀の向うに、薄く柔らかい色をした雲と青い空が半分覗いて

いた。

「眺めもいいんだぞ」

そう言つてアスターントは扉を押し開けた。確かに、眺めは良さそうだ。

広く間取りの取られた店内は右奥の壁一面が硝子張りになつていて、高台からの景色が見渡せる。外には露台が張られ、そこにも三つほど席があつた。昼食時にはまだ少し早いが、店内には既に何組もの客がいて結構込み合つてゐる。

店内に入ると入り口の傍にいた店員が歯切れの良い声をあげた。卓に着いて思い思いで食事をしてゐた客達が、釣られるようにアスターントの上に視線を向け、驚いたように眼を丸くする。

「まあ、アスターント様だわ」

「この店によく見えるとは聞いてたけど……」

アスターントの名前に店内にざわめきが広がる。この国の最高位の貴族である四大公の一人が、一般の民が通う店に来るということ自体、他の四大公では考えられもしない事だ。気さくなアスターントは、城下でも非常に人気が高い。

「あの隣の子は？」

「子つて、あれ、あの服近衛師団だぜ。しかも士官だ」

「士官？ あの歳で？」

彼等の興味は自然、横にいるレオアリスにも注がれたが、近衛師団大将とはいえ一般にはほとんど顔は知られていない。

剣士、或いはその名を聞けば誰しもが膝を打つだろうが、注がれる視線の中にそれと氣付いた者はいないようだつた。

「軍と言えば、エザムが襲撃されたという話だ」

微かな声だったが、レオアリスは素早く視線を投げた。中程の卓に座つてゐる壯年の男だ。妻らしき女性が眉を寄せた。

「怖いわ……貴方、気を付けていただきかなくては……」

「私の販路は西方だから、それほど心配はない。だが、エザムの近辺は

「今通行が出来ないらしい」

「そんなに酷い状態なんですか、お父さん」

「男と同席の青年が身を乗り出す。」

「北方軍が封鎖しているから、状況は良く判つていないうだ。ただ、北の商人達は迂回させられて、日数も経費も余計にかかつてしまふとぼやいてるよ」

「でも、アスター様がこちらにいらっしゃるって事は、それ程問題はないって事なんじやないですか？」

「そうかもしれない。だが王城でも先日、北の外門で侵入者騒ぎがあつただろう。治安が悪化しているとまでは行かないのかかもしれないが、情報がもつと欲しいところだ」

アスターは空いていた露台の席を注文すると、レオアリスの了解を得ず案内の後を付いてすたと歩いていく。先ほどの男達の卓の傍を通りかかると、彼らは慌て口を閉ざした。

（城下は、まだこの程度の情報か……）

今回の件に関しても、城下の情報規制をしているとは聞いていたが、思つた以上に閉ざされているようだ。レオアリスはさりげなく店内を見渡した。ほとんどの客の視線はアスターの姿を追つている。

アーシアに促されてレオアリスも露台に置かれた席まで行くと、既に席に着いているアスターの前に座つた。

アスターは早速、店員に何やら注文を始めている。手元の品書きを何も見ていないくせに次から次へと出てくる単語にただ感心して、レオアリスはやる事もなく頬杖を付いた。

露台の席と店内を仕切る硝子戸に目を向けると、注がれていた視線が一齊に散る。

「――」

多くはアスターを見ていたが、興味の対象はそれだけではないのだ

ろう。やはり彼等も、今王城内とエザムで起こっている事が気になつて

いるのだ。

乳白色の優美な欄干の向こうに目を向ければ、高台に張り出すようなそこから城下の街が望める。すぐ下に見えてるのは商人や職人達の多く住む地区だ。通りに沿つて店の日除け布が色とりどりに広がつていて、普段と何も変わらない、王都の町並み。今回は厳しく情報規制が敷かれているが、伝わつたとしても、生活に影響がなければ噂話程度に囁かれるくらいで、日々の暮らしは変わること無く流れしていく。

この場所から北の方角は望めない。

街道上のエザム、そして、北の果てにある故郷。

（十七年前か）

重い息を吐いて正面に顔を戻し、――思わずがたりと椅子を引いた。

「なつ……」

息を呑む光景というのは、実際こういう事をいうのではないか。

黒檀を円に削り上げた上品な卓の、艶やかな表面はすっかり覆われて、見えない。

卓を覆い隠しているのは、様々な料理の盛られた幾つもの皿だ。冷菜、温菜、汁物、炒め物に揚げ物、焼き物、肉料理や魚料理。全部で十人前くらいは軽くありそうだ。

「……何だ、これ……」

呆然と呟いたレオアリスを余所に、アスターは嬉しそうに瞳を輝かせた。

「食うか？　お前の分も頼むぞ」

レオアリスは思わずもう一度卓の上を見渡した。

「……え、これ俺の分ねエの？」

弾かれるように顔を上げてアスターを眺めたが、はつと気が付いて慌てて首を振る。

「つて、そうじやねえだろ！」

机を叩きたくても叩く余地がない。レオアリスは仕方なくアスター

を睨むだけに止めた。アスターントが愛らしく首を傾げる。

「何って、ごはんデショ」

向けられた甘やかな笑みに、つい緩みそうになる口元を無理矢理引き結ぶ。

「——そ、うじやなくてよお……」

レオアリスは肺の空気を全て吐き出す程の溜息をついた。

店内の客達は、今度は別の意味で硝子戸の奥の卓に視線を集中させている。だがそれも、たった三人でこれだけの量を注文すれば当然だろう。アーシアは食事を摂らないしレオアリスの分は含まれていないと、のだから、正確にはアスターント一人で食べるのだが、多分、不本意にも、他の客達はレオアリスがこの大半を食べると思つていに違いない。

〔相談料〕

アスターントがにこり、と笑う。頬を赤くして熱心に見つめてくる窓越しの客に、ひらひらと手を振つてみせた。

〔はあ？〕

「だからあー、話を聞いてやるから奢れつてコト」

〔……何かずいぶん高くねえか？〕

〔安い方だ〕

はあ、と再び溜息をついて背凭れに寄り掛かり、レオアリスは諦めた顔になつて、嬉々として食べ始めたアスターントを眺めた。

「ああ、アスターント様、こぼさないで。それから一皿だけ召し上がるのではなくて、色んなお皿をそれぞれまんべんなく召し上がるのが礼儀ですよ」

〔はあい〕

三度溜息が洩れそうになる口元を咄嗟に押さえた。こうなつたらもう溜息をつくのもつたいない。口元に片手を当てたまま、目の前にあつた料理が次々とアスターントの口に消えていくのを、レオアリスは今更ながらに感心して眺めた。

元来アスターントは良く食べる。しかし、あの胃は絶対どこか、異次元に繋がっているに違いない。噛み碎かれたものが降ってきたらもの凄く迷惑だよなあ……、と、レオアリスは非常にどうでもいい事を想像した。

「んで？ 十七年前つて何？」

「え……？ ——あ、ああ」

ふいに問われて、レオアリスは一、三度瞬きをし、椅子に預けていた身体を起こした。思わず本来の目的を忘れていた。

その原因を作つたのが自分であるにも関わらず、アスターントは呆れたようすに美しい頬を持ち上げると、既に半分以上片付けた料理の皿を脇に寄せ、一先ずアーシアが淹れたお茶に手を伸ばした。

〔今、件に関係あるのか？〕

ざわざわと店内に満ちる賑やかな空気は、まるで今の状況にはそぐわない。だが、逆にこの方がいいのかも知れなかつた。少しぐらい現実と離れた場所から、第三者的な視点を持つて眺める事も必要だろう。アスターントがそこまで考えてこの場所を選んだのは分からぬ。

〔意外性あるからな、こいつ〕

しかし、では何を、と問われると、何が一番の問題なのか、曖昧なままに氣付く。躊躇うように卓の上に視線を落としたレオアリスに、アスターントは首を傾げた。

〔何を調べてて、どの部分で答えが出でないわけ？〕

〔……答え、か……。多分、答えは全く出でないんだ〕

改めて考えてみれば、バインドが現れてから既に五日近くが経過しようとしているのに、レオアリスの手元にある情報はそれから殆ど変わつてないままだ。逆に、搜せば搜すほど、周囲の扉が閉ざされていくような感覚がある。

「——判つてるのは十七年前に鍵があるって事と、バインドの名前だけだ。だから、そこから調べようとした」

〔師団に関係あるのか？〕

「判らない。おそらく、だ」

深紅の瞳をじっとレオアリスに注いで、アスタロトは暫らく両手の指を頸の下で組んだまま黙っていたが、一度ゆつくりと瞼を閉じた。

開かれた深紅の瞳に、心の中を見通すような光が浮かぶ。

「なあ。まだ私は、何でお前がそんなこと調べてるのか、聞いてない」レオアリスは再び躊躇うようにアスタロトの顔を見つめた。

『お前の一族はどうなった』

あれ以来、常に頭の中に留まり続けて離れない、その言葉。

それが何を指しているのか判らない事が、一番の問題だ。

『仇の元に仕えるか』

嘲笑う響き。

レオアリスは静かに息を吸い込み、それから肺から押し出される空気の勢いを借りるように、言葉を吐き出した。

「……奴が王城に侵入した晩に、俺に告げた事だ」

アスタロトが細い弓なりの眉を寄せる。

「俺の、生まれた頃と、一族について、調べろと」

「一族？　お前の一族を？」

意外そうに声を上げたアスタロトに頷く。

レオアリス自身、自分の一族について、これまであまり多くを考えた事は無い。失われたのか、——もしかしたらどこかにいるのか。

故郷の森にある、あの廃墟。そこがそうだという確証など無い。そこではないかと思いながら、否定する気持ちはずつとどこかにあった。

それは淡い希望だ。だからこそ、敢えて考えようとしなかつたのかもしない。

黙り込んだレオアリスを見て、アスタロトは首を傾げた。

「自分で調べてたんだろ。さつきもさ。何かあったのか」

「無い。不自然なくらい、何も——」

中途半端に、レオアリスは口を閉ざした。

(不自然だ)

今まで漠然と、記録が無いのなら、そういうものなのかと半ば納得しようとしながら、ずっと胸の辺りに引っ掛けっていたのはそれだ。

スランザールの言つたとおり、王立文書宮にも、当時を記した文書は無かつた。バインドの名すら出てこない。名が違っているのかと剣士で

引けば、多くは三百年前まで遡つてしまう。

レオアリスは右手を二、三度握り込み、開いた掌に視線を落とした。

バインドの存在は確かだ。

剣を打ち込んだ感触は、今でも明確に思い出せる。

スランザールは確実に何かを知っている。総将アヴァアロン、正規軍の何人かの将校、そしておそらく、グラансレイも。

存在は事実、何かしら、それが何か判らないものの、知つていながら隠している者があるのも事実なら、文書に残つていなかからと言つて初めから無かつたと考えるのは、その方が無理がある。

(——何だ……)

何を隠している？　隠すのは何故だ？

自分とバインドとの間に、一体何があるのか。

それが何であれ――

誰もが口を閉ざす事によつて、言外に告げているのではないか。

あの男の言葉が、正しいと。

そして。

『仇』

心臓が早鐘を打つ。

焦燥がじりじりと胃の中で焦げる。

ロットバルトはシスファンから何か情報を得られただろうか。

シスファンはバインドを知つてゐるのか。

「——バインドか」

考え込むようなアスタロトの呟きに、レオアリスは顔を跳ね上げた。

「何か知ってるのか!?」

レオアリスの勢いに驚いて、アスタロトは少し瞳を見開いた。柔らかな類の線が引き締まる。

「いいや。けど調べよう。先日のタウゼン達は確かに変だつたしな」

アスタロトはたおやかな手に細い額を乗せたまま、思い起すように天井を見上げた。

そう、確かに初めてバインドの名が出た時、議場内に一瞬戦慄にも似た空気が走った。それは何かに抑えられたかのようにすぐ消えたが、表情に微妙な変化を残した者、全く反応を示さなかつた者、二通りだ。「判つたら、教えてやる。……ま、あまり考え込むなよ。バインドとやらを倒す事が先決だろ。それより、お前——バインドが言つた事は、他にはもうないな?」

アスタロトの深紅の瞳がじっとレオアリスに注がれ、レオアリスはそれを受け止めるべきか逸らすべきか、迷うように見返した。

「……いや」

歯切れの悪いレオアリスの瞳を、アスタロトがじっと覗き込む。

「本当か?」

「……お前には言うよ。判つたら」

「……ふんだ。それならいいけど、ちゃんと話してよね」

頷いた時店の扉が開き、東の間、通りの喧騒が店内の空気と混ざり合つた。扉の傍から店内に騒めきが広がる。

入ってきたのは背の高い金の髪の青年だ。中性的に整つた顔を店内に向け、すぐその視線を一点に止めた。客席、特に女性客が陶然と見惚れる中、青年は店員の案内を断つて露台の席へ足を向けた。

「げげ」

少し慌てたようなアスタロトの表情に気付いて、入り口に背を向けて

いたレオアリスが振り返る。

「ロットバルト。良くここが判つたな。それで立ち上がるとしたレオアリスを片手を上げてやんわりと制し、ロットバルトはアスタロトに一礼すると、レオアリスの耳元に顔を寄せた。

「——バインドです、上将」

低い声に乗せられた名前に、レオアリスの瞳が険しさを帯びる。それまでの煩悶の色も、影を潜めた。

「私にも聞かせろ」

アスタロトの言葉に頷き、ロットバルトは二人に姿勢を向け直した。「つい先刻、アス・ウイアンに現われたとの報告がありました。現在、街道に配備されていた北方二軍の中隊が向つておりますが、間もなくアス・ウイアンに到達するものと思われます」

アス・ウイアン。先日のエザムよりも更に北の街だ。レオアリスは席を立ち、アスタロトに視線を投げた。

「アスタロト。手え出すけど、いいな」

正規軍の管轄に、という事だ。

「いいよ」

あつさりと頷いて、アスタロトはレオアリスを促すように手を振つてみせる。

「——カイ」

レオアリスが小声で呼ぶと、どこからか微かな鳥の声が答えた。常にレオアリスの傍に従う使い魔だ。レオアリスの指示を瞬時に伝える事ができる。

「グラансレイに伝える。市街地ならヴィルトルールだな。俺は直接現地に向う」

低く告げ、今度はロットバルトに視線を向ける。

「ハヤテは?」

「上空に」

領いて見上げると、上空で銀の鱗が光を弾いた。一旦動きかけてぴたりと足を止め、レオアリスは再びロットバルトを振り返った。

「悪い、立て替えといってくれ。それから、戻つたら話を」

それだけ告げて一度高く指笛を鳴らし、露台の低い欄に手を掛け、レオアリスはそのまま飛び降りた。

店内で数名が思わず息を呑んだ。

直後、上空から銀色の疾風が駆け抜け、その背にレオアリスを掬い上げて再び上空へと上昇する。

「アス・ウイアンだ。お前なら半刻で飛べるな？」

飛竜の青い瞳を覗き込むと、ハヤテは聞くまでも無いと言わんばかりに高らかに鳴き、一度大きく風を煽つた。

「な、何だ」

アスタロトは少し身構えるようにロットバルトを見、それから傍らのアーシアの耳元でこっそりと囁いた。

「やつぱ食い過ぎ？ でも腹八分目だよな」

「知りませんよ」

「締めの菓子食つてないし」

「まだ召し上がるおつもりだつたんですか？」

ひそひそと交わされる言葉が漏れ聞こえ、ロットバルトは浮かべた笑みを苦笑に変えたが、すぐに蒼い瞳に一種の冷厳とさえ言える色を刷いた。

「私が直接参つたのは、単に伝令役だけの為ではございません」

改めて姿勢を正し、アスタロトに視線を向ける。

「分を超えた発言と承知の上で申し上げます」

支払いに関して苦言を呈されるかと首を竦めていたアスタロトは、肩を降ろしてほっと息を吐いた。ロットバルトが笑みを消す。

「――アス・ウイアンに向つた北方二軍を抑えて戴きたい。無駄な犠牲は避けるべきかと」

北方二軍ではバインドを止められない、と明確に告げている。侮辱とも取られかねない、そんな発言だ。

「レオアリスの邪魔をするなつて？」

「そうお取り戴いて結構です」

ロットバルトの口元に浮かんだ穏やかとさえ言える笑みに、アスタロトも笑う。

「相変わらず言うなあ。ま、お前のとこの総将からも言われてる事だ。いいさ、そう指示しよう」

ロットバルトは胸に左腕をあて敬礼を施すと、踵を返して扉に向つた。

アスタロトはじつとその様子を見守り、充分離れた所で、はあ、と息を吐き肩の力を抜いた。

直つた。

「うわ、フツーに払つてゐるつ怖つ」

「……アスタークト様は、あの方はやつぱり苦手なんですね」

アーシアが可笑しそうに笑みを浮かべると、アスタークトは白い頬に少し憤慨した色を刷いた。

「苦手なわけじやないぞ。けどさあ、一言つたら十返してくるし、何言つたつて表情も変えやがらないし、あいつに比べたらタウゼングランスレイの方が数十倍可愛いやな？」

「さ、さあ……」

立場上も含めて頷くのは難しい。ただ、ふい、と横を向くアスタークトを見て、アーシアは更に可笑しそうにくすくすと笑い声を洩らした。

「どうやらアスタークト様に忠告を聞いて戴くには、ああした所作を身に付けた方が良きそうですね」

途端にアスタークトはひどく動搖した顔で振り返った。

「止めろよ、可愛くない。お前は一番可愛いんだから、このままでいいの！」

アーシアの頭をぎゅうぎゅうと抱き込み、髪に頬をすり寄せる。アーシアは收めかけていた笑いを再び上らせた。

「……冗談ですよ。でも」

(やっぱり少し、羨ましいな)

アーシアとしては、ああしてレオアリスを補佐できているロットバルトは羨ましささえ覚える。自分の立場では、アスタークトを政治的に補佐しようと思つても出来ないからだ。

「でも何だよ」

「いえ」

アーシアはいつも通りの柔らかい口調で首を振つた。

力や地位や財力など、伴えば伴う程逆に孤独を産むものだ。そんな事を言えばアスタークトは怒るのだろうが、アーシアは時折、アスタークトの中にそれを見る。アスタークトの奔放な態度は、そこに起因していると

思つてゐる。

三年前にレオアリスと出会つた事で、アスタークトは少し立つ位置を変えたように思う。結局は離れられなくても、そこから見える景色は前と違うだろう。楽しそうな表情を浮かべるアスタークトを見つける度、アーシアは穏やかな安堵を覚えた。

アスタークトはまだアーシアの頭を抱え込んだまま、店の扉と北の空を見比べた。

「ふんだ。まあでも、あいつは有能で地位がある。今みたいにレオアリスがいない所を選んで、自分一人の発言に留めるところなんてやつぱ考えてるよ。いずれいい補佐役にも後ろ盾にもなるだろう」

「……アスタークト様がなつて差し上げてはいけないんですか」

後ろ盾に、という意味だ。アスタークトが明確にその立場を表明すれば、少なくとも軍内部で批判が上がる事はなくなるだろう。

だがアスタークトはあつさり首を振つた。

「やだよ。私は友人だもん。アイツに感謝なんかされたくない」

そう言うと、アスタークトもまた席を立つた。

「さて、私達も行こう。バインドとやらを揃んでやる」

ざわざわと喧騒に溢れる街を抜ける。自分に注がれる視線を少しも気にする様子もなく、ロットバルトは人々の行き交う通りを歩く。

アス・ウェイアンに向つた北方軍は、アスタークトの命で止まるだろうか？

北方二軍は勇猛で知られ、率いているのは輪をかけて気性の荒い中将カシムだ。

ロツトバルトは銀翼の飛竜が飛び去った空へ視線を向けた。

止まらなくても問題はない。

必要なのはアスタークトの命があつたという事実と、レオアリス以外にバインドを止め得る者はいないのだという認識、その二つだ。

そろそろ王城内の無意味な批判を封じる必要があつた。

十一

(間に合うか?)

風を切り裂いて走る飛竜の背で、レオアリスは北の地を見透かすように視線を凝らした。

バインドが現れてから、どれ程経つのか。

アス・ウェイアン——そこに、バインドが居る。

全ての疑問の答えが、そこにあるはずだ。

自分の剣を止めた、剣士。

どくん、と身の裡の剣が鳴動した。

レオアリスは自分でも気付かないまま、口元に笑みを浮かべた。

第
三
章

アス・ウェイアンの外壁を囲むように、周囲の草原に北方軍第二軍中隊千騎が展開していた。重装歩兵を中心とした屈強な兵士達は、アス・ウェイアンの街から棚引く幾筋もの煙を視界に捉えながら、進攻の号令を今や遅しと待っている。

街の内部の様子は城壁に阻まれ、この場所からは見て取る事は出来ない。だが、先日のエザムと同じような状況であろう事は、立ち昇る煙から想像できた。兵達の間には、戦いに逸る気持ちとバインドに対する怒りが満ちていた。

陣の中央に張られた本陣では、先程から指揮官カシムや参謀官、少将等が集い軍議を行っているが、まだ動く気配はない。

一人の兵が逸る気持ちを表すように、腰に帯びた剣の鞘を叩き、鎧に打ち付ける。規則的に叩かれる事が、やがて輪のように広がり、アス・ウェイアンの敵を脅かさんとするように、雷鳴のごとく響き始めた。

「——馬鹿な！ 公は何を考えておられる！」

本陣の幕中で、中将カシムは憤りのあまり、手にしていた剣を足元に叩き付けた。たつた今、伝令がアスターの指示を運んできたのだ。

『レオアリスが着くまで、陣を展開させ、そこで待て』

「手を出すな、と……」

腕の血管が浮き上がるほど両手を握り込む。周囲からは兵士達の剣を打ち付ける音が、幕内の会話を搔き消すように響いてくる。

バインドが目前に居るのは分かつている。アス・ウェイアンの警備兵を

殺害し、その後は街に入ったまま動いていない。

「あのガキに、譲れと……？」

足でそこに置かれていた衝立を蹴り上げる。衝立は激しく音を立てて倒れ、側近達はびくりと身を縮ませた。

もともとカシムは気性の荒い将だ。先日バインドによつて焼かれたエザムはカシムの管轄でもあり、名譽挽回を期して功を焦る気持ちも強い。（バインドをこの手で討てば、名を上げられる。それを、ただ待てだと？）劍士がどれ程のものだというのだ。自分とて剣にそれなりの自負がある。更に千もの重装歩兵を擁して、何の不足があると言うのか。

「ここは、公の仰るとおり、様子を見るしか」

恐る恐る、北方二軍の二等参謀官ノーマンはカシムの顔を見上げた。その弱腰と映る態度をカシムは憎々しげに睨む。剣士と聞いて以来、この男はやけに慎重策ばかり説き、それもカシムの苛立ちに拍車を掛けている。

（老いぼれめ）

だが、命令に反するか？

規則正しく、雷鳴は轟いている。

（……いや、倒せばいい事だ。命令に背いたも何も関係ない。の方は、所詮あまり多くを気にされぬ）

カシムは、荒く息を吐くと、ノーマンに眼を向けた。

「包囲を狭め、三方の門より討つて入る」

「し、しかし……」

怒りに満ちた眼で、カシムはノーマンを睨み付けた。

「しかしだと!? では貴様は、ここで間抜け面を晒して笑い者になるか！ 北方二軍はたつた一人の敵を囲むだけで、手も足も出なかつたと

?!

「そ……」

「さつさと行つて全軍に伝えよ！」

「は——はっ」

慌てて伝令を呼びわりながら駆け出していく後姿に舌打ちをし、カシ

ムは剣を取り上げた。

すぐに、全軍が移動を始める。外壁の三方の門に向かって、三隊に分かれて重い足音を立てながら進行していく。アス・ウイアンはすぐ背後に深い森が迫り、門を持つのは北、東、南の三方だけだ。

門を守る警備兵は、全てバインドによつて切り裂かれ、辺りに転がっていた。その様を横目で眺めながら門を抜け、兵士達の列がひしめきながらアス・ウイアンに入る。

折り重なった死体。それは何か、どこかが異様で、兵達の間に正体の知れない不安が過ぎつた。

街並みはまるで大きな鉈でも振るつたかのように壁は切り崩され、焼け落ちて煙を上げている。狭い石畳のそこかしこに住民達の死体が転がっている。街の中には進軍する兵列の他に、動く影は見あたらなかつた。

アス・ウイアンはそれほど大きい街ではない。だがそれでも、その光景には兵達の怒りを急速に冷ますような、心胆を寒からしめるものがあつた。

「……本当に、これを一人でやつたってのか……？」

歩兵の一人が厚い頬当ての奥で呟いた言葉は、等しく兵達の心の中に浮かんだ疑問でもある。

極力崩れた家々を、倒れている人々を見ないように前を向き、兵列は重い足音を石畳に打ち鳴らしながら進んだ。視線の先には先頭に騎馬を立てて進む、中将カシムの姿が映る。

その堂々たる姿は兵達の心を鼓舞し、不安を打ち消すのに十分なものだ。きつく傲慢なところがありはするものの、殊戦場においては、カシムは十二分にその将たる所以を示している。

カシムは兵列の先頭に立ち、苛立ちを隠さない瞳で街の中央に聳える

塔を睨んだ。その塔の上屋に、隠そともしない気配があつた。

バインドは街の中央に聳える塔の屋根に座り、軍が街中を三方から進んでくる様を面白そうに眺めた。

「動くか。愚かな奴等だ。損害を増やすだけだと、判断できる将もいるのか？」

足下の街からは、炎の起こす煙と肉の焼ける臭気が立ち昇つてくる。低く笑つた。

既に正規軍はバインドの足元の広場を埋め尽くそうとしている。くつくつと、喉の奥に湧き上がるそれは、次第に狂気を孕んだ咲笑に変わる。

「何がおかしい」

背後の気配に振り返る事もなく、バインドは笑い続ける。カシムはバインドが振り向かない事に痺れを切らして、剣を抜き放つた。

「貴様がバインドか。俺は正規北方軍二軍中将——」

「誰でもいい」

「何だと?!」

「切り刻めるなら、構わんよ。兵は何騎だ？　五百か、千か——。多い方がいいなあ」

「ふざけ……」

紅い熱が、幾筋も走つた。

振り上げようとしたカシムの剣と、二人の間に伸びる煉瓦作りの塔の屋根が、音を立てて砕ける。バインドは一切振り返らないまま、再び笑い出した。

時を止めたように立ち尽くしたカシムの身体に幾つもの亀裂が生じ、次の一瞬間赤い炎に包まれ、燃え上がる。

「——クツクク……ハ！　ハハハハ！　ああ、つまらねえ……」

喉を反らせて呟き——、バインドの瞳が地上に落ちる。

「手応えの無い分、思う存分切り刻ませてくれよ」

地上に落下したカシムの破片を追って、バインドの足が屋根を蹴る。

上空から炎に包まれた身体の部品がばらばらと降りかかり、言葉を失つた兵士達の真ん中に降り立つた。

広場を取り囲んだ兵士達は、何が起こっているのか全く理解出来ないまま、ゆっくりと立ち上がる男と、燃える身体の破片を見つめる。

バインドが歪んだ笑みを頬に刻んだ。

兵達に剣を構える暇も与えず、左足を軸に円を描き、バインドの剣が一閃する。

バインドの周囲の兵士達が、雪崩れるように外に向かって倒れた。切断された面から噴き出すはずの血はなく、肉の焼ける音と臭いが辺りに漂つた。

「……ひつ」

たつた一刀が切り裂いた結果を目の当たりにして、兵士達が一気に浮き足立つ。

バインドは崩れた兵列に向かつて地を蹴つた。

もはや戦場とは呼べない。それは一方的な殺戮だった。

焰を纏つた剣が翻る度に、腕が、脚が、首が、撥ね上がる。傷口から血が流れないが故に、それはどこか、ひどく作り物めいて見えた。

二つに割られた胴が燃え落ちる。身体を守る分厚い鎧など無いかのごとく、まるで人形の手足を落としてでもいるかのように、バインドは無造作に剣を振るう。瞬く間に、その場に切断された身体の山が築かれていく。

バインドが足を進めるごとに、血を流す事のない死体が列をなす。

一つの鎧も身に纏わないにも関わらず、バインドは平原を行くがごとくにただ歩みを進める。

無防備とも思えるその背に、数人の兵が恐怖に震える腕を鼓舞し、一斉に剣を突き立てた。

一瞬、バインドの動きが止まる。逃げ惑っていた兵達が、息を飲んで佇んだ。

「やつた……」

バインドがゆるやかに振り向くと同時に、突き立てた数本の剣が根元から砕けた。

喜びに見開かれた兵士の眼が、一瞬の内に驚愕に取つて代わった。

低い忍び笑いが耳を打ち、歎声を上げようとしていた兵士達の口から、恐怖に追われるよう悲鳴が上がる。

先程よりも散り散りに、統率すらなく、兵士達は走り出した。

それを悠然と追い、既に戦う意志を失つた兵達を、バインドは動きを止める事なく刻み続ける。

顔に浮かんだ、狂気のような笑み——。その瞳が、ふと見開かれた。喜色がそこに踊る。

兵の一人を切り裂く寸前で、剣が動きを止めた。
「来たか——」

笑みが、深まる。

上空で、何かが陽光を銀の矢のように弾いた。

そこから叩きつけるような風と共に、青白い光が尾を引いて地上に急降下する。

バインドの、真上——。

撥ね上がつた炎の剣が、閃光となつて撃ち込まれた青白い剣を受け止めた。

剣と剣とが撃ち合つた瞬間、爆発したかのように突風が吹き上がつた。周囲に残つた兵士達が、爆風に押されて石畳の上に倒れ込む。

顔を上げ、突風の中心に視線を向けた兵士達の顔に、漸く安堵と希望の光が灯つた。

「……ああ——」

呻くような歎声が、残つた兵士達の間に々と広がっていく。バインドは合せた剣の向こうにレオアリスの姿を捉え、口元の笑みを広げた。

「……待つていたぞ。あんまり遅くて、食い尽くすところだつた。」

剣を合せたまま、レオアリスは周囲に視線を走らせた。転がつた兵士達の身体と、恐怖と憔悴の貼りついた顔。肉の焼ける、吐き気を催すような臭氣。

怒りが、黒い瞳に灯る。

「——貴……様ア」

「クク、楽しい光景だろう？」

弾くようにバインドを睨み、レオアリスは剣に乗せた力を緩めた。押さえを失つたバインドの剣が撥ね上гарのに合せて、青白い切つ先が紅い刀身の上を滑る。踏み込み、手の中で剣を反し、空いた左脇腹を斬り上げる。

僅かに切つ先に掠めた感触だけを残し、バインドが後退する。それを追つて間合いを詰め、左から剣を薙ぐ。迎え撃つたバインドの剣が大きく弾かれた。

瞬間叩き込まれた剣を躱し、バインドは地面を蹴つて距離を取つた。それまでバインドが立つていた地面が、レオアリスの剣の余波を受けて大きく陥没する。

バインドはそれを眺め、ゆらりと立ち上がつた。

恐れて離れたのではない。その瞳にあるのは、紛れもない喜びだ。

「……ずいぶん長い間、この時を待つてたんだ。この右腕を失つてから、十七年——。楽しみで、仕方なかつた」

バインドの身から叩きつける剣気が、ビリビリと大気を振動させる。自分の頬を叩く風に黒い髪を巻き上げながら、レオアリスは一步、バインドへと踏み出した。

右手に無造作に提げた剣の青白い光が、じわりと大きくなる。

相手から一瞬たりとも視線を動かさず、互いの間合いを計る。二人の纏つた剣気がぶつかり合い、渦を巻いて周囲の石くれを砕いていく。あまりの鬼気に、周囲を囲む兵士達が後退つた。

呼吸すら苦しいほどの静寂が落ちる。

バインドの剣が僅かに動いた瞬間、ふ、とその瞳がレオアリスの後方に向けられた。

遙か彼方から、強烈な圧力の塊が近づいてくる。炎の気配だ。

「ち、アスタロトか——。さすがに二人相手はきついなあ」

十七年も待つたのだ。誰にも邪魔をされず、ゆっくりと戦える方がいい。

「残念だが、仕切り直しだ。」

「ふざけるな！」

「謎掛けは解いたのか？」

嘲るように問いかけたバインドの言葉に、レオアリスは息を詰めた。

バインドが口元を歪める。

「その様子じやまだだなあ。クク、念入りに隠して、随分と大仰な事だ」

「……戯言ばかり」

苛立つたレオアリスの言葉を皆まで聞かず、バインドは挨拶代わりだとでもいうように、レオアリスの左後方に居た兵士達めがけて、剣を討ちこんだ。

「！」

咄嗟に伸ばされたレオアリスの剣が、辛うじてその刃を弾く。剣の勢いを殺しきれず、レオアリスは弾き飛ばされるように後方の兵士達の間に倒れ込んだ。

「そうちだなあ……一番相応しい思い出の地で、再び会おうか」

頭を振つて立ち上がつた時には、そこにバインドの姿は無かつた。

苦い溜息を吐き、バインドの気配が完全にその場から去ったのを確認して、レオアリスは上空を振り仰いだ。

全てが解決すると、そう思つてここに来たものの、結局何も変わっていない。

（何も問い合わせ暇も無かつた……）

そんな余裕など見当たらなかつたと言つた方が正しいだろう。数合剣を合わせただけで、まだレオアリスにはバインドの力を計りきれてない。

レオアリスは自分の剣に視線を落とした。

（これだけじゃ無理か）

空いている左手を、鳩尾に当てる。もう一つの鼓動が、微かに感じられる。

「——」

瞳を閉じ、抑えるように息を吐いた。右手の剣が搔き消える。

さつと陽が翳り、飛竜の翼の羽ばたきが大きく風を散らした。視線を上げると、艶やかに磨き上げられた濃紺の鱗をした飛竜が、レオアリス達の上空に浮かんでいた。

その背からアスタークトが飛び降りる。軽やかな動作で地上に降り立つと、上空の飛竜に向かって手を振つた。

「ありがとう、アーシア」

飛竜の青い瞳が頷くように細められる。

アスタークトは辺りを見回しながら、普段は無い張り詰めた表情を浮かべてレオアリスの横に立つた。

「これは予想以上だな。お前が間に合つて良かつた」「……これじやあ間に合つたとは言えない」

低くそう返し、レオアリスはまだ呆然と蹲つたままの兵士達に歩み寄つた。見覚えのある顔を見つけ、その前に膝を付く。

老齢に近いその男は確か、北方二軍の参謀官だつたはずだ。覗き込ん

だ目には怯えた色がある。

正規二軍は勇猛で知られる。それが、これ程とは——。

「動けるか」

「は、はい」

「良かった。カシム、だつたか？ 二軍の将は。どこにいる？」

ふいにノーマンの眼の中の怯えが大きくなつた。両腕が何かに縋ろうとするように、レオアリスの腕を掴む。

アスタークトと顔を見交わし、レオアリスはノーマンへ視線を戻した。「ちゅ、中将は……あ、あの男、あつという間だつた——まるで、紙でも切るみたいに、あんな

レオアリスの腕に縋る手の指が、軍服の厚い生地を通して強く食い込む。その力から感じられる恐怖。だが、背後に広がる悪夢じみた光景を見れば、それは無理もない事といえた。

「……ひどい有様だ。全滅を免れただけでも、幸いと言うべきか」ノーマンの身体の震えが一層強くなり、レオアリスの腕に伝わる。レオアリスは戦場に向けていた視線を戻した。

「あ、あの時、全滅したのに——北方辺境軍、近衛師団第二大隊……手を出すべきじやなかつた」

レオアリスの瞳が陥しくなる。肩を掴み、虚ろに見開かれた瞳を覗き込んだ。

「どういう事だ」「あの男が……師団の。味方の軍を、全部」突然、燐つっていた柱が音を立てて崩れた。

虚ろな瞳がさつと焦点を結び、果然と座り込んでいたノーマンは跳ねるように立ち上がりると、アスタークトに向かつて敬礼した。

「ご、ご無礼を！ ご報告いたします、我が隊は正午丁度を以つてアス・

「……私は、手を出すなど伝えたはずだつたんだがな」

アスタークトが声を落とす。

「も、申し訳ございません！」

「――まあいい。カシムが死んだ以上、責を問う奴もない。それより」
ふいに遠くが騒がしくなる。南の空に靡いた軍旗に、近衛師団が到着したのだと判つた。

ヴィルトルは飛竜の背から飛び降りると、先程のアスタークトと同様、周囲の光景に信じられないといった表情を浮かべ、レオアリス達の方へと歩み寄つた。

足を打ち鳴らすように姿勢を正すと、左腕を胸に当てる。後ろで纏めた長い灰銀色の髪が揺れた。

「御前に、上将。右軍全騎揃っております」

もう一度、ヴィルトルは厳しく眉を寄せたまま周囲を見回した。

「が……どうやら援軍よりも救護班が必要のようですね」

「まずは生存者を探して手当てを。……死者は、どうする？」

後の言葉はアスタークトに向けたものだ。

「多すぎるな……。後から一隊を寄越そう。生きてる奴から頼む」

ヴィルトルは頷くと広場にいた近衛師団少将を呼び、手短に指示を出していく。

レオアリスは目の前の将校に瞳を向けた。その上には先程までの取り乱した怯えの色よりも、軍の失態とアスタークトによる叱責を恐れる、ある意味正常な感情しか見出せない。

レオアリスの視線に気付き、ノーマンは何かを恐れるように視線を逸らした。

(――同じか)

グラントスレイ、総将アヴァロン、それから軍議の間で感じたあの空気と。

おそらくもう問い合わせても口を開くまい。

近衛師団兵に肩を支えられながら退出するノーマンの後姿を、レオアリスは黙つたまま見送り、拳を握り締めた。

『全滅した――北方辺境軍、近衛師団第二大隊』

『味方の軍を……』

アスタークトはその横顔を暫く見つめていたが、どこか怒ったような表情を浮かべ、視線を街に逸らす。

肉の焦げる重い匂いが、吹き抜ける風に散らされる事を拒むように、いつまでも漂つていた。

「今日は何の用だ？」

机の前まで来て立ち止まるかと思えば、アスタークロトは部屋の中をぐるぐると歩き出した。

アス・ウイアンから戻つたその足で、アスタークロトは王宮内の一室、内政宮へと向かつた。内政宮は王城の北面三階層までを占め、三階層の最奥に内政官房長官室がある。

「これは、アスタークロト公」

長官室の扉をくぐると、すぐ脇に据えられていた机の奥で内務秘書官が顔を上げ、アスタークロトを認めて素早く立ち上がる。

「本日はいかがされました」

「うん。ベールはいる？」

「執務室においでです」

「ありがとうございます」

アスタークロトがいきなりやつて来る事などいつもの事で、内務秘書官は特に用向きを確認する事もなくそのまま見送つた。

長官の執務室は広い室内の奥に位置する。秘書官達の机や個室が並ぶ室内を通り抜けながら、アスタークロトは長官室の手前のひと部屋が空室表示なのを認めた。

(——ロットバルトの親父がいないな)

ロットバルトの父、ヴエルナー卿は内務——内政官房の次官、つまりは官房長官たるベールの補佐を努める。

その事が何となく気にかかるものの、特に足を止める事無くベールの執務室前まで来ると、アスタークロトはおどないも告げずに扉を開けた。

「入るぞ」

「入った後に言う言葉じやあないな」

広い黒檀の机の向うで、内政官房長官ベールは知性を湛えた静かな瞳を上げた。目を通して書類を脇に押し遣り、ずかずかと執務机の前まで歩み寄るアスタークロトに身体を向ける。どこか怒つたようなアスタークロトの表情に、ベールは僅かに眉を上げた。

ベールが扉の脇に机を置いている長官随行官へ顔を向けると、秘書官は黙礼して扉を出た。扉が閉まるのを視界の隅に移しながら、アスタークロトは腕組みをして尚も歩く。

アス・ウイアンのあの光景。エザムは見ていない。だから正直、漠然とした感覺でいた。

だが、あれほどまでに踏みにじられた街は、アスタークロトの心にも、少なからぬ怒りを生んでいる。

レオアリスの疑問、バインドについて何かを伏せるような軍内の様子、それもあつたが、何よりさほど関心を示していなかつた自分に対する憤りだ。

『北方辺境軍の全滅』

(知らなかつたって?)

「バインドについて、知つてゐるか」

アスタークロトの單刀直入な質問以上に、ベールの回答は簡潔だった。

「知つてゐる」

最初は何だかんだと躊躇されるだろうと予測していたため、アスタークロトは思はず立ち止まってベールを見つめた。力づくでも聞き出してやろうと気合いを入れてきたのが馬鹿らしい程だ。

「……今回の件じやないぞ」

「驚く事か。北方は私の管轄だ。それでお前も来たんだろう

「だって、……秘密なんだろ」

アスタークロトが睨むとベールは再びあつさりと頷いた。

「そうだ。だがお前のは不勉強というやつだな。正規軍を統帥する将として当然知つていいべき話だらう」

一つ笑うとベールは立ち上がり、アスタークロトに長椅子を勧めて、自分

も向いに腰を降ろす。

「解つてよつ」

乱暴に腰掛けると、弾力性のある厚い綿のせいで長い黒髪が跳ねた。

ベールの言うとおり、本来自分の立場なら知つていなければおかしい位の話だ。誰も教えなかつたらと言うのは甘えだろう。『アスタロト』として正規軍の将の座に着いた時、過去を紐解くのはアスタロトの義務だつたのだ。

縛られたくないという思いから、自分は未だに色々なものに眼を瞑つているのかもしれない。

ベールは怒つたようなアスタロトの顔を眺め、意外そうな表情を見せる。

「なにやら反省をしているようだな。まあそう腐るな、これについては何もお前の所為だけでもない。誰もが口に出すのを憚る事だつたのだから」

「憚る、か。憚つてばかりいや、物事ずっと事態が悪くなる事だつてある。知らせないことそんなんに価値があるのか？」

レオアリスのあの表情。苛立ちと、おそらくは不安。周囲があれでは、誰だつてそれを感じるだろう。

(……私だつて変わんないじやないか)

アスタークは苛立ちをぶつけるようにベールの顔を睨んだ。

「お前が知つてること、みんな話せ」

ベールは目の前の紅い瞳を覗き込んだ。アスタロトが自分から聞いた話を、レオアリスに伝えるつもりなのはその瞳の色から分かる。ベールはどこか複雑な色の交じつた笑みを浮かべた。

「聞けば、お前は迷うだろう。それでも聞くか？」

聞いたところでお前はそれを飲み込めるのかと、そんな問い掛けに聞こえる。だがアスタークは少しの逡巡も見せずに、挑むようにベールを見上げる。

「迷うかどうかなんて聞かないと判んないだろ。教えろ」

自分を睨み据えるアスタークの顔を見つめながら、ベールは束の間思考を巡らせた。

王は既に、半ばその命を解いている。ベールは一つ頷いた。

「よろしい。それもお前の責務の一つでもあるだろ。――では、何から聞きたい？」

長椅子の上で足を組み、正面から瞳を覗き込んでくるベールの前で、その声の響きにアスタークはこの時になつて僅かに躊躇つた。自らに決意を促すように小さく息を吸い込む。

「……十七年前、何があつたのか。それと、バインドが何者なのかだ」

ロットバルトは明るい日差しが降り注ぐ、幾重にも折れ曲がつた硝子張りの回廊を歩き、その最奥にある豪奢な扉の前で足を止めた。広大な敷地内に設けられたこの離れは、邸内の者も用がない限り訪れる事はない。回廊と離れを包む庭園も、午後の白い光の中にひつそりと静まり返っている。

名乗ると、中から低い声が応えた。

溜息を一つ吐き出し、精緻な彫刻の施された取っ手を回して扉を押し開けた。広い室内にも、回廊と同じく白い陽光が満ちている。その中を、正面の机の奥に座る男の方へ足を進める。

厳めしい壯年の男だ。十ある侯爵家の筆頭に位置し、四大公に継ぐ地位を誇る大貴族。がつしりとした身体を幾重もの長衣に包み、泰然として椅子に腰かけたまま、男は机越しにその少し前で立ち止まつたロットバルトを眺めた。

ロットバルトは男に一礼すると、その顔を見返す。

この場に全く見知らぬ第三者がいたとして、彼等が血の繋がりのある

親子だと言つても、俄かには信じがたいだろう。姿形ではなくその上辺からは、家族の中にあるはずの暖かさはまるで感じられない。

「珍しいですね、貴方がわざわざ私をお呼びになるなど」

「……元気そうだな。兵舎などに入らず、この館から通えればよいものを。

ヴエルナー家の子息が何を好き好んでそのような場所にいるのか」

会う度に聞かされる言葉に、ロットバルトは僅かに笑みを浮かべただけで取り合う様子はない。

もう既にそれを言う事を信条にしているのではないかとさえ思えるほど、それは決まりきった会話だ。ロットバルトの答えもまた、常に変わらない。

「何のご用です。私も既に役を頂いている身なのでね。いつものように軍を辞めろというお話であれば、これで退出させて頂きますが。既にご存じでしようが、今はこうしている時間も惜しい」

それだけ言うとあっさりと踵を返しかけた息子に、侯爵は苦い声を向けた。

「だからこそ呼んだのだ。事態が好ましくない方向へ向えれば、第一大隊の立場は微妙なものになろう。わしとしてはその時、そこにお前を置きたくない」というのが本音だ」

そこには普段の挨拶のような会話とは違う響きがある。ロットバルトは再び身体を戻し、侯爵の表情の奥にあるものを見透かそうとするように、向けた眼を細めた。

「……あなた方は、一体、何を『存知なのです？』 バインドと彼について、何を隠そうとしているんです。それが判らない以上、何を仰られても無意味でしょう」

「――お前達は若く年も近い。同調するのも判るが、全体を眺めた時、何が一番良い選択かを見極める事が必要だ」

問題にならないというように、ロットバルトは一度顔を背けた。

「その全体を眺める事が、現在出来る状態に無い、と申し上げているの

ですよ。中途半端に隠すのはお止めなさい。判断をしろと仰るのであれば、それ相応の材料を提示していただきたい」

「提示すれば、わしの言葉を呑むか？」

「伺つた後で判断します」

侯爵は暫らく無言のまま、指先でコツコツと机を鳴らしながらロットバルトに視線を注いでいたが、まるで変わらない表情に、苛立ちの交じつた息を吐いた。

「――お前は、今回の件について、どこまで知っている？」

「全く。ほんんどと言つていい程、情報が伏せられている。そもそも、バインドとは何者なのです？」

侯爵はその名を疎むように、灰色の眉をしかめた。

「――あれは、十七年前まで、近衛師団第二大隊の中将だつた男だ」

ベールがアスタロトの反応を見るように、ゆっくりと言葉を紡ぐ。黒く深い瞳の奥に、捉えどころのない微細な光が浮かんでいる。

「北方の――、剣士の一族のな」

一瞬、周囲の音が途切れたように感じられた。

アスタロトはベールの言葉の意味を図りかねたように、深紅の瞳で目の前の顔を見つめた。

長い睫に縁取られた瞳が、大きく見開かれる。

ベールは皮肉な笑みを口元に刷き、頷いた。

「そうだ。反乱を起こしたのは、レオアリスの一族だつた」

アスタロトの唇が喘ぐように数度動く。

「――そ……え、だつて、レオアリスは」

思わず立ち上がりかけ、アスタロトは再び腰を落とした。言うべき言

葉を見失つて口を閉ざし、ほつそりとした手を額に当てる。

喉の奥が詰まる。肺が酸素を取り込むのを止めてしまったように思える。

「それはもう少し後で触れよう。——その反乱を收める為に向けられた軍の中に、バインドがいた。近衛師団第二大隊左軍中将。戦場にあつた北方辺境軍及び師団第二大隊、合わせて二千余名、その半数以上を切り裂いたのもまた、バインドだ」

広い室内は午後の白い陽射しの中に沈んでいる。降り注ぐ陽射しは、それを受ける者の影をくつきりと浮かび上がらせる。

そこに作り出される光と影。

この場で侯爵の口から語られる言葉は、その影をより一層際立たせようとするかのようだ。

「剣士は稀な存在だが、戦闘能力は群を抜いている。それが、何故軍にレオアリスの他に存在しないか、お前は解るか？」

それは先日、ロットバルトやクライフが感じた疑問でもあつた。ロットバルトが黙つたまま否定の意を表すのを見て、侯爵は言葉を継いだ。「そぐわないのだ。剣士は戦う事そのものが存在理由、本能だ。軍規や隊内での協調を守る事に向かない。時に生よりも、戦う事を好む。——そしてバインドは、その本能が最も顕著な男だった」

侯爵はロットバルトの顔から、白い光に溶ける窓へと視線を移した。

バインドが近衛師団に所属していた折、數度見かけるだけだったにも拘らず、バインドは周囲に不快な感情を抱かせるように思えた。

特に言動が荒い訳ではない。

だが——そう、まるで周囲の者を、物として捉えているような眼。単なる切り裂く対象として。

しかし、それでもあの頃のバインドは、からうじてその本能を抑え込み、軍の中に自分を抑え込んでいた。
あの時までは。

ベールはアスタロトの顔に視線を注いだまま、一つ一つの言葉を繋ぎ合わせるように紡いでいく。

「同じ剣士と戦う事は、確実にバインドの中の何かを呼び覚ましたのだろう。反乱を抑える為の軍は、途中からバインドを抑える為のものに変わつた。だが、結果は先程も言つたとおり。二千余名の内、誰一人、北方の辺境から生きて戻る者はいなかつた」

黙り込み、俯いたままのアスタロトを前に、ベールは非情とも取れる響きで淡々と言葉を紡ぐ。

「その名は禁忌だ。誰もが口を噤む、忌むべき名なしさ。そして以来、軍において剣士もまた禁忌となつた」

「——戦いは、唐突に終わつた」

それは近衛師団が北方の辺境に到達して、一日も経たない内の事だった。

「バインドは忽然と消え、炎の上がる剣士の一族の里、そこに一人の赤子がいたのだ。剣士の一族の、最後の一人だ」

侯爵は蒼い眼に苦い色を灯して、目の前に立つロットバルトに向ける。降り注ぐ陽射しが、まるで温度のないものに感じられる。

「もう一度言おう。バインドが再び現れた今、わしはこれまで以上にお前が師団にある事を望まない。今は何も知らずとも、いづれ過去を知

れば、その剣は王に向けられるやもしれんのだ」

侯爵は言葉を切ると、ロットバルトが頷くのを待つた。途中から一言も口を挟まずに話を聞いていた。

おそらく、自分の意思を理解するだろうと。

だが、意に反してロットバルトは苦笑を浮かべた。

「あなた方は、少し観察が足りないようだ」

「何を」

「王に剣を向ける？ 間違つても、それは起こり得ない」

レオアリスの中に見える王への忠誠の念は、自分達のそれとは少なからず次元を異にする。それが何の故であるのか、ロットバルトが明確に把握している訳ではない。

だがレオアリスの持つ感情は地位や立場から出たものではなく、それを知っているからこそロットバルトには、また周囲の者達には誰しも、レオアリスが王に離反する事は有り得ないと言うだけの根拠になる。

「午前中に、ヴィルトルール中将を喚問されましたね」

侯爵は黙つたまま、不機嫌そうな眼をロットバルトに向かた。

「それで、ミストラの一件に関する中将の証言に、貴方が確信を得られるような内容はありましたか」

「……私が直接聞いた訳ではないが、疑惑が深まるものではあつた」「王に対する翻意があると？」

問題はそこだ。もし今、僅かなりとも周囲がそれを認めれば、レオアリスは王都を追われる事になるだろう。

だが、自分をこうして呼ぶ事しかしていない以上、可能性の範囲を出ていないのだ。

疑念をどう解消すべきか——ロットバルトは思考を巡らせる。

「今の時点では無いだろう。だが、知った後はどうなるかは判らん」だからこそ、事実を伏せ、十七年を経た今でさえ疑惑を棄て切れない

でいるのだ。だがロットバルトはあくまで穏やかな口調を崩さないままだ。

「では現時点では、まだ懸念の範囲を出ていないと言う事ですね。」

敢えて念を押すように、侯爵の瞳を覗き込んだ。

「確信に変わつてからでは遅いのだ。可能性が無いとお前に言えるのか？」

「勿論可能性は無ではないでしょう。ただ、今お聞きした限りでは、まだ反乱に至つた経緯が明確になつていません。そこに関しても調査はついているのですか」

「詳細は不明だ。何の前触れもなく、不意に始まつたものだつたからな。レオアリスの育つた村の者が何かしら知つてゐる可能性は高いが、調査上は取り立てた結果は出でていない」

「……成る程」

微かに笑みを零したロットバルトの顔を、侯爵は不審そうに眺めた。

「尚更、あなた方は調査不足ですよ」

あの村で育つた事それが、レオアリスの中に生まれるべき負の感情を消してゐるとも言える。

ただ、内務の調査官にそこまで感覚的な調査を行えといふのも無理な話だ。しかしその余地がある分、ロットバルトは彼等と別の角度から捉える事ができる。

「もう一度、私からは、彼が王に離反する事はないと、そう進言させて戴きましょう」

「御前失礼。これ以上軍を空けると職務怠慢で副将に叱責されますので」

優雅に一礼し、ロットバルトは踵を返した。

「ロットバルト。今の近衛師団はお前がいる場所ではない。……ヴエルナ一家は、お前が」

今度はロットバルトは立ち止まりもせず、振り向く事もしなかつた。

「貴方とその議論をしても仕方のない事だ」

従うつもりはない、と言外に言い置いたまま、ロットバルトは扉を閉ざした。

回廊を玄関へと向いながら、先程の話を反芻する。

その内容にまるで衝撃を受けなかつた訳ではない。

だが、レオアリスの一族が反逆者であつた事にではない。それはロットバルトにとって、さほどの意味を持たない、過去の事だ。

その事よりも、これほどの事実が今まで隠されていた事に驚きを覚えたのだ。隠そうと思つてそう簡単に出来るものではない。そしてまた、その経緯がありながら現在レオアリスが軍にある事も。

それを成し得る者は、王しか有り得ない。

(やはり王か。しかし、どう取るべきなんだ?)

その真意がどこにあるのか、そればかりはロットバルトなどの計り知れない事だ。そこを詮索するには、まだ情報が少なすぎる。

父である侯爵が懸念しているのは、レオアリスがバインドと同じ事態を引き起こし、更に言えば万が一王に剣を向けた時、ロットバルトが第一大隊に在籍していることは、ヴエルナー家にとつて都合が悪いものだからだ。

けれどもいかにそうした懸念があるとはいえ、それほどに伏した事實を公爵が自分に向けたからには、事態の方向は——王の意向は、変わつたと見ていいのだろう。

(……だからと言つて、事態が好転している訳でもないな。情報も一面的すぎる)

そう思つたところで裏側を覗き込む術はない。ロットバルトはそれを切り上げて、もう一つの懸念に思考を移した。

バインドが近衛師団に在籍していたのであれば、当時既に第一大隊の中将であったグラントスレイが知らない訳はない。クライフとフレイザー

はそれ以降に近衛師団へ配属されている。もう一人、ヴィルトール。

先日の演習場でのヴィルトールの反応を思い出し、ロットバルトは溜息を吐いた。軍に剣士が存在しない事に対するクライフの疑問を、いつなく曖昧に躱していた。

(——だが、もうそろそろ、限界だろう)

無理に抑え込めば、その反動は大きい。

侯爵へ告げた言葉はロットバルトの真意ではあるが、最善のやり方で事実を告げた場合の話もある。その為には、レオアリスが戻る前に、グランスレイと話をする必要があった。

知らず、ロットバルトは近衛師団士官棟へ向かう足を早めた。

ベールは言葉を切り、暫らくの間黙つて、俯いたアスタロトの上に視線を注いでいたが、やがてゆっくりと口を開いた。

「……あの時の赤子が成長し、剣士として王都に現れた時、当時の戦場を見た者は誰もが危惧を抱いた。バインド以来、軍に剣士はいない。再び同じ轍を踏む事を恐れたからだ。そして、レオアリスがその裡に復讐を抱えていないとは、誰にも言えまい。——だが、多くの危惧を余所に王はレオアリスを迎え、近衛師団に配した」

「——レオアリスは、何も知らない」

アスタロトの声はどこか怒ったように響く。それに對して、優しささえ感じられる声でベールは頷いた。

「そうだな。あれを育てた村の者達は、レオアリスに何も告げなかつたのだろう。——その後はお前もよく知つてゐるところ。周囲の危惧はただの懸念に終わつた。当時を知る者が見ても、あれの中に復讐の心を見る事はできん」

「当然だ。レオアリスは王が好きだもん。見てて笑えるぐらい。まるで、

親を慕うみたいにさ」

アスタートらしい言い方にベールは微かに苦笑を滲ませたが、頷いた。

「私も知っている」

アスタートはどうしていいか良くわからずに、長椅子の背凭れに頭を預け、肺に溜め込んだ凝った息を吐き出した。そうしてみても、喉や胸に圧し掛かった重いつかえは取れない。

「——どう言えばいいんだ。私は判つたら教えてやるつて、レオアリスに約束したのに」

ベールにこの喉に被さつた重しを除いてくれと、そう望んだつもりではない。けれどやはり、ベールはそれを取り除こうとはしなかった。
「全てを話すか、それとも伏すか。一一つに一つだ。——だが、全てを知れば、レオアリスはここを離れるかもしれないな」

レオアリスがアス・ウェインから戻つたのは、陽が翳り始めた頃だった。

誰もいない執務室を横切ると、上着を椅子の背に投げ出し、背を軋ませて座る。身体の裡に重い疲労がわだかまつていて。椅子の手摺に肘を置き、その手を額に当てた。

あの兵士の言葉が、意識の上に点り続いている。

負傷者を収容し終わつた右軍を先に帰還させ、レオアリスは暫らく半壊したアス・ウェインの街を眺めていた。漂う血と肉の匂いは吐き気すら催させるものだったが、それすら意識をしてはいなかつた。

感じていたのは、苛立ちだ。

目の前の状況への。それから――

北方辺境軍と近衛師団第二大隊の全滅。

そんな事を、グランスレイが知らない事は有り得ない。
(何で黙つてるんだ)

『過去など、逐一掘り返さずとも良いものじや。掘り返したところで、後悔しか生まぬものもある』

そう言つたのはスランザールだつたか。

扉を二度、叩く音と共に、グランスレイの声が入室の許可を求める。
返事をする気になれず、レオアリスが答えないままでいると、一言断りを入れてグランスレイは扉を開けた。

額に手を当てたまま動かないレオアリスを見て、眉を寄せる。その顔に浮かんだレオアリスを気遣う色に、偽りは見えない。

「上将？ ご気分が優れないようですが……」

普段と変わつた様子もなく歩み寄るグランスレイの上に、尖つた視線を投げる。

(聞くべきじゃないのか)

グラансレイが黙っているのであれば、それ相応の理由があるのだ。

だが、そう思つてゐるにも関わらず、レオアリスは厳しい瞳を副将に向かへた。身の裡に渦巻く疑問が口を衝く。

「……二隊の全滅とは、何だ」

グラансレイが表情を強ばらせ、レオアリスを見た。その表情が、レオアリスの中の苛立ちを一層募らせる。

「……バインドから何かをお聞きになつたのであれば、そのような事」「バインドじゃない」

「——」

黙り込んだグラансレイに苛立ちをぶつけるように、レオアリスは立ち上がり机に両手を叩きつけた。

「黙つてちや分からぬ！　お前はその時軍に居たはずだ！　知らな

い訳がない！」

珍しくレオアリスが声を荒げるのを聞き付け、隣室にいた中将達が何事かと執務室へ姿を見せる。机に手を付いたまま睨み付けるレオアリスの前で、グラансレイは一言も発さず姿勢を正した。

「……何故何も言わぬ。否定も肯定もしないのか」

「私の一存では、お答え致しかねます」

レオアリスは一瞬深く息を吸い込み、それから何かを飲み込むように顔を伏せた。

「上将……」

「——もういい」

「私は決して」「いいと言つてるんだ！」

激しい絶対の言葉に、グラансレイは伸ばしかけた手を止めた。

レオアリスは暫らくの間、机の上についた両腕で身体を支えるようにして顔を伏せていたが、やがて静かに顔を上げた。

既にそこには先程までの激高はない。けれど心の底を覗かせない、閉

ざされたような印象がそこにはあつた。

「怒鳴つて悪かつたな。——少し、頭を冷やしてくる」

そう言うと、顔を背けるようにグラансレイの横を擦り抜ける。執務室の扉を開けた拍子に、戻ってきたロットバルトに肩がぶつかつた。レオアリスの顔に視線を落としたものの、ロットバルトは何も言わず彼を通した。

扉の閉ざされる音が響き、静まり返つた室内を見渡してロットバルトが息を吐く。

（……どうにも、予想以上に早く展開しているな）

「……只今、戻りました」

グラансレイは何かを測るようにロットバルトの顔を見つめた。

「侯爵のご用件は済んだのか」

「ええ。お時間を戴きましたが、もう済みました」

二人とも暫らくの間、お互いの反応を探るように黙つていたが、その沈黙に耐え切れなくなつたクライフが堰を切る。

「何なんだ、全く。副将、何をやってんですか」

「……持ち場に戻れ」

グラансレイが苦い響きを声に宿す。その言葉に、クライフは苛立ちも露わに一步詰め寄つた。今回の件に関して、クライフは起こつた事実しか把握していない。だがその背景に、レオアリスを中心とした何かがあるのだ。

「はあ？　……状況は分からねエけど、そうやつて何かを煙に巻いてるから上将が怒るんじやないですか。いつものあんたらしくもない、一体」

「クライフ。今はやめておけ」

ヴィルトールがクライフの肩を押さえ、扉の方へ向かわせる。クライフはその手を払つてヴィルトールを正面から睨み据えた。

「今言わねエでいつ言うんだ」

向き合つた二人の間に、微かな緊張が生まれる。

「やめましょう。我々が諍つても仕方ない」

フレイザーはそう言って二人の間に入つたものの、やはり翡翠の瞳に納得の色はない。グラントレイに一度だけ視線を投げた。

「——貴男は、もうご自分で消化したものだと思つてましたわ。見込み違いなら失礼」

グラントレイが眉をしかめるのを確認する事なく、フレイザーの姿が扉の外に消える。クライフはまだ何か言いたげに口を開きかけたが、吐き出すように息をつき、踵を返した。

扉の閉まる冷えた音が響く。

ロットバルトは暫らくその場に立つたまま、グラントレイが口を開くのを待つていたが、グラントレイは黙り込み、苦いものを嘔み締めるよう正面を見つめたまま。ヴィルトールも壁に背中を預けたまま動かない。諦めて自席に戻り、脱いだ外套を椅子の背に掛けた。

押させていたものが吹き出して、寒風のように熱を奪つていったように思える。

「……いつまでもこうしていても仕方ありませんね」

グラントレイが視線を上げる。

「侯爵は、どこまで話したのだ」

「どこまで？ 知つてている限りの事は全てでしよう。あの方の目的は私に翻意を促す事ですから」

揶揄する口調にグラントレイはロットバルトを睨んだ。翻意を選ぶ事を是としない、厳しい光がその瞳にある。

「お前は、どうするつもりだ」

その様子にロットバルトは思わず苦笑を漏らした。ここでロットバルトの動向を牽制する位なら、レオアリスに誤解を受けるような態度を取らなければいいのだ。グラントレイの気持ちも分からぬではない。事実を自分の中に飲み込む事と、それは別の話だ。だが、過去を封じ込める時はもはや過ぎた。

「上将が今拘っているのは、隠されている事実に対してもないでしょう。貴方がそうして黙つてゐる事にだ。貴方は、上将が王都にいらした折から彼を見てきている。その中で得たものを言葉にするのは、そう難しい事ではないはずですよ」

「……簡単に言つてくれる」

「事は単純なんですよ。私にとつてはね。選ぶか、選ばないかだ。——貴方もこれ以上複雑にする事はない」

グラントレイがまだ何も動こうとしないのを見て、ロットバルトは肩を竦め、ヴィルトールに顔を向けた。

「ヴィルトール中将。後はお願ひします」

ヴィルトールは壁に凭れたまま、瞳だけを上げて呆れたように苦笑を浮かべる。

「結局、私は板挟みのまんまか」

「戻つて来るまでに、場を収めておいてください」

「やれやれ」

ヴィルトールが了承の意味で片手を上げるのを見て、ロットバルトは再び執務室を出た。

一度中庭を望む回廊から辺りを見回したが、さすがに姿は見当たらぬい。

「ロットバルト」

振り返ると、クライフとフレイザーが回廊の柱の間に立ち止まり、クライフがロットバルトを手招く。ロットバルトは彼らの方へ足を向けた。

「何が、どうなつてんだ」

苛立ちを隠さない声にロットバルトは小さく笑つた。

「私も最初からあの場にいた訳ではない。まあ大方の予想は付きますが、何があつたんです？」

レオアリスがそれをいつ、どこまでどんな状況で知つたのか、それを把握したかつたが、クライフもフレイザーも首を振つた。

「判らないわ。ただ、上将が副将を問い合わせようだつたけれど」

「言やあいいんだ、何だつて。今更隠して何になる。どれ程大した理由

かは知らねエけど、まどろっこしすぎるんだよ」

「そうですねえ。確かに、簡単に口にするには大き過ぎる話ではある。

こうなる前に、副将と話をしておきたかったのですが」

ロツトバルトの言葉に二人は顔を見合させ、それから詰め寄った。

「何か知つてんのか！？」

「聞かせなさい！」

「説明すべきでしようが、まずは上将を探したい。もう少し後に……」

「私が話すよ」

ヴィルトールの声が割つて入り、三人は執務室の入り口に顔を向けた。ヴィルトールはクライフとフレイザーを手招き、ロツトバルトへは行けと促す。そのまま執務室に入らずに回廊を歩きだしたヴィルトールの後を追つて、クライフはその肩に手をかけた。

「どこにいくんだよ。中でいいだろ？」

「副将には、邪魔の入らない所でじっくり考えてもらつた方がいいだろう？」

フレイザーは気遣わしげな瞳を一瞬だけ執務室の扉に向け、それから頷いた。

「まあ、すぐに答えを出されるさ。元々持つてゐる答えだ。さて、ロツトバルト、お前もちゃんと上将を見つけてくれよ。説得はお前が一番巧いからね」

「どこかのんびりしたヴィルトールの口調に苦笑で応え、三人の姿が別の扉へ消えるのを見送つてから、ロツトバルトは改めて考え込むように口元に手を当てた。

レオアリスが一人になる為に行く場所は、大体分かつてゐる。裏庭か、書庫、演習場。裏庭や書庫は大体、呼びに来られる事を見越して行く場合が多い。おそらくは演習場の方だろう。

だが、ロツトバルトが行つてそれを告げる事が、問題を解決するとは思えなかつた。

開く気配のない扉に一度視線を投げてから、ともかくレオアリスを探そうと回廊の出口に足を向けた時、前方からやつてくるアスタロトの姿が見えた。

レオアリスの椅子の背に残された士官服の上衣を眺め、これがなければ少し肌寒いだろうと、グラナスレイはそんな事を考えた。

初めて彼が近衛師団に配属された時、グラナスレイは一隊の左軍中将だつた。今とは逆の立場にあり、レオアリスはまだ十五にも満たない年齢で、今よりもずっと幼さを残していた。

剣士と聞いて不安を覚えなかつた訳ではない。だが王が決めた事、何か深い思慮があるのだろうと、そう納得していた。

最初に配属された小隊にはあまり長くはいなかつたはずだ。彼の能力がその中では上手く機能しなかつた為だ。

強すぎる力は個よりも隊の連携を重んじる小隊には向かず、數日も経たない内に、当時揮下の少将であつたフレイザーが相談を上げてきた。王から預かつた以上、彼をそのままにしておく訳にはいかないと考えたのだろう。

「あまりに力の差がありすぎます。このままでは、剣士である事が強調され、周囲から浮き上がるばかりです」

「皆と同じ剣を使うようにすればいい」

フレイザーは問題にならないと言わんばかりに肩を竦めた。

「無駄ですか。すぐに折れてしまう。負荷に耐えられないのです」

フレイザーは判断を仰ぐようにグラナスレイを見つめたが、黙り込んだ彼に短く息を吐く。紅い髪に映える翠の瞳が苛立ちを隠さない。

「軍が剣士を忌避している理由は詳しく述べません。ですが、それは

過去の話ですわ。今をどうするか、貴男は決めて戴かなくては

「珍しい、随分と親身になるな」

「ご覧になつて戴ければ分かります」

「……どうしろと？」

バインドの記憶は未だに禍々しく残っている。まして、レオアリスはその原因ともなつた一族の、最後の一人だ。剣士としての凶兆、そして或いは復讐者としての凶兆。どちらも無いとは言い切れない。

「とにかく、一度ご覧になつて、ご判断を」

あまり気の進まぬまま演習場に赴いた。フレイザーが示した先に、組む相手も無く演習を眺めるレオアリスの姿があつた。

剣士として覚醒したばかりであつたせいもあるだろう。どこか自分の力を持て余すように壁に背を預けたまま、隊の演習を眺めている。

フレイザーの無言の視線に押され、グラントレイはレオアリスの許に歩み寄つた。

レオアリスとまともに話したのはその時が初めてだつただろう。確かにバインドの印象が強く、関わる事を無意識に避けていた。

だが、初めて正面から向かい合つたその瞳には、かつてのバインドのような翳りは見つけられなかつた。

真っ直ぐ自分に向けられた瞳。

あの時生まれて間もなかつた赤子がこれほどに成長したのかと、感慨めいた驚きを覚える。

黙つたままいつまでも自分を見つめているグラントレイに、レオアリスは諦めたように溜息を吐いた。

「俺は、首ですか」

その様子があまりに残念そうで幼かつた為に、グラントレイは思わず苦笑を漏らした。

「そうではない。だが、隊に馴染まないのも事実のようだ」

レオアリスが唇を噛み締め、肩を落とした。

「しかし、王はお前を敢えて近衛師団にお入れになつた。王の為の力になると、お考えなのだろう」

弾かれるように顔を上げたレオアリスを見て、グラントレイは思わず息を呑んだ。彼がひどく嬉しそうな表情を浮かべたからだ。

その瞳の中にあるのは復讐の意志などではなく、王に対する純粋な憧れだった。

この少年を支える者が必要だ、と強く意識したのはその時だ。

何故そう思ったのかは自分で明確ではない。だが、軍に馴染めず、王都に頼るものもなく、『剣士』という禁忌を背負つたままでは、自分が望めば望むほど、その道行きは苦痛を伴うものになるだろう。

「……無論、我々としてもそうあつて欲しいと望んでいる」

今までの自分を言い繕うようだと思った。背後に立つフレイザーが小さく笑うのが分かる。それを隠すように、グラントレイは殊更厳しい表情を浮かべた。

「何故、王に仕える気になつたのだ？」村の者達は反対しただろう

自分で口にしてから、ひやりと肝が縮んだ。それは彼の過去を直接指摘しているようなものだ。

だが、レオアリスはその言葉に深い反応を示さなかつた。考えを巡らせるように首を傾げる。

「……何故つて言われても。ただ、御前試合があるつて聞いて。確かに爺さん達は反対したけど」

彼の養い親達は、彼に何も告げていないのだろうか。

あの過去を？

おそらくはそうなのだろう。理由など測りようもないが、レオアリスの言葉には自分の過去を知つてゐる様子は少しも見られなかつた。

「さすがに、偉そうな事言つて出てきちまつたから、今更王都じや通用しませんでした、なんて帰つたら、叩き出される」

まだ少年らしい発想に、グラントレイは再び苦笑を漏らした。

一気に吹き出した苛立ちは既に鳴りを潜めていたものの、完全に消えた訳ではなかつた。

情けない態度だと自分でも判つてはいた。本来なら、あの場で飲み込んだおくべき事だったのかもしれない。けれど、どうしても出来なかつた。

(何でなんだ)

誰も彼も、知つていながら隠す。そうしながら、意味ありげな視線を向けてくる。一体何を自分に望んでいるのか、それが判らなくともどかしい。

ふと、レオアリスは瞳を上げた。

バインドが自分に告げた事は、おそらく偽りではないだろう。

なら、自分がここにいる事は、果たして望まれているのだろうか。自分は？

水気を失い始めた草を踏む微かな音を捉え、レオアリスは振り返つた。レオアリスが寄りかかっている演習場の壁伝いに、歩いてくるアスタロトの姿が見えた。

ゆっくり歩み寄りながら、アスタロトは鮮やかな紅の瞳でレオアリスの顔を見つめる。レオアリスの顔に昇つたいつもは見せる事のない戸惑つた表情に、小さく笑つた。

(情けない顔だな)

アスタロトの指摘に、レオアリスが自嘲するように口元に笑みを浮かべる。その笑みをアスタロトはただ黙つて眺めた。

告げるつもりでここに来たのに、いざ本人を前にすると言葉が出てこない。

喉も胸も、いまだに重い。先ほどの声は少し掠れたが、気付かれなくて良かったと思つた。

(いつも通りに笑え)

アスタークトはレオアリスに真っ直ぐ視線を向ける。

レオアリスの過去がどうだろうと、何も関係ない。アスタークトはレオアリスに会つてから、結構楽しい。おもねる事も、距離を置く事もなく、身分もない。

『アスタークト』を継承した時から、そんな相手はもう望めないとつ

ていた。だから余計、嬉しかったのだ。

レオアリスは、自分がアスタークトだと知つた後も何も変らなかつた。当たり前の事だ。自分も変らない。

二人は演習場に張り巡らされた壁に寄りかかるようにして座つた。顔は中央の広場に向けたまま、アスタークトが懐かしむような響きで口を開く。

「……覚えてるか。初めて会つたときのこと」

「忘れる訳ないだろう。まだあれからそんなに経つてない」

ひどく長い時が過ぎた気がするが、レオアリスが王都へ来てからまだ三年も経つていないので。

初めて出会つたのは、西方の深い森の中だ。まだレオアリスが剣士として覚醒する前の事で、初めは術士として王都に上がるつもりでいた。王の御前試合には参加資格が必要で、レオアリスはその資格を得るために途上だつた。

「最初、食おうと思つたんだよなー」

レオアリスは前を向いたまま眉根を寄せ、何の話なのだろうかと一瞬考え込んだ。

「——誰を」

「お前」「……はあ?!」

慌ててアスタークトを振り返ると、アスタークトは何故かうつとり瞳を細めている。

「だつて、森ん中をずつと歩き回つてて、すつごい腹減つてたんだもん」

(——こいつ、マジっぽい……)

「…………」

（——うあ……）
とんでもない事をさらりと口にされ、レオアリスは頭を抱えて胡坐を組んだ膝の上に屈み込んだ。

「信じらんねえ」

レオアリスとしては、村を出て、ほぼ初めて巡り合つた相手が目を疑うほど可愛い少女で、少しばかり、正直に言えば当時はかなりどぎまぎとしていたのだ。それがよもや、食われかかっていたとは。

（丸呑み？ やっぱ丸呑みか？）

「食わなくて良かつた」

レオアリスの苦悩は知らず、呆れて上げられた顔を見つめ、アスタークトは、と悪戯っぽく笑つた。ほつそりとした腕で両膝を抱え込んだまま首を傾げ、からかうようにレオアリスの顔を覗き込む。

「面白かった。へつぽい術でさー、御前試合に出ようなんて、いい根性だと思つて」

「……うるせえな」

「自分が剣士だつて事も知らないでさ」

アスタークトは膝の上に顎を載せ、目の前の広い演習場に視線を戻した。

「お前が、王都に来て良かつた」

レオアリスは浮かべていた呆れと抗議の入り混じつた表情を消し、漆黒の瞳でアスタークトの横顔を眺める。一人の他に誰の姿も無い演習場内は静かで、遠くの街のざわめきがここまで微かに届いていた。

アスタークトの言葉が、黄昏時の冷えた風に力強く刻まれる。

「何があつても、私はお前の友人だからな。忘れんなよ」
真っ直ぐに自分に向けられた深紅の瞳。その瞳を見返す。

「——話せよ。聞いたんだろう」「聞いた」

『全てを話すか、それとも伏すか。二つに一つだ。だが、全てを知れば、

レオアリスはここを離れるかもしれない』

ベールの言葉がちらりと頭に浮かぶ。

それでも目の前のレオアリスの瞳には、過去を受け止めようとする色がある。

「なら、頼む。知りたいんだ」

(大丈夫)

アスタークトはもう一度その顔を見つめ、息を吸い込むように唇を開いた。

「——十七年前、北方で反乱があつた」

アスタークトは言葉を紡ぐ。それはまるで刃物のように、喉を切り裂く感じがした。

「反乱を起こしたのは、レオアリス、お前の一族だ」

束の間の沈黙の後、レオアリスの瞳が大きく見開らされる。

色を失ったその瞳に、アスタークトの裡に一瞬強い後悔が生まれた。

だが、伝えると決めたのだ。既に口火は切つた。今さら消し去ることなどできはしない。

迷いを振り切るように、アスタークトは声の響きを強めた。

「詳しい経緯は知らない。ただ切っ掛けは、剣士の一人が辺境軍の小隊を切り捨てた事だつて話だ。——多分、お前の育つた村の者が詳しいだろう」

『反乱』——。

その言葉は、初めまるで意味のある言葉として頭に入つてはこなかつた。

自分の一族が、誰に対しても……?

軍に。

——いや。

それは雷光のようないれオアリスの脳裏に閃いた。

王に。

「——は」

笑おうとしたのに、声は出ない。喉が引きつるよう震えただけだ。強い眩暈を覚えて、レオアリスは乾いた草の上に片手を付き、上体を支えた。開いた片手が無意識に胸元の青い石の飾りを握り込む。

漸く、判つた。誰もが口を閉ざし、触れないように秘していた訳。バインドのあの言葉。

眩暈がする。

まず浮かんだのは、当然の疑問だ。

(——何で、俺はここにいるんだ?)

王の敵を排撃すべき近衛師団に、何故。

アスタークトは口を閉ざし、俯いたレオアリスの顔を覗き込む。

「……大丈夫か?」

「——ああ」

足元が、柔らかい綿にでもなつたように頼りなく感じられる。地面がそこにある事を確認するかのように、レオアリスの指が枯れかけた草を握り込んだ。草は容易く千切れ、吹き抜ける風に舞う。

だが、最初の衝撃が過ぎれば——、その二文字はやけに空虚に感じられた。

実感などない。

そんな立場の自分が今ここに居る事を疑問に思いはしても、反乱を起した自分の一族に対する、同調も反発もない。

それは彼等が顔も知らない、遠い存在だからなのかも知れなかつた。

「……まだ先は長い。続けるぞ」

レオアリスが黙つたまま頷くのを視界の端に收めながら、アスタロトはベールから聞いた話を感情を交えない声で淡々と反復していく。そうしないと、何も言えなくなる気がする。

「——戦いは長引いた。配備されていた北方軍には、鎮圧する力はなかった。まあ、相手が剣士の一族じや仕方ない。けど、圧倒的優位に立ちながら、不思議と反乱は辺境から広がる事は無かつた。だから、反乱の理由は不明確なんだ」

片膝を抱え込み、その上に顎を載せるようにして演習場の広場に顔を向けたまま、レオアリスは黙つてアスタロトの言葉を聞いている。

「暫らく戦局が動かないのを見ると王は近衛師団を送つた。バインドがいたからだ。バインドは当時、並ぶ者がない剣士だつたらしい。……最初は、バインドが上手く反乱を抑えかけたかに見えた。——でも

同じ剣士との戦い。

剣を交え、相手を切り裂く内に、バインドは狂つていった。

「……狂つた？」

レオアリスの瞳が形容しがたい色を浮かべ、アスタロトに向けられる。身の裡で、剣が微かに脈打つ。

「そうとしか言い様が無かつたみたいだ。敵も味方も、構わず斬りはじめたんだから」

「——」

当時の戦場からの急使、事後の調査、それから次第に形を帯びた戦場の様子は、誰をも絶句させるに足るものだつた。

バインドは徹底的に切り刻んだ。

手当たり次第、敵味方関係なく。

少しでも、目の前に動くものは全て。

北方軍、近衛師団ともに、死者の半数以上は、敵ではなく味方であるバインドによつて命を断たれたのだ。

バインドはあらゆるものを持ちきながら、やがて剣士の里に辿り着いた。その頃には、既に反乱軍と鎮圧軍という図式は崩れ去り、バインドを抑える事こそが、戦いの目的に刷り変わつていた。

それが

「唐突に——」

バインドが消えた。

そして、

「そこに、お前がいたんだ、レオアリス。赤子だつたお前は、バインドが消え、お前の一族が滅びた後の村に、ただ一人残されていた」

炎の中に泣き声を上げていた赤子。

遠からず焼かれて命を落としていたであろうその赤子を、炎の中から救い上げたのは、王自身だつた。

王が何故そうしたのかは判らない。反乱を起こした一族が既に滅びた今、もはや咎を負う必要もないと、そう考えたのか。

赤子は、剣士の里のすぐ近くにあつた村に預けられた。

口を閉ざしたアスタロトの横で、レオアリスは黙つたまま、自分の手の上に視線を落とした。交わす言葉もなくただ座つてゐる二人の足元では、枯れかけた芝が、落ちかかつた長い陽に細かな陰影を作つてゐる。やがて深い溜息をついて、アスタロトは静かに立ち上がつた。まだ座り込んだままのレオアリスに視線を落とす。

「——私は行くよ」

見上げたレオアリスの上には、アスタークトが恐れていたような感情の色は見つけられ無い。だがもつと感情を露にされた方が、不安を感じずに済んだかもしれないと思つた。

「……私が言つたこと、忘れんなよ」

アスタークトの表情に、レオアリスが苦笑を浮かべる。

「なんて顔してんだ」

不安が、おそらく顔に出ていたのだろう。

「ふん。お前のせいじゃないか」

むつとして顎を逸らしながら、いつもと変わりの無いレオアリスの口調に、漸くアスタークトの胸の裡が少し軽くなつた。レオアリスが肩を竦める。

「悪かったな。……少し、混乱してるだけだ」

アスタークトはその顔を暫らく眺めていたが、一つ溜息をつくと、腕を伸ばしてレオアリスの頭をぱしつと叩いた。

「さつさと帰れよ。お前の隊、お前の事心配する奴らばつかじやん。ガキじやないんだから、あんまり心配せんna」

アスタークトと別れても暫ぐの間、レオアリスは演習場に張り巡らされた壁に背中を預けたまま、次第に暮れて行く空を眺めていた。

探していた過去は、自分の想像以上のものを秘めていた。だが、それをどう受け止めるべきなのか、全く見えてこない。

指先が胸元にかけた青い石の飾りを弄ぶ。

『お前自身の為じや』

スランザールの言葉が、脳裏を過り、ふと瞳を上げる。

レオアリスがここで今までやつてこれた理由、それは一重に彼等の態度の故ではなかつたか。

敵愾心や自分を疎む気持ちの見える者もいたが、グラントスレイヤーアヴァロン、スランザール、そして、王。

過去を知つてゐるはずの彼等の中に、自分に対する負の感情を感じた事はなかつたようだ。

王は何を思つて、自分をその懷に受け入れたのだろうか。

自分に何を望んでいるのだろう。

レオアリスがその剣を向けるとは考へていないのである。

(……剣を、向ける?)

何故だろう。いくら自分の心の中をさらつてみても、その考えはあるで見つからない。

もつと時を置き、その事実を自分の中で現実として捉えたならその思いが生まれるのかもしれないが、今はそうは思えなかつた。

赤い落日が長い影を差す。

斜陽に染められた演習場は、まるで炎の中にあるように感じられた。この色は好きではない。眩暈がする。

ぐらりと深渊に踏み込んだ意識が、それを切り裂いた焰に引き戻される。

その焰を知っている。

(——バインド)

近衛師団第二大隊と北方辺境軍、そして、自分の一族を滅ぼした男だ。周囲を焼く赤い炎。自分はそれを見ていたのだろうか。

レオアリスの中の剣が、どくんと鼓動を刻む。

バインドを斬る。それが今レオアリスのすべき事だろう。

だが、何の為に？

王城に侵入した者としてか。エザムとアス・ウイアンを焼いた者としてか。

それとも、自分の一族を滅ぼした者としてか——。

どれも、今のこの曖昧な迷いを打ち消す程の相応しい理由には思えなかつた。

レオアリスは立ち上がり服に付いた草を払い、演習場の門へと歩き出した。そうしたものの、その足をどこへ向けるべきか決めかねている。

このまま近衛師団に戻って、それでどうすればいい？

いつも通り、何も無かつたように振る舞えるとは思えない。

(——)

厩舎にはハヤテが待っている。ハヤテの翼なら、一晩も飛ばせば故郷の村に着けるだろう。

(爺ちゃん達、元気でやつてんのかな……)

口の中で呟くと、堪らなく祖父の顔が見たくなった。それはただひたすら、その想いだけだ。

全て放り出してあの家に帰つたら、祖父は何と言うだろう。怒るだろうか。

(だって、何でもないじやないか)

ここで。

この場での、自分の立場は、何だと言うのだろう？

反逆者か、王国の兵か。

周囲は、どちらである事を求めているのだろう。

厩舎の木戸を押し開けると、銀翼の飛竜が待ちかねたように長い首をもたげた。レオアリスへ首を伸ばして背に乗れと促す。首筋に手を置くと銀の鱗はひやりと心地よい手触りを伝える。

(——お前、北に行くか？ それともどこか行きたい所はあるか？)

ハヤテは丸く青い瞳を不思議そうに瞬かせ、再び帰ろうと云うようになに置かれたレオアリスの手を押した。

この飛竜は、大将に任せられた時、王から賜つた。疲れを知らない疾い翼が気に入っている。北の辺境にも半日程で辿り着く。

だが、王から賜つたものだ。

レオアリスは首を傾げるハヤテを見つめた。

(……悪いな。今日はここで休め)

レオアリスは一度その首を軽く叩き、置いていた手を下ろした。

ハヤテが呼び止めるかのように高い声を上げるのを、背中で断ち切るようにして厩舎の扉を出る。

演習場は王都の周辺部にあり、正面の道は王城に向かい、左右へ延びる道は王都の外周を巡りながら各方面の街道と繋がっている。ここから北方に行くには、北の街道は正反対の位置にあつた。外周をぐるりと回るよりも正面の道を城下に向つた方が近道になるが、当然のことくそれは王城の傍を通る事になる。

行く先を未だ決めかねたまま、レオアリスはいつもの習慣で正面の道を歩き出した。

左右を木立に囲まれた石畳の道を辿ると、すぐに巨大な門が聳える。門は常に万人に開かれており、それを過ぎると城下の街に入る。門の向こう、夕闇が迫る街には、至る所に明かりが灯り、旅人に長い道行きの終わりを知らせていた。

門を潜った瞬間、それまでの牧歌的な風景は一変し、雑多とした色彩が互いに争うような、賑やかな街並が広がつた。そこかしこに燭蝟の灯りが溢れ、昼とは違つた喧騒に満ちている。

王都は各地から様々なる種が集まる埠頭であり、特にこの辺り、下層と呼ばれる地区は雑多な感が強い。酒、賭博、喧嘩、流血沙汰も珍しいものではない。陽が落ちると袖を引く街娼達の姿が街角に立ち、半ば公然とそこにある遊廓。地下では禁制品が売買され、表に出ることのないの商業網が確立されている。

以前行つたミストラ山脈の街の闇など、ここは比較にならない。

世界の中心に開く巨大な花が、その広げた花弁の一枚一枚に抱え込む複雑な影。

自分も、その影の中の一つにいるのだろうか。

レオアリスは王城の外門へと続いている広い道を選んで歩く。陽が落ちてきたこの時分の方が、この辺りは賑やかだ。通り沿いに犇めき合う屋台、立ち並ぶ店は建物の二階や地下にまで軒を競つていて。

ただ慣れない者が一人で歩くには少し危険を伴う場所である。道端や屋台の奥に屯しているのは、一癖もありそうな顔ばかりだ。左右には細い路地が幾筋も伸びていて、その奥は迷路のように複雑に入り組んでいる。

吹き抜ける風に肌寒さを覚え、レオアリスは今更ながらに上衣を着てこなかつた事に気が付いた。陽が落ちた後では、薄い半袖の服一枚だけでは不十分だ。

周囲の建物の窓に灯る明かりが、温度を持つて感じられる。

(……そう云えば、クライフはこの辺に住んでたな)

込み合つた街並みに目を向けて歩いている内、ふとクライフが王城から遠い下町に好んで住んでいる事を思い出した。中将ともなれば王城内の士官区に官舎が支給されるのだが、この辺りは種々様々な住人達がいて面白いのだと言つていた。

あの後どうなつただろう。彼等の戸惑つた顔が脳裏に浮かぶ。引っ搔き回すだけ引つ搔き回して、何も言わずに出てきてしまつた。

彼等が、事実を知つたら、どう思うのだろう。

レオアリスはピタリと足を止めた。それでいて、止まつた足に不思議そうに瞳を落としている。

(……行こう)

促すように思つてみても、止まつた足は動く気配を見せない。

第一、どこに行くと言うのだろう。

地面に貼りついたように動かない足は、問いかけてくるようだ。

どこに？

(知らない。でも、ここで立ち止まつたつて仕方ないじやないか)

もう一度歩き出そうとした時、不意に肩に何かが勢い良くぶつかり、レオアリスは体制を崩して石畳に片手を付いた。荒れた怒鳴り声といくつもの軽い塊が降りかかる。

「道の真ん中でボケツとしてんじやねえぞ！」

片手を付いたまま振り返りかけた肩を、再び靴底が蹴り付ける。石畳に打ち付けそうになつた肩を押し留め、身体を起こした。

「なん……」

訳の判らないまま、レオアリスは漸く振り返り、自分の前に立ちはだかつている男を見上げた。

「てめえのせいで大事な商品を落としちまつたじやねえか。どうしてくれんだ」

見回すと、石畳の上に藤で編んだ籠が散らばつていて。どうやらぼうつと道の真ん中に立つていて、ぶつかつたらしい。

レオアリスは足元の籠を手に取つてひっくり返してみたが、どこも壊れた様子もない。

「……拾うのは手伝うよ」

差し出しかけた籠を、男は乱暴に払つた。

「バカか、てめえは。弁償しろって言つてんだよ！」

気の弱い者であれば竦み上がりそうな声音だったが、レオアリスは石

畳に座つたまま、ただ空になつた手を振つた。

「壊れないだろう」

レオアリスの様子に男は僅かに面食らつたように顎を引いたものの、すぐ殊更に口元を歪めて見せた。こんな場所でぼうつとしているのは、いい鴨以外の何者でもない。

「おいおいおい、正氣で言つてんじやねえだらうなあ？」

男はレオアリスの胸ぐらを掴み、引きずり上げると、威嚇するように顔を寄せた。

レオアリスは眉をしかめ、視線だけで周囲を見回したが、通りにいる者達は見て見ぬ振りで足を早めるか、面白い見ものでも眺めるように笑いを浮かべているだけだ。要は難癖を付けるたかりのようなものかと、レオアリスは溜息を吐いた。

（めんどくせえ……）

「汚れちまつただろうが。これじや商品になんねえだろ、なあ。てめえがボケツと突つ立つてやがるからよお」

「避けりやいいじやないか」

「てめえ、誰に向かつて口利いてんだ？！俺は」

レオアリスは溜息を吐き、胸元を掴んだ腕を手の甲で跳ね上げると、素早く掴んで背中に捻上げた。関節が反対方向に捻られて軋み、男は途端に悲鳴を上げた。

「いい加減にしろよ。不当な商売は……」

そう言い掛けて、レオアリスはふと口をつぐんだ。
(何やつてんだ、俺)

こんな場所で乱闘でもするつもりなのか。それとも、近衛師団の権限で取り押さえるか。

そうするのは簡単だが、全身に貼りつくような億劫さを感じた。

そもそも、今の自分にどこまでその資格があるのか。

「おい、若いの。いい加減手を放しな。ここで調子に乗つて、後でどうなるか判つてんだろうな？」

横合いから声がかかり視線を向けると、今までただ道端で眺めていた男達の一人が立ち上がつて、周囲に屯していた男達の目付きも変わっている。

「……こいつが難癖を付けて来たんだろう」

「調子に乗るなつて……」

「待て、そいつは近衛師団だ」

別の人気が詰め寄ろうとした男を制し、レオアリスを指差す。

「近衛師団！」

驚いたように周りの男達も改めてレオアリスを眺めた。確かに、軍服の上衣が無いために判りにくいか、両脚の脇に入った独特の銀線を認め、男達は躊躇うように顔を見合せる。

それは全く違う躊躇いの表情だったが、レオアリスは無性に苛立ちを覚えた。

「……師団だつたら、どうだつて言うんだ」

苛々と男達を睨み付ける。こんな時に騒ぎを起させば、ただ問題があつたというだけでは済まないかもしれない。ちらりと過つたその考えに、更に苛立ちが増した。どうでもいいとさえ思う。過去だの、近衛師団の立場だの、自分にあるのはそんなものばかりだ。

様子ばかり伺つていないので、決めてくれればいい。

「中途半端じや、気分が悪いだろ」

だが男達は既に関わる気が失せたようだ。気勢を削がれた顔で、道の端に座りなおす。

「意氣がるんじやねえぜ、若いの。そいつを着てるから無事で帰れるんで

勝手に自分の立場を判断しているのが、気持ち悪い。

近衛師団とは関係なくなるかもしないんだと、そう言つてやつたらどうなるだろう。

「師団兵さんよ、さつさとそいつを放して消えちまいな」

レオアリスは何か言おうかと口を開きかけたが、結局何も言わずに唇を引き結んだ。

苛立ちは、気持ち悪さに取つて変わっている。どうでもいいから、早くこの場を離れたかった。

捻り上げていた男の腕を放るように放し、踵を返す。

暫くの間、周囲の視線はレオアリスに注がれていたが、やがて興味を失つて逸らされた。

早足で歩く内に、気持ちの悪さも影を潜めていく。一つ息を吐き、レオアリスは歩調を緩めた。

大通りの少し先の右手に、中層区へ抜ける為の『門』が見えてくる。

通りはまだ先へ続いているが、通りの流れに乗るように、『門』へ足を向けた。『門』には扉の変わりに、薄く光を放つ幕のようなものが張られている。通り抜ける瞬間に一瞬だけ浮遊感を感じたものの、すぐにそれは消えた。

『門』抜けたそこは既に中層区との境で、水路が道を横切るように流れている。いつ通つても、良く出来た仕組みだと思う。王都の術士達の技術には感心させられる事ばかりだ。先程の場所から歩けば、ここまで一刻以上はかかる。

ただ、それだけの距離を一瞬にして移動した事によつて、正面に聳える王城の影もまた、急速に濃さを増した。結局のところ、何の答えもないままに、次第に距離は近づいて来ている。レオアリスは一度だけ背後の『門』を振り返り、僅かに躊躇う素振りを見せたものの、再び歩き出した。

水路に架かるゆるやかな半円を描く橋を渡る。その橋を越えると、街

の様相が僅かに変わり、商人や職人達の多く住む地域に入る。この辺りには、商店や職人達の工房が区域内に数多く存在している。通り添いの店はまだ軒を開け活気に満ちていたが、先程の下層区とは水路一本隔てただけで、落ち着いた佇まいを見せていた。

とりとめも無く、石畳の道を歩く。歩く事で考えが纏るかと思つたが、思考はあちこちに飛びばかりで一向に向かう道を見い出しそうには無かつた。

ふと眼を上げると、前方から數名の近衛師団兵が近づいてくるのが見え、レオアリスは咄嗟に横道に逸れた。路地の壁に背を預け、王城からの帰途なのだろう、彼らが通り過ぎるのを見送る。

第一大隊の兵では無い事にほつと息を吐き、それから自分の行動に情けなさを覚えた。黒い生地の服は、あちこち砂埃に塗っていたが、払う気にもなれなかつた。

(さつきつから何やつてんだ、俺は)

今も別に隠れる必要はない。自分の過去がどうであろうと、今立場が変わつた訳でもないのだ。レオアリスは自嘲の息を吐き、路地の壁に寄り掛かつたままその場に座り込んだ。

細い路地には誰の姿もない。そのまま壁に頭を預けるように頭上の狭い空を見上げる。暮れていく空に、星が輝き始めている。
(何をするつもりなんだ)
曖昧なのだ。全部。

怒りがあれば、畏れがあれば、悲嘆や喪失、憎しみ、その一つでも自分の中に明確にあれば、足を向けるべき先もまた明確だつただろう。

それら全てが曖昧な故に、どこに進むべきか、それが判らなかつた。
(――何を、したいんだ)

もう一度自分に問い合わせた時、緩く傾斜のついた路地の奥から微かな金属音が響いてくるのに気付き、レオアリスは視線を向けた。

複数の金属音が何かを弾くように規則正しく流れている。レオアリス

は咄嗟に入つたこの路地がどこに続いているのか、今更ながらに思い出した。

立ち上がり、僅かに躊躇つてから、音の流れてくる方へと歩き出す。おそらく追い払われるだろうと思いながら、今はそれが無性に見てみたかった。

金属音は次第に大きく、高くなっていく。

緩やかに登る路地を抜けると、面前に小さな丘が開ける。丘の周囲にはまた王都の街並みが続いていて、家々の窓に灯る灯火が、光りだした天空の星々よりも明るく散りばめられていた。

開けたその場には、煉瓦造りの黒ずんだ壁をした小屋が三棟立っていた。

地面を覆う短い下草が小屋の周囲に行くほどに、小屋から後退するように戸口を覗かせている。三つの小屋の一つから、止まる事を知らないうに黒い土を覗かせていた。止まる事で足を止めた。

開け放たれた戸口に近づくにつれ、周囲の温度が上がっていくのが感じられる。レオアリスは戸口の前で足を止めた。

覗き込むと、小屋の中には一層強い熱気が満ちていた。

中央に鉄を溶かす炉が明々と燃え、その周囲では数名の鍛冶師達が黙々と、手にした鎧を赤く焼けて輝く鉄に振り下ろしている。

打ち下ろす度に火花が散り、鉄が少しづつ形を変えていく。

周囲を一瞬、強い輝きで照らし出す。

それは生命の煌めきのように美しい、息の詰まる光景だ。鍛冶師達が一心不乱に剣に魂を注ぎ込んでいく。

ふいに、戸口の傍で剣を打つていた鍛冶師の汗と熱で赤く染まつた顔が上がり、入り口に立つレオアリスの姿を捉えた。

老齢に近いその鍛冶師は、途端に苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ口を開きかけたが、ふと口を閉ざし、じつとその姿に視線を注いだ後、

手元に視線を戻した。

剣を傍らの水桶に浸ける。たちまち激しい音を立て、水蒸気が立ち昇る。

鍛冶師は黒く沈んだ色を取り戻した鋼を、燃え盛る炉に差し込んだ。普段ならレオアリスが入り口に近づくのを眼にしただけで、怒鳴りつけて門前払いを食らわせるはずのこの鍛冶師が、今は一言も発さない事は、逆に僅かな居心地の悪さすら感じさせた。

「……見ていいのか。」

鋼を打ち延べる複数の音が重なり、さほど広くは無い鍛冶場の中に響いている。鍛冶師はちらりとその視線を投げただけで、片時も手を休めず鎧を振り下ろし続ける。

「そこから近寄ンじゃねえぞ」

ぼそりと告げられた渋みを含んだ声に、レオアリスは心外そうに苦笑を漏らした。

「いくら何でも、近寄っただけで折れる訳ないだろう」

「信用なんねエ。一体何本俺の打った剣を折りやがったと思つてんだ」にこりともしない鍛冶師を前に、レオアリスは戸口に手をかけたまま視線をさまよわせた。他の鍛冶師達は視線すら寄せさせない。

炉と剣が放出する熱に汗塗れになりながら、黙々と鎧を振るい続ける姿に、これほどまでに精神を傾けて打ち上げる剣を次々と折られるのは、確かに腹に据えかねるどころではないのだろうと、そう思った。

「悪いと思ってる」

「悪いで済むか。ひとが魂込めた剣をよオ」

相変わらず手を休める気配も無いが、乱暴な物言い程には、その声に嫌悪の響きはない。

「大体何の用だ？ お前が使える剣はここにやねえぞ」

「ただ、見ていたいだけだ」

レオアリスがそう言うと、鍛冶師は荒っぽい動作で肩を竦めた。

「けッ、物好きなガキだ。剣士がこんなモン見て、何が面白いんだか」

「面白い。——まるで、剣が、命を得ていくみたいだ」

鋼から飛び散る火花、振り下ろされる鎌の音。一振り一振りに込められる魂。

その音を聞き、一瞬に燃え上がり散つては消える火花の輝きを見ていると、余計な思いが全て流れ落ちていく気がする。

波打っていた心が深い湖のように凧ぎ、その底に沈んでいる想いを覗き込めそうな気すらした。

「……ふん、好きにしろ」

再び鎌を振り上げ、打ち下ろす。水に浸し、炉に戻す。

次第に形創られて行く剣。意思を持たないそれは、使い手に何をもたらすのだろうか。

鍛治師は打ちかけの剣を目の前に持ち上げ、暫くためつすがめつ検分していたが、やがて小さく舌打ちして手にしていた鎌を振り上げると、一息に叩き折つた。思わず息を呑むレオアリスに構わず、折れた鋼を再び炉に投げ入れる。

「おい、せつかく……」

「納得いかねえ」

そう吐き捨てて、鍛治師は厳しい表情のままレオアリスを見上げた。「見させてくれ」

唐突に請われて、レオアリスは思わず辺りを見回した。

「何を」

「何をだあ？」寝呆けてンじやねえぞ。決まってンだらうが、テメエの

剣だよ」

鍛治場で剣士が剣を抜く事に僅かに躊躇いを覚え、鍛治師の浅黒い顔を見つめる。だがその上にある真剣な表情に、レオアリスは鳩尾に右手を当てた。

ずぶり、と手首まで呑まれ、洩れ出した青白い光が鍛治場に満ちる。

呼び合うように響いていた鎌の音が止まり、鍛治師達が顔を上げた。

右手をゆっくりと引き抜く。

宵闇を切り裂く光と共に現れた長剣に、鍛治師達の口から溜息にも似た声が漏れた。

目の前の青白い光を纏う剣に視線を吸い寄せられたまま、鍛治師は感嘆を隠そともせず、半ば独り言のように呟いた。

「簡素な剣だ。何の氣負いもてらいもねえ。……それがこれほど、見る者を惹き付ける」

引き寄せられるように手を伸ばして刀身に触れ、剣を受け取る。だがレオアリスの手を離れた瞬間、剣は輝きを消した。

「ちッ、つれねえ奴だ。主以外に興味がねエか」

一度名残惜しそうに掲げて見上げた後、レオアリスに戻すと、剣は再び美しい輝きを纏つた。

「いい剣だ。俺達が目指してるのは、こんな剣なのかも知れねえ」

レオアリスの顔に目を止め、太い眉を上げる。

「何、妙な面してやがる」

「……いや、誉められるとは思わなかつた。嫌われてるとと思つてたからな」

意外そうな響きに、鍛治師はしかめ面を浮かべてレオアリスから視線を逸らした。

「ふん。こんな剣、嫌える刀打ちあいねえよ」

そう言って背中を伸ばすように立ち上ると、鍛治師は汗と熱で贅肉の削げ落ちた身体をレオアリスに向けた。

「変な野郎だな、テメエは。怒鳴られんのが判つてんのにしょっちゅう来やがる。バインドはこんなとこ、見向きもしなかつたぜ」

あまりにもあつさりとその名が語られた事に、驚くレオアリスの横を抜け、戸口で立ち止まる。

「テメエ等、手エ休めんな。……おい、風に当たんねえか」

レオアリスの返事を聞きもせずさつさと小屋の外に出ると、戸口のす

ぐ脇の壁に寄り掛かり、懐から煙管を取り出して火を灯した。黙つたままのレオアリスに構わず、吸い込んだ煙を吐き出す。白く細い煙が踊るように立ち昇り、鍛治師の視線がその煙を追つて動いた。

「……どうやら生きてやがるらしいじやねえか」

「——知つてゐるのか」

「知つても何も、俺あ奴が掛け値無しに嫌いだつた。野郎の剣は独善の剣だ。他の誰の為のものでもなく、ましてや王の為ですらねエ」

吹き抜ける風が、煙管から立ち昇る煙を吹き散らす。

「俺達あ、王の為に剣を打つ。毎日毎日汗水垂らして肌あ焼いて、そりや全部王の為だ。その先にある國の為だ。テメエの隊がしじゅう剣をぶつ壊してくれてもよオ、そんなら次あもつといい剣を打つてやる」

少しも和らぐ事のない目元に、だがどこか暖かさを感じさせる色を浮かべ、鍛治師はレオアリスを見た。

「お前を嫌いじやねえのは、それが結局同じ事だからよ。——お前の剣が、王の為にあるからだ」

弾かれたようにレオアリスが瞳を見開くのを、可笑しくもなさそうに眺め、ひよい、と煙管を裏返すと火種を足元に落とした。火の消えた煙管を銜え直し、レオアリスに背を向ける。

「ま、その内テメエでも折れねえ剣を打つて見せらあ」

鍛治師が小屋の中に消えると、すぐ新たな鎧の音が響き始めた。その確かな力強い音を聞きながら、レオアリスは戸口の横に立ち止まつたまま、自分の鳩尾に視線を落とした。

（王の、為の——）

鍛治師の言葉は、温かい血が全身に行き渡るように、身体の隅々に染み込んで行く。

身の裡の剣が、ゆつくりと鼓動を刻む。

思わず込み上げた笑いを抑えるように、レオアリスは瞳を閉じた。ひどく単純で、だが一番大事な事を、忘れていた。

——何の為に、自分は王都に来たのだったか。
状況に囚われ過ぎて、見失っていた。

自分が今ここにいるのは、王に仕える為ではなかつたか？

明確な理由などない。

それでも、育て親の反対に耳を傾ける事も無く、頼る当てもない王都に一人こうしてやってきたのは、その漠然とした、けれども強い想い故だ。

過去や立場など、始めから無い。

閉じていた瞳を上げる。

そこに、強い光を宿した。

「……良くここが分かつたな」

「簡単な事です、と言いたいところですが、ここまでしか貴方の情報が無かつたもので。八方手分けして探させる訳にも行かないでしょう」

「……」

僅かに迷つたものの、レオアリスは再び演習場へ戻つた。長い時間近く衛師団を開けてしまつたが、先ずは置いてきてたものを連れ帰らなくてはいけない。

背後では王都が光を型どつて夜の闇にくつきりと浮かび、そこから届く僅かな薄明かりの中、秋の虫達の音色が競うように聞こえてくる。久しぶりに感じた穏やかな夜の気配だ。

人影の無い演習場の門を潜り、すぐ右手にある廄舎の木戸を押し開ける。

廄舎の中は灯りが抑えられ薄暗かつたが、僅かな光源でも光を纏う銀翼の姿はすぐに見て取れた。飛竜の前に見覚えのある影があるのに気付き、レオアリスは思わず足を止めた。

ロツトバルトはレオアリスの姿を認めると、左腕を胸に当て深く頭を下げたまま、レオアリスが歩み寄るのを待つた。ゆっくりと頭を上げ、

レオアリスの上に視線を落とす。その頬に微かな苦笑が過ぎる。

「……また随分と埃塗れになられたものだ。一体何をされていたんです？」

気が付けばまだ服のあちこちに、白く砂埃がついたままだ。

「いや、まあ……」

さすがに下層で揉め事になりかけたとはみつともなくて言えず、レオアリスは曖昧に口の中で呟いて、服の埃を払う。

ここに誰かがいるとは思つていなかつた為少し驚いたものの、それでも目の前にいるのがグラансレイでは無かつた事に僅かに安堵を覚え、それから苦笑に似た溜息を洩らした。

どんな顔をしてグラансレイと向き合えばいいのか、いまだに躊躇つている。しかし、いきなり顔を合わせずに済んだと安堵する反面、ある種の落胆も感じていた。

確かに、それは余りに情けなさ過ぎる。レオアリスが飛竜の柵に歩み寄ると、ハヤテが嬉しそうに長い首をもたげて顔を摺り寄せる。レオアリスは艶やかな鱗に手を当て、詫びる代わりに数度叩いた。

「それで、ずっとここに？」

「近衛師団に戻られるのに、貴方が彼を置いていく訳がない」

近衛師団には戻らなかつたかも知れない。そう言おうかとも思つたが、今更それは大した意味の無い仮定だと気付く。

「私もまあ、居ませんでしたとただ帰るのでは、面目が立ちませんからね。父に偉そうな事を言つた手前もある、正直申し上げれば、ここに戻つて戴けてほつとしましたよ」

「……侯爵に？ 何を……」

問いかけて、皮肉を込めて口元に笑みを浮かべたロツトバルトの顔を眺め、口を閉ざす。ロツトバルトはある意味で一番、事実を伏せていた側に近づけるところにいるのだ。軍内にばかり目を向けていてそこまで思い至らなかつたが、ただ思いついたとしても、それをロツトバルトに頼むという気にはならなかつただろう。そこはレオアリスの関わらない、複雑な部分だ。

「……余計な事をさせたな」

「特には。まあたまには会話くらい必要ですよ」

レオアリスはすぐ隣のロツトバルトを見上げた。

「――聞いたんだろう」

「聞きました」

余りにもあつさりと言つてのけられ、レオアリスは次に言うべき言葉を搜して口籠つた。だが灯りを落とした廄舎内の薄闇の中できえ、ロツ

トバルトの顔にこれまでと違う色は認められない。柵に片手を置いて、開いている手でハヤテの頭を撫ぜる。ハヤテは何故主がいつまでも自分に乗らないのか、不思議そうに青い瞳を瞬かせている。

「——それで」

「それで、とは?」

問い合わせられてレオアリスが再び口籠もると、ロットバルトは声に可笑しそうな色を滲ませた。

「今更私の意見など、必要の無い顔をされていますが?」

確かにそれで自分の意思が変る訳ではないのは分かつていたが、敢えて口に出したのはその事を確認する為だ。

「率直な意見を聞きたい」

ロットバルトは一度レオアリスの顔を見返し、口を開いた。

「では、私の個人的な見解を述べさせて戴きますが……。関係ありますね」

「……はあ?」

「貴方の過去がどうであろうと、大して問題ではないと、そういう事です」

あっけに取られて目の前の参謀官を見つめる。

「私は貴方の背景を見て、貴方に仕える事を選んだ訳ではありません」

「——随分、簡単に……」

悩んだ自分が滑稽に思える。だが、結局はそういう事なのかもしれない。今思えば、アスタロトもまた同じ事を言つていた。

「貴方もそうでしょう。」

「貴方が王に仕える事と、貴方の背景とは関係ないはずだ」

レオアリスは驚いた瞳をロットバルトに向けた。そのまま暫く黙つていたが、やがて俯くと、小さく笑い始めた。すぐに肩を震わせ、声を立てて笑う。

「……相当俺は、自分を見失つてたらしいな」

迷っている自分よりも先に、周囲の方が正しい答えを見つけている。多分、そういうものなのだ。落ち着いて振り返り、ゆっくりと自分と

周囲を眺めれば、答えはどこかしら存在している。

どう選ぶか、それだけの事だ。

「シスファン大将との面会について報告を上げようと思つていましたが、たつた半日の間に随分状況が変わりましたね」

ロットバルトの言葉にレオアリスは改めて頷いた。バインドがアス・ウェイアンに現れた事も、アスタロトが語った過去も、たつた半日の間に起こつた事とは思えない程だ。

だが、疲労を感じていたのはそれまでの事で、全ての事実が見えた今、逆にわだかまつっていた疲労はきれいに流れ落ちている。

道は選んだ。後はそれを進むだけだ。

その前に一つだけ、きちんと筋道を付けておかなければならない事がある。

「……師団に戻る。それから」

ロットバルトが軽く片手を上げ、レオアリスの言葉を遮る。視線を上げた先の顔が、面白そうな笑みを浮かべた。

「どうやら、あまりにお戻りが遅いので、心配になつたようですね」

「?」

ロットバルトの視線が厩舎の扉へ向けられる。それを認める前に聞き慣れた足音を捉え、レオアリスは扉を振り返つた。

足音は厩舎の入り口で躊躇うように一瞬止まり、それから扉を押し開けた。再び入り口のすぐ傍らで静かに立ち止まつてから、グランスレイは厩舎の薄い光の中に踏み込むと、無言のまま頭を下げた。

つい先程までどんな顔をして会えばいいのかと、躊躇いすら感じていた相手を前にして、レオアリスはほんの一瞬だけ気まずそうに視線を落とした。

けれど、すぐにその視線を真っ直ぐにグラントスレイへと向ける。

長い事レオアリスはグラントスレイに眼を向けたままだったが、やがて静かに口を開いた。グラントスレイの耳に届いたそれは普段より固い響きだが、そこに恐れていた色はない。

「もう一度だけ聞く。バインドの事を、知つているな?」

グラントスレイは覗き込む漆黒の瞳を見返した。常に正面から向けられる瞳。この瞳から逸らない事が、彼を信じる証といえた。そして、グラントスレイが選んだ道もある。

「知つています」

「俺が軍に……王都に来る前からか」

「そうです」

レオアリスはグラントスレイを見据えたまま、僅かに眉を歪めた。呆れた響きと共に肺から大きく溜息を吐き出す。

「まつたく……」

二年間、それを知りながら、ずっと自分を支えて来たのかと、感嘆とも苦笑ともつかない想いが湧く。

一度眼を伏せ、それから再び視線を上げた。そこにあるのは、いつも変わらない強い意志の光だ。

「王にお会いする。その手続きを取つてくれ」

「お会いになつて、何を」

だが聞かずとも、その眼の光から、答えは判つていた。

「決まつてる。——王から直接、バインド討伐の許可を戴く」

王を守護すべき近衛師団の将として、バインドを討つ。レオアリスが出した答えに、グラントスレイはゆっくり頷いた。

「早速、王へ上申いたしましよう」

グラントスレイは一度姿勢を整えると、左腕を胸に当てる。深く上体を折つた。

ここには、それを伝える為に来たのだ。

「お戻りを——剣士レオアリス」

執務室の扉を開けると、思い思いの場所で黙り込んでいた中将達がさつと顔を上げた。入って来たレオアリスの姿を確認し、緊張した面持ちで立ち上がる。

一番最初に口を開いたのはフレイザーだった。

「——おかえりなさい」

柔らかい笑みと単純なその言葉が、僅かに躊躇いを覚えていた気持ちを溶かす。思えば初めて近衛師団に配属された時も、フレイザーはこうして笑って迎えてくれた。

「……ただいま」

レオアリスが照れくさそうな顔をしながらも頷くと、クライフがほつとしたように息を吐いて、それから大股で歩み寄った。

「探しに行こうかと思つてたんすよ。ロットバルトに任してたら、日が暮れたって戻つてこねえし」

にやりと笑つてレオアリスの前に立つ。扉の前にいたロットバルトはただ肩を竦めた。

「ヴィルトールから大体は聞きました。正直言つて驚いたなんてモン

じやないんですが、でもそれよりも先ずは腹立つてンですけどね」

そう言うとクライフは一旦言葉を切り、唇を曲げ眉をしかめてレオア

リスを眺めた。

「水くせえですよ。上将も、副将も。言つてくれりや、いくらだつて手伝つたのに」

「お前が口を出したら、事をややこしくするだけだ」

ヴィルトールの言葉に、クライフは首を巡らせて後ろを睨み付けた。「そういう所が十分ややこしいつつーの。大体お前だって黙つてたくせに口出すな」

「全てがお前のように単純じやないんだよ。残念だけど」

「てめえ、本っ当」

「悪かった。——一人で何とかしようつてのは、考えが甘すぎた」

ヴィルトールに身体を向けかけていたクライフの前で、レオアリスは静かに頭を下げた。クライフが慌てて手を振る。

「やめてくださいよ。頭を下げて欲しいとかそんな事言つてんじやなくて」

「そうです。大将がそう簡単に部下に頭を下げるものじや」

「もう一つ、勝手を言わさせてもらう」

中将達は顔を見合わせ、それから姿勢を正した。

「——一隊に、バインド討伐の許可を戴くつもりだ。直接は俺が出る。ただ命が下されれば、動いてもらう事になるだろう」

バインドの力は既にエザムとアス・ウイアン、それよりも十七年前の一件で証明されている。軍を動かす事は、例え最終的にレオアリスがバインドを倒したとしても、犠牲を出す事も考えられる。

「これは俺個人の問題でもある。だから、選んでくれて構わない。」

必要なのは王の下命であつて、彼等の犠牲ではない。バインドを抑える事が出来るかと問えば、正直に言つてしまえば、その確信はまだレオアリスの中には無かつた。

「——それが水くせエつて言うんですよ」

「当然、上将がどうお考えだらうと、私達はそのつもりですわ」

「よく、考えて……」

もう一度、促すように彼等を見回した中で、ヴィルトールが灰銀色の瞳を真っ直ぐにレオアリスに向けた。

「結局どの時点であつても、軍とバインドとの衝突は避けられません。現時点で近衛師団が出ず、——貴方が出なくとも、バインドは同じ事を続けるでしそう。結果が同じなら、早期に手を打つた方がいいと思いますよ。」

ヴィルトールの言葉に全員が頷く。クライフはもう一度、にやりと

笑った。

「決まりですね。まあ、ロットバルトにきつちり戦術考へて貰いましょう。人探しは苦手だろうけど、当然本来の役割だ、いい手考へ付くよな？」

向けられたからかう視線をロットバルトは事も無く返す。

「剣士相手に策ですか。私なら先ず、退けと言いますがね」

「役立たね……」

扉が開き、グラントスレイが戻つてくる。室内を一度見渡してから、レオアリスの前に立ち、一礼した。

「王への面会の許可が下りました。すぐにお会いいただけると仰せです。仕度を整え、王城へ参りましょう」

「今……？」

こんなにも早く面会が叶うとは考へていなかつた。瞳を見開いたレオアリスへ、グラントスレイが促す表情を向ける。

レオアリスは瞳を伏せ、自分の鼓動を数えた。

一つ、二つ、三つ——

意志は変わらない。

王に目通りする事を考へれば、過去を知つた今でさえ、震えるような喜びを覚える。

何故と問いかけても、答へのない感情だ。

瞳を上げる。

「——行こう」

そう言ふと踵を返し、レオアリスは扉へと足を向けた。

冷えきつた王城の廊下を歩きながら、グラントスレイは数歩先を行く年

若い上官の背を見つめる。壁の所々に設けられた灯火が、レオアリスの姿を夜の闇に浮かび上がらせ、また闇に溶かしていく。

闇に溶けた先に、今よりももう少し背の低い彼の姿が浮かぶ。

レオアリスは兵法などを始めとする様々な知識を、驚くほどの速度で吸収した。グラントスレイや他の中将達と戦術を論じ、その切り口に驚かされる事もしばしばあった。

任務において功を重ね、次第に、だが確実に彼の師団内部での位置は固まって行つた。

剣士が禁忌となつたその理由を知るごく一部の者以外には、曖昧模糊とした剣士への忌避よりも、その剣の強さに対する驚嘆の思いの方が強くなつていつた事もある。

レオアリスが近衛師団に配属されてから半年も経たない内に、隊内の剣士に対する否定的な見方は、ほとんど消えていた。

レオアリス個人によるものも大きかつただろう。連携を重んじる隊というくびきから少し離れた位置に身を置けば、レオアリスはすぐに誰とも親しくなつた。

レオアリスを中将に、そして大將に推したのはグラントスレイだ。

グラントスレイはかつてのレオアリスの姿と、今日の前を歩く彼と比べるように、もう一度その後姿を見つめた。

思えば初めてレオアリスと正面から向きあつた時から、こうして彼の下に付き、彼を支えるようになる事を、何の違和感もなく受け入れていたように思う。

今まで上官だった者を飛び越えて、急に命令を下さなければならない立場になり、レオアリスは当初随分戸惑つっていた。その事に煩わしさを感じていたと言つてもいい。

できればあまりしがらみのない場所に居たかつただろうレオアリスを大将へ推したのは、そこが最も彼の能力が生かされる場所であろうと考えた故だ。

周囲に軽んじられる事のないよう、事ある毎に口調を改めさせ、それも今ではすつかり板についている。

尤も、どこか碎けた飾り気のない態度だけは変わることなかつたが、

それは逆にレオアリスの魅力でもあり、表面では嗜めはするものの本気で改める必要はないと思つてゐる。

まだ青年とも呼べない程の若い将だが、今ここを越えれば、おそらく彼はその先に、もつと大きな未来を向かえるだろう。

可能であれば、自分がそれを見届けたい。

謁見の間の前まで来ると扉の前で立ち止まり、レオアリスはグラナントレイを振り返つた。促すように頷いてみせると、レオアリスは再び扉に向き直る。

巨大な両開きの扉は音も立てず、ゆっくりと開いた。

広大な広間には、扉から深緑の絨毯が最奥の玉座へと真直ぐに敷かれ、その左右には一抱えもある柱が等間隔に並び高い天井を支えている。

定例の謁見の際などには、その奥にすらりと諸侯が控えるが、今はそこには誰の姿もない。

レオアリスは足音を吸収する絨毯の上を玉座へと進んだ。

一段高く造られた玉座へと昇る階段の前に、左右に分かれて立つ四つの影がある。それを認め、グラナントレイは小さく息を呑んだ。

四大公——ベール、ベルゼビア、ルシファー、アスター。

(定例の謁見ではないのに、彼等が顔を揃えるとは……)

「王に対して僅かなりと翻意が見えれば、いつでも討てるようにな」

グラナントレイの思考を読んだかのよう、ベルゼビアが低く忍び笑う。

「どう見えるか?」

向けられた身を凍らす冷たい瞳に、グラナントレイは心臓を掴まれるような感覚に陥つた。ベルゼビアは四大公の中で、最も冷酷な男だ。冗談めかしてはいるが、もしレオアリスの上にそれを見たと思えば、躊躇いも無く手を下すだろう。傍らのレオアリスをちらりと見たが、レオアリスは彼等へ真っ直ぐに顔を向けたままだ。

「東方公、それ言うだけ無駄つて判ると思うけど」

アスターの呆れた声がその場の緊張を溶かし、グラナントレイは漸く息を吐いた。アスターの横に立っていたルシファーが穏やかな笑みを二人に向ける。波打つ漆黒の髪を首の辺りで短く揃え、暁の空のような紫の瞳を持った、アスターとはまた違う透明な美しさを持つ女性だ。

「そう構える事はないわ。レオアリスが王都に来た時こうして迎えたよう、今この場を見届ける為にいるだけ。そして我々が、この場の証人となる」

レオアリスは彼等の前まで行くと、その前に片膝を付き、深く頭を下げた。壇上の玉座は、今はまだ空のままだ。

鼓動の音が響くように感じられる程の静寂の中、ベールが低く告げた。

「御前だ」

一斉に四大公が片膝を付く。

微かな衣擦れと共に玉座の背後の長布が左右に開き、その奥の扉から、アヴァロンを伴つて王が姿を現した。

一度その場を睥睨し、玉座へゆつたりと身を預ける。

広間が、王の力に満たされ張り詰めていく。四大公すら、その空気に僅かに身を震わせた。

王が玉座へと着いたのを確認し、ベールは顔を上げ、レオアリスへと視線を向けた。

「直接の口上を認める」

跪いたまま、レオアリスは頭を下げた。

「近衛師団第一大隊大將レオアリス、御前での拝謁を賜り、恐悦に存じます」

「バインド、か」

伏せていた瞳を上げると、王はレオアリスの上に金色の瞳を投げた。低く流れる声に、レオアリスは一層深く頭を垂れる。

「畏れながら申し上げます。バインドが向かつたと思われるの、北の

辺境です。本来管轄でない事は十分承知の上です。——第一大隊に、バインド討伐のご命令を

四大公がそれぞれ、僅かに視線を交わす。

「面を上げよ」

王の言葉に、レオアリスは伏せていた上半身を起こし、壇上の玉座に座す王に視線を向けた。

身を覆い尽くす、強大な力の波動。それはこの広間の隅々にまで余すところ無く満ちている。

心地良さと恐怖とが、跪いたレオアリスを覆う。

「……そなたはバインドについて、どこまでを聞いた」

「——私自身に、関わる事を」

グラナスレイには、自分の鼓動の音が、広間に割れ鐘の如く響き渡るようと思える。長い間、誰も何も言おうとせず、その時間は永遠のようにも感じられた。

王は玉座の肘置きについた右腕に頭を預け、暫らくその瞳をレオアリスの上に注いでいたが、やがてゆっくりと口を開いた。

「近衛師団を動かす許可は与えられん」

その場の全員が、呪縛を解かれたかのように、身じろぎをして王に顔を向ける。

視線を落とし言葉を失つたレオアリスを見て、グラナスレイは思わず伏せていた顔を上げた。
だがグラナスレイが口を開こうとする前に、アスタロトが壇上をきつと見上げる。

「何故ですか？」レオアリスが離反すると、そう思つてゐるなら

王の元に詰め寄らんばかりのアスタロトの肩を、ルシファーがやんわりと押さえる。

王は彼等の驚きや戸惑いを前に、低く笑つた。

「勘違いをするな。バインドを相手に軍を動かす事は、無意味だと言つ

ておるのだ。それはそなた達も良く判つていよう」

玉座の背に預けていた体を起こす。ゆらりと、広間全体の空気が揺らいだ。

「剣士レオアリス」

弾かれるようにレオアリスは顔を上げた。

「バインド討伐はそなた自身に命じよう。見事打ち倒し、我が前に戻れ」

一度だけ、大きく瞳を見開き、レオアリスは深く頭を下げた。

暗紅色の長布を翻して王が玉座を立つ。全員が首を垂れ見送る中、玉

座の背後の扉の前で、王はふと足を止めた。

「——まだ、そなたは全てを聞いてはおるまい」

訝しげに王を見上げるレオアリスに、深い金色の瞳を注ぐ。その瞳の中に読み取れる感情は無い。

「そなたの養い親に会うといい」

問い合わせる間もなく、王の姿は扉の奥へ消えた。

「上将お一人で、行かれるのですか!?」

「そんな無茶な話、何でそのまま納得して来られたんです!」

一人執務室に戻ってきたグラансレイの言葉に、クライフやフレイザーがグラансレイに詰め寄る。ヴィルトールとロットバルトは非難こそ口にしなかつたが、その顔の上には到底承服しかねる色が浮かんでいた。

「バインド相手に軍を出す意味はない、王はそのおつもりで命を下された」

フレイザーは不服そうに目の前の顔を睨んだ。

「ではせめて、我等のうち一名だけでも、上将の傍にお付けください」グラансレイは考え込むように彼等の顔を見渡した。王は軍を動かす事は認めず、レオアリスにだけ討伐を命じた。

確かにたつた一人で行かせる訳にはいかない。だが、その事が王に背いたと指摘される事にも繋がりかねない。王からではなく、他の諸侯から。

批判の糸口をこれ以上広げさせるべきではない。

「——ロットバルト。上将に付いて、北方へ向かえ」

ロットバルトは微かに目を見開き、それから笑った。

「私の立場なら、それほどの咎を受けまいとお考えですか」

ロットバルトの指摘に、グラансレイは僅かに口籠る。彼の本来の身分を考慮したのは事実だ。ヴエルナーという地位を背景に持つロットバルトならば、諸侯の批判の声は封じ込める事が出来る。

「……そういう意味だけではない。お前なら預かる隊も無く、かつて上将に伴つて郷里を訪れた事もあるだろう。それ故、適任と考えたのだ。不服か?」

「いえ。喜んで参りましょう。まあバインド相手では、私が力になれる

事はほとんどないでしょうが」

グラансレイは不器用だと、ロットバルトは心の内で笑う。ただ違う

と言えばいいものの、彼の性格ではそれはできないのだろう。

今回その実直さが少しばかりの不安を招きはしたが、だからこそレオアリスもまた、彼に全般の信頼を置いているのだ。

「上将は一刻後、夜明けと共に発たれる。戻つて準備をし、再びここへ」

「承知しました」

夜明けまで、それほどの時間は無い。ロットバルトはグラансレイに一礼すると、踵を返して扉に向かった。

けからかもしれないし、命を捧げる程の想いからかもしれない』

王都を覆う夜の帳が、ゆつくりと西に後退していく。

澄んで冷えた大気が、厚い石造りの城内にも静かに染み込んで、それが全ての音を吸収しているかのように思える。王の執務室の中にもその冷気が室内を覆うように漂っていた。

『レオアリスは、北方へ向かいました』

傍らに立つアヴィアロンに視線を向け、王は無言のまま頷く。

養い親に会えば、レオアリスは十七年前に時起こつた事とその理由の、全てを知るだろう。知った時に、どうなるのか。

自分を憎み、敵対する者となるか。

それとも。

王は何かを期待するかのよう、薄く笑みを浮かべた。

それからふと、次第に白み始めた夜のじじまに金色の視線を注ぐ。あれはいつの——どこの戦場でだつただろうか。

もう既に遙か遠い過去のようにも、昨日の事のようにも思える。時間は王にとつて、それほど意味を持たずに流れていく。

あれは、バルバドスの戦乱の折だ。ならば三百年ほど前の事か。

あの時の彼等は、王国の要請に応えて戦場に赴いた。

あの、剣士。

一度だけか、直接話す事があつただろう。

屍の山の上、紅い夕日と返り血を全身に浴びて、笑つた——。

『いづれ得られるだろう、王よ。貴方なら』

『不思議なものだ。俺達は闘う為に生まれる。他と馴れ合はず、受け入れず、ただ切り裂く者としてのみ、存在する』

『それなのに時折、心に入り込んでくる者がある。ほんの些細なきつか

『ただ、そうなれば、俺達は剣だ。その相手、それだけを守るための剣として、自らの生にもう一つの意味を得られる』

あの剣士は、未だその相手を得ていないと言つていた。

『剣士にとつて、その剣を捧げるべき相手を得る事は、何ものにも変えがたい喜びだ』

第
四
章

雪がひとひら、にび色の空から落ちて地に辿り着く前に溶けた。

次第に数を増し、ゆっくり、やがて次々と、終りなく落ちてくる。瞬く間に茶色の土や枯草が白く覆われていく。

周囲を深い森に閉ざされ、背後には低く幾つもの山が連なる。そしてその更に奥には、再び鬱蒼とした森が広がっていた。

北の辺境を覆う黒森、ヴィジヤ。それを抜けた先は最早、王の版図ではない。

外界から隔絶された土地に、寄り添うように建てられた粗末な家々。その上にも、白い幕が容赦なく降り募っていく。

「これが始まつたら、ここは暫くの間は雪の中だ」

ロットバルトを振り返り、レオアリスは懐かしむように空を見上げた。

この北方の辺境では、冬は一年の内の半分近くにも渡り、世界を閉ざす。

「よく、ずっと雪が降つてくるのを見てたな。——何か案外飽きないだ

ろ」

様々な軌跡を描きながら落ちてくる雪は、見ていてつい引き込まれる。この村で、雪が音もなく降つてくるのを眺めながら、色々な事を取り止めも無く考えた。

それは一族の事だつただろうか、自分の未来の事だつただろうか。

一番は、この厳しい地で、決して豊かではなく、それでもこの土地に寄り添うように暮らしている、彼等の事だ。

白く染まり始めた細い道を、自分が暮らした家へと向う。

『そなたの育て親に会うといい』

彼等はどんな事を知っているのだろう。もう大抵の事では驚かないと思ひながらも、僅かな不安と、久しぶりに祖父の顔を見れるという懐かしさに、レオアリスは足を早めた。

長老は時期外れの帰郷に、驚いた顔を上げた。

「珍しい事じや。年に一度しか帰らぬ奴が」

そう言いながらも、手にしていた書物を脇に積み上げた本の山の上に置くと、嬉しそうに立ち上がり、囲炉裏の一角を開けてレオアリス達を手招いた。

「お久しうぶりです」

ロットバルトが会釈をすると、長老は表情の読み取りにくい鳥に似た顔の上に、確かに笑みを載せる。

「まだ、これの傍にいてくださるか。有難い事だ」

「どういう意味だよ」

囲炉裏の前にあぐらをかいて座り込み、レオアリスは祖父を睨んだ。「周囲に支えてもらわねば、お前のような若造が、まともに上になど立てまいて」

「——知ってる」

長老は自分もレオアリスの前に腰を降ろしながら、少し意外そうに顔を傾けた。囲炉裏に掛けられた鍋から湯を器に酌み、二人の前に置く。仄かな香草の香りが狭い室内に漂った。

「ほお。成長したものだ」

からかうような響きにレオアリスは不満そうに頸を逸らせた。

けれど、レオアリスが望むままに動けるように、グラансレイを始め、一隊のそれぞれが様々な配慮をしている事は、良く判っている。

普段口に出す事こそないが、自分一人で生きているのではない事は、常に実感していた。レオアリスが今の位置にいるのは、彼らが在つてその事だ。

自分の一族は王に對して反乱を起こしたという。

本来ならば近衛師団にいるどころか、生を持つてゐる事すら不思議な

立場だ。

それでも今ここにいるのなら、それはその時その時に、誰かが手を差し伸べてくれて来た結果なのだろう。

既にレオアリスの中に迷う心はない。自分が望むのは、近衛師団にあつて王に仕える事だ。何故その事に、ここまで強い思いを感じるのかは分からぬ。

だがその事は今回の件を経て、今まで以上に強く心の中に根を下ろしている。

木のはぜる音と共に、囲炉裏の中の炭が崩れる。レオアリスは赤く熱を発する炭火に向けていた顔を上げ、長老の落ち窪んだ瞳を捉えた。

「教えて欲しい事があつて來た」

「——ほう」

「めんどくさいから單刀直入に言うぜ。俺の一族について教えてくれ。

それから、——バインド」

長老はしばし、じつと囲炉裏の上に視線を落としていたが、やがて深い溜息と共に顔を上げた。

「知つたか」

肺から押し出すようなその声には、苦しみと、どこか開放にも似た安堵の響きがある。

「バインドが、王都に現れた」

弾かれるように長老は腰を浮かせた。その拍子に脇に積んであつた書物が崩れる。表情の掴みにくくその顔に激しい驚愕と憎悪が交じり、身体を支える為に付かれた手が、囲炉裏の縁の木枠を強く握り締めた。

「——まさか。……死んだと」

「……思われてたみたいだな」

祖父の見せた激しい感情に驚きを覚えながらも、レオアリスは立ち上がる。すると祖父の横に行き、崩れた本を拾い上げた。

「相変わらずごちやごちやしてんなあ」

所狭しと書物や薬草が積み上げられた壁際にそれらをまとめて置き、改めて祖父の脇に座り直す。再び、じっとその顔を見つめる。

「——生きてて、まだ斬り続ける」

「……会つたのじやな。バインドと」

「ああ」

長老はすぐに呼吸を落ち着け、静かにレオアリスを見た。既にその面からは憎しみの色は影を潜め、入れ替わるように深い悲しみが広がつていく。

「——どこから、話すべきか。……やはり、我等とお前の一族との関わりからじやろうの……」

口を閉ざせば聞こえるのは、囲炉裏の炭のはぜる音と、沸きあがる湯がしゆんしゆんと立てる音だけだ。

降り続ける雪に音を吸い取られるような静寂。

長老は暫らく黙つたまま、立ち昇る湯気を追う様に視線を上に向けていたが、やがてゆっくりと口を開いた。

「——我らは、かつて忌み族と呼ばれた」

彼等——剣士の一族に出会ったのは、それほど昔ではない。レオアリスが生まれる僅か一年前、ほんの十八年ほど前の事だ。

『忌み族』

訪れる地に災いを呼ぶとして疎んじられる種族をそう呼んだ。

疫病、灾害、飢餓。偶然か必然か、そう呼ばれる一族は確かに、災いのある場所にその姿を見られる事が多い。根拠のない迷信に近いものではあったが、石を以て追われる事が常だった。

カイルが長として一族を率いるようになつてから、どれほどの時が流れたのだろう。数年か、数十年か。常に疎まれながら生きるには、例え様ようのない長い月日だ。

一箇所に落ち着く事が叶わず、各地を点々としながら漸く北の山脈の麓に辿り着き、誰も住み着くものがない凍つた大地の上に、細々とした村を作り上げた。一年の半分近くが雪で閉ざされるそこでなら、誰からも忌まれる事なく、ひつそりと暮らしていけると思ったのだ。

その山脈の更に奥に広がる深い森、黒森の中に、彼らの——剣士の一族の里があった。

剣士の存在を知つた時、村人の誰もがこの地を離れる事を考えた。自分達が忌み族と知られれば、おそらく剣士達はこの村を、瞬く間に滅ぼしてしまうだろう。

だが——ここを出て再び彷徨う事は、抑えがたい疲労を伴つた。剣士達の存在を恐れながら、それでも安住を求める心を捨てられないまま、不安の内に日々を過ごした。

けれども、日々の中で剣士の一人とも出会う事はなく、次第に恐れる気持ちは薄れ、不安は和らいでいった。

誰も、この地には来ない。
もはや憎しみをぶつけられる必要はないのだと。

一度目の厳しい冬を越し、短い春を終えようとしていた頃の事だ。

薬草を摘みに数名で森の中に入り、そこで一人の若い男に出合つた。初めカイル達は他者の存在に怯えさえ覚え、極力係わり合うのを避けようと、すぐにその場を離れるつもりだつた。

だがその青年は周囲を見回し、しきりに思い悩む様子が見て取れる。カイルが思わず道に迷つたのかと声をかけると、青年もまた驚いた顔をしたもの、どこかほつとした色を浮かべた。

どうやら家にひどい怪我を負つた者がいるらしく、薬草を探しに来たのだがどれが効くのだから良く分からないのだ、と下生えに眼を落として手を付けかねたように溜息をつく。

確かに森の中は様々な野草が至る所に生え、薬草に疎い者にはどれが何の効能を持つのか、一見して見分けは付かないだろう。カイルは周りを見回し、一番良く効く薬草を見つけると、それを示した。

「お前さんは運がいい。今の時期しか花を咲かせんものじやが、その花弁なら、深い傷でも七日ほど塗布しておれば塞がるじやろう。ただ磨り潰せばよい」

そう告げると青年はひどく嬉しそうに笑い、礼を述べて教えられた薬草を摘むと森の奥に消えた。

他者と関わる事には僅かな不安を覚えた。反面、もうずいぶんと長い間他者と言葉を交した事すらなかつた自分達にも、まだ礼を言つてくれるものがあつたのだと、その事が心を暖めた。

数日後、その青年がふらりと村に現れた。彼は驚く村人達の前に、森

で獲つたらしき獸を差し出した。

「あんた達のお陰で助かった。結構マズイ傷だつたんだ。これはその礼だ」

自分達は肉を食べないのだというと、精悍な面にばつの悪そうな色を浮かべる。

「そりや逆に悪い事をしたな。ま、狩つちまつたし、里に持ち帰つて食うか。——別の礼をするよ。何がいい?」

「特には。それよりも、あの薬草のみでは傷は塞がつても、体力まではなかなか回復しないじやろう。今、煎じ薬を持つてくるから、戻つたらそれを飲ませてやるといい」

青年は驚いたようにカイルを見ると、再び嬉しそうな顔を見せた。
「礼に来て、また助けられるとはな。——俺は、ジン。この奥の里に住んでる。最初に言つておくが、剣士つてヤツだ」

長老の顔に浮かんだ驚きの表情を眺め、青年は面白そうに笑つた。

「やつぱり知らなかつたな。安心しろよ。何も取つて食う訛じやない」
それから、今まで周囲に集つていた村人達が怯えるように後退つたのに気付き、困つたように黒い髪をくしやりと交ぜる。

「剣士つてそんなに印象悪いか?」

カイルは慌てて首を振つた。

「い、いや。すまんの。わしらは——剣士を見たのは初めてじやて、少し驚いておるのだ」

それはただの言い訳というだけでもなく、本当に彼には好ましい印象しか抱いていなかつた事もある。それに剣士とはもつと恐ろしい姿なのだろう、と漠然と考えてもいた。

「それならいいけどなあ。でもここに移り住む時、周りの奴等から俺達がいるのは聞いてたんだろ? それでわざわざ住み付くんだから随分胆の据わつた奴らだつて、うちじや話題になつたんだ」

「……いや、知らなんだ」

「何だ、怖がつてない訛じやなかつたんだな。でも珍しいぜ、こんな辺境に好んで住むなんて。一年の半分近くが冬だ。あんまり寒さに強そくにも見えないけどなあ」

それについては曖昧な返答しか出来なかつた。青年は残念そうな様子しか見せず、取り繕つたように聞こえなかつたかどうかは分からない。

自分達が忌み族と呼ばれる者である事を知られれば、この青年はやはり剣を抜くかもしれない。

今までどれほどそれを経験しただろう。
浴びせられる石つぶて、罵声、嫌惡の眼差し。時には武器を以て追われた。

けれど青年はそれ以上詮索する事もなく、受け取つた煎じ薬にもう一度礼を言うと帰つていつた。

よほど怪我人を癒せた事に感謝しているらしく、あれ以降は獸こそ持つてこなかつたものの、何かしらを手土産に持つてきては、村人達と言葉を交わした。

一人の時もあれば、数人を伴う事もあつた。怪我をしていた剣士を伴つて現れた事もある。
その男は青年より十は見た目も上で、髭を蓄え、一見して学者風にも見える。

「俺の義兄なんだよ。見た目はこれだけどすぐかつとなつちまつてな、お陰で要らん負傷が多いんだ。この通りすつかり良くなつたけど、今回ばかりはさすがに爺様達に会わなきや死んでたぜ」

青年の口調は軽やかだつたが相当に深刻な傷ではあつたのだろう、男はゲントと名乗り、カイル達に歩み寄りその手を取ると、氣難しいそうな顔に子供のような笑みを浮かべ、やはり何度も礼を述べた。

彼等が村を訪れるにつれ、次第に彼らの事も判つてきた。

剣士達はカイル達の生活に興味を持ち、術や薬草について様々な質問をし、またカイル達では困難な作業を良く手伝ってくれた。

カイル達の種族は元々力も強くない。自分達で建てたあばら家は、先の冬に雪の被害を受けあちこちが壊れていたが、それを補強してくれたのも彼等だ。木を伐る時は斧など必要とせず、一人剣士が黒森まで行つて斬つてくるという。

「やり過ぎるとヴィジヤが怒るから、結構気を使うけどな。けど意外とそこが剣の制御の訓練にもなる。だから一番制御飛ばし易いヤツに行かせるんだが、大抵ゲントかな。良く失敗して伐りすぎてるが」

「義兄に冷たいと思いませんか」

彼はカイル達に訴えるように溜息を向けたが、黒森の樹を伐ること自体カイル達には恐ろしい事で、何とも返事をしかねた。カイル達は森に入るのでさえ常に細心の注意を怠らない。

しかし黒森に暮らしている事さえ、彼等は楽しんでいるようだった。

「失敗するはどうなるのじや。殺されてしまうのか」

村人達が恐々と身を乗り出すと、青年はあっさりと笑つた。

「それは無い。まあヴィジヤは優しいから、二、三日出してくれない程度さ。けど奥に行つちまうとでかいのがいるからな。ゲントはそれでこないだ一戦交えて、腹を半分喰われかけて帰ってきたんだ」

黒森の奥深くには、強大な魔物が棲むと言われている。その魔物に喰われかけたと聞いて、カイルは驚いた。あの時渡した薬草は、そこまで深い傷に対応できるものではない。第一そんなものと戦うなどと、想像も及ばないものだ。

剣士の回復力の高さ、戦場での強さの一端を垣間見た気がした。

里人の数はそれほど多くは無い。青年を含め、里にいるのは全部で二十名にも満たない小さな部族のようで、皆外見は若いが成人ばかりで、幼い子供は無かつた。

青年は中でも一番若かつたが、どうやら一族の長であるらしかつた。「一応、まとめ役が要るから。」

剣士達の誰もが笑つてそう言い、実際彼等の中にも長というほど取り立てた上下関係は感じられない。

ただ青年が常に首に掛けていた青い石のついた銀の飾り、それは長が受け継ぐものなのだと聞いた。

「誰が一番強いのか」

やはり興味を覚えてそう尋ねると、皆迷わず青年を擧げる。実際に彼が剣を持つ所を見た事などなかつたが、剣士達の誰もが彼を誇りにしその強さに憧れを抱いていた。

夏も盛りになる頃には、カイル達の不安は薄れていた。

巷で殺戮者として恐れられ、自分達が存在を知られる事を恐れていた剣士達は、付き合つてみれば自分達と何ら変わることなかつた。

そして不思議と、全く性質の異なるはずの彼等と気が合つた。

ただ切り裂く存在として恐れられていた剣士。何がそうさせていたのかは分からぬが、もはや彼らを恐れる気持ちはどこにもなかつた。

ただ、自分達が忌み族と呼ばれる者である事実を、彼らに告げられないでいる事に対する罪悪感は、日増しにカイル達の中で大きくなつていつた。

隠したくないという思いと、告げる事で彼らの視線が変わる事を恐れる気持ち、その二つが常にカイル達の心の中についた。

ある時、青年が一人の女性を連れてきた事がある。冬の前だつただろう。

芯の強さを感じさせる、凛とした美しい女性だつた。青年と同じ漆黒の髪が、しなやかに背の半ばまで流れている。

「紹介するよ、俺の妻だ」

「彼女は青年の傍らで頭を下げ、穏やかに微笑んだ。

「これはまた、美しい女性じやの」

当然カイル達と美の基準など違つたが、自然とそう口から出たのは、内面から照り映えるような美しさを感じたからだ。その理由は、すぐに分かつた。

「いい女だろ。けど剣も気も滅法強くてさ。口説き落とすのは命懸けだつたんだ」

こつそりカイルの耳元で囁き、隣から向けられた視線に慌てて顔を引き締める。それから集まつていた村人達をぐるりと見渡した。
「この冬を越したら、子供が生まれるんだ。そろそろ雪も降り始めるし、そうすると暫らくは連れて来れないから、紹介しておこうと思つてさ」

その場の者達は皆顔を見合せ、それから口々に祝いの言葉を述べる。彼女の内から零れる光は、ますます輝きと柔らかさを増したように思えた。

青年は少し照れくさそうではあるが、その上には待ち遠しくて仕方がない様子が見て取れる。

カイル達もまた、自分達の事のように喜びを覚えた。

青年の義兄、彼の妻の兄のゲントは一人の肩に手を置き、やはり嬉しそうに破顔した。

「剣士なんて戦うばかりが頭にあつて、他は二の次でな。我々の一族に漸く生まれる子供だ。待ちに待つた子だ。きっと、いい子が生まれるだろう」

その言葉に、レオアリスは形容しがたい表情を浮かべた。

右手が、服の中に納めた銀の飾りの辺りを押さえる。

その子供——それがおそらく、レオアリスの事なのだろう。

戸惑いと、思慕、喪失。

そんなものが入り混じつたその顔を、長老は悲しげな瞳で見つめた。

その夜、村人達は誰からともなく、それを告げる事を決めた。もし疎まれるとしても、他から耳に入るよりは、自分達から告げた方がいいと思ったのだ。
告げようと決めたものの、そうするのに数日はかかっただろうか。彼らの表情が、どう変わってしまうのか。
こうして他者と交流する事が、どれほど心安らぐ事か、どれほど失いがたいものか——。

それは初めて手に入れた安らぎだ。

今更それを失つたら、この先の放浪は耐え難い苦痛を伴うだろう。

それでも意を決して告げたのは、どうしても、これ以上隠していたくなかったからだ。それは彼等の信頼を裏切る事になる。

そして、忌まれたとしても、彼らの手にかかるのであれば、その方がいいと。

だが、恐れていたような反応は全くなかった。

まるで裁断を待つ面持ちで顔を伏せた村人達を前に、剣士達は少し途惑つたように顔を見合わせる。

それから先ずは青年が、半ば苦笑しながらも申し訳なさそうに口を開いた。

「緊張してもらつて悪いが、最初から知ってるよ」

村人達が耳を疑つてざわめく様を、彼等はどこか面白そうに眺めた。「そりやこんなとこに来るんだ、ある程度訳有りだろ。第一俺達の方があちこち行くからな。自然と耳にはに入る」

「それで……」

「それでって言われてもなあ」

青年は腕組みし考え込むように天井を見上げた。

「……我らは、災いを呼ぶと」

「呼べんの？」

逆に興味深々といった態で問い合わせられ、カイルは返答に詰まった。そんな事は今まで考えた事もなかつた。

「い、いや……」

「呼べないんだろ？　じやああまり意味はない。まあ、迷信なんてのは大体がそんなもんだ」

自分達の恐れと不安が滑稽に思えるほどあっさりと、彼等はそれを笑い飛ばした。

剣士というものが皆そうなのかは分からぬ。だが確かに、迷信など気にも留めない程の強さが彼等の中にはあつた。

カイル達の喜びがどれほどであつたか、言葉に言い表すのは難しい。肩の力が抜け、安堵に座り込んだ村人達の背を、剣士達の手が軽く叩いた。

ただそれが全てで、これまでの放浪の苦痛を癒し溶かすのには、それで十分だった。

冬に入つて、世界が雪に閉ざされ始めて、村と剣士の里とは互いに行き来を続けていた。

そんな中でふと疑問に思つた事がある。

出会つてからずっと、彼等は全くと言つていい程、戦場に出る様子がなかつた。通常、戦場にいる事の多い彼等がこんな北の辺境に定住している事もまた疑問ではあつたが、尋ねるとあつさりとその答えは返つた。「俺達は主持ちじやないからな。必要な時に要請を受け、自分達が気に入つた戦いなら参加する。気楽なもんだろ」

「主持ち……？」

黙つたまま聞いていたレオアリスが、その言葉に引かれるように顔を上げる。

懐かしむように細めていた眼をレオアリスに向け、カイルは頷いた。「そうじや。剣士には二通りあると彼は言つておつた。自由意志で戦う者と、主を持つ者。わしはどちらが良いのかと問うた」

「よりけりだな。そこに条件がある訳でもないし、必ずしも主つて概念でもない。だが剣士にとって、剣を捧げるべき相手を得る事は、何にも勝る存在理由だ。剣士つてのは言つてみれば抜き身の剣だ。主を得る事は、剣を収める鞘を得る事に等しい」

「剣を、捧げるべき相手——」

「お前は既に見つけておるじやろう」

壅んだ瞳を、じつとレオアリスに据える。その前で、自分の中の想いに答えを見つけたかのように、レオアリスの瞳の光が強さを増す。

カイルはそれを暫らく見つめていたが、再びゆっくりと語りだした。
今まで懐かしむように語っていた声に、痛みを堪えるかのような響きが混じる。

「彼等との交流は、今までの放浪の苦痛を全て和らげるようなものじやつた。それは思い返せば短い日々であつたが、その間我らは自分達が忌まれるものである事も、ここが死と隣り合わせの厳しい冬を持つ北の凍土である事も、全く気にはならなかつた。だが——それでも確かに、我らは忌み族と呼ばれる者だつたのだ」

偶然にも、その年はいつも増して厳しい寒さが続き、近隣の村でも多くの者達が寒さと飢えの為に死んだ。
この厳しい冬は、あの村の者達が呼んだのだと、いつしかそんな噂が流れ出していた。

彼等さえいなければ、自分達の生活はもつと楽なはずだと。
凍りつくような一日を越す毎に、兵達の顔にも憎しみの色が募る。
そして、冬が漸く折り返し点を迎えた頃、耐えかねた警備軍の一小隊が村へと押し入つた。

彼等は入り口近くにあつた家に火を放つた。村人達が凍つた大地を耕して作つていていた薬草畑にも、燃え盛る松明を投げ入れる。
それから——止めようとして飛び出した一人を、斬り捨てた。

それは今までによく見た光景だつた。ひと時なりと身を落ち着けた土地で、終わりはいつもそれとあまり大差ない形で訪れた。
だが、その時そこに、剣士達の一人が居合わせたのだ。彼は村人達の薬草によつて命を取りとめたあの男だつた。

村に来ていたのは僅か一小隊のみだつたが、彼はそれを全て斬り捨てた。

それが王の軍でなければ、結果は違つっていたのかもしれない。

きつかけは、北方辺境軍の村への地税調査だつた。

軍は彼らが何者であるかに気付き、そこにある事を疎んだ。

軍に正式に、忌み族を排除せよと命が下されている訳ではない。

忌み族とは根を辿れば、貧しさや日々の苦しさを転化する為により低い位置のものを創り、心を慰める為に創られた蔑称であり、長い時を経て一般の中に流布するようになつた、謂わば迷信に過ぎないのだから。

ただ単に、このような北方の辺境にある軍は王都の軍とは違ひ、地の者達で多く構成されている。迷信もまた、彼等の中では、現実感を伴つて生きていた。

出て行けと迫る彼等と、押し問答を繰り返す日々が続いた。

囲炉裏の前に座り、炭の上に視線を落としたまま動かないレオアリスに、カイルは痛みを宿した声でとつとつと語る。

「辺境の一小隊とはいえ、軍に剣を向ける事、それはすべからく、彼等を王に対する反逆者とする事であつた。例え王が事実を知り、軍を咎め罰したとしても、それは王の領分。他の者が手を出せば、反逆者となる

のは当然じゃつた。それは瞬く間に、反乱という名に形を変えた」

暗い夜が高波のように押し寄せる。それはカイル達には成す術もなかつた。

「この辺境に向けて、軍が差し向けられた。わしらは自分達の命に代えたとしても、それを止めたいと願つた。——だが、既に事態は取り返しの付かないところまで進んでいた。もはやわしらの問題ではなくなり、わしらの陳情など、辺境軍を統括する司令官は一切省みる事は無かつた」

つめている。

「剣士の一族は強く、差し向けられた軍を悉く打ち破つた。雪解けの季節になつても、北方軍は未だに彼らの一人も討ち取る事が出来ずにいた」

ただそれ故に、事態は膠着化し、問題はすり替わつたまま、引き返しようの無いものになつて行つたとも言えるだろう。

「——やがて、王は近衛師団を差し向けて了。近衛師団第二大隊には、当時最強の剣士として恐れられていた、バインドがいたのだ」

「済まない。わしらがこんな所に移り住んだばかりに、こんな事になつてしまふた」

だが、詫びるばかりのカイル達に、青年はいつも見せるのと変わらない笑みを浮かべた。

「気にするな。いいんだよ、俺達は。元々闘う為に存在するんだ。それが友人の為なら、最高だろう」

「しかし、お前達が反逆者など……！」

青年はカイルの肩を一度叩くと、漆黒の瞳に深い光を刷く。

「……前にも言つた事があつたよな。剣士にとつて、剣を捧げるべき相手を得る事は、他の何にも勝る存在理由だと」

近衛師団第二大隊が派兵されたと聞いた時、初めて剣士達の間に緊張が走つた。

「第二大隊——という事は、バインドか」

全員がその意向を伺うように、壁際に寄りかかっていた青年を見る。バインドの名はカイル達の耳にも届いていた。最強と謳われる剣士。その男が、この地に来る。

青年は少しだけ面倒そうに口元に笑みを刷いた。

「バインドね、やつかいだな。もう少し早い段階で交渉に持ち込んでおくべきだつたか」

「どうする？」

「どうするも何も、仕方ない。俺がやるよ」

そう告げた顔は、どこか面白がつてゐるようでもあつた。

「わしらは剣を捧げる相手とか、そんな大したものではなかつたが、確かに友人同士じゃつた」

彼等を懐かしみ、誇る、その祖父の顔を、レオアリスは瞬きもせず見

その夜は、いつにも増して空気が冴えていて、上空に昇つた臥し待ちの月が、遠く彼方まで光を投げかけていた。

青い光に浮かび上がつた夜の中に青年が立つてゐる。森の奥に視線を

注いでいる青年に近寄ると、彼は振り返りカイルを認めて笑みを浮かべた。

「多分、今日か明日にでも生まれるぜ。なんて名前にしよう。ま、もうあいつが決めちまつてあるかも知れないけどな」

ふいに俯いたカイルを見て、不思議そうな表情を浮かべる。

「どうした」

済まないと詫びたかった。本当ならどれほど身重の妻の傍にいてやりたい事だろう。詫びる言葉を飲み込んで、カイルは青年を見上げた。

「男の子じやつたかの」

「あいつはそう言つてゐるけどなあ。生まれてみないと判らないさ。けど、これだけは判る」

可笑しそうに笑う。

「絶対、俺より強くなるぜ」

「お前よりもか。まだ生まれてもおらぬのに、親馬鹿というやつじやの」

「俺達の子だからな。実際、あいつは俺より怖えんだ」

そう言つて、青年はまた陽気な笑い声を立てる。こんな時でさえ陽気さを失わない青年を、カイルは救われる気持ちで眺めた。

「教えていた事が、山ほどあるじやろう」

「そうだな……」

そしてふと表情を改める。再び里の方角に引き締まつた顔を向けた。

「一番伝えたいのは、剣に呑まれるなつて事か」

それがどういう意味か判らず、カイルは青年の横顔を見つめた。

「剣士はともすれば、自らの剣を抑えきれずにそれに食われる。俺はそういう奴を、何人も見てきた」

青年の上に、どこか翳りの色が浮かんだ。出会つてから初めてのその表情に、カイルはふと不安を覚えて青年を見上げる。

「その可能性があると？」

「剣士なら誰でも、その可能性は無くはないのさ。だから、俺達は生ま

れてすぐ、一旦剣を封じられる。剣の力に、身体と心が耐えられるようになるまでな。赤子の内に下手に暴走でもしたら、剣に内から裂かれてしまう」

口調はいつもと変わらないままだが、その声にはどこか思案する響きがある。青年の瞳が里へと引き寄せられるのを見て、カイルは自分の裡の不安が更に頭をもたげるのを感じた。

「ジン」

不安の正体を測れないまま青年の名を呼ぶと、細められた瞳にいつにない懸念の色を浮かべ、呟いた。

「——剣が、二本だ」

「二本？ それは、珍しい事なのか」

「珍しいな。聞いた事が無い。——生まれる時に、あるいは」

それはカイルに向けられたというよりは、自分自身に確認するように呟かれた。だがすぐに、青年はいつもの笑みを戻した。

「まあ、それも言つてみりや、明日以降の楽しみつてとこだ。取り敢えずは、バインドを倒さないとな」

「出来るのか？」

「さあな。あれと戦うのは初めてだ。剣を合わせてみない事には何とも言えない」

そなは言うものの、青年の上には揺るぎない自信が垣間見える。

「まあ、そんなに心配すんな」

こうして彼が笑つてゐる以上、大丈夫なのだと、何も問題はないのだ

と、カイルはほんの少しだけわだかまる不安を、心の奥に押しやつた。

その翌朝、近衛師団第二大隊が、黒森に到着した。

もし……彼等と出会わなかつたなら——。おそらく、お前が一族を、父母を失う事も無かつたろう

「——仮定なんてのは、無意味だろ」

「そうじや。それでもな」

深い溜息を吐いて、カイルは口を閉ざした。長い昔語りの間に、囲炉裏の火は小さくなり、炭は中心を残して灰になつてゐる。

夢から覚めたような、そんな感覚がある。まるで、剣士の一族が、たつた今までそこにいたような——。

ふいに火が消えたように、冷えた室内の空気が身体を包む。長老は立ち上がるが、扉を開け、屋外のすぐ脇の小屋に積んでいた炭をいくつか取つて戻つてきた。

新たにくべられた炭は、暫らくの間火を移すのを拒むように、黒い姿のまま囲炉裏の上に横たわつてゐる。

「俺の——つ

「……それから、どうなつたんだ」

「——王都で、聞いておろう。それ以上の事はない」

顔を上げ、押し詰まるように口を閉ざした。見られる事を拒むように再び顔を伏せる。

カイルは疲れた表情の上に、強い悲しみと、それからおそらく、十八年前から全く変わることのない、誇りにも似た想いを宿した。

「……お前の一族は強かつた。特にお前の父は。バインドとも、さほど違ひはなかつたであろう。ただ、彼らは戦いのみを求める剣士とは違つて、優しさを持つていた。持ち過ぎていたのかもしけん」

重い溜息が、再び熱を増し始めた炭のはぜる音に重なる。

暫らくは、誰も、何も言おうとはしなかつた。言うべき言葉を搜しあぐねて、ただ炭が熱を放つ音を聞いている。

やがて、カイルは何かを否定するかのように、首を一つ振つた。

「わしらは時折、ひどく後悔する。もしも、わしらがそのような存在でなかつたなら。もし、わしらにもつと己を守れるだけの力があつたなら。

「もし、なんて無いんだ。爺さん達に力があろうと無からうと、そうする事を選んだのは、俺の一族なんだろう」

「それなら、爺さん達が後悔する必要なんて無い」

カイルが再び何か言おうとする前に、レオアリスは立ち上がつた。

「少し、外にいる」

カイルもロツトバルトも黙つたまま、雪の戸外に出て行くレオアリスの後姿を見送つた。

彼が死んだと聞かされた時、カイルには信じられなかつた。

それは村の他の者達も同様だ。

この北の地で戦いが始まって以来、彼は少しも揺るぐ事なく、まるでどこか散歩にでも出かけるように戦場に出向いては、何も普段と変わらないまま戻つてきた。

千余名からなる北方辺境軍は次第に後退し、やがては周辺を取り巻くのみになつた時、どこか残念そうな様子すら見せたものだ。

バインドの件が片付いたら交渉の場に持ち込むかと、そう言つていたのは今朝の事だ。

その、彼が、死んだ、と——。

一人の剣士が自分でも信じ難いだろうその事実を呆然と告げた時、カ

イルにはその事が理解できなかつたのだ。

実際に戦場を見た訳ではない。

傷を癒す為の薬草の小瓶が手から滑り落ち、足元で砕けても、それにすら気付かなかつた。

もうすぐ、もう、今日か明日にでも、子供が生まれると——そう言つていたではないか。

戻らない訳がない。

あれほど嬉しそうに、自分に初めて子供が生まれるのだと言つた。傍らに寄り添う妻に、かけがえのない者達に向ける瞳。

戻らない訳がないのだ。

剣士が身体を休める間もなく里へ向かつた事にも、それが何を意味するのかも気付かずにいた。

いつ、村を出たのだろう。氣付けばカイルは、彼が戦つた戦場にいた。切り裂かれた死体が点々と転がつた、悪夢のような光景——その中央に。

震える手が、生氣の失せた身体を抱え起こす。

あの快活さも、すでにそこにはない。

何も、感じなかつた。

涙すら出ないのが不思議だつた。

視界の隅に、一瞬光を放つ何かを捉え顔を向ける。

散乱した兵達の亡骸の間に隠れるように。

あの青い石の飾りが落ちていた。

剣士達の里が滅びたと知つたのは、まだ深い夜の中だつただろう。

カイルはその言葉を、夢の中の出来事のように聞いた。

告げに来たのは、背が高く威厳に満ちた壯年の男だつた。その男が現れた時、村を取り巻いていた兵達が一斉にひれ伏し、男を呼ぶ名前から、それがこの王国の王、その人であると知つても、その驚きも畏れも、どこか心の表層で滑り落ちた。

もはやどんな感情も、自分の裡には無いのだと、他人事のようにそう考えていた。

ただ、青年が死んだ事に触れた一瞬だけ、王の金の瞳が苦痛を受けたようになんだのを見て、ふいに抑えようの無い怒りが込み上げたのだ。王だというのなら、何故我々の言葉を聞かなかつた。我々を処罰せよと、あれほど願つたではないか。何故それを聞き入れなかつたのだ。掴みかかるカイルや村人を、警護の兵達が引き倒す。冷たい剣が首筋に当たつても、カイルは叫び続けた。

だが本当は自分でも判つていたのだ。その怒りは王に向けられたものではない。それは自分達に向けられた怒りだ。

今更どんな事も叶わない。

自分達を受け入れてくれた友人達は、もはや永遠に失われた。

ふいに扉が開いた。

その兵がどう告げたのかは、はつきりとは覚えていない。

炎を上げ続ける里の中で、赤子の泣き声がする、と——。

引き戻そうとする兵士達を振り切つて駆け出した。どれほど森を駆けただろう。

里はまだ、収まる気配を知らない炎の中に沈んでいた。確かに、泣き声が聞こえる。ともすれば炎と渦巻く風の音に搔き消されそうになりながら、けれども力強く、精一杯の声で泣いている。生まれていたのだ。

そうはつきりと意識する間もなく炎の中に飛び込もうとしたカイルの肩を、背後から伸びた手が抑えた。

王はカイル達の脇を抜け、燃え盛る炎の中に足を踏み入れる。全てを焼き尽くす筈の業火は、王の身体に僅かも触れ得る事なく、その姿は炎の奥に消えた。

何度炎の中に飛び込もうとしたか判らない。その度に、兵士の手がカイル達を引き戻した。やがて炎の中から王が再びその姿を現した時、王の右腕には、生まれ間もない赤子が抱えられていた。

「——わしらにとつて、あれは命にも代え難い宝となつた」

レオアリスが戸外に出て行つた後、長い沈黙に沈んでいたカイルが、ゆっくりと口を開く。ロットバルトは瞳を上げ、囲炉裏の傍で背を丸め

顔を伏せたままの彼を見つめた。老人は問わず語りのようになに言葉を綴る。「ともすれば生への希望を失いかけた我らに、あの子は再び生きる事への執着を思い出させてくれた。小さかつた手があつという間に大きくなり、わしらを助けてくれるようになつた。あの子が成長していく様は、絶え間なく浮かぶ後悔と罪の意識とを上回る喜びじやつた」

答えを求めていたのは、ロットバルトは黙つたまま、カイルの言葉に耳を傾ける。

「快活さや芯の強いところが、父母によく似ておる。誰が教えた訳でもないのに、物言ひは時折、あれの父がそこにいるのかと思えるほどじや」

その度に沸き起る悲しみと追憶、刺すような喜び。

「わしらはあの子に過去も、剣士という事すら教えずに育てた。剣士とは何者かを教える者が無い以上、復讐の為にバインドのようになる事を

恐れた」

カイルは喜びと疲労の入り混じった声で、静かに語り続ける。

「王はあの子を、わしらにお預けになる形を取つてくださつた。そしてまた、成長した時、望むのであれば、王都へ来させるようにも。本来ならば処罰されてもおかしくない者に、多大すぎる程の温情じや。」

「だが、畏れながらわしらは、王のその言葉すら、あれに伝えなんだ」王を恨んだ訳ではない。どこか彼の死を悼むような様子を見せた王に、一時の憤りを覚えはしたもの、その憤りが向かうべき場所は違うのだ

と分かっていた。

ただ王に興味を持てば、いつかは過去を知るだろう。

その時が永遠に訪れない事を、村の者全てが願つていた。

「王の御前試合に出ると言つた時、わしらは反対した。だが何も知らぬはずであつたのに、あれは自分自身の意思でこの村を出て、剣士として覚醒さえし、王に仕える事を選んだ。剣士としての血——そうとしか言いようが無い。だとすれば、これもあの子の運命の一つなのじやろう」ゆっくりと顔を上げ、ロットバルトを見つめる。

そして、静かに頭を下げた。

その先に、王都でレオアリスを取り巻く者達に。

「——あの子を、頼みます」

気が付けばレオアリスが外に出てから、随分と長い時間が経過している。ロットバルトは僅かに思案した後、立ち上がって扉を押し開けた。途端に、凍るような寒さが身を包む。一度戻りレオアリスの外套を取り上げた。

戸外に出ると、無音の世界が広がる。

雪雲の晴れた夜空に細い月が一つ浮かび、僅かな光で世界を青く照らし出していた。

雪は既に止んでいたが、昼から降り出したとは思えないほど積もり、青い闇の中に薄白く、大地や疎らな家々が浮かび上がっている。少し先の広場に立つ影を認め、ロツトバルトは積もった雪に足を踏み入れた。近寄る足音にも振り向かず、レオアリスはじっと村の奥に広がる山並みを眺めている。

「……そろそろ、お戻りください。そんなに薄着では体を壊す」
「慣れてる」

ロツトバルトは苦笑を浮かべた。少し低い位置にある顔には明確な感情は見えないが、彼はいつもそうだ。悲しみや憤りといった負の感情を面に表そうとはしない。

それはこの白く無音の世界で育つた故なのかもしかつたし、周囲に辛い思いをさせない為の、幼い頃からの癖なのかもしかつた。腕を延ばし、外套を掛けると、肩に腕を回して引き寄せる。案の定、それはひどく冷えきていた。

温もりを覚える事で少しぐらい泣けばいいのだと、そう思う。泣くという行為は、何か一つくらいは、洗い流してくれるものだろう。

だがレオアリスは僅かに身じろぎをしただけで、何も言わず、ロツトバルトの肩越しに再び視線を山肌に投げた。

その奥に広がる、森に――。

そこに何を見出そうとしているのか。

失われた彼等の姿か、そこに今いるだろ、バインドの姿か。

「――もう、お戻りなさい。あの囲炉裏の傍が、貴方にとって一番暖かい場所の筈だ」

彼等がレオアリスをどれほど大事に思っているか、慈しみながら育ってきたのかが、良く分かる。

友人の忘れ形見。

年々育ついく様は、悲しみや後悔よりも多くの喜びを、この村に与えた。

「上将」

「判ってる。もう戻る」

漸く、彼方から視線を外し、それをロツトバルトの上に向けた。

「……バインドは、俺が討つ。けど、一つだけ自信が無い」

「何です」

これまで二度、バインドと剣を合わせた時。そして、おそらく明日、剣を交える時――。

それを考へると、怒りとは別の感情が浮かぶ。

それは、悦びだ。

戦う事への――。

『バインドは、狂つていった』

「――俺は、狂うと思うか」

自分の剣を止めた相手。剣士として覚醒をしてから、初めての。

あれ以来ずっと、戸惑いや疑問、怒りや悲しみといった感情に寄り添うように、戦いへの悦びがあった。

そして、それこそが、バインドを狂わせたものの正体だ。

「――さあ。絶対と言い切れるものなど無いでしょう」

「……そうだな」

レオアリスは自嘲するように軽く笑うと、家に向かつて歩き出した。

「ですが、貴方既に収まるべき鞘をお持ちのはずだ」

足を止めてロツトバルトを振り返る。

ふと、祖父の――『彼』の言った言葉が、心に浮かんだ。

『剣に呑まれるな』

レオアリスはもう一度だけ、夜の中に広がる深い森に視線を注いだ。

降り募る雪と灰色の雲の幕の向うで、太陽が次第に高く昇っていく。レオアリスは戸外に出て雪を踏みしめ、雪雲に覆われた薄い太陽を降り仰いだ。

「昼までには止みそうだな」

一足先に戸外に出ていたロットバルトが振り返る。足元には膝下まで雪が積もっている。

「この足場では、少々動き辛いのでは？」

一步踏み出そうとするだけでも雪が纏いついて、足は重りを付けたようを感じられる。この中で普段通りに動くのは困難だ。だがレオアリスは事もなさそうに首を振った。

「問題ない」

ずっとここで育つたのだ。むしろ地の利はレオアリスにある。カタリと音をさせてカイルが戸口から姿を現し、レオアリスの前に立つと彼の顔をじっと見つめた。

「……無事に戻れ」

祖父の顔を見つめ返し、レオアリスは口元に笑みを刻んだ。

「心配すんなって。すぐ戻るよ」

飛竜へと歩き出しかけたレオアリスを、カイルが呼び止める。

「何だ？」

カイルは暫らく黙つたままだつたが、やがて首を振つた。

「いや……」

そして顔を上げ、訝しそうなレオアリスを見上げる。

「一つだけ、伝えておかなんだ事がある。本当は三年前に伝えるべきだった事じや」

カイルはそれまでの思いを振り切るように、レオアリスの瞳を覗き込んだ。

「レオアリスよ。王がお前を、炎の中から救い上げた。——そして、名をくださつた」

レオアリスの張り詰めていた表情の上に、内側から光の透けるような感情が差す。

驚きと、もう一つ、

「名を——」

手足の先に暖かい血が行き渡るような感覚。

それに何と名前を付ければいいのかは分からぬ。だが、自分の中に

ある感情を確かに肯定するものだ。

この村で、王の御前試合があると聞いた時、ひどく急かされる気持ちを感じた事を思い出す。そして、王と相対する時に、常に抱く思い。

尊敬、畏怖、憧憬——

ただ一言では、言い表せない感情。

「……その誇りが、お前をこの先、前へと進ませるのじやろう」

いつか、青年が言った言葉が、カイルの心の中に浮かんだ。

『剣士にとつて、剣を捧げるべき相手を得る事は、何にも勝る存在理由だ』

レオアリスは自分の手でそれを見つけた。剣士としての、存在理由を。ならば、レオアリスがこの村を離れる事が、どれほどの喪失感を伴うものであつても、もうカイルにそれを妨げる理由はない。

「必ず戻れ」

まるでそう言わなければ戻らないとでも考えているかのように、カイルが念を押す。レオアリスは祖父の様子に安心させるように笑い、背を向けて歩き出した。握った拳を高く掲げる。

「そんなに心配すんなよ。いい知らせを持ってきてやる」

「——」

一瞬、レオアリスの姿に、あの夜の青年の姿が重なる。

鼓動が跳ねた。

カイルが再び差し出しかけた手を、ロットバルトが押さえた。カイルの眼の中に浮かんだ恐怖に似た感情を認め、それを打ち消すように穏やかな笑みをみせる。

「……あまり心配なさらなくとも大丈夫でしょう。これは王が彼に与えた任務ですから。王はそれが可能だとお考えです。だからこそ、それに応えられると、そう思いますよ」

カイルにとっては、それは辛い響きにも聞こえただろう。だが、「剣士」としてのレオアリスにとって、その事は彼の力となるものだ。カイル自信が一番、その事を知っている。

「……そうかもしれん」

カイルは皺ぶいた顔を伏せ、足元に積もつた白い雪を見つめた。

静かに降り募る雪は、全てを覆い隠しても尚満足する事を知らないよう、ゆっくりと落ちてくる。

ロットバルトがレオアリスを追つてその場を離れ、彼等の乗った飛竜の姿が雪の幕の向こうへ消えて、カイルはじつと足元の雪を見つめていた。

ごく小さな、誰の耳にも届く事の無い呟きが、雪に紛れて散る。

「――後悔する事、それ自体を避けたい選択は、取り返しのつかない事実を目の前にして初めて、そこに選択が存在していたと気付く。たつた一つ、搖るぎなく、取るべきだった正しい選択が確かにあつたと」

カイルは静かに瞳を上げ、レオアリスの向かつただろう森の奥へと、視線を向けた。

王が約束し、毎年村へ届けられた書物。王都との交流があつた為か、いつしか周囲の者達から、忌み族という見方も薄れ消えていった。

意識とは単純で愚かだ。

容易く周囲の状況や言葉に流れされ、向く先を変える。だがそれを責める氣にも、憤る氣にもならなかつた。

あの場所へ、レオアリスを連れて行つたのは一度きりだ。

幼いレオアリスは、ただじつと不思議そうに、崩れた家々と自分達を見つめていた。何も告げられない事が辛く、その姿を見る事は心に刃を差し込むように耐え難かった。

そこには崩れ、草に覆われた廃墟以外何も無い。小さな手を握るはずの、力強く暖かい手も、優しく柔らかい手も。そこに満ちていたはずの、笑い声も。

しんしんと、雪のように想いは降り続け、心の底に静かに積もり続ける。

静かに、深く、凍り付き、溶ける事を知らない雪のように。

雪に覆われた廃墟の中に立ち、バインドはさも懐かしそうにその場を見渡した。

明け方に再び降り始めた雪は、廃墟を更に白く染め上げていく。

雪が覆つていなければ、崩れて焼け爛れたそれらを見る事が出来るだろう。だが一見しただけでは、おそらくそれが家だった事は分かるまい。自分がこの手で破壊し、焼き尽くした。ここに住む者達も全て切り裂いた。

あれは、それまでどの戦場でも味わった事の無い感情だった。

自分の裡からとめどなく溢れる、切り裂く事への渴望。

落された腕は再生する事はなく、それは抑え難い苦痛を伴つた。絶えず痛み続ける傷跡よりも、斬る事を封じられた、その事が強い苛立ちと焦燥を生んでいた。

だが絶望の中、切り刻む事への渴望は、やがて左腕に新たな剣を生んだ。

そして、その剣をかつてのように使いこなせるようになるまで、これだけの時がかかったのだ。

あの時、右腕を切り落とした、青白い剣風——。

バインドは瞳を上げ、雪に覆われた木立の間を透かし見た。

もう、ここに来る。近づいて来るのが感じられる。

愉悦が、その頬に踊った。

あの年若い剣士は、十七年前に斬つた剣士よりも強いだろうか？

あの剣士は強かつた。初めて、あれほどの相手に出会つたのだ。力は拮抗していた。いや。

あの男の方が自分より上回つていた。

一瞬でも気を抜けば、切り裂かれていたのはバインドの方だつただろ

う。その事が逆に、バインドの中にこの渴望を目覚めさせたのだ。

それまでの戦いは、ひどく退屈だつた。力を出し切れる相手などどこにもいない。敵を切り裂く事は、まるで単純な作業のようだつた。

だがそれなら自分は何の為に存在しているのか。

生も死も賭けられず、戦う相手も無い。

自分の存在が空虚なものに思え、全てが煩わしかつた。

そんな時に目の前に現れた剣士。

剣を弾かれ、受ける都度、力が増していくのを感じた。

それでもあのままの状態であれば、自分が今生きていたかどうかは分からぬ。それもまた悪くはなかつただろう。

だが、あの時——ただ一瞬だけ、あの男の視線が逸れたのだ。

遠く離れた森の方角に、ただ一瞬。

何の為かは分からぬ。だがその剣の持つ力を、一瞬だけそこに向けた。

それで、勝敗は決した。

ただ一瞬のうちに、生と死は逆転し、バインドは呆然と足元に倒れた

男の身体を眺めていた。

何が起つたのか、理解できなかつた。

勝利の喜びなどない。虚ろな心の中に沸き起つたのは、怒りだ。何があの男の気を、自分から逸らした？

自分との戦い以上の、何があるというのか。

勝利に駆け寄つた副将を切り捨てた。

驚き、そして憤り、それから恐怖の内に逃げ惑う自軍の兵士達を、目につくものから全て切り裂いた。

周囲が何百、何千という死体で埋まつても、苛立ちは収まらなかつた。そうして、森に、あの男の視線が向いた方角に向つた。

無性に知りたかつた。そこに何があるのか。

辿り着いた里で他の剣士達と戦つた。右腕の剣は男との戦いで既に限

界に近付いていたが、さほどの手間はかからなかつた。家々を破壊し、

捲し回つた。

剣士達が護る先に、目指すものが在るはずだ。

剣から迸る炎が自分の周囲を焼き始めるのにも構わらず、ただそこを目指した。里の者全てを切り伏せ、その先にあつた家の壁を吹き飛ばした。

崩れ落ちる石となだれ込む炎の中、女が一人、立つていた。

たつた今まで床に臥していた様子でひどく弱つていたが、それでも剣

を手にし、決然と光を宿した瞳で、自分の前に立ちはだかる。

女の後ろに、小さな白い布の包みが置かれていた。

そこだと、判つた。

女を切り裂いた瞬間、その背後から青白い光が膨れ上がり、右肩に鋭い衝撃を感じた。女が制止の声を上げ、その光を隠すように覆い被さるのが見える。

あの男の剣と同じ光——。

気が付いた時には、どこか見知らぬ場所にいた。

激痛に目をやると、右肩から先が無かつた。

右肩に左手を当てる。バインドは失われたはずの腕が齧す痛みを、愛おしむように撫でた。

肩に注いでいた視線を上げる。

その先に、長い間待ち続けた者の姿があつた。

一度だけ頷き、レオアリスは飛竜の背を蹴つた。

鳩尾に当たた右手が、ずぶりと手首まで埋まる。青白い光が零れ、地上に落ちていく雪に反射し拡散しながら大気を染めていく。

剣を抜き放つと同時に、雪を巻き地上へと降り立つた。

廃墟に腰掛けていた男が風に揺れる柳のように立ち上がる。

青白く光を纏うレオアリスの剣に呼応するように、バインドの左腕が

飛竜の背に立ち、レオアリスは眼下を見渡した。

深い森の中に、ぽつかりと白く開けたその場所。たつた一度、訪れただけの、心の奥深くに宿る場所。

レオアリスにとつての、全ての始まりの土地だ。

その廃墟の中心に、既に見知った剣の気配がある。

追憶よりも、思慕よりも、その事が今のレオアリスの中を大きく占めていた。

吹き付ける雪に黒い髪を巻き上げながら、その一点だけを睨む。

「ロットバルト、お前は村で待て」

バインドを倒すには、全力を以て当たらなければ難しいだろう。周囲への影響は考慮しきれない。

「……いえ。見届けるのも私の役割です。私に関してはお気遣いなく。まあ私も命は惜しい、安全圏は見極めますよ」

ロットバルトらしい言い草に、レオアリスは視線だけを背後に向け苦笑を洩らした。結果がどうあれ、王都への報告は必要だろう。

「損な役回りだな」

「お陰さまで」

皮肉めいた口調を返すと、レオアリスはもう一度笑つた。左腕を胸に充て、ロットバルトが深く頭を下げる。

「——ご武運を」

赤く光を宿す。

艶の失せた黒い前髪の奥で、バインドの瞳が愉悦の色を浮かべた。

「随分と待たせるじゃないか、近衛師団大将。王に敵するものを迅速に排除する。それが近衛師団の本分だろう」

レオアリスは無言のまま、バインドに向って歩を進める。バインドはまるで、レオアリスが自分の元へ来るのを待ち構えるように動こうとはしない。二人の間には雪が薄い幕を掛けている。一步進むごとに、白い幕は薄くなり、互いの輪郭を浮き上がらせていく。

「師団は居心地がいいか？ そうだろうなあ。……思う存分、切り刻める」

「……俺は、お前とは違う」

「違う？ クク、違わないさ。剣士の本分は戦う事だ。それ以外はどうだっていい。敵を切り刻む事こそが、剣士の存在意義だ。俺は時に、この意識すら鬱陶しいよ」

低く這うように、冥い嗤い声が響く。光を吸い込んで閉ざした闇色の瞳が、レオアリスをひたと捉える。

「お前に言われるまでもない」

剣の間合い、その少し手前で、レオアリスは足を止めた。

バインドが肩を竦める。

「つれないな。俺は常に、お前の事を考えていたのになあ」

射るような視線を感じながら、バインドは腕の欠けた右肩を撫ぜた。「十七年前のあの時から、片時も忘れた事など無かつたよ」

そこに宿り続ける痛み。戦いへの、それは悦びだ。

じわり、とバインドの左腕が紅く光を増した。

肘から先の骨が盛り上がり、軋む音を立てながら、次第に炎を纏う長剣へと姿を変えていく。バインドへと降り掛かる雪が、その身体に届く

前に溶けて消える。

「夢にまで見た。腕が疼く度に、どう切り刻んでやろうかと、そればかりを考えていた。——お前が近衛師団にいると知った時の、俺の喜びが分かるか？」

レオアリスは無言のまま、バインドに視線を据えた。バインドの口元の笑みが、更に深く吊り上がる。

「これでこの痛みを満足させてやれる。しかも、師団？ 最高の舞台じゃないか、なあ？」

剣を伝つて零れた焰が、雪の上に滴つた。

バインドとレオアリス、互いの剣が同時に振り抜かれる。

雪を蹴立てて走った剣風が中央でぶつかり、弾ける。轟音と共に衝撃が大地を穿ち捲り上げた。

それを合図に、二人の足が雪面を蹴る。

雷光と紅煉、対照的な二つの閃光が尾を引いてぶつかる。

鍔元を打ち合わせ、刃の向うの瞳を覗き込んだ。

ロツトバルトは廃墟を望む張り出した山肌の上に飛竜を降ろした。

十分に距離を取つたその場所にまで、一人の剣士が放つ圧迫されるような波動が伝わる。

こうした離れた場所からでなければ、剣筋を眼で追い切る事すら難しい。

どちらに分があるのか、眼下に広がる戦場は、全くの五角だ。

(まだ双方とも力を抑えている状態だろう。ただ)

バインドの剣に些かの躊躇いもないのに比べ、レオアリスの剣はどこか迷うように見える。経緯を知っているが故の杞憂に過ぎないかもしれないが、おそらくそれこそがこの戦いの最大の懸念だ。

『俺は、狂うと思うか？』

レオアリスがそれを消化出来たのかは、今朝の彼の様子からは判断が

付きかねた。

ハヤテが不安そうに喉を鳴らす。それを宥める為に片手を飛竜の首に置き、ロットバートは戦場へ視線を向いた。

二つの思いがある。
警鐘を打ち鳴らすものと、貪欲にその愉悦を欲するもの。

「考えるな」

バインドが動く。

閃光が奔る。

剣を弾き、流し、斬り上げる。胸元で止められた刃を反して薙ぐ。

互いの刃が上段かと思えば下段へ、流星のように尾を引く。剣が翻る都度、周囲の木立が切り裂かれて倒れ、大地が削られた。黒森が苦痛を受けて騒めぐ。

剣を撃ち合わせ、一瞬互いの視線が交叉する。同時に弾き上げて跳び退さると、後ろ足で地面を蹴つた。

鋭い音が響き、互いの足元で剣が交叉して止まる。

二人の間の地面が衝撃を受けて陥没した。

身体を入れ替え、再び距離を取る。

残響が、一瞬の内に静寂を取り戻した廃墟の中に佇して消えた。

ゆらりと上体を起こしたバインドの口元に冥い笑みが湧き上がる。肩が僅かに震え、それは次第に大きくなり、高い咲笑に変わった。

「はははっ！――いいなあ、これだよ。俺は長い間、ずっとこれを待っていた。この俺と、再び剣を合わせられる相手を……！」

ゆっくりと、左腕の剣を目の前に掲げる。剣を縁取る赤い焰が、喜びに震えるようにざわざわと揺らぐ。

「お前も、そりだらう……」

「……言つたはずだ。俺は、お前とは違う」

不快さを隠そともせぬ、レオアリスはそう吐き捨てた。だが、剣を合わせている間、ずっと身の内に沸き上がつてくるもの。

愉悦。

闘いへの――。

先程よりも疾い剣戟を剣の平で流すように手の内を反し、レオアリスはそのまま弧を描いて斬り下ろした。切つ先がバインドの脇腹を掠めた。初めて、赤い血が散る。

バインドは後方へ跳び、雪の上に片膝を付いた。僅かに掠めただけの刃の凍るような痛みに、瞳を細める。捉えられれば確実に、二つに切り裂かれるだろう。

だがまだバインドの望む存在には足りない。生と死を垣間見る、その戦いこそがバインドの望むものだ。

それだけが、自らの存在を満たす。

それ以外は必要ない。

右腕が存在を訴えるように軋んだ。

「――まだ、足りないな。その程度じゃあ期待外れだ。……お前の目を覚まさせるには、何が必要だ？怒りか」

身を起こし、バインドは脇腹から流れ出る血に目を細め、にいつと笑つた。瞬く間に血が止まり、傷口が塞がつていく。

「お前のその剣、その青白い光。覚えてるよ。……昔話をしようか……？」

「必要ない」

振り抜かれたレオアリスの剣を、赤い刃が受け止める。バインドは剣を反すと、レオアリスの剣を巻くようにして足元の地面に押さえ込んだ。レオアリスに退く間を与せず、剣を跨ぐように踏み出し体重を乗せる。

「つ」

バインドがぐいと顔を寄せた。見開かれた瞳の中に、狂氣と愉悦が仄見える。

「まあ聞けよ。お前にも懐かしい話だ――。俺が初めて戦つた剣士。こ

の地で反乱を起こした剣士の一族の一人だ。そいつが一番強かつた。美しい長剣を持っていてなあ。青白い光を纏う……お前のこの剣のように」

レオアリスの瞳を捉えたまま、口元が歪んだ笑みを浮かべる。

「そいつとの戦いが、俺の中の欲望を呼び起こした」

「……黙れ」

「剣士の本能——切り刻む悦びだ」

「黙れ！」

レオアリスは弾かれるように叫んだ。バインドが嗤う。

「お前の、父親だよ！ 似ていたぞ、お前に、よおく！」

レオアリスの瞳に怒りが灯る。

抑えられていた剣が足元から跳ね上がつた。

バインドの腕が高々と上がる。

振り下ろされた剣に、バインドの身体が真つ二つに割られたかに見えた。

衝撃を受けて、大地に深い亀裂が走る。巻き上がつた雪と土砂の中に踏み込んだレオアリスの背後で、嘲笑が響いた。

「お前の父親を殺すのは楽しかったよ。感謝してるんだ……おかげで俺は、剣士とは何者かを知ったんだからなあ！」

目の前が怒りで霞む。

剣が大きく脈打ち、引きずられるように振り抜いた。バインドの背後の木々が薙ぎ倒され、積もつた雪の上に崩れる。

二の太刀、三の太刀を軽くいなし、バインドはレオアリスの懷に踏み込んだ。

「！」

バインドの剣が紅く輝く。右下から剣が振り抜かれる。刃より熱の塊を叩きつけられるような感覚だ。

辛うじて防いだ剣もバインドの剣の勢いを殺しきれず、レオアリスは後方へと弾かれた。

木の幹に肩と頭を打ち付け、一瞬意識が遠退く。
薄れかけた視界に紅い光が過る。

「つ」

反射的に木の幹を押すように離れた場所を、焰が碎いた。

バインドが間合いを詰め、迎え打つレオアリスの剣を弾く。そのまま手を緩めず、鋭い切つ先がレオアリスの身体を掠めた。

「くく、どうした？ 剣が鈍いな」

躱しているにも関わらず、焰の熱が皮膚を焦がすのが判る。それだけで体力が消耗していく。

バインドが一步踏み込むことに、レオアリスは後退する。

逸らしたレオアリスの首を剣が掠め、切れた服の襟元から蒼い石の付いた鎖が覗いた。

「へえ」

バインドが面白そうに瞳を見開く。

退こうとした肩が木の幹にぶつかって漸く、自分がいつの間にか木を背後にしているのに気付き、レオアリスは舌打ちした。だが崩された感覚を取り戻そうとしても、沸き上がつてくる怒りが邪魔をする。

バインドがずい、と踏み込み、剣を突き出した。左に抜けようとして、木の幹に突き立つた剣に絡まつた鎖に引かれ、がくんと身体が止まる。

レオアリスは木の幹を背に振り返り、バインドと正面から向かい合つた。

バインドの瞳が細められる。

「……なつかしいな、この飾り。お前の一族の紋章じやないか？」

じり、と剣の当たつている鎖と首の皮膚が焦げる。

キン、と小さい音がして鎖が千切れた。

石が剣先に弾き上げられ、反射的に追つた手を、バインドの赤い刃が切り付ける。

咄嗟に躱したもの、右の二の腕が深く裂け鮮血が噴出し、足元の雪

を紅く染めた。

腕を抑えながら、離れた雪の吹き溜まりに落ちた鎖を、レオアリスの視線が追う。その様子をバインドが面白そうに眺めた。

「気になるか？ そうだろうなあ。あれはお前の父親のものだ。よく残っていたもんだ。——青い石のものはその長だけが持つ。今のお前に相応しいじやないか」

バインドの咲笑が廃墟の中に響いた。

「たつた一人だもんなあ！」

雪を吹き上げて剣風が走る。だが切り裂いたのは、バインドの残像のみだ。バインドの姿は視界から消えている。

移動する気配を追いかがら、レオアリスは大きく息を吐いて呼吸を整える事に集中する。

『殺せ』

じわり、と心の中に浮かび上がってくる、殺意。そしてその喜び。それらが自分を支配しようと沸き上がる。

(——邪魔を、するな！)

気配は、上だ。

鋭い金属音とともに、頭上に振り上げた剣が、打ち下ろされたバインドの剣を弾く。

踏みしめた足元が雪に取られ、体勢を崩したレオアリスの上に、新たな剣戟が振り下ろされる。逸らした左肩に焼け付く痛みが走った。

予期した追撃はない。体勢を直したレオアリスの周囲で、バインドが嗤う。

「……余計な事を考えていると死ぬぞ。剣も満足に振るえないまま死なれちや、この俺が十七年待つた甲斐が無い。……まだ後押しが必要か？」

振り返り様、叩きつけるように振り抜かれた剣が、バインドの頬を浅く切り裂く。赤い血が飛び散り、花弁のように雪の上に散った。バインドは身動きもせず、レオアリスの剣先をちらりと眺めた。腕が

血を拭いとると、既にそこに傷は無い。

「しつかり狙えよ。……なあ、お前の父親は強かつたぜ。この俺よりも……」

喉の奥で嗤いを転がす。

バインドの剣がレオアリスの右腕と胸を掠める。熱を受け、レオアリスの瞳が軋んだ。

「それで何故俺が今生きているか、教えてやろうか」

打ち込んだ剣はバインドの左手に弾き返される。バインドは大きく踏み込み、間合いを詰めた。

「……一瞬だけ、奴は何かに気を取られた。そこに力を向けた。気に食わないよなあ。俺との戦い以上の、何があるっていうんだ？ ……俺は、その何かを探した」

その言葉を聞くなど、心の奥で警鐘が打ち鳴らされる。

だが聞くまいとしても、塞ぐ術などなく言葉は自然と耳に入り込む。レオアリスの剣が正確さを欠くのと反比例するかのように、赤い剣が、浅く、だが確実に、レオアリスの身体に熱を刻み付けていく。

「そして、剣士の里で……ここで、それを見つけた」

「聞くな。

脳裏に青い光が過ぎる。

自分を押し留めるように、暖かく包んだ光。

バインドの声が低く、愉悦を宿して蛇のように這う。

「赤子だった――

青い。

聞くな。

「――お前だよ」

びくりと震え、レオアリスの剣が動きを止めた。

俯いたその右肩を、バインドの剣が貫く。更に剣を深く押し込むと、腱が千切れ、骨を削る音がバインドの耳にも届いた。

噴き出すはずの血が、剣の纏う炎の熱で赤く蒸発する。剣を握った右腕が、力を失つてだらりと下がつた。

俯いたレオアリスの表情は見えない。

バインドが剣を引き抜くと、つられるようにレオアリスの膝が雪の上に落ちた。

右肩を覆う激痛にも苦鳴すら上げず、俯いたまま動かない姿を見下ろし、バインドは苛立つようにその瞳を細めた。

「早くしろ。それとも、終わりか？」

紅い剣が、レオアリスの頭上に持ち上がる。それでもレオアリスは身動きすらしない。

その内面を現わすかのように、手にした剣からは光が失せていく。

バインドは鋭く舌打ちをし、振り上げた剣に力を籠めた。

「つまらねえ……。死ね」

翼の羽ばたきが凍る大気を打つた。

銀の鱗が光を弾き急降下する。顔に掴み掛かった鋭い鉤爪を躲し、バインドの剣が飛竜へと動く。剣が飛竜を捉える寸前で、鐸を弾く音と共に白い閃光が走つた。

首許に伸びた白光を後方に飛んで避け、バインドは笑みを浮かべたままの顔を向けた。首に浮かび上がつた赤い筋をなせる。

鞘走らせた剣を納め、ロツトバルトは再び柄に手をかけた。

「……面白い太刀筋だなあ。惜しかつたか？」

「全く。限界ですよ」

向かい合うと、じわりと圧迫感が身体を包む。レオアリスの剣と対する時とは違う、狂気を孕んだ剣気に、ロツトバルトは無意識に退こうとする足を押し止めた。

バインドは光の無い闇色の瞳を、膝を付いたままのレオアリスと、正面のロツトバルトに交互に向ける。

「剣士同士の戦いに、不粹だとは思わないか？」

「べらべらと、埒もない事を捲し立てる貴様よりはマシだ」
不愉快な響きを隠しもせず、ロツトバルトはバインドを睨み据えた。

「クク……」

バインドはチラリと上空に視線を飛ばした。飛竜が再びバインドに掴みかかると旋回する姿を捉え、嗤う。

「——余計な手出しをしなければいいものを。まあ、お前等の死もまとめて、レオアリスにくれてやるものいいかもなあ？」

バインドが一步踏み出す。それだけで強烈な圧迫感が叩きつける。

更にもう一步——だがロツトバルトの間合いには足りない。ロツトバルトを相手に、バインドに間合いなど関係ないだろう。バインドが剣を一振りすれば、それで終わりだ。

ロツトバルトは鞘を強く握り込み、バインドに視線を注いだまま距離を測つた。

あと数歩踏み込んでくれば剣が届く。それを待つだけで激しい消耗を覚えた。

レオアリスは雪の上に膝を付いたまま、動く気配がない。

ロツトバルトはバインドを退かせる方法を探して思考を巡らせる。

バインドがもう一步、歩を進めた。

じり、と冷たい汗が額を伝う。

バインドが再び踏み込む。

(チ)

何の策も浮かばないまま、左手の指が剣の鐸を弾きかけた、その時。

一瞬、大気が震えた。

二人の視線が吸い寄せられるように一点に向けられる。

レオアリスの身体を青白い光が覆うように包んでいる。

レオアリスの剣が纏う、剣光。

ふいに強烈な圧迫感が、レオアリスの身の裡から膨れ上がつた。

剣光が爆発するように急速に広がる。光に触れた瞬間、ロツトバルト

は弾かれ、後方に飛ばされた。

「つ」

雪に片手を付き、霞む頭を振つて顔を上げる。視界の先、先程までと変わらない位置に、レオアリスが立ち上がっているのが見えた。

陽炎のように青白い剣光がその身体を取り巻いている。

バインドもまた、弾き飛ばされたその場で、レオアリスの姿を捉えた。

驚愕に見開かれた瞳が、次第に再び強い愉悦の色を滲ませる。

レオアリスはその場に立つたまま動かない。だが、その足元から、ゆっくりと、放射状の亀裂が広がっていく。

右手に剣を提げたまま、レオアリスの左手が持ち上がり、鳩尾の上に置かれた。

ずぶりと沈み、光が溢れる。

白い世界が、青く染められていく。

再び、左手が引き抜かれる。

ゆつくりと現れたのは、右手の剣を映したかのようだ、青白い光を纏う長剣だ。

ロツトバルトが息を呑む。

レオアリスの剣は彼の十三対目の肋骨——即ち、一本。

だがこれまでの戦いで、レオアリスが二本の剣を持つ所を、ロツトバルトは見た事が無かつた。

強い不安が胸に灯る。

『俺は、狂うと思うか？』

ミストラの時とは違う、だが確かに、レオアリスが纏う強烈なまでの鬼気は、普段見知ったものではない。

レオアリスの負つた傷が、瞬く間に癒えていく。

「……ク……ハハ、ハハハハハ！ 待つていた、待つていたぞ、これを！」

漸く、会えたなあ！」

感に耐えないというようにバインドが喉を震わせた。立ち上がり、レ

オアリスに向かって歩き出す。

「さあ、思う存分戦おうじゃないか」

バインドの剣が熱を増す。たちまちの内に周囲の雪が溶け、乾き始めた。

周囲には静寂が満ちていた。

目の前に赤い一本の剣が浮かび上がっている。

(――何をするんだっけ？ ……ああ、)

バインドが頭上から剣を打ち下ろす。レオアリスの右手の剣がそれを受け止めた。

感じるのは、悦びだ。

解放と、——目の前の戦いへの。

沸き起こる、歓喜。

(こいつを、斬ればいいのか)
にい、と口元に笑みが刻まれた。

受け止めたバインドの剣を、軽く、ほんの僅か、跳ね上げた。その動作に、逆に体勢を崩され、バインドがよろめく。

レオアリスの左腕が動いた。

閃光のように打ち込まれた剣をかろうじて受け止め、バインドが後方に吹き飛ばされる。

防いだはずが、バインドの胸から腹にかけて深い傷が走った。吹き出した血に、驚きと、

悦びがその顔を彩った。

剣が赤々と焰を纏う。

廃墟に、赤い光が渦を巻いた。剣から散った焰が廃墟を覆う雪に灯り、

四方に走る。

「懐かしい光景だなあ。まるであの時に戻つたみたいじゃないか」

レオアリスの足元を焰の舌が舐める。蒸発していく雪の下から黒い土と、焼けて崩れた石が覗く。

「この墓場に相応しいのは、俺か、お前か」

バインドの足が焰を蹴る。レオアリスの右後方へ、一刀に間合いを縮めると、剣を斬り上げた。焰が迸り、大気を焦がす。

振り返りもせず、レオアリスは右手を動かした。

バインドの剣はレオアリスの背後で、その剣に阻まれて止まつた。

剣に触れた瞬間、バインドは弾き飛ばされ、廃墟の中に叩きつけられた。

刃を下に向けたまま、レオアリスが身体の前に二本の剣を掲げる。

剣は引き合うように重なり、そのまま一振りの長剣に姿を変えると、強い光を発した。

目の前に浮かび上がった剣の柄を、光の中に延ばされたレオアリスの右手が掴む。

剣の纏う光が、主の手の中に收まり、一瞬輝きを増した後、静まつた。例えようもない圧迫感が周囲を取り巻く。

大気の振動が、離れた所にいるロットバルトにまで伝わる。

無造作に剣を一閃させると、生じた剣風が周囲の木立を断ち、その奥の山肌を穿つた。

レオアリスがひどく酷薄な笑みを刷く。

「——それが、完全な姿か……」

バインドは目の前の剣士を、ただ陶然と眺めた。

剣が、届かない。

剣を打ち合わせる、それすら適わず自分の剣が空を切るのを、バインドはどこか敬意すら抱いて眺めた。

横薙の剣の回転をそのまま乗せ、左足を軸に踏み込む。袈裟掛けに振

り抜かれた剣には、やはり何の手応えもなかつた。

バインドの顔を、今までとは違う笑みが彩る。右肩を覆い続けていた

痛みは、既に無かつた。

戦いは、バインドにとつて生命だ。

死を感じることこそが生命だ。

漸く、今再び、生を得た。

青い光を視界の隅に捉え、バインドは咄嗟に上体を反らした。今まで

首があつた場所を、剣風が抜けた。

戻した上体の、すぐ前に、レオアリスがいた。

黒い凍るような瞳と、酷薄な笑み。

何の予備動作もなく至近から打ち込まれた剣を、バインドの左腕が迎え撃つ。

くぐもつた、嫌な音が響いた。

「！」

剣の衝撃を殺せず、バインドは地面に叩きつけられた。

碎けた左腕を、驚愕に見開いた瞳が見つめる。

「はは」

顔を上げた視線の先に、レオアリスの姿はない。気配を感じて動こうとした瞬間、足が左腕を押さえ付けた。

青白い剣が首筋にひやりと当る。

バインドとレオアリス、二人の視線が合わさる。

笑つた。

骨を断つ鈍い音が、ロツトバルトの許まで届いた。

断ち切られた首が雪の上に転がる。

ロツトバルトの位置からは、佇んでいるレオアリス後ろ姿が見えるだけで、その表情は判らない。

ひきつっていたバインドの身体が、やがて静かに動きを止めた。
「つまらないな。もう終わりか」

その声はぞつとするほど無機質な響きを持っていた。

先程までのバインドとの戦いは、互いの力がほぼ拮抗していた。

二本目の剣の出現、全能力の解放がここまで差をもたらす事になるとは、おそらくバインド自身想定していなかつただろう。

それとも、それがバインドの望みだったのか。
(どうなつた……?)

あの感情を欠いた声の響き。

レオアリスが頭をもたげ、ゆっくりと視線を巡らせる。
ロツトバルトは知らず、剣の鞘を左手で掴んだ。冷えたその感触に気付いて笑う。

普段のレオアリスからは感じる事のない、心臓を撫ぜるような恐怖がその場を満たしている。

このまま放つておけば、切り裂くものを求めて、眼にするもの全てを滅ぼすだろう。バインドのように。

だが今この場には、ロツトバルト一人しかいない。
(……俺が、止めるか?)

止められる可能性があるのか。

(——全く、自信が無いな)

自分一人で止める自信どころか、大隊一つ手にしていた所で何の勝算もない事は、バインドが証明している。

だが、すぐにでもレオアリスはロツトバルトを見つけるだろう。今のレオアリスにどれほど彼の意識があるのか、この場からは想定が付かない。

どうすれば戻る?

(剣を手放させるしかない)
最も単純で、最も効果的だ。
どうやって?

「知るか」

価値の無い自問に、自嘲気味に笑う。

レオアリスの視線がロツトバルトを捉えた。

ふ、とレオアリスの姿が消えたと見えた瞬間、目の前にその姿があつた。

上げられた漆黒の瞳と一瞬視線が重なる。

何も考える間もなく、身体だけが動いた。

地面を蹴ったその後を追つて横薙の閃光が走る。
咄嗟に立てた剣が、碎けた。

(しまつ)

剣風に弾かれ、後方の森へ弾き飛ばされる。

「つ」

雪の上に全身を叩きつけられ、ロツトバルトは激しく噎せ返った。

先程の位置から再びレオアリスは一息に間合いを詰めた。

呼吸を失つてその場に沈み込んだのが幸いした。

横薙の剣がロツトバルトの頭上を抜け、背後の木々が衝撃と共に断ち切られる。

息をつく間もなく振り下ろされた剣が、ロツトバルトの首の横で止まった。

剣のひやりとした感覚が皮膚に伝わる。

自分の首と胴が未だに繋がっている事に、どこか他人事のように不思

議さを覚えた。

だが剣は止まつたまま動く気配が無い。

首筋で剣が小刻みに震えるのを感じ、ロットバルトは視線を上げ、レオアリスを見た。

レオアリスの瞳が軋む。見慣れた感情の色が、僅かにその瞳に揺らいだ。

レオアリスの瞼が軋む。見慣れた感情の色が、僅かにその瞼に揺らいだ。

「噛みしめられた唇から、擦れた声が途切れ途切れに押し出される。

「……離、れる……」

聞ぎ合う意識を表わすように、剣を握った右手を、左手が押さえ込む。

（……まだ――）

先程の初太刀を避けられたのも、この為だ。

まだ完全にレオアリスの意識が消えた訳ではないのだ。

止めるなら、今を置いて他にはない。

だが幾度思考を巡らせてても、自分の今の能力を考えれば答えは全て、否だ。比較にならない。

それでも、ただ殺させる訳にはいかない。一旦身近な者を斬れば辛うじてかけられている枷は外れ、もはやレオアリスは自分を押し止める事はできないだろう。

（氣休めに近いな）

それでレオアリスの意識が戻る確率など、握った砂の一粒もあるかどうかだ。

だが、きつかけにさえなればいい。自らの意志で剣を抑えない限り、レオアリスの意識を戻す他の方法はない。

それを捜して視線を巡らせ、ロットバルトは息を呑んだ。

雪を踏んで、ゆつくりとこの場に近づいてくる者がある。

カイル——レオアリスの祖父だ。

右手に丸い香炉を提げている。

来るなど、喉元まで込み上げた声を飲み込んだ。刺激を与えるのは避けたかった。レオアリスはまだ背後に気付いてはいない。

（何をするつもりだ……？）

カイルは足を止めると低く何かを呟いた。その詞に合わせ、提げていた香炉から薄紫の煙が溢れ出し、雪の上に落ちると這うようにレオアリスの足元に漂っていく。

それは足元からゆっくりと、レオアリスの身体を絡めとろうとするかのように立ち昇った。

ロットバルトの許にも煙がじわりと這い寄る。足先に僅かに触れたそれは、ひどく重量感を伴う。咄嗟に足を引いたものの、触れた瞬間頭の奥が鉛のように重くなつた。おそらくは捕縛用の術なのだろう。

煙を嫌い、レオアリスは身体を捩る。だが絡み付いた煙に繋ぎ留められたかのように、脚は動かない。

脚に、腕に絡み付いた煙が厚みを増す毎に、剣がじり、と下がつた。上体が揺れ、雪の上に膝が落ちた。

（……成功したのか？）

煙は途切れる事なく、屈み込み動きを止めたレオアリスの背に纏いついていく。

じわり、とレオアリスの中に怒りが生まれる。手足が痺れるよう重く、鉛を括られたように動かない。

苛立ちと怒りが胸の奥に渦巻く。

自分を抑え込もうとするは何だ？

背後に、何かの気配があつた。

邪魔だ。

雪についた右手が、剣の柄を握り込んだ。

凍える冬に自分を暖めた腕。
目の前にいるのは。

剣が切り裂く事への喜びに満ちる。

囲炉裏の傍で、そのしわがれた声が語る言葉に耳を傾けた。

剣が、動きを止めた腕に苛立つように震えた。

目の前の相手は逃げる気配すら無い。

斬れ。

剣の歓喜が全身に流れ込む。

……何で――。

胸の奥底で、微かな悲鳴が響いた。

劍の歓喜が全身に流れ込む。

レオアリスが動かなくなつたのを見て、カイルは大きく息を吐いた。
掲げた香炉を下ろそうとした瞬間、青白い光が走り、手にした香炉を碎いた。

「！」

衝撃でカイルが雪の中に倒れ込む。

身を起こし向かけた視線の先で、レオアリスの身体が重い戒めを纏つたまま、ゆっくりと立ち上がる。

何で、逃げてくれない。

取り巻く煙を断つように、身体の周囲を剣が一閃した。

煙が搔き消える。

(やはり、抑える事は出来ぬか)

カイルは予め分かっていたかのように、僅かに笑った。

恐らくは、抑える事は不可能だろう、と……。

ふと、瞳を見開く。

ならば何故、自分はこの方法を選んだのか。

その場に立ち尽くしたカイルに向かつて、レオアリスは足を踏み出しだ。

た。

これが自分を斬れば、もはやレオアリスは止まるまい。

そうさせてはならないという想いの奥底に、小さな硬い石のようにこごつた固まりがある。

それが自分に裁断を下すのを待つていて。

彼らが去つて長い間、口に出されないままに、ずっと抱き続けてきた想い。

幾度重ねても、どうやつても、思考はそこに戻る。

我々はやはり、忌み族だったのだと。

——違う。

自分の邪魔をしていた相手に向つて歩く。

目の前まで来ても相手は動く気配もない。簡単に斬れる。

それは少し、つまらなかつた。

心の奥に浮かんだ声を無視して、剣がゆっくりと持ち上がる。

関わるものに禍を呼ぶ。

何故、生を求めてこんな地まで来てしまったのだろう？

もつと早い段階で諦めるべきだったのだ。

自分達の足掻きが呼んでしまったもの。

ずっとどこかで死を望み続けてきた。

もうすぐ、それが訪れる。

一番、相応しい者の手によつて。

カイルは剣が振り下ろされるのを待つように動かない。その姿に、ふいにロットバルトの中に憤りにも似た感情が沸き上がった。

『あの子を、頼みます』

あれは、そういう意味で言つたのか？

『我が子』を想う親の願いではなく？

(――冗談じゃない。そんな頼まれ方は御免だ)

雪に覆われた木立の間に視線を走らせる。探ししているものはすぐに見つかつた。

いつの間にか晴れ上がつた空の光を受けて、鮮やかに輝く。走り寄り、雪の上に落ちていたそれを取り上げると、ロットバルトは二人へと向き直つた。今にも振り下ろされそうな剣。

微かに震える腕が、レオアリスの中の葛藤を伝えている。

カイルにはそれが見えていないのか。

「止めろ！ あなた方が望んだのは、そんな事では無いはずだ！」

鋭い声がカイルを思考から引き戻した。レオアリスの後方にロットバルトの姿がある。

その手が投げた何かが、陽光を弾いてカイルの手の中に落ちた。

剣の意匠に、青い石の飾り。

目の前のレオアリスの姿に青年の姿が重なつた。

『忌み族？ 迷信なんて大体そんなもんだ』

『伝えたいのは――』

「あ、あ」

自分は、何を、しようとしていた？

この、何よりも大切な、彼等の忘れ形見。

それを――。

見上げたレオアリスの瞳の中に激しく闘ぎ合う色がある事に、カイルは漸く気付いた。

どうして今まで見えなかつたのか。

そこにあるのは、怒りでも憎しみでもない。苦痛にも似た、悲しみの感情だ。

今にも泣きだしそうな。

無造作に上げられていると思つた剣に込められた、二つの力。振り切ろうとするものと、押し止めようとするもの。

それを目にした瞬間、カイルは腕を延ばして目の前の身体を抱き締めた。

引き絞られ、限界に達した弓のように、その上に剣が落とされた。

抑えがたい衝動が、鼓動に合わせて吹き上がる。

止め処も無く生まれるそれは、解放を求めてレオアリスの意識を搖さ

振り続ける。

千切れそうになる意識を繋ぎ止める為に、精神は急激に疲労していく。

目の前に祖父がいるのは判っていた。抑えようとする腕を無視し、切

り裂く相手を求め、剣が歓喜に震えて持ち上がる。

抑えようとするこの腕に力は入っているのだろうか。

そもそも、自分は抑えようとしているのか？

斬りたがっているのは誰だ。

——いやだ。

剣の歓喜が膨れ上がる。

目の前にいるのは、自分を育ててくれた親だ。

——嫌だ、止めてくれ！

剣が落ちる。

意識が、弾けた。

八

ふいに、辺りが静寂に包まれた。

真っ白い雪の中に誰かが立っている。

『——悪かったなあ。俺はお前に、何一つしてやれなかつた』

初めて聞く声。少し低い、どこか陽気な響きだ。

『でも、楽しみにしてたんだぜ？』

その姿は雪に乱反射する陽光に阻まれ、はつきりと見る事はできない。自分にやはり似ているだろうか。

(——幻だから、分からぬ)

現実では在り得ないのだから。

それでも、胸には締め付けられるような、哀しみと喜びが満ちている。

『名前もやれなかつたな。……でも、お前は王から名を貰つたる』

軽やかに笑う。

『レオアリスか。いい名じやないか』

男の手が、剣を握ったままのレオアリスの右手に置かれた。

温もりが置かれた手から静かに伝わる。

鮮やかな漆黒の瞳。

——剣に呑まれるな』

ゆっくりと、穏やかに、だが明確に告げる。

『それは、お前自身だ』

レオアリスが言葉を発する前に、その姿は雪に溶けるように消えた。

剣が、カイルの背に届く寸前で止まる。

覗き込んだレオアリスの瞳に、明確な意志の光が戻った。

未だ力を緩めない剣を、握った腕が少しづつ押し戻す。

「レオアリス……」

確認するように呼び掛けたカイルに、レオアリスは瞳だけを向けた。

「……離れてろ」

食い縛った歯から押し出される言葉に、言われるままカイルは数歩後ずさつた。

レオアリスの腕が再び上がった。

頭上に掲げられた剣が発する青白い光が、白い世界を染め上げていく。剣が支配を求めて力を増していく。

無尽蔵にも思えるその力が、自分の中を突風のように激しく吹き上がる。抑え込もうとするほど、全身を切り裂こうとして身の裡で渦を巻く。身体がばらばらに砕けそうな激痛に、途切れそうになる意識を繋ぎ止める。

だがもう、分かっている。その力も意志も自分の範疇にしかあり得ない。

抑え得るのは、ただ意志と、誇りだ。

自分を常に支える、彼等への。

雪に閉ざされた世界を暖める、しわがれた声。

陽気な声と、置かれた手。

炎の中から見上げた金色の瞳――。

剣から叩きつけられる風が、レオアリスを中心に雪を吹き上げていく。

レオアリスは静かに息を吐き出した。

先程まで渦巻いていた身を引き裂く程の力は、既にレオアリスの裡に収まっている。

地面に突き立てた剣が一つ身震いをし、二本の剣に分かれ、そしてレオアリスの中に溶けた。

晴れ上がった空に顔を上げる。

微かな金属音に、首許に指を当てると、冷えた小さな石が指先に触れた。

(――まずい)
ロツトバルトは座り込んだままのカイルの身体を抱えると、雪を蹴り後方に跳んだ。

レオアリスの足元で湿った地面が覗き亀裂を生じたかと見えた瞬間、巨大な破片となつて竜巻のように空に巻き上がった。

一瞬上で停止し、竜巻のその中心目がけて急激に落下する。

レオアリスが剣を大地に叩きつけるように突き立てた。

轟音と共に、爆風と光が膨れ上がり、落ちかかった破片を粉々に碎く。

ロツトバルトはカイルの身体を抱え込み、地面に伏せた。

村人達はレオアリスの周りに集まり、名残惜しそうに彼等の育て子を見つめた。その顔はどれも皆、恨みがましい色を浮かべている。

「来たのも教えんで、もう帰るとは、薄情もんが」

「カイルもカイルじや。わしらに黙つて」

祖父が取り囲まれて口籠る様を眺め、レオアリスは可笑しそうに肩を震わせた。そうしながら、こうして再び笑える事に、強い安堵を覚えていた。

その姿に一斉に老人達の厳しい視線が向けられる。

「何を笑つとる、お前もじや」

じろ、と睨まれてレオアリスは無理に笑いを押さえ、肩を竦めた。それから改めて彼等一人一人を見回す。

「——もう行くよ。また来る」

「年に一度しか戻らんくせに」

「来る日を教えて行け」

「んな事言つたつて……」

四方から詰め寄られ、言葉に詰まつて数歩後退る様を眺め、ロットバ

ルトは苦笑を零した。

「上将。よろしければ、報告は私が先に戻つて上げておきますが」

老人達は嬉しそうに領き合い、レオアリスに再び詰め寄つた。

「気が利くのう」

「そうじやそうじや。二三日帰らんでも問題はないわ」

「いつも帰らんでええ」

「それは困りますね。我々には大将が必要です」

老人達は今度はロットバルトに顔を向ける。

「横暴じや！」

「そう仰られても」

ロットバルトは老人達に詰め寄られても素知らぬ顔だ。レオアリスは

その様子に笑い、それから僅かに迷う素振りを見せたものの、やはり首

を振った。

それは自分の任務として、王から与えられたものだ。

落胆を浮かべ、肩を落とした村人達に再び顔を向ける。

「……またすぐ来るさ。いない間にじいちやん達がぱっくり逝つちまつても困るし」

そう言つてにや、と笑つてみせる。

「なんちゅう口の悪いガキじや」

「そよう死なんつ」

「お前みたいな孫がいたんでは、気になつて死ねん」

口々に言いながら、それでも老人達は代わる代わる、レオアリスを抱き締める。

最後にカイルがレオアリスに歩み寄り、束の間その顔を見つめ、身体に腕を回した。

祖父の背を見つめたまま、レオアリスは身体を暖める温もりを噛み締める。

ずっとこれを感じて育つてきた。

あの手も、これと変わらない温度を持つていた気がする。

「——俺、多分ジンに会つた」

呴かれた言葉に、カイルや老人達が瞳を見開いてレオアリスを見つめる。数度躊躇うように開きかけた口が、結局何も紡ぐ事無く閉ざされた。

「単なる、夢かもしれないけどな。……笑つてた」

カイルは一度だけ、静かに瞳を閉じた。

「——そうか」

胸に架けた石は、もはや何も言わない。ただ深い青い色を湛えてそこにある。

レオアリスは顔を上げた。

「……俺は、この村が好きだよ」

カイルが少し呆れたように笑う。

「止めるのも聞かずに飛び出した奴が、良く言うわ」

「そうだけど。俺を、ここまで育ててくれた」

色々なものをここで培ってきた。彼等なくして、今の自分は有り得ないだろう。

「まだ、礼も言つてなかつたな」

レオアリスは改めて彼等に向かい合うと、静かに、深く頭を下げた。

「ありがとう」

飛竜の銀の翼が大きく風を孕んで空に浮かび上がる。

一面の白銀の世界が、陽光を受けて眩しいほどに輝く。

ここは、これから雪が降り続け、外界から隔絶された厳しい冬を迎えるのだろう。

レオアリスは暫く白い森の奥に視線を注いでいたが、やがてそれを戻すと、まだ飛竜を見上げたままの村人達に大きく手を振った。

手綱を引き、騎首を南に向ける。

「戻るか」

王都へ。

終

章

前方で王城の尖塔が朝日を弾いた。

薄紫の夜明けが東へと後退していく空に、小山のような王都の影が現れ、見る間に視界に迫るように近づいて来る。周囲を囲む広大な森の中に浮かび上がる巨大な都、アル・ディ・シウム。

そこに、王が座す。

様々な想いが心の裡を過ぎる。ただその多くは、温もりを伴うものだ。

レオアリスは大きく息を吸い込み、静かに吐き出した。

随分と久しぶりに戻ってきた気がする。

急かす心のままに飛竜を駆ろうとして、王都の上空を旋回する複数の飛竜の姿があるのに気付き、レオアリスは手綱を引き速度を緩めた。真横から差す太陽の日差しに、飛竜達の姿は濃い影のようだ。やや遅れて、

ロットバルトが乗騎を寄せる。

「こんな早くに……何かあつたのか」

「カイは戻った時、何も告げはしなかつたのでしょうか？」

「特にはな」

レオアリスの使い魔は、村を出る時に帰都を知らせに飛ばしたが、取り立てて異変を知らせてはいない。

ただ、こここのところ立て続けに軍が動いている。バインドの件が終わつたとは言え、早朝から飛竜が王都の上空を旋回している事に、少なからず緊迫感を覚えた。

「どこの隊だ？」

この間にも、王都はゆっくりと目前に近づいて来る。ロットバルトは蒼い瞳を細めて次第にはつきりしてくる王都の上空を透かし見た。

「——師団ですね」

「師団？ 何で上を飛んでるんだ。訓練は予定して無いだろ」

何か緊急の案件でもあったのかと、レオアリスがハヤテを急がせようとした時、彼方の飛竜が一騎、二人に気付いたのか、速度を上げ近づいて来た。

それを合図に、北の演習場から飛竜の一隊が一斉に上昇する。飛竜に驚いた鳥達が周囲の木立から追われるよう羽ばたき、騒然と羽音を響かせた。

「何——」

飛竜の黒い鱗が陽光を弾き、黒雲のように王都の北側の空を埋めている。

飛竜の上に立てた棚引く旗は黒地に暗紅色の双頭の蛇、紛れもない近衛師団の軍旗だ。

飛竜を駆る騎手の姿が肉眼で捉えられる程に近づき、レオアリスは身を乗り出した。

「一隊……」

先頭の飛竜の上に立るのはグラントスレイだ。クラライフの中軍がそのまま背後に続き、左右にそれぞれ、フレイザーとヴィルトールの左右軍が展開している。

「——ほほ、一隊全騎じやねえか……」

「そのようですね。ただ離脱もその後の飛空も乱れが無い。見事な編隊ですよ。儀礼の際の空域展開の見本だな」

今度の御前演習に取り入れましようか、と感心したように口元に手をあてたまま、ロットバルトはレオアリスに瞳を向けた。

「いや、お前、何をのんきに……」

レオアリスが驚きを通り越して、呆れた声を上げる。全隊がこうして動く事など通常ではほぼ有り得ないのだが、第一大隊の飛竜は一糸乱れぬ編隊のまま次々に飛来すると、レオアリス達の周囲に滑り込むようになぐりと取り巻いた。

黒旗が風に靡き、音を立ててうねる。

呆気に取られてハヤテの上に立ち尽くしているレオアリスの前で、グラ

ラ NSレイが飛竜の上に立つたまま、深く上体を折る。

フレイザー、クライフ、ヴィルトール、そして第一大隊の将校と隊士達が、一齊に敬礼を向けた。

「ご無事の帰還、お慶び申し上げます、大将」

グラ NSレイの低い声が、静まり返った大気に溶ける。

二、三度口をぱくぱくと動かしてから漸く現状を飲み込み、レオアリ

スは顔に血を昇らせた。

この為だけに、早朝にもかかわらず彼等はずつと待っていたのだ。

レオアリスはまだ顔を赤くしたまま一度俯き、再び顔を上げて彼等を見回した。

「——今、戻った」

黒雲のように密集した飛竜達の上から、大きな歓声が上がった。

「こういう場合、将校は兵に対し手を振るなどして応えるのが慣例です

よ」

「手……？」

手を振つて応えるというと、祝祭などの折に王や高位の貴族がやるあ
れだ。優雅で華やかな印象が強く、王やアヴァロンが行う場合は威厳に
満ちている。レオアリスには一番苦手な分野だ。

「……いや……俺にはちょっと……」

「慣例、というよりは、一軍の将としての義務ですね。兵の士気を上げ
るも落とすも、上に立つ者次第でしよう。まあ一言演説されるという手
もありますが」

「義務……？」

実際は剣を挙げて応えて見せれば、それだけで十分なのだが、義務と

言われてレオアリスは真剣に眉を顰めて考え込んだ。

ロットバルトは考え込んでいるレオアリスの横を離れると、正面のグ
ラ NSレイへ乗騎を寄せた。第一大隊全軍を動かす許可を、誰が出した

のかと、その点が気にかかる。

この件に関して、王は軍を動かす事を禁じている。バインドを討つた
以上、既にその範疇ではないにしろ、緊急時でもなく大隊全騎を動かす
事は、許可がなくては出来ないはずだった。

歓声はまだ続いていて声は聞き取りにくかったが、グラ NSレイは領
いた。

「アヴァロン閣下には、飛空演習を行うと申請して許可を戴いている」
グラ NSレイの顔に浮かんだ表情に、ロットバルトは苦笑を洩らした。

規律規則を重んじるグラ NSレイがこうした選択をするのは、かなり

思い切ったはずだ。

「……何だ」

グラ NSレイが渋い顔でロットバルトを睨む。

「いえ。派手な演習ですが、たまには必要でしょう」

「——今回は、我々だけではなく」

口を無理に引き結んだままのグラ NSレイの声に重なるように、鋭く、
だが朗らかな声が降り注いだ。

「剣士、レオアリス！ 良くぞ戻った。王はお待ちかねだ！」

上空に、磨き上げられた濃紺の鱗の飛竜が浮かんでいた。飛竜の青い
瞳が挨拶をするように瞬く。レオアリスが言葉を発する前に、アスター
トがその上から、ひよいと顔を覗かせた。

「お前さあ、こういうところでがつちり固まつちやつてどうすんの？ 情
けないね。もうちょっととばあーっと行けよ、ばあーっと。せつかく派手
に迎えてやつたんだからさあ」

華やかな面に、に、と笑みを広げ、アスターは手を振つた。呆気に
取られて言葉を失つていたレオアリスも返すように笑う。

「——何が派手だ。大体お前が何でこんなところにいるんだよ」

「だって、面白いじゃん。お前がどんなカッコいいこと言つてくれるの
かと思つてさ」

悪戯っぽくけらけらと笑い、アスターントはハヤテの上に飛び降りた。

レオアリスの正面にふわりと浮かぶと、黒い艶髪が風に靡いて零れた。

握った拳でレオアリスの胸をトンと叩く。

「ほら、応えてあげなよ。皆朝っぱらからお前が何言うか楽しみにして来てんだから」

「……」

ぐつと詰まり、レオアリスは周りを見回した。周囲の隊士達の顔には、レオアリスがどんな事を言うのか、半ば面白がっている表情が浮かんでいる。ここまで注目されると、余計何も出てこない。レオアリスは恨みがましい瞳を、にこやかに微笑むアスターントに向けた。

「しょおがねえなあ。——上将！」

じれったそうな声と共に隊士達の中からクラライフの飛竜が進み出るト、クラライフはハヤテの上に飛び移った。主以外の者に乗られ、ハヤテが不機嫌そうに鋭く息を吐き出す。

「ちつと我慢してくれよ。お前のご主人の為だ」

クラライフはハヤテへそう声を掛け、レオアリスを肩に担ぎ上げる。

レオアリスは慌てふためいた声を上げたが、クラライフは構わずぐるりと隊士達を見回した。

「バインドを討つた剣士だ！ 僮達の大将だぜ！」

朗々としたクラライフの声に重なるように、再び歓呼の声が響く。

クラライフはレオアリスの顔を見上げ、カラカラと笑った。

「上将おつ、ほら、奴等に何か言つてやってくださいよ」

レオアリスは赤面したまま何とか逃れる手は無いものかと周囲を見回したが、逆に期待に満ちた顔に迎えられ、やがて観念したかのように顔を引き締めるとハヤテの上に降り立つた。

この位の責務は果たせて当然なのは確かだ。

アスターントが期待に瞳を輝かせて、食い入るようにレオアリスを見つめている。

(くそ、何の期待だ)

レオアリスはその顔をじろりと睨み付けた。

(きつちり、格好いい事言つてやろうじやねえか)

喉の調子を整える為、一度軽く咳払いして顔を上げる。

「こ……」

じつとらそこにある全ての視線が集中する。どんな戦場にある時よりも、付け加えれば、王の前にある時よりも、緊張した。

(——やっぱ、何も出てこねえ……)

「……これからもよろしく……」

一瞬の沈黙が生じた中を、涼やかな風が吹き抜ける。

「史上稀に見る、迷言ですねえ」

「——少し厳しく、大将としての在り方を学んで戴かねば」

アスターントの爆笑が、晴れ渡った空に響いた。

「良く戻った。バインドを見事討ち倒しての帰都、喜ばしい事だ」

王の声が、低く心地良く、そしてその場を圧する響きで、静かに流れる。

高い位置に設けられた窓の飾り硝子から、複雑な色彩を帯びた光が玉座を浮かび上がらせるように降り注いでいる。

レオアリスは玉座の壇下に跪いたまま、顔を伏せ、王の声を聞いていた。

湧き上がつてくる喜びと、誇り。それらは心臓から送り出される血液に乗つて、身体の隅々まで行き渡るよう感じられる。

この感情が、彼の言っていた、主を得るという事なのだろうか。

結局、明確な答えをくれる者はいない。

それは自分自身で選ぶしかない感情だが、そうであれば、自分は既に選んでいるのだろう。

許されるなら、王に尋ねてみたい事がある。

十七年前の事を。

何故あの時、自分を救い上げてくれたのか。

名付けた、その理由を。

だが、王の上には常と変わらない表情があるだけだ。

レオアリスは気持ちを抑え、深く頭を下げた。

「……月の末は演習があつたな」

「はい。御前に、披露させて頂きます」

「楽しみにしている」

一言、そう告げると、王は瞳を閉じた。

王都に戻つてからはひたすら慌ただしかつた。

まずは正式な報告書を作成しなければならない。どこまで記載すべき

かで、ロットバルトやグラヌスレイと何度も議論を交した。

レオアリスは直接的にバインドと関わる事柄のみでいいと考えていたが、ロットバルトは過去の経緯は一度明らかにしておく必要があると説き、グラヌスレイもそれに賛同した。

「それが誰にとつても真実となる訳ではありません。ですが、多方面からものの見方は提示すべきでしょう。特にこの件に関しては、貴方は貴方の立場からの主張をいづれかの時点としておくべきです。この先王都にあるなら、尚更必要な事ですよ」

結局、実際の報告書へ追記として別に添える形で、その部分はロットバルトに任せた。自分ではどうしても感情が先に立ち、報告としての処理は出来そうにない。

軍議での口頭の報告も残つていた。

報告は淡々と行なわれ、バインドの死に対して確認する二、三の質問を受けただけで、特に問題も挙がらなかつた。

もとより四大公の立会いの上で王が下した決定に異論を差し挟む余地はなく、バインドを討つて戻つたのであれば、それ以上の議論もない。まだ完全に納得したとは言い難い表情を浮かべている者もあつたが、それも表立つて取り沙汰される事は無かつた。

ロットバルトが用意した答弁の資料もあまり聞く必要のないまま、彼らの反応には肩透かしを食らつた気分さえ覚えたが、それでも正規軍副将のタウゼンが一連の軍議の終了を告げた時は、レオアリスもグラヌスレイも顔を見合させ、開放感からほつと息を吐いた。

中断されていた御前演習の準備もまた再開された。
慌ただしく、しかし確実に、日常が戻つてくる。

ゆっくりと振り返る時間もないままに、演習訓練、演習会場の警備や

王の警護と入退場に伴う導線の確保、列席する諸侯の警備、一般観覧者への対応と、日々すべき事は山積していく。近衛師団内の会議や正規軍との合同の会議、更に合同の演習も重なれば、ほとんど食事を取る暇さえ惜しいほど、誰もが慌しく動き回っていた。

バインドの一件で準備が滞っていた分、尚更立ち止まつてはいられない。

そうして、日数を数える間もなく、日々は過ぎた。

街路樹は金色に染まり、乾いた葉が枝から零れそうに揺れている。気の早いものは枝を離れて散り始め、路上の石畳に鮮やかな絨毯を敷き始めてている。

早いもので、もう明日は御前演習が行われる日だ。正規軍、近衛師団の詰める第一層は、出陣前にも匹敵する慌ただしさに包まれていた。

最後の近衛師団全体の布陣演習を確認して執務室に戻ると、レオアリスは椅子にどさりと腰を下ろした。久しぶりに動くのを止めた気がする。「――警備態勢も、演習の布陣も、閲兵の並びも、全部終わりだな？」

念を押すようにグランスレイを見ると、グランスレイも慌ただしい影

を額に残したまま、力強く頷いた。

「後は午後の会議で全体の最終確認を行い、それで本日の案件は終了です」

グラансレイの言葉に、レオアリスは大きく息を吐き、椅子の背にぐつたりと寄りかかった。ただ、闇雲に疲れている訳でもない。終着点のある慌ただしさは充足感も感じさせるものだ。

「明日か……」

明日は正午から始まり、王の高覧のもと、布陣演習、隊内の実戦演習、演武、閲兵と、数刻に渡つて行われる。演武の中で、レオアリスの剣舞

も予定されていた。

二刀を使うかどうか、それを少し迷っていた。剣の制御や演習場の状況を測った上で決めようと思っていたが、中々じっくりと考える時間も取れてはいない。

実際あれ以来、レオアリスはまだ剣を抜いてはいない。
完全に制御できるのかと自分に問えば、いま一つ確証が付け難かつた。レオアリスは束の間天井を仰いでいたが、一旦身体を背凭れに沈め、勢いをつけて椅子から立ち上がつた。とにかく、この後の会議、近衛師団、正規軍の揃う会議で取り敢えず最後だ。

「行つてくるか」

面倒なのは変わらないが、バインドの件を議論していた時よりはずつと気が楽だ。

「どうぞ、会議用の資料です」

扉へ向かうレオアリスへ資料を差し出し、ロットバルトは言葉を継いだ。

「会議が終了された後、お時間を戴いても？」

「予定は開いてるけど……めんどくさい案件じゃないだろうな。さすがにもう色々考えるのは遠慮したい」

ロットバルトは笑つてそれを否定する。

「では、王立文書宮へお越しください」

見せたいものがあるとそう言って、会議の時間が迫つているレオアリスを送り出す。

何があるのか尋ねようとも思ったが、なんとなく止めた。

外に出れば、日差しが暖かく中庭に注いでいる。吹き抜ける冷えた風も心地よい。レオアリスは青く晴れ渡つて空を振り仰ぎながら、東の間、遠く離れた故郷の雪を想つた。

「参りましょう」

グラансレイに促され、レオアリスは視線を戻し慣れた中庭の景色を見渡すと、頷いて歩き出した。

御前演習の流れの最終確認だけにも関わらず、一つ一つの手順や事項を頭から追う様に確認していくば、会議が終了した頃には既に二刻が経過していた。太陽もかなり西に傾いている。

アスターが随分と真面目に参加していたのが印象的だと、そんな事を思いながら、レオアリスは王城の広間まで来るとグラансレイを振り返った。

「文書宮に行つてくる。かなり待たせたかもな。お前はどうする？」

「私は先に戻らせて戴きます。もう今日は公務はございません。ゆっくり休息をお取りください」

「グラансレイも身体を休めろよ。皆にもそう言つといてくれ」

グラансレイが頷き、一礼して王城の出口へ向かうのを確認し、レオアリスは王城の奥、王立文書宮へ向かった。廊下を暫く歩き中庭への扉を出ると、広い中庭に純白の花崗岩で造られた長い回廊が伸びている。

擦れ違う学院生達が、やけにざざめいている。彼等の会話の中に度々ヴエルナーの名前が交じるのを聞いて、レオアリスはロットバートがつい一年ほど前まで王立学術院の院生だった事を思い出した。まだ学院生達の間でも、話題に新しいようだ。

在席していた間、ずっと首席だったと聞いている。首席にありながら内務へ進まず軍へ入る事も極めて珍しい例で、今年の学院生達の進路に大きな選択肢となつたとも。武の方が伴つてゐる事が肝心だが、今後の参謀部候補が増えるのは、軍にとつても歓迎すべき事だ。

ともかくロットバートが既に来ているのが判り、レオアリスは少し足を早めた。

王立文書宮の扉の横にロットバートが寄りかかっているのを認め、片

手を上げる。周囲を遠慮がちに囲んで立ち止まつてゐる学院生達の姿に先日の食堂を思い出し、どこも余り変わらないと苦笑を洩らした。

「悪い、少し長引いた。……待つたみたいだな」

ロットバートが一礼し、面を上げる。

「私も今しがた来たところです」

「回廊からこつち、話で持ちきりだつたぜ。ちょっと詳しく聞いてみたいよな」

「お聞きになるほどの価値はありませんよ。それより、会議は恙無く？」

「無事終わつて、後は明日を待つだけだ」

レオアリスの面に浮かんだ苦い色に、ロットバートは口元に笑みを刷いた。

「剣舞は？」

「……最後に回された。アヴァロン閣下の前だ」

不服、というより心底嫌がるような低い声に、ロットバートはレオアリスの顔を同情と興味の入り交じつた瞳で眺めた。

「——それはまた」

「有り得ねえ。普通に年功序列でいいじやねえか。第一大隊なんだし、一番最初で最初なら失敗しても演武が終わつた頃には忘れてるよなあ」「失敗の度合いにも寄りますがね」

総将の前など大舞台だ。そこへ本来の序列を無視して置くということは、まだ試す気持ちが全般的にあるのだろう。

失敗すれば、またそれを理由にあれこれと批判も挙がる。

「二刀を披露されればいい。失敗しさえしなければ、批判の口を閉ざさせれるいい機会になりますよ。それに今回の報告は既に上げていますから、期待は持たれているとお考えになつた方がいいでしよう」

「……いつそ、おもいつきり振り回すかな」

「それで発散されるのもいいかもしませんが。一応、修繕費は押さえてありますしね」

その言葉にレオアリスは隣を見上げた。

「……ちょっと参考に聞きたいんだけどさ。修繕費はどの位押さえているんだ？」

ロットバルトの告げた数字に、レオアリスは呆れて口を開いた。

「——お前、俺がどれだけ壊すと思ってんだ」「さて。命が幾つあっても足りないと思つた事は何度もありますが」

「——」

自分の所業——大抵記憶が余り無いところが余計怖い——を思い返し、

レオアリスは肩を落とした。やはりまだ今一つ確信が持てない。

「やっぱり二刀はよすか……」

「ご随意に」

「……本題。見せたいものがあるって言つてたろ」

ロットバルトは頷いて、すぐそこにある重厚な扉を示した。

「そうでした。どうぞ中へ」

王立文書宮の扉を押し開け、正面の机に近づくと、スランザールがいつものように書物に突っ込んでいた顔を上げる。

「ふむ」「それだけ呟いて立ち上がり、ちょこちょこと二人に近寄る。「少しは成長した顔をしておるの」

スランザールは首を伸ばしてレオアリスの顔を覗き込み、そう言つてくしやりと笑つた。
「成長したかどうかは判んねえけど、まあ少しは変わったつもりだよ」「己の自覚はその程度が程良いものじや」

普段国内随一の知恵者と自ら公言して憚らない老公はそう言つと、ロットバルトへ顔を向けた。
「お前も、ましな顔になつたの」

皺枯れた声でカラカラと笑うスランザールに対し、ロットバルトはただ笑みを返し、一礼しただけだ。レオアリスはその顔を眺め、スラン

ザールに視線を移す。スランザールは王立学術院の院長も兼務している。

「そうかもな……。学院生時代はどんなだつたんだ？」

再び興味が湧いてそう訪ねると、スランザールは口元を尖らせた。

「つまらんヤツじやつたわ。わしの会心の問い合わせを全部解いてしまいよる。しかも解答が実利一辺倒で全く面白みがない。不可をやろうかと何べんも思つたが、周囲が煩く止めるでのう」

「それは残念ですね。正当な評価を戴く機会を逸していた訳だ」

嫌味とも素直な感想とも判別しにくい物言いに、スランザールは眉を盛大に寄せた。

「ふん。して、今日は近衛が二人も揃つて学問の聖域に何の用じや。わたしの教えを聞きたいと申すのであれば、特別に時間を割いてやらない事もないが」

「いえ。それはまた次の機会に」

さらりと否定され、スランザールの皺顔がさらにくしやすくしゃと寄つた。

「閉架を見せて戴いても？」

文書宮の閉架は十数万冊の文書量を誇るが、整理途中や分類前、そして持ち出し不可の貴重な書物を含む閉架は、更に閉架の数倍の規模になる。

基本的に申請さえ行えば、希少本以外は誰でも閲覧が可能だ。

「ふむ、まあ良いじやろう。……大戦のか」

「そうです。以前と同じ場所ですか」

「あそこら辺は変わつとらんよ。……くれぐれも言うとくが、整理を付けていい訳ではないぞ。他をやつとるだけじや」

「じいさんの場合、すぐ読み耽るからじやないのか？」

レオアリスが口を挟むと、スランザールはじろりとその顔を睨んだ。

「スランザール様と言わんか、小僧。大体お前のような不勉強者の孫を持つた覚えはないよ」

レオアリスが肩を竦める横から、ロットバルトが付け加える。

「貴方と上将の祖父君は、良く似ておいでなんですよ」

スランザールの皺顔が、何とも表現しがたいほどくしゃくしゃになつた。

「……ふん。勉強せえ」

スランザールはくるつと後ろを向くと、さっさと机に戻り、再び書物に首を突っ込んだ。

「似て……るけど……まあ」

レオアリスも照れくさそうに、片手で黒髪を交ぜた。

ロットバルトは可笑しそうに笑い、レオアリスを案内して机の奥にある扉を開けた。

扉の向こうはすぐ左右が階上へと続く短い石段になつていて、それを見るとまた長い廊下があつた。内側の壁には、幾つもの扉が一定間隔に設けられ、書物の分類名と数字が振られている。

「こんな場所あつたのか……」

レオアリスが感心して見回していると、ロットバルトが足を止めずに振り返る。

「学院の関係者にはありふれた場所ですが、一般の閲覧者は余りここまでは入りませんね。開架で足りない程深く調べようとする者位です」

ロットバルトの言うとおり、僅かな距離を歩く間に、学士らしき女性と一度擦れ違つた。頻繁に使われているのだろう。ロットバルトはしばらく歩いてから、一つの扉で立ち止まつた。扉の表記は、史書だ。

扉の向こうは天井が三階部分まで吹き抜けになつた広い部屋で、壁一面の書棚の他に、十数基の書架が二列にずらりと並んでいる。

「すげえ……」

こんな部屋が幾つもあるのかと、レオアリスは手近な書架に寄り、書物の背に視線を流した。古いもの、新しいものがまちまちに置かれ、背

表紙に標題の無いものも多い。

ロットバルトは並んだ書架の一つを選んで入ると、背表紙の表記を確認しながら歩き、やがて立ち止まつた。取り出したのは一冊の幅広い書物だ。部屋の中央に戻り、設えられている卓にそれを置いた。

近寄つて見ると一見しただけでもかなり古い造りで、表紙の装丁や縁が所々擦れている。

「彼の名前を聞いて、以前これを見た事があつたのを思い出しました。子細な表記はありませんが……」

「――」

レオアリスは一旦ロットバルトの顔に視線を向けて、また書物に落とした。

静かに息を吐く。

多分、その事なのだろうと考えていたのだが、目の前に見せられて改めて、書物が残されていたのだと感慨を覚える。

レオアリスはゆっくりとそれに触れた。特別な感覚が伝わつてくる訳でもなく、乾いてかさついた古い紙の手触りがあるだけだったが、それでも心臓の鼓動が早まつた。

指先がすぐにそこを開いたのは偶然だらう。

年代記というべきなのか、淡淡と起こつた出来事だけを記しているものだ。時折小さく絵が添えられている。

その項に書かれているのは三百年前のバルバドスの大戦の記述で、文章を眼で追えば幾度も、その名が浮き上がるよう飛び込んできた。戦場の記録。月日と場所、布陣や戦果、そうした事務的な記述の中、温度を持つて感じられる名前。彼が戦場に有つたのは、大戦が終結する直前の、ほんの数年間のようだつた。

幾度か項を繰つた後、レオアリスは挿絵の一つに引き寄せられるように視線を落とした。

彩色のない小さな挿絵で、何処かの戦場に、王の姿が描かれている。

その横に一人の青年が立っていた。

三

顔までは見えないが、背格好、そして手にしている飾り気のない長剣は、レオアリスのそれに良く似ていた。

大戦の剣士——。今までただ歴史の中で聞くだけだった名が、自分と関わりを持つのは不思議な感覺だ。

声に出さないままに名を呟くと、胸の奥が静かに騒めく。

右手を上げ、軍服の上から胸に掛けた飾りに触れた。

僅かに躊躇い、それから、自分の耳にも届かないほど微かに、もう一つ、別の呼び方を呟く。

「——父さん」

現実感は少し薄い。それでも、胸の中に震えるように、暖かい火が灯るような気がした。

レオアリスはそれを噛み締めるように瞳を閉じた。

「……もう少し探せば、色々と記述は見つかるかも知れませんね」

彼の——ジンの事は伏されている訳ではない。ただ記憶の中に埋もれているだけだ。辿つていけば、判る事は少なくないのだろう。

「——時間が出来たら、聞いて回るか」

村に戻つて、祖父達に聞く事もできる。近づく事は可能だ。

「居たんだもんな」

鳩尾に手を当てる。

自分の裡に在る、穏やかなもう一つの鼓動が感じられる。

父と母、二人から受け継いだ剣の鼓動。

それはこの先ずっと、レオアリスと共ににある温もりだった。

場内が息を呑む。

力が、身体の内から吹き上がつてくるのが感じられる。その力に靡く
ように、レオアリスの纏う長布が翻つた。

深い呼吸と共に、一息に引き抜く。

太陽は日ごとに地上に近づき、風も吹く向きを変え、北から冷たい空氣を運んでくる。

ただ、空は見事に晴れていて、低い陽射しが大気を暖めていた。

演習場を抜けしていく冷えた風に、レオアリスは一度瞳を閉じた。

静かに息を整え、瞳を上げる。

演習場を取り巻く観覧席とそこにひしめく大勢の視線が、演習場の中央に立つレオアリスへと注がれている。

その正面の高い位置に、王の座す玉座があつた。

すぐ下の席でアスターが手を振るのが見え、レオアリスは口元に苦笑を浮かべた。

(あいつ、何を暢気に観覧してるんだ。俺のひとつ後じやねえか)

この後にアヴァアロンの演武があり、最後にアスターが正規軍將軍としての演武を見せる予定だ。その二人の演武はレオアリスにとつても楽しみの一つでもある。ゆっくり観るためには、まずはこの場を問題なく乗り切る必要があるが、今はそれもあまり気にしてはいなかつた。

(ま、後処理は頼んでるしな)

レオアリスは一礼すると、右手を鳩尾に当て、剣を引き抜いた。

青白い光が演習場に満ちる。

現れた長剣に、ざわめきと溜息が場内に広がつた。

その響きが消える前に左手を上げ、再び鳩尾に当てる。

ずぶりと、沈む。

場内が息を呑む。

解放、尊厳、意志。

レオアリスの瞳が王の姿を捉える。

左右の剣が呼応するように、眩い輝きを放つた。

王は拾い上げた赤子を、その村に預けた。名を与え、いずれ成長した時に、望むのであれば、自らの元に来させるようにと。それが復讐の為であつたとしても、落胆する事はなかつただろう。

二本の剣が空を切り裂き、時折呼び笛のような高い音を立てる。

広い演習場で、レオアリスが二本の剣を操る。

静から、一転して動へ。

風を巻くように空を切り裂き、空で止める。黒衣が動作に合わせて翻る。

舞という響きから想像される優雅さは少ないが、剣が青い尾を引いて大気を切り裂く様は、だがやはり、見る者を惹き込む程に美しかつた。

「満足！」

身を乗り出すようにその動きを眺めていたアスタークトは、言葉どおり満足そうに息をついた。御前演習が行われている第一演習場には多くの諸侯が列席し、この演目は言葉を忘れて見入っている。

視線のあるのは、レオアリスに対して意趣のある者にさえ、それまでの批判を一時忘れさせる光景だ。

「二刀の剣士か……」

感嘆して呟く彼等の顔をちらりと眺めて、アスタークトは笑つた。

その存在は、王国にとつて悪い事ではない。

視線を演習場へ戻す。アスタークトはまだレオアリスとゆづくり話をしていたなかつたが、聞きたい事への答えは全て、視線を注いだ先にあつた。

「良かったですね」

傍らのアーシアが穏やかに笑う。その言葉が何に向けられたものなのか、敢えて確認する必要はなかつた。

「うん。——これからまた、楽しいな」

その剣を恐れた訳ではない。

ただ、剣士にとつて主を得る事がその最大の喜びであるように、自らの為の剣を得る事は、その者にとつても喜びだろう。であればこそ、その剣を失う事に、躊躇いを覚えたのだ。

明確な言葉で言うのならば、絶対の信頼、を。

バインドがレオアリスの前に現れた時、王は僅かに自問した。伏せ続けるか、全てを明らかにしてみせるか。

だが敢えて、レオアリスが自ら知るままに任せた。

その剣が何を選ぶのか、干渉を与える事なく、それを見てみたいと思つたのだ。

今——全てを知ったレオアリスの中に、今までと変わらないそれが見える事に、僅かに安堵している自分に苦笑する。

『いざれ得られるだろう、王よ。貴方なら』

時は思わぬ方向へ流れる。

淡々と流れていく時の一幕一幕は、意外と興味深いものだ。

(はは。何考えてんだ……)

「そんで、王から下賜されたのが、それ？」
アスタークトはレオアリスの執務机の前に椅子を持つてきて腰かけ、机に置いた腕の上に頸を載せたままそれを眺めた。レオアリスが頸くのを見て、さすがのアスタークトも乾いた笑いを洩らす。

レオアリスが剣を納め、その場に片膝をつく。黒衣がその身体を追つて、ふわりと落ちた。

王の高座に対し一礼すると、水を打ったように静まり返っていた場内に、歎声が響く。

王が立ち上ると、場内は再び静まり返り、その言葉を待つた。

「——見事な剣舞であった」

低い静かな声が朗々と演習場内に響き、レオアリスが一層深く頭を下

げる。
「先のバインドとの一戦によつて、そなたは名実と共に、この国に於いて比類無き剣士となつた。——我が名付け子にして、我が剣士。そなたを得た事を誇りに思う」

場内に満ちた驚きが、すぐに波のような歎声に代わる。

(——最高の、後ろ盾だ)

アスタークトが笑みを浮かべる。

王自ら、諸候の前でそう告げる事の意義は計り知れない。

(……まあ、あいつにはそんな事どうでもいいかな)

レオアリスの頬に浮かんだ、誉められた子供のような喜びの色を認め、

アスタークトはもう一度、満足そうな笑みを浮かべた。

鞘に彫り込まれた紋様、使われている地金、黒檀で加工された柄。鞘から出さずとも、刀身が完全な美しさを以つて鍛え上げられているだろう事が容易に想像できる。
拝領してから既に三日。ずっとこうして、執務室の机の上に置かれている。

「……しまつとけば？」

「うん」

アスタークトの言葉に頷くものの、レオアリスは非常に複雑な表情で剣を眺めたままだ。

(——だめだな、こりや)

噴き出しそうになるのを堪えてアスタークトは席を立つた。

「もう、お帰りですか」

「うん。ちょっと見たい気もするけど」

ロットバルトが執務室の扉を開けると、アスタークトは回廊へ出て振り返つた。扉の奥に、まだ剣を眺めたままのレオアリスの姿が見える。

「三日か。結構保つたよな」

「でしようね」

アスタークトを見送つてから、ロットバートはレオアリスの前に戻つた。

「何を考えていらつしやるんです」

「いや、ちょっと、使ってみようかなー、と」

遠慮がちに視線を落としながらも、レオアリスは今にも剣に手を伸ばしそうだ。

「……敢えて言わせていただければ、お薦め致しませんね」

「でも俺なあ。最近結構加減も効くようになつたと思わねえ？」

ロットバートは暫く黙つてレオアリスの顔を見つめてから、薄く笑み

を浮かべ、無言で立ち去つた。

「……何だそりや」

憮然とした表情で室内を見回すと、誰も彼も視線を逸らす。

（まずいのか、やっぱり）

でもやはり、使つてみたい。これほどの剣を使わずにただ飾つておく

など、宝の持ち腐れもいいところだ。

（まずいかな。折れるか？）

折れる。

いや、折れないだろう。

細心の注意を払つて扱えばいい。

たぶん。

きっと。

折れない。

（……一度、振つてみるだけだ）

レオアリスは期待に満ちた笑みを浮かべて、剣を取つた。

「うーん、上将の考へてる事は分りやすいな」

執務室を出るレオアリスの姿を目で追いつつ、クライフは両腕を頭の後ろに組んで背もたれに寄りかかつた。同意を求めるように、隣席のヴィルトールに顔を向ける。

「顔に全部出てるからな」

「賭けるか？」

「お前が折れない方に賭けるならね」

「有り得ねえ」

「百はどうかな？」

「有り得ねえつってんだろ」

「じゃあ五十」

「しつつけえなあ！」

二人のやり取りを聞きながら、ロットバートはグラントレイの席へ行くと、書類を机の上に置いた。

「……お止めになるなら、今ですが」

グラントレイは渋い表情を浮かべ、息を吐いた。その様子に、フレイザーが翡翠の瞳を閃かせて笑う。

「——仕方ない。鍛冶師には、全員で頭を下げに行くとしよう」